

抑うつにおける認知バイアスに関する臨床心理学的 基礎研究

著者	田上 恭子
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301乙第9294号
URL	http://hdl.handle.net/10097/64280

博士論文

抑うつにおける認知バイアスに関する
臨床心理学的基礎研究

田上 恭子

はじめに	1
第Ⅰ部 問題と目的	5
第1章 抑うつと認知に関する基礎理論	6
第1節 抑うつとは	6
第2節 抑うつ認知理論	7
第3節 抑うつへの認知心理学的アプローチ	13
第2章 気分一致効果の基礎的研究	16
第1節 気分一致効果の実証的アプローチ	16
第2節 初期の代表的な説明理論	27
第3節 気分一致効果の生起しにくい条件と気分不一致効果	31
第4節 気分一致効果・気分不一致効果の生起に何が影響しているのか	34
第5節 新たな説明理論の必要性	41
第3章 抑うつにおける認知バイアス	43
第1節 抑うつへの認知心理学的アプローチと気分一致効果	43
第2節 認知心理学における認知の無意識的側面と意識的側面 —潜在記憶と顕在記憶—	46
第3節 臨床心理学における認知の無意識的側面と意識的側面	49
第4節 抑うつにおける潜在記憶バイアス	52
第5節 抑うつにおける認知バイアスの説明	55
第4章 問題の所在と目的	61
第1節 本研究の目的	61
第2節 本研究の意義	63
第Ⅱ部 自己関連的な認知における気分一致効果の検討	65
第5章 物語記憶に及ぼす気分の効果に関する実験的研究 —Bower, Gillian, & Monteiro (1981) の再検討— (研究 1)	66
第1節 目 的	66
第2節 実験 1	68

第3節 実験 2	75
第4節 全体的考察	80
第6章 抑うつにおける自己関連的な認知の気分一致効果	84
— 個人差アプローチと気分誘導アプローチからの検討 — (研究 2)	
第1節 目 的	84
第2節 実験 1	86
第3節 実験 2	92
第4節 全体的考察	99
第5節 実験 1 の再分析	100
— 抑うつにおける性格表現用語の自己記述性評価について —	
第7章 抑うつにおける自伝的記憶の想起の特徴と気分状態との関連	109
(研究 3)	
第1節 目 的	109
第2節 方 法	110
第3節 結 果	111
第4節 考 察	117
第Ⅱ部の要約	122
第Ⅲ部 抑うつにおける認知バイアスの検討	124
— 無意識と意識の違いに着目して —	
第8章 抑うつにおける潜在記憶バイアスの実験的研究	125
— データ駆動型テストと概念駆動型テストを用いて — (研究 4)	
第1節 目 的	125
第2節 実験 1	126
第3節 実験 2	136
第4節 全体的考察	143
第9章 抑うつにおける潜在記憶と顕在記憶	147
— 抑うつの重篤性の違いに着目して — (研究 5)	
第1節 目 的	147

第2節 方 法	148
第3節 結 果	152
第4節 考 察	156
第10章 概念駆動型テストとしての意味定義課題の作成（研究 6）	159
第1節 目 的	159
第2節 方 法	160
第3節 結 果	163
第4節 考 察	165
第11章 抑うつにおける処理バイアスと感情特性に関する実験的研究 —特性メタ感情の働きに着目して—（研究 7）	171
第1節 目 的	171
第2節 方 法	177
第3節 結果①：従来のアプローチによる検討	184
第4節 結果②：調整的アプローチによる検討	188
第5節 結果③：媒介的アプローチによる検討	196
第6節 考 察	197
第Ⅲ部の要約	200
第Ⅳ部 総合考察	202
第12章 本研究の総括と今後の課題	203
第1節 本研究で得られた知見の要約	203
第2節 抑うつにおける認知バイアスに関する臨床心理学的考察	206
第3節 抑うつにおける認知バイアスの図式化	216
第4節 臨床への示唆及び今後の課題	219
引用文献	222
初出一覧	239
謝 辞	240

はじめに

仕事で失敗し落ち込むことや、対人関係がうまくいかずに憂うつになること、特に理由は思い当たらないのに何となく気分が晴れないことなど、抑うつ的な気分や状態は誰もが多少なりとも経験したことがあるのではないだろうか。そのようなときには、過去の嫌なことばかり思い出されてきたり、自分がどうしようもない人間であると感じてしまったり、自分を責めたりすることもあるだろう。何もかもがうまくいかないような気がしてきたり、先が全く見えなくなったりすることもあるかもしれない。このほかにも、仕事が手につかなくなったり食欲がなくなったり何となく身体がだるくなったりするなど、抑うつは私たちの日常生活の多くに影響を及ぼすものである。中でもものの見方や考え方、すなわち認知のありようと抑うつは深く関連していることが知られている。現代社会においては、ストレスなどにより慢性的な抑うつ状態や抑うつ気分に悩まされる者も多く、抑うつは現代的な感情の障害であるともいわれている（大平, 1996）。

わが国においてはうつ病等の精神疾患患者数の増加に伴い、その対策が急務となってもいる。厚生労働省が行っている「平成 26 年（2014）患者調査」（厚生労働省, 2015）によると、うつ病を含む「気分〔感情〕障害」の総患者数は 2014 年では 111 万人と 1996 年以降で最も多く、2.5 倍以上の増加がみられている。社会においてもうつ病やメンタルヘルスの不調、さらにはそのような精神疾患が背景にある場合が多いとされる自殺の問題に対する関心が高まっており、職場における過労やうつ病の増加といった社会問題や抑うつの低年齢化の問題が指摘され、うつ病や自殺は日本の社会が取り組むべき最優先課題のひとつであるともいわれる（坂本・丹野・大野, 2005）。うつ病の診断には至らないまでも、災害や長らく続いている不況などによるさまざまな喪失体験によって抑うつ症状が生じたり、抑うつ気分悩んだりしている者の数は計り知れないだろう。2015 年 12 月からは、労働者 50 人以上の事業所においてストレスチェックの実施が義務づけられているが、これはうつなどのメンタルヘルス不調を未然に防止するための仕組みとして位置づけられているものである（厚生労働省労働基準局安全衛生部労働衛生課産業保健支援室, 2015）。このように、今日抑うつに

ついでの問題は極めて身近なものであるといえる。

冒頭の例に挙げたように、抑うつはものの見方や考え方と深く関連している。この認知の問題に着目した心理療法が認知療法・認知行動療法である。うつ病の治療としての認知療法・認知行動療法の適用は海外において推奨されており、その治療効果も実証されてきている（清水・鈴木, 2011）。そしてわが国においても、昨今その効果のエビデンスが積み重ねられてきている（慶應義塾大学認知行動療法研究会, 2009）。このような背景から 2010 年、認知療法・認知行動療法が診療報酬に新設され、保険適用が可能となった。厚生労働省のうつ病対策において、認知療法・認知行動療法の治療者マニュアル（慶應義塾大学認知行動療法研究会, 2009）も出されている。このマニュアルの中に、「近年発達してきた情報処理モデルないしは認知モデルを基盤にした治療法」（p.2）と記述されているように、この療法は臨床実践や臨床心理学的及び精神医学的研究の知見にもとづくばかりでなく、心理学における基礎的な分野、特に上述の「認知」に関わる認知心理学的研究の知見も踏まえたエビデンス・ベイスト・アプローチであるといえる。

認知心理学の分野では、1970 年代後半から感情と認知との相互作用に関する実験研究が盛んに行われるようになり、感情の問題のひとつとして抑うつと認知との関連に関する研究も行われてきた。認知心理学的にも、われわれの感情や抑うつと認知との間に密接な関係があることが実証されてきている。丹野・小川・小谷津（2008）が述べているように、認知心理学の成果は臨床心理学にも大きなヒントを与えてきたと考えられるが、わが国においては臨床心理学と認知心理学との建設的な対話はほとんどなされてこなかったこと（森岡, 2008）、臨床心理学と基礎的心理学的との交流が希薄であること（丹野他, 2008）が指摘されている。このように、臨床と基礎とをつなぐ研究が今求められており、条件をより厳密に統制した実験研究による豊富な基礎的知見を活用することで、抑うつにおける認知の問題により一層迫ることができるのではないかと考えられる。本研究は臨床心理学的な基礎研究として、抑うつにおける認知の問題について、認知心理学の知見を活用しながらアプローチしていきたい。

なお本研究においては、冒頭の例に挙げたような、うつ病という診断には至らないが誰もが経験し得る抑うつ気分や抑うつ症状など（抑うつについては後

述する)に着目したい。うつ病や、うつ病の診断にまで至らない軽い抑うつ状態は、誰もがかかりうる可能性がある社会問題であるという指摘もある(坂本・大野, 2005)。軽度の抑うつ状態に悩んでいる人の数はかなりのものと考えられ、軽い抑うつであっても、本人が苦悩していないわけではなく、うつ病の診断基準に満たない抑うつ症状が1年後のうつ病の危険因子となるという報告もあると坂本(2002)は述べている。ここで出された知見はうつ病の予防に何らかの示唆を与え得るものであり、メンタルヘルスの不調の早期対応にも役立ち得るものであると考えられる。

以上より、本研究は軽度の抑うつを対象に、その認知の問題を明らかにすることを目指したい。

本研究の構成は Figure 0 の通りである。

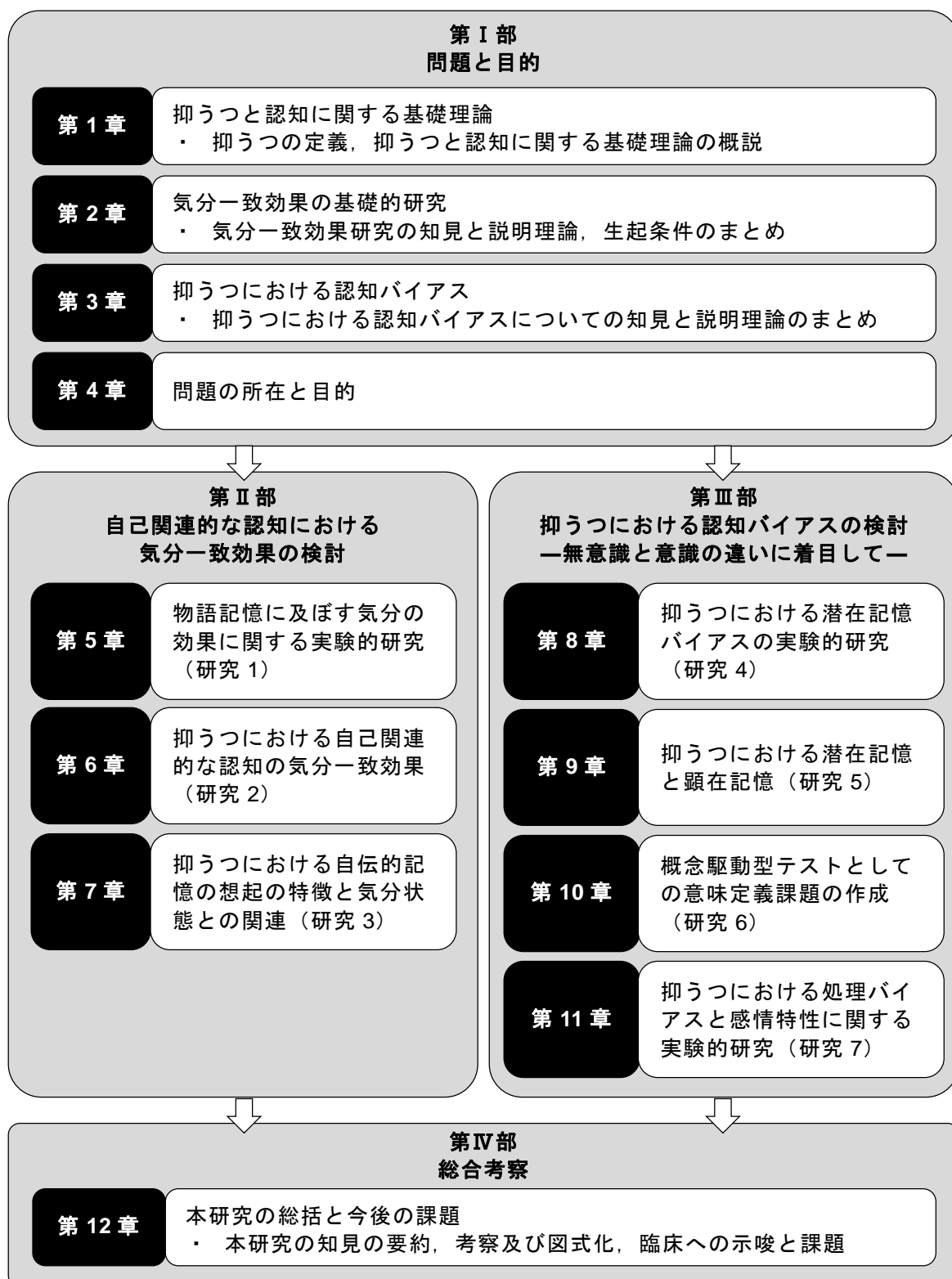


Figure 0. 本研究の構成。

第 I 部

問題と目的

第1章 抑うつと認知に関する基礎理論

第1節 抑うつとは

抑うつ (depression) とは、抑うつ気分 (depressed mood)、抑うつ症状 (depressive symptoms)、疾病単位としてのうつ病 (depressive disorder) の3つを包含するものであるとされる (坂本, 2002; 坂本・大野, 2005)。

坂本 (2002) によれば、抑うつ気分とは、滅入った (悲しくなった、憂うつになった、ふさぎ込んだ、落ち込んだ) 気分のことであり、一時的なものから2週間以上持続するものまでである。また抑うつ症状は抑うつ気分とともに生じやすい状態で、抑うつ気分の他にも、興味や喜びの喪失、疲れやすさ、自信喪失、自責感、自殺企図あるいは自殺念慮、集中困難、精神運動性制止または焦燥、食欲・体重の変化、性欲の減退、不眠や過眠、絶望感、心氣的憂慮などがみられる (坂本, 2002; 坂本・大野, 2005)。なお、抑うつ症状がみられればうつ病であるというわけではなく、たとえば抑うつ気分が一定期間持続することや症状のために著しい苦痛が生じたり重要な領域において機能障害が起きていたりするなど、診断基準を満たした場合に疾病単位としてうつ病と判断されることになる (坂本・大野, 2005)。

本研究では、抑うつ気分やうつ病を含め、広く抑うつ的な症状を抑うつ (depression) とあらわすこととする。また、非臨床サンプルにおける抑うつとうつ病患者などの臨床サンプルの抑うつには連続性があるという立場をとっている松本 (2014) の見解にもとづき、本研究においては主として自己報告式質問紙の得点によって分類される準臨床的 (subclinically) 抑うつと大うつ病性障害など臨床診断を受けた臨床的 (clinically) 抑うつとの間には連続性があると想定する。

第2節 抑うつ認知理論

(1) Beck らによる抑うつ認知理論

Beck らによる抑うつ認知理論は、体系的な臨床観察と実験的な検証から生まれてきたものであり、うつ病の心理的な基本要素（psychological substrate）を説明するための3つの概念、すなわち、①認知の三徴候（cognitive triad）、②スキーマ（schemas）、③認知の誤り（cognitive errors; もしくは誤った情報処理, faulty information processing）を前提としている（Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1979）。

① 認知の三徴候

認知の三徴候は、a) 自分自身、b) 自身の将来、c) 自身の経験に関して、特異な見方を導く3つの大きな認知パターンから成り立っている。a)の自分自身については、自分自身についてのネガティブな見方を中心に展開するものであり、自分自身を不完全で不適切で病的で恵まれていないとみなし、不快な体験を、自分の中にある、心理的、道徳的、身体的欠点のせいであると考え、傾向にある。そして、自身の想定した欠点のゆえに、自分が好ましくなく、価値がないと考えるのである。b)については、将来に対するネガティブな見方であり、抑うつ者の見通しは長期的なものであって、自身の現在の困難や苦痛はいつまでも続くであろうと考えている。c)の自身の経験に関しては、今の体験をネガティブな方法で解釈するという傾向である。自分を取り巻く世界について、自身に途方もない要求を行ってくるものであり、人生の目標に到達することに対して対処不可能な障害を与えてくるものと捉えている。

② スキーマ

人は特定の刺激に選択的に注意を向け、それらのあるパターンで結びつけて状況を捉えており、同じ種類の出来事への反応は一貫している傾向があると考えられている。この安定した認知パターンがスキーマである。ある特定の状況に直面したとき、その状況に関連したスキーマが活性化され、それが人の反応を決定するという。うつ病などの状態においては、優勢となっている非機能的なスキーマに合うように、状況の捉え方がゆがめられている。

このようにスキーマという概念は、なぜ抑うつ者が、生活の中にポジティブな要因の客観的な証拠があるにもかかわらず、苦痛を引き起こすような自己破滅的な態度を持ち続けるのかということを説明するために用いられているものである。

③ 誤った情報処理

以下のいくつかの代表的な特徴が指摘されている。

- a. 恣意的推論: 結論を支持する証拠がないのに、あるいは証拠が結論とは相反するのに、ある特定の結論を導くプロセス。
- b. 選択的抽象化: 文脈から取り出された細部に焦点を当て、状況の中のより目立った特徴を無視し、この断片にもとづいて経験全体を概念化すること。
- c. 過度の一般化: 複数の別個の出来事にもとづいて一般的な法則や結論を引き出したり、その考えを、関連する状況にも関連しない状況にもおしなべて当てはめたりするパターン。
- d. 拡大と最小化: ある出来事の重要性や重大さの評価における、ゆがみを生み出すほどひどい誤り。
- e. 個人化: 根拠もないのに外的な出来事を自分自身に関連づける傾向。
- f. 絶対主義的、二者択一的思考: すべての経験を2つの対極的なカテゴリーのどちらかに位置づける傾向。自分自身の描写においては、極端にネガティブなカテゴリーを選択する。

抑うつ者は、極端で、ネガティブで、断定的、絶対的、批判的な見方をしがちであり、これらの体系的な誤りによって、相反する証拠が存在するにもかかわらず、ネガティブな考えが正しいと信じ続けることになる。またその結果として、ネガティブで極端な情緒的反応がなされる傾向にある。

以上の Beck らの抑うつ認知理論においては、抑うつ者は独特の認知、特にネガティブな認知が行われやすいことが概念化されている。Abramson, Alloy, & Metalsky (1988) によるこの理論の図式化をわかりやすく改変した坂本 (2002) の図を Figure 1.2.1 に示す。そして、認知心理学の知見を取り入れこれをさらに発展させたのが Teasdale の理論である。

(2) Teasdale の理論

Beck らの認知理論は基本的には認知が抑うつ症状や情緒的反応を決定するという立場であるが、この理論に、後述する実験心理学・認知心理学の実験的な研究結果と Bower (1981) の感情ネットワーク理論とを加え、抑うつと認知との相互作用モデルを提唱しているのが Teasdale の理論である。

Teasdale (1983) は、Beck の認知モデルはネガティブな認知が抑うつ症状を引き起こす原因的な役割を果たしていることを提唱しているが、対照的に精神医学的には、ネガティブな認知は抑うつ症状として位置づけられていることを挙げ、この2つの立場は相互排他的な関係にあるのではなく、この相互関係が悪循環を作り、抑うつを持続させていると考えた。そして、ネガティブな認知が抑うつ症状の原因であるのか結果であるのか、その双方であるのか、理論的な検討と実証研究のレビューを行った。

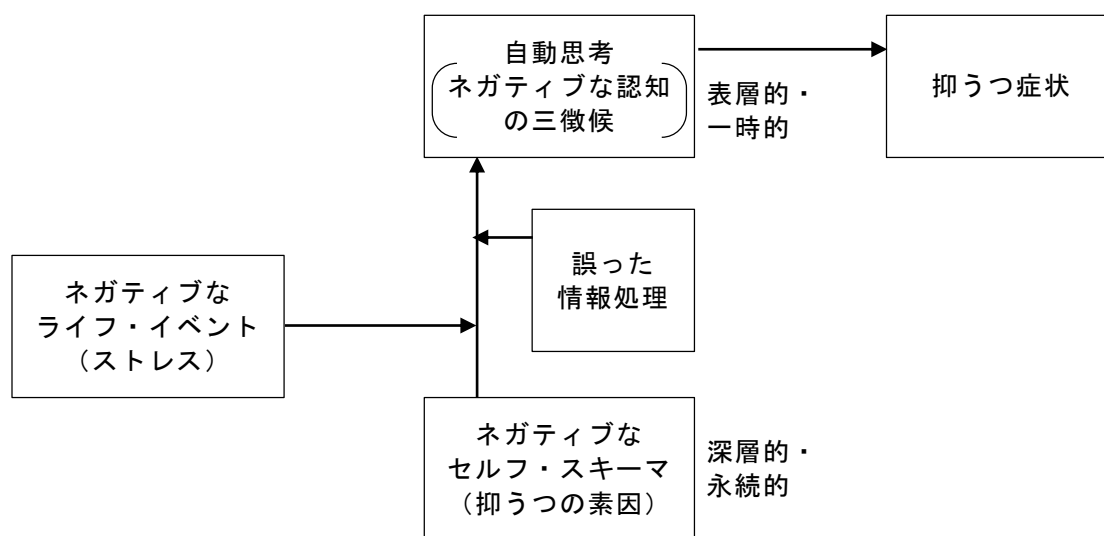


Figure 1.2.1. Abramson et al. (1988) による Beck の抑うつ認知理論 (坂本, 2002, p.152 にもとづき作成, 一部改変)。

注) 坂本 (2002) の解説にもとづくと、Beck の抑うつ認知理論では、ネガティブなライフ・イベントそのものが抑うつ症状を生じさせるのではなく、認知によって抑うつが生じると考える。そして、ネガティブなセルフ・スキーマがネガティブなライフ・イベントにより活性化し、誤った情報処理がなされ、自分の意志とは関係なく意識にのぼってくるネガティブにゆがんだ考えがもたらされるとする。

Beck らによる抑うつ認知理論、すなわちネガティブな認知が抑うつ症状に影響を及ぼすことについては、臨床的な鋭い洞察と観察とにもとづくものであり、相関研究的なエビデンスは存在するものの、実験的なエビデンスはわずかであると Teasdale (1983) は指摘している。そこで因果を捉えるために、Teasdale らは健常な対象者に実験的に誘導した抑うつ気分が記憶に及ぼす影響について一連の実験を行い (e.g., Teasdale & Fogarty, 1979)、全体的な傾向として、たとえば抑うつ的な気分では不快記憶を思い出しやすいというように、気分状態がポジティブな認知とネガティブな認知のアクセシビリティに異なる影響を及ぼすことが一貫して見出されているとまとめている。さらに、うつ病患者の抑うつ個人内変動が記憶に及ぼす影響についても検討し (Clark & Teasdale, 1982)、健常対象者に気分操作を行った実験と同様の結果を得ている。

加えて、Teasdale らの研究とは別の流れとして行われていた Bower らの一連の実験研究と感情ネットワーク理論を踏まえ、Beck らの理論と対立するのではなくそれを発展させる形で、認知心理学の視点を加えた、抑うつと認知との相互作用が悪循環を導くという相互作用モデルを提唱した。Teasdale (1985) はこのモデルを発展的に修正し、悪循環と抑うつについての抑うつである二次的抑うつを強調したモデルを提唱し、治療への示唆も行っている。坂本 (1996) によって図式化された Teasdale (1985) のモデルを Figure 1.2.2 に示す。

以上のように、抑うつにおけるネガティブな認知は、臨床的な観察から見出され、抑うつ認知理論として理論化され、さらには実証的にも研究されてきた。厚生労働省のうつ病の認知療法・認知行動療法の治療者用マニュアル (慶應義塾大学認知行動療法研究会, 2009) の中でも、「私たちは、自分が置かれている状況を絶えず主観的に判断し続けているのですが、通常は半ば自動的にそして適応的に行われています。しかし、強いストレスを受けるなどの特別な状況下ではその判断に偏りが生じ、非適応的な反応を示すようになってきます。その結果、抑うつ感や不安感が強まり、非適応的な行動が引き起こされ、さらに認知の歪みが強くなるという悪循環が生じることになります」(p.2) と、理論としての情報処理モデル・認知モデルについて紹介されている。

そして前述のようにこれとは独立して、Bower らの研究をはじめ、学習心理

学や認知心理学などの実験心理学領域においても、気分が認知に及ぼす影響を実験的にも検証し、理論化しようとする動きが 1980 年前後より盛んになった。そして今現在も、Teasdale らのように、こういった基礎的知見や理論を取り入れる形で抑うつ認知理論は発展を続けている (e.g., Pössel & Knopf, 2011)。

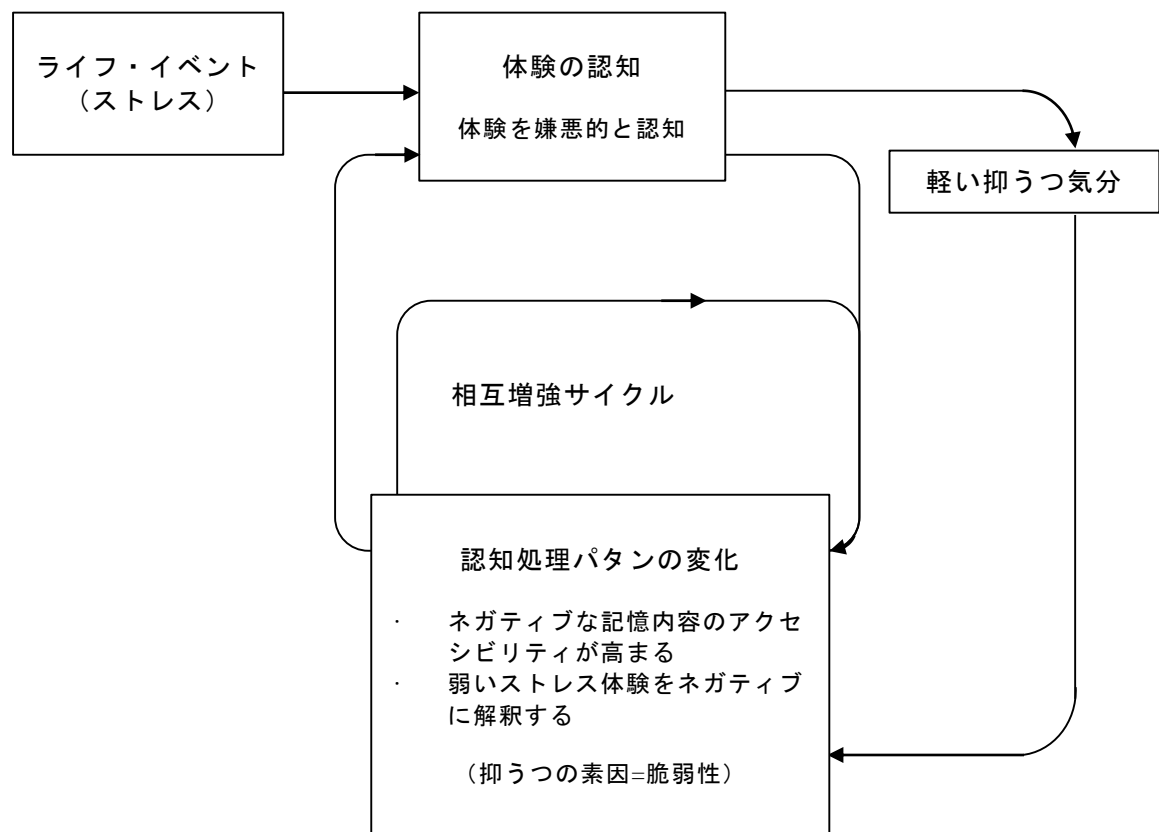


Figure 1.2.2. Teasdale の抑うつと認知の相互作用モデル (坂本, 1996, p.141 にもとづき作成, 一部改変)。

注) このモデルを解説している坂本 (1996) によると、ライフ・イベントを嫌悪的に認知した結果生じる軽い抑うつ気分は、ネガティブな記憶を活性化したり解釈にバイアスをかけたりするため、さらに体験をネガティブなものとして認知するようになるという。このサイクルができると、きっかけとは無関係に二次抑うつがサイクルの一角を占めるようになり、互いを増強しながら循環するので、容易には抜けだせないと捉えている。

(3) 認知療法・認知行動療法

以上のような抑うつ認知理論にもとづく心理療法が認知行動療法である。

現在わが国では、うつ病治療のひとつとして認知療法・認知行動療法の効果のエビデンスが積み重ねられてきている（慶應義塾大学認知行動療法研究会，2009）。「認知行動療法」ということばを耳にすることも多くなってきた昨今であるが、認知行動療法の意味する内容は多様である。熊野（2012）によれば、認知行動療法は、行動療法の部分集合として説明されることがある一方で、うつ病を対象にして登場した認知療法がみずからの体系を狭義の認知行動療法の一部として位置づけるようになってきたこともあり、その結果、行動療法的な色彩の強い、学習理論の発展変化の過程として捉えられるものと、認知療法的な色彩の強い、情報処理理論にもとづき新たな治療体系と位置づけられるものの両方の意味で使われるようになっているという。前述の抑うつ認知理論にもとづく場合は後者の立場ということになる。厚生労働省の治療者マニュアルや診療報酬点数表では「認知療法・認知行動療法」と併記されているが（e.g., 慶應義塾大学認知行動療法研究会, 2009），これも後者の認知療法的色彩の強い立場であると考えられる。

本研究では認知療法的な立場を中心に論じるが、表記に関しては、包括的な意味で「認知行動療法」と表すこととし、認知療法的な立場であることが明確である場合に「認知療法」と表す。

認知療法は、抑うつ認知理論を提唱した Beck (Beck, 1976; Beck et al., 1979) によって開発された心理療法である。Beck et al. (1979) によれば、認知療法は、うつ病や不安、恐怖などさまざまな精神医学的障害の治療に用いられる、能動的、指示的、時間制限的、構造的なアプローチと定義され、認知が個人の感情と行動を決定するという理論的根拠にもとづくものである。心理療法場面においては、抑うつ認知理論にもとづき、認知の背景にあると想定されているゆがんだ概念化と非機能的な信念を見つけ、現実吟味し、修正することを目指して、多様な技法が用いられる。一般的に Beck の認知療法は週 1 回、15 から 25 回のセッションから構成される (Beck et al., 1979)。わが国の厚生労働省の治療者マニュアルでは、6 ステージ 16 セッションから構成され、心理教育、気分や認知の同定及び修正、行動への介入などが中心となっている。

第3節 抑うつへの認知心理学的アプローチ

(1) 認知心理学における認知-感情研究

認知心理学の分野では気分 (mood) を中心とした感情 (affect) と認知との相互作用という観点から、主に知覚や注意、解釈、判断などのさまざまな認知過程 (cognitive process) とそれらに関わる認知的処理 (cognitive processing) に及ぼす気分の影響やそのメカニズムが研究されてきた (以下、感情と認知との相互作用に関わる研究を認知-感情研究と表す)。抑うつと認知との関係については、主として感情状態のひとつとして位置づけられ得る抑うつ気分あるいは抑うつ症状が、どのように認知過程・認知的処理に影響を及ぼすかが認知心理学では検討される。なお気分とは穏やかで比較的長時間持続する感情状態と定義し、一時的で生理的反応を伴う強く激しい感情である情動 (emotion) とは区別する。そしてこれらを包括する広い意味での感情状態を感情 (affect) と本研究では位置づける。また認知 (cognition) については、谷口 (1991a) にならない人間の心的情報処理における知的側面と定義し、さまざまな認知過程や認知的処理を広く含むものとする。

この分野において広く認められている現象は、気分状態依存効果 (mood-state-dependent effect) と気分一致効果 (mood-congruent effect) であり、これらの現象を説明し、感情と認知との関係を表したひとつの代表的な理論が Bower (1981) の感情ネットワーク理論である。これらは抑うつに特徴的なネガティブな認知を表している現象であるとも捉えられており、抑うつが発症や持続に関わる現象として位置づけられている (Blaney, 1986; Bower, 1981; 谷口, 1991a)。

(2) 気分状態依存効果と気分一致効果

認知心理学における気分が認知に及ぼす影響についての研究の発端のひとつは、状態依存効果である (Bower, 1981; 谷口, 1991a)。これはある精神状態で学習した事象は、元の経験時と同様の状態に置かれた場合により思い出されやすくなるという現象である (Bower, 1981)。谷口 (1991a) によれば、状態依存効果が仮定されたきっかけは、たとえば飲酒時の記憶は飲酒時に再生されやすいというように、アルコール等の薬物の使用時における記憶についての研究 (Eich,

1980)であるとされ、広い意味では文脈依存効果に位置づけられるものである。

Bower らは、この状態依存効果を実験的に生じさせる試みをし、ひとつの状態としての気分を実験的に誘導して、気分状態依存効果を再現した。この現象から抑うつがネガティブな記憶の想起を促進することの説明もなされている (Teasdale, 1983)。そして Bower らは、この現象を説明する理論として感情ネットワーク理論を提唱し、この理論から感情が影響を及ぼす認知過程について論じている。

さらに気分状態依存効果に関する実験を進める中で、Bower らは、出来事の種類(快-不快など)の違いが気分と交互作用することを見出した (Bower, 1981)。これが気分一致効果であり、感情ネットワーク理論から説明され得る感情が認知に及ぼす影響のひとつである。気分一致効果及び感情ネットワーク理論については次章で詳述する。

この後、認知-感情研究は急増し、さまざまな条件下で気分状態依存効果や気分一致効果を実証しようとする研究が非常に盛んとなった。Bower 自身も、抑うつや不安、心配 (worry) 等における認知や、感情と認知との悪循環について考察しているが、抑うつの問題をこういった現象から説明しようとする研究も増え、たとえば Blaney (1986) は気分一致効果を中心に初期の実証研究をレビューし、抑うつを理解にこれらの現象が果たし得る役割を論じている。Blaney (1986) は、気分一致効果に関する研究について、Bower らが催眠を用いてある種の気分を誘導したような実験的な気分誘導アプローチと、臨床診断や自己報告式質問紙などにもとづいて“抑うつ的”“非抑うつ的”というように分類された者の比較を行う個人差アプローチとに研究を分類し、それぞれにおける知見や問題点の整理を行った。個人差アプローチでは、主として、うつ病と診断された者と健常者との認知の比較を、“気分一致”という観点から研究するものである。すなわち、これまでうつ病者に特徴的にみられるネガティブな認知を、うつ病者の抑うつ的な気分状態とネガティブな認知との“一致”現象として捉えようとしたものであるといえる。このことは、基礎的な実験心理学の研究やその知見、そしてそこから提唱された理論を、従来から臨床的に見出されてきた抑うつにおける認知の問題に適用し得ることにもつながり、その問題のより一層の解明とよりよい治療や援助に向けて前進したと考えられる。

さらに、抑うつと認知の問題における気分一致効果研究に関して Blaney(1986) は抑うつの原因としての気分一致効果について論じており、他の気分一致効果に関する研究者が言及しているように、抑うつ者において記憶の気分一致的な選択性が抑うつを悪化させる悪循環に影響することは考えられ得ると述べている。気分一致効果に関する研究、特に実験的な気分誘導を用いた研究では、記憶や認知のメカニズムに感情の果たす役割を明らかにしようとする立場からのものもみられるが、抑うつや不安などの臨床心理学的な問題に実験的にアプローチしようとする立場も多い。

次章では、主として認知心理学分野において数多く研究されてきた気分一致効果の基礎的研究について展望する。

第2章 気分一致効果の基礎的研究

第1節 気分一致効果の実証的アプローチ

(1) 気分一致効果とは

気分が良いと他者に対して寛大な態度になったり、逆に憂うつな気分のときには過去の嫌な体験が思い出されてしまったりというように、そのときの気分や感情状態で、ものごとの考え方やとらえ方、行動が変わってくることを我々は経験している。こういった経験は、感情が認知に何らかの影響を及ぼしていることから生じていると考えられている。

第1章で述べたように、1970年代より認知心理学分野を中心に、この感情と認知とがどのように相互に関連しているかに関する実験心理学的研究が盛んになり、そのひとつの現象として気分一致効果が見出された (Bower, 1981)。気分一致効果とは、ある気分状態のときには、その気分に一致した、ポジティブ-ネガティブ、快-不快などの感情価 (affective value) を持つ認知が促進されるという現象である。たとえば、陽気な気分の時に思わず楽しい歌を口ずさんだり、落ち込んでいる時に過去の失敗の経験ばかりを思い出してしまったりする現象である。

初期の代表的な研究として、たとえば Isen, Shalke, Clark, & Karp (1978) は実験参加者にコンピュータ・ゲームの勝ち負けによってポジティブまたはネガティブな気分を誘導し、快・不快・ニュートラルなパーソナリティ特性語の学習再生を求めた。結果、ゲームで勝った参加者、すなわちポジティブな気分状態の者はポジティブな特性語をより多く再生することが見出された。また物語の記憶を指標とした研究として、Bower, Gilligan, & Monteiro (1981) は、催眠によって学習時もしくは再生時に気分を誘導し、物語の記憶に及ぼす気分の効果について5つの実験によって検討した。実験の結果、学習時に楽しい気分を誘導した場合には楽しい内容が多く再生され、悲しい気分を誘導した場合には悲しい内容が多く再生されるという気分一致効果が示された。わが国における代表的な研究として谷口 (1991b) では、大学生及び大学院生に音楽の聴取によって高揚的な気分と抑うつ的な気分を誘導し、ポジティブ語とネガティブ語につ

いて社会的望ましさ及び単語か非単語かの判断を求め、その後、ニュートラルな気分状態で自由再生を求めた。結果、音楽によって誘導された気分と再生された単語の種類との間に気分一致効果があることが確かめられている。

一方、先にも述べたが、実験的気分誘導を行わず、診断等によって実験参加者を分類して行う研究もある。たとえば McDowall (1984) は、うつ病入院患者、非うつ病（パーソナリティ障害や不安障害など）入院患者、非患者の快-不快語の記憶再生の比較を行い、うつ病患者の自由再生において不快語がより多いことを見出し、気分一致効果という点からの考察も行っている。

(2) 気分一致効果研究における独立変数の操作方法

気分一致効果に関する研究は、気分などの独立変数をどう扱うかによっていくつかに分類される。たとえば Blaney (1986) や谷口 (1991a) では、前述のように臨床診断や尺度得点によってうつ病患者と健常者との比較や抑うつ傾向者と非抑うつ傾向者との比較など、個々人の違いにもとづいて検討する個人差アプローチと、基本的に健常者を対象とし、実験的に誘導した気分状態下における認知を研究しようとする気分誘導アプローチとに大きく二分している。また、Gerrards-Hesse, Spies, & Hesse (1994) は実験的気分誘導とそれ以外の3つの方法（実験前分類、非臨床者と臨床患者との比較、自然発生感情の利用）に4分類し、特に実験的気分誘導の効果について論じている。本節ではこれらを踏まえ、①個人差アプローチ、②気分誘導アプローチ、③自然な気分の利用アプローチに3分類し詳述する。研究方法の種類の概要を Figure 2.1.1 に整理した。

① 個人差アプローチ

個人差アプローチは、臨床診断や尺度得点にもとづき対象者を分類し、その個々人の違いにもとづいて、認知の比較を行う方法である。分類に際しては、構造化された臨床面接を実施する方法 (e.g., McDowall, 1984)、抑うつやパーソナリティ等に関する尺度や検査への回答を求める方法 (e.g., Hasher, Rose, Zacks, Sanft, & Doren, 1985a) などがあり、たとえば単極性うつ病患者と健常者との比較、双極性躁うつ病患者のうつ病相期と躁病相期との比較、一般学生の中での軽度抑うつ者と非抑うつ者との比較などが行われている。

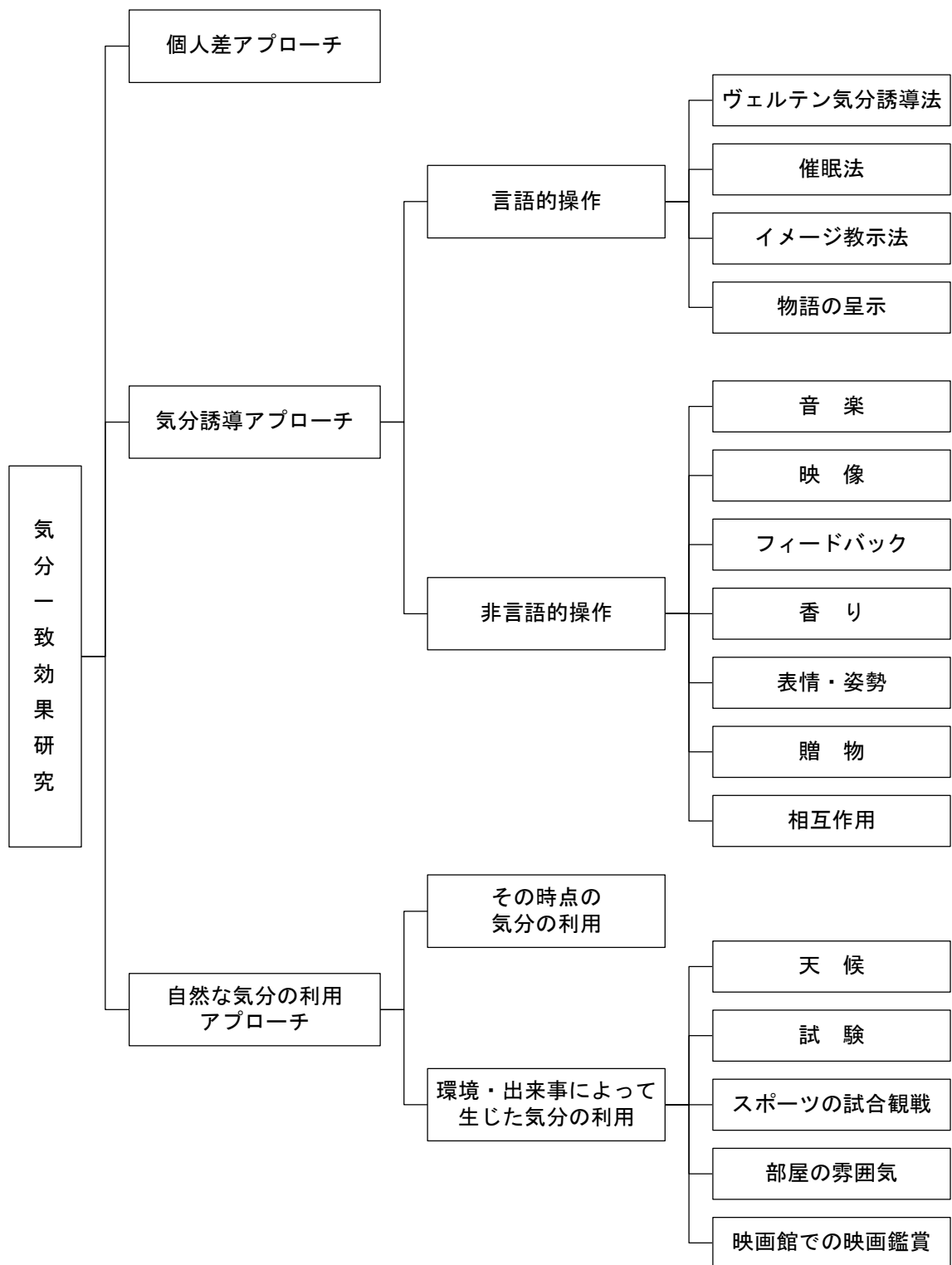


Figure 2.1.1. 気分一致効果研究の独立変数の主な扱い方による分類。

このアプローチの意義は、対象者にとって最も自然な気分状態を研究できる点であるとされているが、それが逆に欠点にもつながると指摘されている（谷口, 1991a）。そのひとつは、一般的な学習-テストの記憶研究の場合、刺激の呈示時（学習時）も再生時（テスト時）も同様の状態であることが多いため、記憶への影響がみられるのは呈示時であるのか再生時であるのかが明らかになりにくいということが挙げられる（Blaney, 1986）。また、抑うつ程度を測るための質問紙は、現在の気分状態を測定しているのではなく、パーソナリティ特性を測っている可能性もあり、気分が認知に及ぼす影響ではなくパーソナリティ特性による認知構造の違いを研究していることになる可能性があるとの指摘もある（谷口, 1991a）。さらに、抑うつ症状は抑うつ気分だけではなく複雑なものであるために、診断したり測ったりすることも容易ではない。上述のパーソナリティ特性による認知構造の違いと同様、抑うつ状態時の何らかの認知状態がそのまま反映されている可能性もあり、気分による影響であるかどうかははっきりしないという問題も考えられる。

② 気分誘導アプローチ

主に健常な成人（学生など）を対象とし、実験的に気分誘導を行う方法である。気分を誘導する方法はさまざまであり、大きく言語的操作によるものと非言語的操作によるものの 2 つに大別される（谷口, 1991a）。以下は、主として Gerrards-Hesse et al. (1994) 及び谷口 (1991a) で挙げられた気分誘導法を言語-非言語に大別し、彼らの見解にもとづき解説を加えたものである。

a. 言語的操作

i. ヴェルテン気分誘導法（Velten mood induction procedure）

Velten (1968) によって開発された代表的な言語的誘導法であり、初期の多くの研究で用いられている。この誘導法では、気分を高揚する記述文、抑うつにする記述文、中立的な記述文が各 60 文用意され、それぞれ 1 文ずつ印刷されたカードが各 60 枚用意されている。記述文の例を Table 2.1.1 に示す。気分の誘導は、この 3 種類の記述文のうちのいずれかの 60 枚のカードを実験参加者に読ませることで行われる。Velten のオリジナルの方法では、比較的ニュートラルに近い穏やかなものから、感情を強く暗示するようなものへと順に呈示され、

Table 2.1.1
ヴェルテン気分誘導法の記述文の例

種 類	記述文例	
高揚文	“I feel so good, I almost feel like laughing.”	私は非常に良い気分だ。もう笑い出しそうである。
	“Things will be better and better today.”	今日は事態がどんどん良くなるだろう。
抑うつ文	“I feel worn out. My health may not be as good as it's supposed to be.”	私は疲れきっている。私の健康状態は思っているほどよくないのかもしれない。
	“I have too many bad things in my life.”	私の人生は悪いことばかりだ。
中立文	“Thomas Edison is best known for his invention of the light bulb.”	トーマス・エジソンは電球の発明で最もよく知られている。
	“Many birds fly south for the winter and return in the spring.”	多くの鳥は冬には南へ飛び、春になると戻ってくる。

各文 20 秒ずつ、1 回目は黙読、2 回目は音読で、計 2 回読んでもらう。この方法は、そのまま単独に用いられることも多いが (e.g., Hale & Strickland, 1976), 音楽など他の誘導法を組み合わせることもある (e.g., Albersnagel, 1988; Eich & Metcalfe, 1989)。また短縮版や修正版も出されている (e.g., Ellis, Thomas, McFarland, & Lane, 1985; Frost, Graf, & Becker, 1979)。

ii. 催眠法

実験参加者を催眠状態に置くことで、特定の気分を誘導しやすくするというものである。Bower らによる研究で主に用いられている。参加者は快適なリクライニングの椅子に座ったり、長椅子に横になったりし、リラクゼーションと閉眼法を用いて催眠状態が誘導される。そして催眠状態下の参加者に、うまくいったことや休暇の場面を想像させることによって楽しい気分を、個人的な失敗や葬式の場面を想像させることによって悲しい気分を誘導している。しかし、催眠感受性が低い者には利用しにくいという欠点を持つため、あらかじめ催眠

感受性の測定を必要とすることが多く、また催眠という特殊な技術が必要である（谷口, 1991a）。

iii. イメージ教示法

ある場面をイメージしてもらう方法である。谷口（1991a）によれば、自己の過去経験をイメージするよう求める方法、単に特定の感情を連想させるような架空の出来事をイメージするよう教示する方法、言語連想を用いて気分を誘導する方法などがある。たとえば Wright & Mischel（1982）は、自分自身を楽しく（あるいは悲しく、または楽しくも悲しくもなく）感じさせるような場面をできるだけ鮮明に想像するように実験参加者に求めることで気分誘導を行った。参加者は、その場面についてできるだけ詳細に心の中に描き、生じている出来事を再体験するように、そしてその状況で実際に考えるだろうということを考え、感じるだろうということを感じ、実際にその場にいるかのようにするように告げられる。自伝想起法（autobiographical recollections method）または自己生成イメージ（self-generated imagery）とも呼ばれる（Salovey & Birnbaum, 1989）。

iv. 物語の呈示

録音された物語を聞かせるという方法である。イメージ教示法に類似している。たとえば Rosenhan, Salovey, & Hargis（1981）では、目を閉じ、椅子に深く座ってリラックスし、テープから聞こえる男性の声で述べられる状況に集中するようにという教示が最初に行われ、ポジティブ条件では、ハワイへのバケーションの場面について語られる。たとえば、温かい砂浜、黒く日焼けした身体、サーフィン、スイミングなどのエキサイティングな活動などについてである。また Thompson, Cowan, & Rosenhan（1980）のネガティブ条件では、自分の友人が癌に侵され、死が近づいていることを段々と知っていく学生についての物語が用いられている。

b. 非言語的操作

i. 音 楽

音楽を呈示する方法であり、課題遂行中も継続されることが多い。たとえば、谷口（1991b）では、高揚的気分が喚起されるような音楽 2 曲（“Je te veux” “Le Picadilly”）と抑うつ気分が喚起されるような音楽 2 曲（“Gnossienne No.3” “Gnossienne No.5”）を用い、それぞれ繰り返し聴かせることで気分誘導を行っ

ている。ヴェルテン気分誘導法やイメージ教示法、映像などの他の方法と組み合わせて用いられることもあり、非常に多くの研究で用いられている（e.g., 野内・兵藤, 2007; 筒井, 1997; レビューとして Gerrards-Hesse et al., 1994）。ただし、音楽は本質的には美的表現と美的経験を追求するという機能を備えており、特にクラシック音楽では怒りなどの強いネガティブ感情を喚起することは少ないと谷口（1991a）で論じられているように、日常生活において自然に喚起される感情に比べ弱いものであることは留意する必要があるといえる。

ii. 映像

主に 5～10 分程度のビデオ映像を呈示することで気分誘導を行う。音声が含まれている映像を用いることも多い。一般的にポジティブ気分の誘導にはコメディ・タッチのものが用いられ、ネガティブ気分や抑うつ気分の誘導には、死を扱ったものや陰惨な映像が多く、ニュートラルでは教育的内容に関するものが多い。Isen らの研究でよく用いられており、たとえばポジティブ気分の喚起にはテレビの NG 集のようなもの（“Gag Reel”）、ニュートラル気分の喚起には数学の証明を扱っているもの（“Area Under a Curve”）、ネガティブ気分の喚起にはナチス強制収容所のユダヤ人虐殺に関するドキュメンタリー（“Night and Fog”）が用いられている（e.g., Isen & Daubman, 1984; Isen, Daubman, & Nowicki, 1987）。わが国では、たとえば田上（2000）において、ポジティブ気分群には海外のコメディ映画（“裸の銃を持つ男”）の一部が、ネガティブ気分群には海外のサスペンス・ドラマ（新ヒッチコック劇場“バァン！もう死んだ”）の一部が、それぞれ呈示されている。また子どもを対象とした富山（1995）では、ディズニー映画の“ダンボ”と日本のアニメ映画“火垂るの墓”がそれぞれ HAPPY 群と SAD 群に対して用いられている。

iii. フィードバック

ゲームや概念形成課題、知覚運動課題、心理検査などの偽の課題を実施し、結果の善し悪しをフィードバックする方法である。たとえば前述の Isen et al.（1978）ではコンピュータ・ゲームの勝ち負けを操作することによってポジティブ気分やネガティブ気分を誘導している。また偽の心理検査を用いた山中（1999）では、偽の社会適応テストに回答を求め、その後すぐに偽の結果のフィードバックを行い、結果内容、結果までの待ち時間、結果伝達の方法を変え

ることで、不安、怒り、幸せを誘導している。

iv. 香 り

実験室に快または不快な香りを漂わせ、その中で課題を行う方法である。一般的に用いるには難しいとされており、この誘導法を用いた研究は少ないが、たとえば秋山・竹村（1994）では、不快感情を喚起するため、生ごみを腐敗させたものから発生する悪臭の漂う部屋で課題を行わせている。Ehrlichman & Halpern（1988）は、快条件ではアーモンドエッセンスの水溶液を、不快条件ではピリジンの水溶液を、ニュートラル条件では蒸留水を用意し、空気を循環させて香りを呈示している。

v. 表情・姿勢

実験参加者に、ある表情や姿勢をとらせることにより気分誘導を行う方法である。情動のジェームズ=ランゲ説にもとづくと考えられている。特定の気分を表現してその表情をさせる場合もあれば（「悲しい顔をしてください」）、ただ顔の筋肉をどう動かすかだけを指示する場合もある（「眉を上げてください」）。表情と姿勢を操作した Duclos, Laird, Schneider, Sexter, Stern, & van Lighten（1989）では、最初に顔の筋肉をリラックスさせ、表情を作った後は 15 秒ほどそのままの状態を維持してもらう。たとえば悲しみを喚起させる姿勢として、次のような教示がなされる。「椅子に深く座り、背中を椅子の背もたれに楽につけて、足を椅子の下にだらりと入れてください。足には緊張感を無くしてください。それから手を膝の上で組んでください。ちょうど茶碗ですくうように片方の手をもう一方の手にゆるく置くような感じです。それから頭を落として、ろっ骨を引っこめるような感じにして、体の残りの部分はぐったりとさせて下さい。ただ、首の後ろと肩の平らな部分には少し緊張感をもたせてください」。この方法は特にネガティブな気分についてさまざまに工夫されているが、微笑みをさせることでポジティブ気分を喚起させる方法もある。

vi. 贈 物

実験参加者に贈物を渡すことでポジティブな気分を喚起させることを意図した方法である。実験室実験というよりはフィールドにおける研究で多く用いられている。たとえば Isen らの研究ではメモ帳や爪切り、チョコレートのお菓子などを贈っている（e.g., Isen & Daubman, 1984; Isen et al., 1987; Isen et al., 1978）。

vii. 相互作用

他者とのやりとりを通して気分を誘導する方法である。たとえば Marks & Hammen (1982) では、実験参加者は感情表現を操作的に行わせたサクラと共に面接を受けた。サクラは事前に姿勢や非言語的要素（声のトーン、身体の動き、アイコンタクト、表情など）、認知的要素、感情的要素について学び、面接の質問に対して、条件に合った態度で臨む。実験参加者はサクラのそういった振る舞いから影響を受け、条件とされる気分が喚起するとしている。

③ 自然な気分の利用アプローチ

個人差アプローチにも気分誘導アプローチにも含まれないと考えられる、自然に生じている気分を利用するという独立変数の扱い方である。Gerrards-Hesse et al. (1994) にもとづく、大きく以下の2つが挙げられる。

a. その時点の気分の利用

気分の操作は行われず、気分状態の測定のみが行われる。すなわち、実験参加者のその時の自然な気分状態をそのまま利用し、気分状態の測定結果から条件を設定する方法である。たとえば谷口 (1995a) は、実験の最後に参加者の気分を測定し、指標となる尺度得点の高い者と低い者を抽出して、自然な気分状態 (naturally occurring mood) と性格形容語の再生との関連とを検討している。

b. 環境及び日常的な出来事によって生じた気分の利用

環境の利用や生活上の出来事によって生じる気分を用いる方法である。Gerrards-Hesse et al. (1994) によれば、主なものとして天候、試験、スポーツの試合観戦、部屋の雰囲気、映画館での映画鑑賞の5つが挙げられる。これらの具体的な方法について Table 2.1.2 にまとめた。

以上が、認知-感情研究において用いられる独立変数の主な操作方法である。

個人差アプローチと自然な気分の利用アプローチに共通する最大の利点としては、自然な状態での研究が可能である点にあると考えられる。個人差アプローチでは臨床的な問題の影響をそのまま捉えることができ、自然な気分の利用ではより日常的な気分の影響を捉えることができる (谷口, 1995a)。また実験的な操作を行わないため、実験状況の要求特性を最低限にとどめることができる

Table 2.1.2
環境及び日常的な出来事によって生じた気分を用いる方法

方 法	内 容	研究例
天 候	日照量, 温度, 湿度, 気圧, 風速などの違いによる気分の差 (Cunningham, 1979) に着目	Schwarz & Clore (1983) : 晴れの日と雨の日の気分の違いを利用し, 幸福感や満足度の判断に及ぼす気分の影響を検討
試 験	試験や試験にまつわる出来事 (採点された試験を受け取る時など) が不安や落胆, 喜びや安心感などを喚起することを利用	Parrott & Sabini (1990) : 予想した得点と実際の得点との開きによって生じる気分を利用
スポーツの 試合観戦	スポーツの試合 (たとえばサッカー) の中継等を見て喚起された気分を利用する方法	Schwarz, Strack, Kommer, & Wagner (1987) : 1982 年のサッカー・ワールドカップの 2 つの試合, 自国が勝った試合と引き分けた試合の前後に電話でインタビューするという方法を用い, 判断に及ぼす気分の影響を検討
部屋の 雰囲気	部屋の雰囲気の違いが気分に影響することを利用した方法	Schwarz et al. (1987, 第 2 実験) : 快適な部屋 (アームチェアやポスター, 花があり, 親しみやすい素敵なオフィスのような雰囲気) と快適ではない部屋 (掃除用具やペンキ用具が置きっぱなしで, 電球が点滅する上に, 隣の部屋からプリンタの騒音が聞こえ, 汚く暑すぎて嫌な臭いがする, 実験室のような雰囲気) の 2 つの部屋で判断の実験を行い, 気分が判断に及ぼす影響を検討
映画館での 映画鑑賞	実際の映画館で上演されている映画を鑑賞した人々を対象に行う方法	Forgas & Moylan (1987) : 幸せ, 悲しみ, 攻撃的な気分を喚起するような映画の上演の直後に, 一般の人々に対してインタビューを行い, 映画の感情的な性質によって判断が影響をうけることを検討

ると考えられる。しかし、他の要因を検出・統制することは困難であり、交絡している可能性も高いため、純粋な気分の影響なのかは明らかにならないという問題がある。また入力時と出力時が同じ状態である場合が多いため、どちらに気分が影響しているのかがわからないことも問題として指摘されている (Blaney, 1986)。加えて、個人差アプローチでは、診断や測定は簡単ではなく、臨床的な患者を対象とする場合は、複雑な課題や時間のかかる課題を行うことは困難であり、実験にかなりの制限がかかるアプローチであるといえる。

気分誘導アプローチ全体としての利点と問題点は個人差アプローチ等の逆であり、要因をある程度統制することができる点が最大の利点であると考えられるが、喚起された気分が自然な日常的な気分とどの程度類似しているかは大きな問題である。また気分誘導場面の要求特性による可能性も否定できないと考えられ、日常生活で行うであろう自然な気分のコントロール (谷口, 1995a) がなされない可能性も問題として挙げられる。

さらに気分誘導アプローチを言語的操作と非言語的操作に分けて考えると、言語的操作では認知プライミングが生じている可能性があるという問題も指摘されている。谷口 (1991a) は、感情ネットワーク理論の立場から考えると、たとえば言語的教示から「憂うつ」ということばに関する意味的概念や過去経験の記憶の活性化がなされると考えられ、そうすると実際に憂うつな気分が生じていなくても、憂うつな気分が及ぼすのと同じ効果を得ることができるのではないかという問題を述べている。特に従属変数を測定する認知課題では言語を媒介とするものが多いことから、この認知プライミングの問題は検討すべきものと考えられる。また、催眠やヴェルテン気分誘導法の成功率は高くはなく、性差もみられることも指摘されており (谷口, 1991a)、感受性による対象者の選別の必要性和それに伴う問題があるといえる。

一方非言語的操作については、要求特性を最小限にとどめることができること、言語課題に干渉しないこと、認知プライミングの問題が言語的操作よりは小さいこと、言語的操作に比べてより日常的で自然な気分が誘導されること、認知課題の遂行中も連続して誘導を行うことができることなどがこれまで挙げられている (e.g., 谷口, 1991a)。また対象者についても、音楽を用いた場合、成功率は 87~100%であるという報告があり (Clark, 1983)、成功率は高いといえる。

このことから、対象者を選別する必要性は少ないというメリットが考えられる。しかしながら前述のように、最も用いられている音楽や映像の利用に関しては、それら“作品”から喚起される気分は非常に弱いものであり、また強いネガティブ感情を喚起することが少ないという指摘もある（谷口, 1991a）。

以上のように、さまざまな独立変数の扱い方があり、それぞれ有効な点もあれば問題点もあり、幅広い認知-感情研究における独立変数の扱い方について、どれが最も有効であるかという結論は出せないものと考えられる。それぞれの限界を十分考慮したうえで、研究の目的や方法に適した方法を選択し、工夫していくことが必要であるといえよう。

第2節 初期の代表的な説明理論

気分一致効果を説明する理論はいくつかあるが、これまで長らく論じられてきた代表的なモデルは Bower らによる感情ネットワーク理論である。そもそも気分状態依存効果の説明のために提唱されたものであるが、この理論から気分一致効果も説明される（Bower, 1981; Bower & Cohen, 1982）。そしてもうひとつ、先に述べた Beck の認知理論や社会心理学領域で用いられるスキーマの概念を用いて説明しようとするスキーマ理論が挙げられる。本節ではこの初期の代表的な 2 つの説明理論について述べる。

(1) 感情ネットワーク理論

感情ネットワーク理論は、Collins & Loftus (1975) などによって提唱された、長期記憶の意味ネットワーク理論（semantic network theory）を用いたものである。意味ネットワーク理論では、概念は各々の特性が貯えられているノード（node）で表され、概念間の関係はリンク（link）によって示されている（Figure 2.2.1）。谷口（1991a）の解説によると、あることばが処理されるときには、そのことばの意味と結びついている他の概念も活性化されるとし、同じことばあるいは別のことばが示されたとき、そのことばの概念が既に活性化されていれば、再認率が向上したり、処理の負担が軽減されるために反応時間が短くなっ

たりすると考えられており，このような効果はプライミング（priming）効果と呼ばれている。

Bower（1981）は，このネットワークの中に喜びや抑うつ，恐怖といった感情のノードを仮定し，感情ノードの周囲には関連するノード（たとえば自律神経パターン）があると考えた（Figure 2.2.2）。感情ノードは多くの刺激によって活

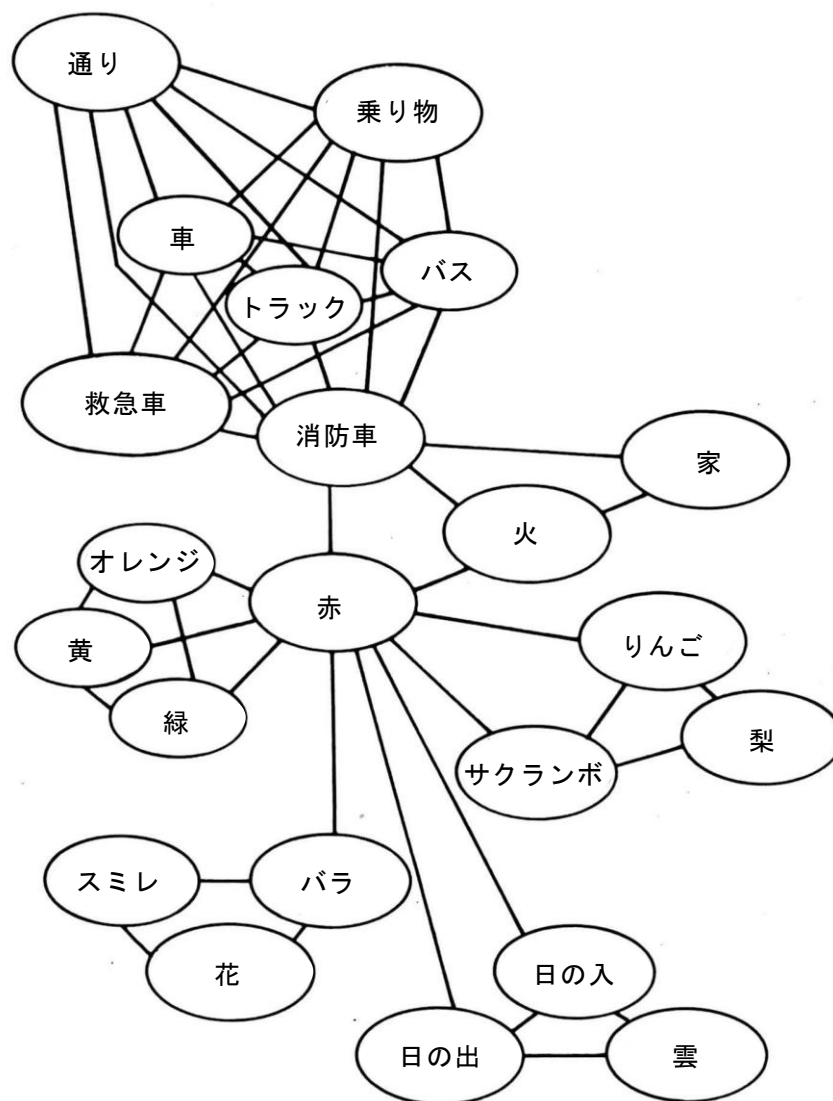


Figure 2.2.1. Collins & Loftus（1975）の意味ネットワーク・モデル（Collins & Loftus, 1975, p.412 を和訳）。

注）人間の記憶における概念間の関係性を表したものである。線分が短いほど関連性が高いことを示す。

性化され得るものであり，ある閾値以上に活性化すると周囲のノードに興奮を伝達する。そしてそれが結びついている記憶構造の中で活性化を拡散させ，関連する記憶の全体的な活性化を上げるとする。たとえば悲しみを感じている人は，自身の悲しい出来事を意識的に考えるようになり，思い出すことになる。なお各々の感情ノードは，相互に反対の性質の感情を抑制すると考えられている。この感情ネットワーク理論による気分一致効果の説明として谷口（1991a）は，現在の気分はその気分と関連する概念を活性化し，それらと一致する情報は，処理が促進されて反応時間が短くなると同時に，活性化された他の要素と結びつくことによって記憶がよくなることで生じると述べている。

さらに Bower（1991）は，気分一致記憶と気分一致判断との結果の分離に着目し，社会的判断における気分一致効果をよりよく説明するためにこのモデルを修正した。この修正モデルでは，ネットワーク内にポジティブ価-ネガティブ

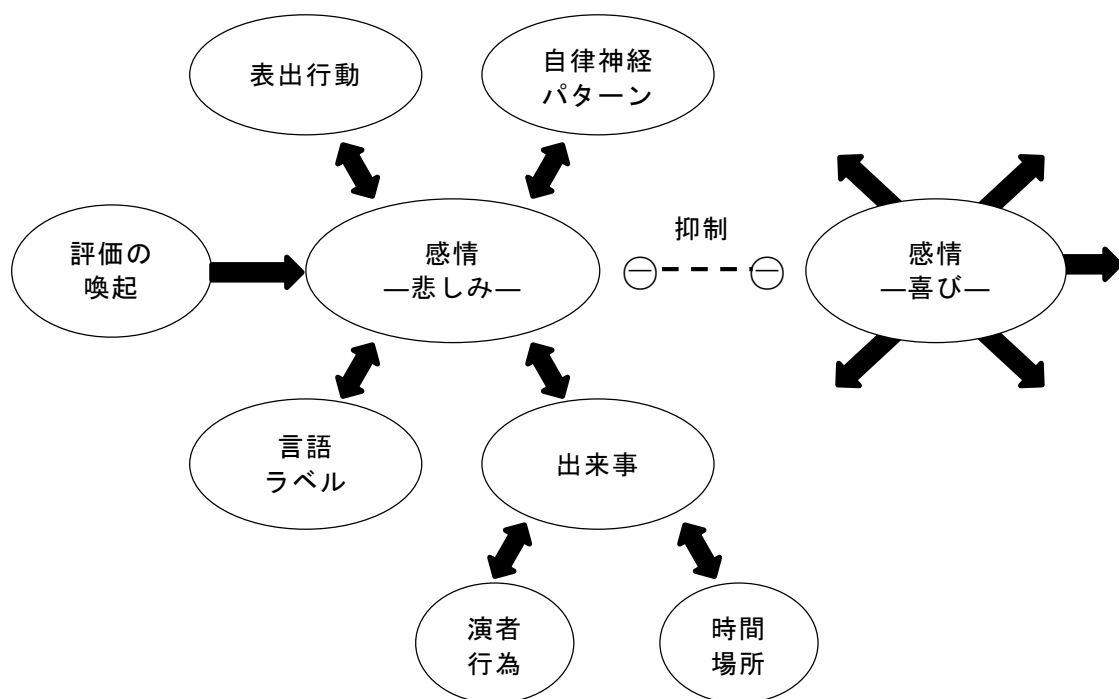


Figure 2.2.2. Bower の感情ネットワーク・モデル (Bower, 1981, p.135 を和訳，一部改変)。

注) 感情ノード (悲しみ) の周囲には，小さな楕円で示しているノードが結合している (例えば，悲しみの表情などの「表出行動」や悲しみという「言語ラベル」など)。双方向矢印は，ノード間の活性化の相互やりとりを示す。また破線で示した悲しみと喜びという対照的な質の感情は，互いに活性化を抑制する。

価というノードを設定している。大平（1996）によれば、抑うつ的な気分を経験すると、ネガティブ価ノードが活性化し、それに連結しているネガティブな概念が広く活性化するために、ネガティブな記憶が促進されると考えられる。

(2) スキーマ理論

ここでいうスキーマとはわれわれが経験的に学習してきた知識の枠組みであり、情報処理の仕方を決定する認知構造のことを指す（伊藤, 2000a）。第1章で述べたようにスキーマは Beck らの抑うつ認知理論において用いられている概念であり、ある状況に直面したとき、その状況に関連したスキーマが活性化され反応を決定すると考えられている。そしてうつ病者はネガティブなセルフ・スキーマを有していることが想定されており、したがってポジティブな情報を選択的に除き、ネガティブな認知を行いやすいと説明される。

この立場は抑うつと認知に関する研究に多く、初期の研究では個人差アプローチによるものが多い。気分の効果はセルフ・スキーマによって情報が処理されたときに生じるという仮説にもとづき、自分に関わりがあるかどうかを判断する自己関連づけ（self-referent）課題を組み合わせた処理水準課題が用いられることがほとんどであり、およその傾向として自己関連項目において気分一致効果を得たという研究が多い（谷口, 1991a）。

以上の2つの理論が気分一致効果の代表的な理論であるが、どちらの理論も特定の現象は説明可能であり、どれが正しいと決めることはできないし、組み合わせることでよりよく説明できる可能性もあると谷口（1991a）は述べている。最近の研究動向としては、自己関連づけ課題において気分一致効果が認められやすいことから、スキーマ理論に傾きつつあるという指摘もあるが（野内・兵藤, 2006）、いずれの理論からも説明できない研究結果や、理論から予測される現象とは反対の現象も見出されており、限界の指摘や新たな理論の提唱がなされている。次章では、気分一致効果や理論をめぐる問題について論じる。

第3節 気分一致効果の生じにくい条件と気分不一致効果

気分一致効果はこれまで非常に数多く研究され、関心を集めてきた現象である。また、それを説明する代表的な理論である感情ネットワーク理論やスキーマ理論も明快である。しかし、初期のレビュー研究からも、実際にはその効果が認められるのは部分的であることが多いことが指摘されており（Blaney, 1986）、研究が増加するにつれ、広く一貫して認められる現象ではないという見解が主となってきた（e.g., Sedikides, 1994）。本節では、どのような場合に気分一致効果が認められにくいのか、先行研究の知見や見解をまとめる。

(1) 記憶検索への気分の影響は認められにくい？：符号化と検索の違い

特に初期の研究で論じられてきたもので、記憶検索に及ぼす気分の影響は弱いものであることが指摘されている（Bower & Forgas, 2000; 川瀬, 1990）。ここでいう検索とは、記憶からの出力段階の過程を指し、記憶された情報のなかから、特定の情報を探して取り出すことをいう（岡, 1999）。またこれに対して、入力された刺激が記憶表象として貯蔵されるまでの過程を符号化とよぶ（森, 1999）。符号化という用語は、刺激の物理的特徴の検出や分類などの知覚的処理から、リハーサル、体制化、精緻化などの記銘方略も含めた幅広い意味で用いられている（森, 1999）。

たとえば Bower et al. (1981) では、物語記憶の再生時のみに気分誘導を行った場合には気分一致効果は認められなかった。検索時の課題によって影響が異なることも指摘されており、再生課題では気分の効果が認められるが、再認では認められにくいともいわれている（Forgas & Bower, 1987）。これらの理由として、外的手がかりと比べて気分は情報の検索手がかりとしては弱いものであることが考えられているが、この点については単純に説明することは困難であると考えられる。

(2) 気分を一次元で捉えた場合、効果が認められにくい？：感情特定性（emotional specificity）に関する議論

独立変数である広い意味での感情と従属変数である刺激の感情価との一致に

関する問題である。ここにずれがある場合に気分一致効果が生起しないのではないかという指摘がある（e.g., 伊藤, 2005; Rusting, 1998）。たとえば Niedenthal & Setterlund（1994）は知覚には気分の影響が認められにくいというそれまでの見解に対して、認知や気分を単にポジティブ-ネガティブや楽しい-悲しいなどの一次元で捉えるのではなく、カテゴリーカルに検討することで気分一致効果が生起する場合があることを示している。Rusting（1998）によれば、この感情特定性を支持しないエビデンスも示されており、この点については今後の検討課題であると考えられる。

(3) 自動的処理への気分の影響は認められにくい？：認知的処理の違い

認知課題で求められる認知的処理の違いが気分一致効果の生起に関わる問題として論じられている。特に抑うつに関して、注意課題や自動的処理への影響は認められにくいことがこれまで論じられている（e.g., Williams, Watts, MacLeod, & Mathews, 1997）。たとえば、自動的処理の寄与が高いとされる潜在記憶（implicit memory）へは抑うつの影響は認められにくいなど、主として求められる認知的処理が異なる顕在記憶と潜在記憶に及ぼす抑うつの影響の違いに関しては今もなお議論が続いている。この点については次章で詳述する。

(4) ネガティブ気分の影響は弱い？：効果の非対称性（asymmetry of effect）

これまでよく見出されてきた現象のひとつである。ポジティブ気分では気分一致的な認知が促進されるがネガティブ気分ではそれが生じにくいというように、ポジティブ気分とネガティブ気分が認知に及ぼす効果は対称的ではないことが初期の研究から多く示されてきた（e.g., Blaney, 1986）。Isen et al.（1978）では、フィードバックによってポジティブ気分とネガティブ気分を誘導し、パーソナリティ特性語の学習再生を求めた結果、ポジティブな気分状態ではポジティブ語がより多く再生されるが、ネガティブな気分はネガティブ語の記憶に影響を及ぼさないことが示されている。

その後も数多くの研究でこういった非対称性が見出され、レビュー論文やメタ分析において、その影響要因やメカニズム、説明理論についてさまざまに論じられてきた（Blaney, 1986; 伊藤, 2000a, 2005; 川瀬, 1990; Matt, Vázquez, &

Campbell, 1992; Rusting, 1998; Singer & Salovey, 1988)。最も多くなされている説明は、人は一般にネガティブな感情を嫌うがポジティブな感情は維持しようとするものであるという感情調整の動機づけからのものである(e.g., 伊藤, 2000a, 2000b; 川瀬, 1990, 1994)。また、対人認知に及ぼす気分の効果を検討し、非対称的な効果を見出した Forgas & Bower (1987) は、文化的規範からネガティブな判断を抑制している可能性を考察し、動機づけ、文化、規範などの影響も含めて考える必要性を指摘している。ポジティブ気分とネガティブ気分では影響を及ぼす認知的処理が異なるという説明(e.g., Forgas, 1995; 川瀬, 1992) などもある。

(5) 気分不一致効果

理論から予測される現象とは逆に、ポジティブ気分ではネガティブな認知が、ネガティブ気分ではポジティブな認知が促進されるという気分不一致効果もこれまで見出されてきている。この気分不一致効果についてもさまざまに論じられているが(e.g., Erber & Erber, 1994; Parrott & Sabini, 1990; Rinck, Glowalla, & Schneider, 1992; Rusting & DeHart, 2000; Sakaki, 2004; 榊, 2006; 富山, 1999)、最も多い説明は上述の効果の非対称性と同様、感情調整によるというものであり、ネガティブな気分状態ではポジティブな思考などを行うことでその気分状態を緩和しようとするために気分不一致効果が生じると考えられている。ポジティブな気分状態においてなぜネガティブな認知を行うのかという点については、説明している研究は少ないが、たとえば Parrott & Sabini (1990) は、気分は複雑なものであり、自己イメージや楽観・悲観主義、動機づけなどを含むものであって、現実主義的な意思決定を行うためには、悪い方向への調整もあり得ると述べている。この感情調整に関しては、動機づけ要因の関与の可能性の指摘がなされており、動機づけ的な処理を行う場合に気分不一致効果が生じるという見解もある (Forgas, 1995)。このほか、個人の有する自己複雑性による違いやパーソナリティ特性の媒介可能性など、他の要因が関与している可能性も指摘されている (Rusting, 1998; Rusting & DeHart, 2000; 榊, 2006)。

なお感情調整の結果として気分不一致効果を捉えた場合、この現象は抑うつ
の予防や緩和の手段である可能性があることが指摘されている (Parrott & Sabini,

1990)。抑うつ者は抑うつに対抗するものとして気分不一致的な認知を行う傾向が低い可能性や、そういった認知を効果的に行うことができていない可能性についても彼らは述べている。このように考えると、気分不一致効果は抑うつにおける認知と抑うつとの悪循環を断ち切る現象であるとも捉えられる。言い換えれば、ある条件下では抑うつと認知とのネガティブな悪循環に巻き込まれずに保たれる部分が存在し得るということにもなるだろう。気分一致効果のみならず気分不一致効果の生起要因についてもさらに検討し明らかにしていくことで、抑うつの臨床心理学的理解がより一層進み、より効果的な援助の開発にもつながり得るものと考えられる。

第4節 気分一致効果・気分不一致効果の生起に何が影響しているのか

前節で述べたように、気分一致効果が認められるのは部分的であり、何らかの条件下に限定される可能性が高いことがこれまで示唆されてきた。気分一致効果の生起・不生起及び気分不一致効果の生起にどのような要因が影響しているのか、本節では、先行研究において効果の生起に影響すると考えられてきた主な3つの要因について取り上げ論じる。

(1) 自己関連づけ (self-referent) 処理と情報の自己関連性 (self-relevance)

情報処理に何らかの形で自己が関連する場合にのみ気分一致効果が生じるという見解であり、数多くの研究で検討され論じられているものである (e.g., Blaney, 1986; 伊藤, 2000a; Rusting, 1998)。たとえば川瀬 (1992) は日常的記憶の検索に気分が及ぼす効果を検討し、“自分”ということばを手がかりとして記憶検索を行った場合には気分一致効果が生じたが、ニュートラル語を手がかりとした場合には気分一致効果は認められなかったという結果を得ている。

中でも自己記述性 (自分自身に当てはまるかどうか) の評定などの自己関連づけ符号化が重要であることが指摘されており (e.g., Rusting, 1998), 符号化時に自己関連的な情報処理を行わない場合には気分の効果がみられないか、気分の効果の非対称性がみられると伊藤 (2000a) は述べている。気分一致効果に着

目した研究ではないが、Derry & Kuiper (1981) は抑うつ的内容と非抑うつ的内容の形容語について、形態評定、意味評定、自己記述性評定を行い、その後偶発再生を求めた結果、自己記述性評定を行った場合においてのみ抑うつ群で自己関連的な（自分自身に当てはまると評定した）抑うつ内容語の再生が高まることを示した。すなわち、自己関連づけ符号化が行われた場合においてのみ、抑うつ者において抑うつ的内容の自己関連語の記憶が促進されるという気分一致効果的な現象が認められたといえる。

この Derry & Kuiper (1981) の結果において、自己関連づけ情報処理だけではなく、情報の自己関連性も記憶バイアスに関わっていることが示されているように、処理される情報の自己関連性によっても気分の影響が異なることが見出されてきている。筒井 (1997) は、健常大学生に実験的な気分誘導を行い、自己記述性判断を行ってもらった後、偶発再生を求めた。結果、自己関連語においてのみ気分一致効果が認められている。しかしその後の実験研究の結果から、情報の自己関連性よりも自己関連づけ情報処理が重要であると伊藤 (2000c) は結論づけているが、必ずしも気分一致効果の生起に自己関連づけ情報処理は要さないとする知見もあり (野内・兵藤, 2006)、自己関連に関する結果は一貫していないといえる。

以上のような自己関連が気分一致効果の生起に関与していることについては、スキーマを用いた説明が最も多くなされている。たとえば Kuiper & Derry (1982) は軽度抑うつ者における記憶バイアスを検討し、うつ病患者ではネガティブなセルフ・スキーマが構造化されているのに対し、軽度抑うつ者ではポジティブとネガティブの両方の内容を含むスキーマが、一方非抑うつ者はポジティブな内容のみのスキーマが構造化されていることを示唆している。池上 (1992) は、抑うつ的な人は自己に注意を向け自己を強く意識したとき、ネガティブなスキーマに駆動された情報処理を行いやすくなるのではないかと述べている。また筒井 (1997) は、ネガティブな気分は注意を自己に向けさせやすいことを挙げ、自己を強く意識した場合にネガティブ・スキーマが活性化される傾向があるため、自己に関連する情報処理を行う場合には気分一致効果が認められると述べている。このほか、抑うつにおける自己注目理論からの説明 (e.g., Bargh & Tota, 1988)、認知心理学における自己関連づけ効果 (self-referent effect) や社会心理

学における自己 (self) 理論からの説明などが試みられている。どれが最も適切な理論であるか結論は出されていないものの、このように、自己の関連が気分一致効果の生起に関わるという多くの指摘から、少なくとも自動的に気分が概念を活性化することによって気分一致効果が生じるという感情ネットワーク理論による説明には限界があるといえる。

(2) 独立変数の扱い方の違い

前述のように気分一致効果研究には独立変数の扱い方の異なるいくつかのアプローチがあるが、異なるアプローチから得られた知見を混同して扱うことに對する疑問が掲げられている。たとえば Kwiatkowski & Parkinson (1994) は、実験的に誘導される抑うつ気分と個人差にもとづく自然発生的な抑うつとが類似した状態であるのかは疑わしく、気分誘導アプローチと個人差アプローチ研究とを混同することの問題を指摘している。また、気分誘導アプローチは気分が記憶に及ぼす影響を検討するものであるが、個人差アプローチではパーソナリティ特性による認知構造の違いを研究している可能性があるという指摘もなされている (谷口, 1991a)。

この問題について、気分誘導アプローチと個人差アプローチを同一の課題を用いて検討している研究がいくつかある。Kwiatkowski & Parkinson (1994) は、個人差アプローチと気分誘導アプローチを用いた 2 つの実験で、単語の手がかり再生について抑うつにおける気分一致効果を検討した。その結果、個人差アプローチでは気分一致効果が認められたものの、ヴェルテン気分誘導法を用いた気分誘導アプローチでは同様の効果は認められなかった。また気分一致効果研究ではないが、Gotlib & McCann (1984) はストループ課題を用いた検討を行い、個人差アプローチでは抑うつ者は抑うつ語の色命名時間が長くなるが、ヴェルテン気分誘導法を用いた気分誘導アプローチではこのような現象が示されないといった同様の結果を得ている。さらに Gilboa, Roberts, & Gotlib (1997) では、自己記述性の判断課題と記憶課題を用い、学生を対象に非不快気分者、自然発生的な不快気分者、実験的に誘導された不快気分者のパフォーマンスを比較している。結果、非不快気分者と実験的に誘導された不快気分者ではポジティブな認知バイアスが示されたものの、一方自然発生的な不快気分者ではポ

ジティブな情報とネガティブな情報についての自己記述性判断や記憶に差は認められず、気分の強さと持続の影響だけではなく、その他の抑うつ症状に含まれる要因の影響も含めた検討の必要性を述べている。

以上のように、同一課題を用いて個人差アプローチもしくは自然な気分の利用アプローチと気分誘導アプローチとを比較している研究では、気分誘導アプローチにおいては抑うつ的な気分の影響が認知に及ぼされないことがほぼ一貫して示されている。しかし一方で、気分誘導アプローチのみを用いた研究で、気分一致効果を見出しているものも数多い。これらから、少なくとも個人差アプローチ・自然な気分の利用アプローチと気分誘導アプローチとでは測定している現象が異なっている可能性があることを考慮する必要があるといえる。

(3) 独立変数の質的違い: 気分, 症状, パーソナリティに関わる要因

気分一致効果の生起に関し、独立変数である気分や症状に関する問題が関与している可能性やパーソナリティ要因が交絡している可能性についてもこれまで論じられてきている。

① 個人差アプローチにおける抑うつの違い

個人差アプローチの中でも、対象が臨床群であるか準臨床群であるかで、気分一致効果の認められやすさが異なるのではないかという指摘がある。

準臨床群における抑うつを独立変数として検討した初期の代表的な研究として Hasher et al. (1985a) が挙げられる^{注 2-1}。この研究については、その結果の考察・説明をめぐって議論がなされている。Hasher et al. (1985a) は大学生の自然な抑うつを利用し、ポジティブ、ネガティブ、ニュートラルな出来事を含む物語の記憶に及ぼす気分の効果を検討した。抑うつ尺度得点を基準に抑うつ群と非抑うつ群とに分け比較した結果、群間に差は認められなかった。この結果について、a. 気分誘導法に関する問題、b. 抑うつ、特にその連続性や強度に関する問題、c. スキーマ理論における問題の 3 点から考察しており、大学生の気分

^{注 2-1} Hasher et al. (1985a) では、準臨床的抑うつとは表現されておらず、主として健常大学生（非臨床群）における抑うつ気分の効果の検討として論じられているが、自己報告式質問紙であるベック抑うつ尺度（BDI）の得点によって抑うつ群、非抑うつ群とに分けられているため、本研究では準臨床群の研究と位置づけることとした。

の軽度の変動は記憶には影響を及ぼさないと結論づけている。これに対して、Ellis (1985), Isen (1985), Mayer & Bower (1985) が先行研究との相違や方法上の問題を中心にコメントし、これらコメントを受けての Hasher らの返答論文 (Hasher, Zacks, Rose, & Doren, 1985b) では、健常大学生の軽度抑うつ、すなわち準臨床的な抑うつと臨床的なうつ病者とではスキーマなどの認知構造が異なっている可能性が考えられ、今後それを検証する必要があることが最終的に述べられている。

また Matt et al. (1992) の記憶に関する気分一致効果のメタ分析では、1975 年から 1988 年の間に発表された研究を対象とし、健常的な非抑うつ、主に学生等を対象とし自己報告式質問紙の得点によって分類される準臨床的な抑うつ、臨床的な診断を受けた臨床的な抑うつ、気分誘導アプローチによって誘導された抑うつ気分、誘導された高揚気分における効果を比較検討している。結果、臨床的な抑うつでは気分一致効果が認められるが、準臨床的な抑うつでは気分一致効果は見出されないことが示されている。

このように、個人差アプローチ研究の中でも、大うつ病性障害者など臨床診断を受けた臨床的な抑うつを取り上げる場合と、大学生等における抑うつ尺度得点によって分類される準臨床的な抑うつを取り上げる場合とでは、認められる現象が異なることが報告されており、この違いが気分一致効果の生起に影響している可能性があると考えられる。

② 気分誘導アプローチにおける気分状態の違い

Bower らの研究では主に催眠によって気分誘導が行われているが、催眠状態は非常に特殊な状態であり、非催眠状態における気分と同じであるかどうかの保証はないという指摘がある (谷口, 1991a)。また、催眠を用いる場合やヴェルテン気分誘導法を用いる際に、催眠暗示にかかりやすいなど感受性の高い者を選別する場合も多く、認められた効果は感受性の高い者特有の現象であるという指摘もある。この問題については初期の研究から度々論じられており、議論が分かれているところであるが、こういった方法によって喚起された気分を独立変数にしているのか考慮することが必要であると考えられる。

③ 状態と特性の違い、及び状態と特性との交絡の可能性

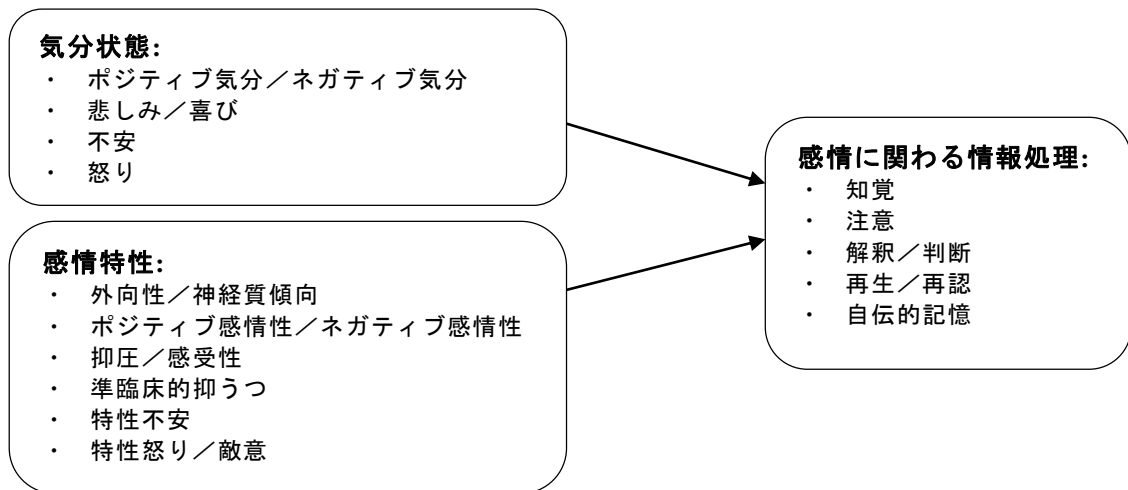
これまでの気分一致効果に関連する研究を整理した **Rusting (1998)** は、気分一致効果とは別に、準臨床的抑うつや特性不安、特性怒り、感情調整に関する傾向、パーソナリティ特性など、特に感情に関わる特性（以下、感情特性と表す）が一致した感情価を持つ情報処理を促進する現象を特性一致性とまとめた。気分一致性と特性一致性は概念的には関連しているが、それぞれ独立に論じられることも多く、個人差アプローチなどにおいては気分と特性が交絡しているような研究もあり、これらの研究を統合することの必要性を指摘している。**Rusting** は、気分と特性が認知に及ぼす影響をどう扱うかによって a. 従来のアプローチ、b. 調整的アプローチ、c. 媒介的アプローチの3つのアプローチに分けた (Figure 2.4.1)。

a. 従来のアプローチ

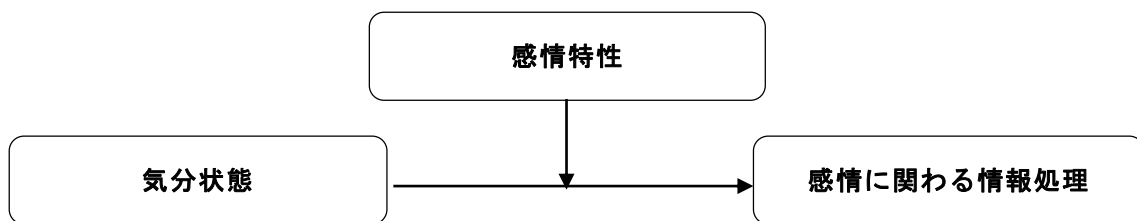
従来のアプローチは一時的な気分状態が認知に及ぼす影響と安定した特性が認知に及ぼす影響をそれぞれ独立に検討するものである。前者については **Bower** の感情ネットワーク理論からの予測にもとづいた検討をしているものが多く、後者については感情ネットワーク理論だけではなく **Beck** のスキーマ理論にもとづくものもあるとしている。すなわち、前者は気分誘導アプローチによる研究が、後者は個人差アプローチによる研究がほぼ該当すると考えられるだろう。どちらも、一貫して理論を支持する結果とはなっていないと **Rusting** はまとめているが、その説明として、サンプルの問題や認知課題の違い、そして本研究でも先に論じてきたような気分誘導法の違いの影響や自己関連の問題、感情調整に関わる個人差や動機づけ変数の影響などを挙げ、これらから気分と特性の両方の測度を含めて検討することの必要性を導き出した。

b. 調整的アプローチ

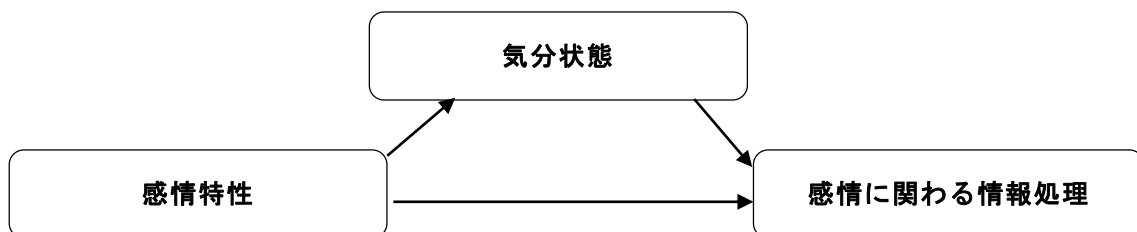
このアプローチは、気分と特性が交互作用的に認知に影響を及ぼすことを想定したものである。たとえば **Smith & Petty (1995)** は、特性として自尊感情とネガティブな気分調整期待の2つを取り上げ、映像によって誘導された一時的気分が認知に及ぼす効果における調整変数として検討している。3つの実験から一貫して示されたのは、ネガティブな気分一致効果は低自尊感情者に特徴的であり、高自尊感情者ではネガティブ気分でポジティブな認知が促進されると



(a) 従来のアプローチ



(b) 調整アプローチ



(c) 媒介アプローチ

Figure2.4.1. 気分一致効果研究における気分要因と特性要因の3つのアプローチ(Rusting, 1998, pp.166-167 を和訳, 一部改変)。

注) (a)の従来のアプローチでは, 気分状態と感情特性とは感情に関わる情報処理に独立して影響を及ぼし, 気分一致効果及び特性一致効果を生じさせる。(b)の調整アプローチでは, 気分一致効果は感情特性の個人差の影響を受け生じる。(c)の媒介アプローチでは, 感情特性がある気分状態を感じやすくさせ, それが情報処理に影響を及ぼし気分一致効果を生じやすくする。なお(a)において, 気分状態, 感情特性, 感情に関わる情報処理の例を箇条書きで示した。

いう気分不一致効果がみられるということであった。Rusting (1998) のレビューでは、調整的アプローチの実証研究からのエビデンスはかなり一貫しており、気分一致効果及び気分不一致効果の生起の有無を特性変数が調整している可能性が示唆されているが、結論を出すにはさらなる研究が必要であると述べられている。

c. 媒介的アプローチ

これは、安定した特性が一時的な気分を通して認知に影響を及ぼすことを想定するもので、Rusting (1998) のレビューの時点では直接検証している研究はないという。ただし、媒介アプローチと類似した解釈をしている研究は存在し、たとえば日常生活における自然な気分の影響を検討している研究では直接気分を操作しているわけではないため、パーソナリティの影響が含まれている可能性があるとして Rusting は述べている。また気分誘導研究においても、感情特性が気分誘導法の感受性を高めることを示している研究もあり (e.g., Larsen & Ketelaar, 1989)、特性が認知に及ぼす影響に気分が媒介している可能性は否定できないだろう。

以上のような Rusting (1998) の指摘の下に、その後これら3つのアプローチについて直接的な検討が行われている。たとえば伊藤 (2001) は特性として、Smith & Petty (1995) と同様の自尊感情とネガティブ気分調整期待を取り上げて、共分散構造分析を用いて調整アプローチによるモデルと媒介アプローチによるモデルの比較を行った。結果、適合度指標の値から調整アプローチにもとづくモデルが適切であると考察されている。

このように、気分や症状、特性による違いを考慮することやそれらを統合して検討することの必要性が考えられる。しかしながら Rusting (1998) の示したような調整アプローチや媒介アプローチによる研究は未だ数少なく、知見の蓄積が必要であるだろう。

第5節 新たな説明理論の必要性

ここまで気分一致効果の例外、生起条件、影響要因について論じ、従来の説

明理論に限界があることを述べてきたが、従来の理論では説明できない現象を説明しようとする新たな理論も提唱されてきている。

たとえば、社会的判断など社会的認知に関する領域では、誤帰属から感情が認知に及ぼす影響を説明しようとする Schwarz らによる感情情報 (Affect-As-Information; AAI) 理論 (e.g., Schwarz & Bless, 1991; Schwarz & Clore, 1983) や、処理方略の違いに焦点を当てた感情混入理論 (Affect-Infusion-Model; Forgas, 1995) などがある。特に Forgas による感情混入理論は気分一致効果が生じる状況を同定していると評価されており (Rusting, 1998)、認知課題で求められる処理の違い (たとえばヒューリスティック処理と動機づけ処理の違いなど) が気分一致効果・気分不一致効果の生起を決定する可能性があることを説明している。また自己関連の影響や効果の非対称性についても、このモデルの中である部分説明されている。

このように新たな理論が社会心理学分野を中心に提唱されてはいるものの、個人差や特性の影響は説明されていないという批判もある (伊藤, 2000a, 2005; Rusting, 1998)。また前節で触れたように、認知的処理の違いが効果に影響することが示されてきているが、特に抑うつへの認知心理学的アプローチでは、無意識的処理と意識的処理への影響の違いを説明する理論が必要であるとの指摘もある (Williams et al., 1997)。この点については次章で詳説する。

抑うつと認知との関係を明らかにし説明していく上では、心理学の基礎的領域における気分一致効果を中心とした認知-感情研究の豊富な知見と説明理論は有用であると考えられる。しかし本章で述べてきたように、例外的な現象や従来の理論からは説明できない現象も多く認められてきている。加えて、抑うつ問題は単なる感情上の問題に限られるものではなく、また特性不安や特性怒りのようなパーソナリティとも異なる。抑うつと認知に関するより良い包括的な説明が可能な、理論の修正・拡張、新たな理論の構築が求められているといえる。

第3章 抑うつにおける認知バイアス

第1節 抑うつへの認知心理学的アプローチと気分一致効果

抑うつにおいてネガティブな認知が行われやすいことは、第1章で述べたように、気分一致効果という現象が注目される以前から、うつ病患者の認知機能の低下に関する研究や抑うつの認知理論にもとづく研究など、臨床的な枠組みの中で示されてきた。1980年代以降、抑うつや不安などの感情の障害 (emotional disorder) への認知心理学的アプローチが盛んになり、また Teasdale が Beck の理論を発展させ、Bower の理論を取り入れた実証研究を行うようになると、気分一致効果の枠組みでの抑うつにおける記憶を中心とした実験的研究が急増した。うつ病患者など臨床群における認知を扱った研究や、大学生等の抑うつ傾向の比較を行う準臨床群を対象とした研究など、気分一致効果研究でいえば個人差アプローチが多いが、健常者に抑うつ気分を実験的に誘導し、抑うつ気分が認知に及ぼす影響を検討する気分誘導アプローチからの検討も行われている。

中でも抑うつにおいてネガティブな事象が記憶想起されやすいという、抑うつにおける記憶の気分一致効果に関する実証研究は多く、レビューやメタ分析もなされている。特に過去経験や自己に関わる出来事に関する記憶、すなわち自伝的記憶 (autobiographical memory) の想起に関して抑うつ者がネガティブな側面を思い出しやすいことは信頼性の高い現象であると Williams et al. (1997) は述べている。また自伝的記憶の想起以外の実験的な記憶材料を用いた抑うつにおける気分一致記憶再生バイアス研究のメタ分析を行った Matt et al. (1992) では、臨床的な抑うつ、実験的に誘導された抑うつ気分では、気分一致効果が認められることが示されている。

このような気分一致効果に関する基礎的な実証研究と、臨床的な観察・治療にもとづく実践的事例的研究の蓄積から、気分一致効果とその説明は認知行動的病理学の基礎理論のひとつに位置づけられるようになった (越川, 2010)。現在では、抑うつ状態の発症・持続・再発にはネガティブな認知と抑うつ的な気分との悪循環が関わっており (e.g., Teasdale, 1983, 1985; Teasdale & Barnard, 1993), この悪循環に気分一致効果が重要な役割を果たしていると考えられるよ

うになっている (e.g., Blaney, 1986; Watkins, Vache, Verney, Muller, & Mathews, 1996)。このことについて Teasdale & Barnard (1993) では新たな抑うつ認知モデルも提唱されている。

さらに近年では、どういった認知過程においてどのように抑うつが影響を及ぼすのかということへの関心が高まっており、従属変数である認知過程を細かく区分し、さまざまな課題を用いた実験的検討が行われてきている。この背景として、自動的処理や注意課題などでは抑うつの影響が認められにくいことが示されてきているように、無意識的な処理と意識的な処理とで感情の及ぼす影響が異なることが明らかとなってきたことが挙げられる。Williams et al. (1997) は、初期の気分一致効果の代表的な説明理論である Bower の感情ネットワーク理論も Beck のスキーマ理論も、このような区別を行っていない問題を指摘し、少なくとも認知の無意識的側面と意識的側面とを区別した、双方を含む理論が必要であると主張している。

無意識的側面を考慮することについては、Freud 以来、心理臨床において意味のある、重要な観点であると考えられる。認知行動療法においても自動思考 (automatic thought) が概念化されているように、コントロールしづらい無意識的な認知の働きこそが心の問題を生じさせ維持させているともいえよう。Williams et al. (1997) においても、これまでの多くの研究から、かなりの量の情報が無意識的に処理されているといえるということが述べられている。

認知心理学の領域では、1970 年代より認知における無意識・意識の区分が注目されるようになってきた。たとえば注意研究領域において Schneider & Shiffrin (1977), Shiffrin & Schneider (1977) は情報処理における自動的 (automatic) 処理と統制的 (controlled) 処理という二過程理論を提唱した。この二過程理論に関する Jacoby (1991) 及び山下 (2006) の解説によれば、統制的処理は人の意図を反映し、処理容量を必要とするものであり、処理に時間がかかるので効率性は悪いが、環境の変化によって柔軟に処理を変化させることができる処理過程であるとされる。一方、自動的処理は必ずしも気づきを伴うものではなく、意図や処理容量を要しないものであり、効率性という点からみれば非常に優れているが、いったん形成されると固定的なものとなり、なかなか変化させにくい処理であるとされる。

また Hasher & Zacks (1979) は記憶の符号化における自動的 (automatic) 処理と努力的 (effortful) 処理とを区分した理論的枠組みを提唱している。ここで自動的処理とは、他の認知活動の干渉を受けずに、最低限のエネルギーしか用いない、無意図的に生じる処理である。一方、努力的処理とは、たとえば記憶におけるリハーサルや精緻化などの活動であり、かなりの容量を要し、他の認知活動の干渉を受け、意図的に開始される処理である。なお、後者は統制的処理と類似したものであると Hasher & Zacks (1979) は述べている。

そして記憶検索の意図性・意識性に関して、ほぼこれと対応する形で潜在記憶と顕在記憶の区分が注目されるようになった。このような区分に関する理論はほかにも提唱されている。Sugiura (2010) 及び杉浦 (2011) では、自動的過程と統制的過程は無意識的過程と意識的過程とほぼ同じ意味で用いられると述べられているが、本研究でも包括的な意味で、意図を伴わない自動的な処理を無意識的処理、意図を伴う統制的・努力的処理を意識的処理と表すこととし、たとえば潜在記憶のような無意識的処理が主となる認知過程を認知の無意識的側面、顕在記憶のような意識的処理が主となる認知過程を認知の意識的側面と表すこととする。

抑うつの影響の違いに関しては、初期の気分一致効果研究をレビューした Blaney (1986) において既に自動的過程と統制的過程を区別することの重要性が指摘されている。記憶に関しては、潜在記憶と顕在記憶に及ぼす抑うつの影響の違いに対して関心が持たれるようになり、多くの研究が行われるようになった。そして、現在の抑うつと認知に関する理論ではこのような2つの認知における違いがどのように抑うつの持続に関わっているかを説明することが試みられている。抑うつにおける認知の無意識的側面、意識的側面の特徴に関する知見や理論について論じるに先立ち、次節でまず認知心理学における潜在記憶と顕在記憶の区分について述べたい。

第2節 認知心理学における認知の無意識的側面と意識的側面

—潜在記憶と顕在記憶—

(1) 潜在記憶と顕在記憶の区分

潜在記憶と顕在記憶の区分については、1980年代の記憶研究において多くの研究者たちの関心を集めたトピックであり（藤田, 1994）、健忘症患者の記憶機能の検討をはじめ、数多くの研究がなされてきた（Roediger, 1990; Schacter, 1987）。顕在記憶（explicit memory）とは、従来の記憶研究で一般的に用いられてきた再生や再認などのテスト課題によって測定される記憶で、実験対象者に学習時のエピソードを意識的に想起するよう求めるものである。これに対して、テスト時に必ずしも先行学習のエピソードの意識的想起を必要としない記憶は潜在記憶（implicit memory）と呼ばれる。

潜在記憶を測定する代表的な課題として単語完成課題が挙げられる。ここでは藤田（1994, 1999）の解説を紹介する。単語完成課題とはテスト刺激として単語の断片（fragment）を用いる記憶課題であり、たとえば“かたおもい”から数文字を抜いて虫食い状態にした“__た__もい”を呈示し、最初に心に浮かんだ単語を報告するように教示する。一度学習された単語は未学習の場合に比べて完成率が高くなるのであるが、この現象はプライミング（priming）効果と呼ばれるものであり、潜在記憶では多くの場合このプライミングが測度とされる。課題遂行には学習エピソードの意識的想起を求める必要がなく、しかしそれでも過去の経験（学習）の影響が完成率に反映されることから、潜在記憶が測定されたとみなすのである。

なお、一般的に潜在記憶実験は偶発学習事態で行われる（太田, 2008a）。偶発学習事態とは、記憶のテストであることを実験参加者には告げず、学習時に意図的に記憶することを直接は求めない状況のことである。偶発学習事態では、たとえば単語のイメージのしやすさや望ましさ、自分にどの程度当てはまるかの自己記述性の評価、どんなフォントで書かれているか活字の形態の判断など、記憶と異なる課題が与えられるが、このような課題は方向づけ課題（orienting task）と呼ばれる（今井・高野, 1995）。方向づけ課題は学習時における処理を方向づけるものでもあり、刺激を符号化する際の処理の種類（たとえば意味的

処理や音韻的処理など）を，実験者側で統制することが可能になると考えられている（Surprenant & Neath, 2009 今井訳 2012）。

潜在記憶テストでは上述の単語完成課題のほかにも，語幹完成課題，知覚同定課題，語彙決定課題，連想課題，一般知識課題，カテゴリー要素産出課題，類似語産出課題など，さまざまな課題が用いられている（Blaxton, 1989; Hamann, 1990; 堀内, 2000; Scott, Mogg, & Bradley, 2001）。

この2つの記憶区分に関して中でも注目された現象は，潜在記憶と顕在記憶の分離（dissociation）である。たとえば健忘症患者は顕在記憶テストにおいてはパフォーマンスに低下がみられるのに対し，潜在記憶テストでは低下はみられない。このような分離は健忘症においてのみ生じる現象ではなく，加齢や不安，恐怖においても示されている（e.g., 岡田, 1999a）。そして抑うつにおいても，顕在記憶においては抑うつ欠損と呼ばれる全体的なパフォーマンスの低下がみられるが，潜在記憶では低下しないという分離がほぼ一貫して示されている（e.g., Bazin, Perruchet, de Bonis, & Féline, 1994; Danion, Willard-Schroeder, Zimmermann, Grangé, Schlienger, & Singer, 1991; 岡田, 1999b）。

(2) 理論的説明

上述の分離の現象などの潜在記憶と顕在記憶の区分を説明する理論がいくつか提唱されている。代表的な理論として複数記憶システム論（multiple memory system theory）と処理説（processing account）の2つについて，藤田（1992, 1994），岡田（1999b）の解説を中心にまとめ，紹介する。

① 複数記憶システム論

Tulving & Schacter（1990）などによって提唱された，記憶の区分は用いる記憶課題が依存する記憶システムが異なるために起こると考える説である。伝統的な再生・再認など，いわゆる顕在記憶はエピソード記憶システムに依存し，単語完成課題や知覚同定課題など，いわゆる潜在記憶は知覚表象システム（perceptual representation system）に依存すると考え，それぞれのシステムが異なる性質を持っているために，分離が生じると主張する立場である。処理説と比較すると，記憶に関する現象を全体的に扱おうとする特徴があると考えられ

ている。

この主張にしたがうと、同じシステムに依存する課題間には分離がみられないことになるが、実際には分離が数多く報告されており、論の修正が必要とされている。このような批判は処理説の立場の研究者から主に出されてきている。

② 処理説

記憶テストによって課題遂行時に要求される処理過程が異なるために区分が起こるのだという説であり、学習時とテスト時の認知的処理の同異や類似度によって、潜在記憶と顕在記憶におけるさまざまな現象を説明しようとする理論的立場である。転移適切処理（transfer appropriate processing）アプローチ（e.g., Graf & Ryan, 1990; Roediger, 1990）が理論的基盤となっている。

転移適切処理は、記憶の符号化の文脈と検索の文脈との一致の程度が大きいほど記憶がよくなる（豊田, 2008）という符号化特定性仮説（encoding specificity hypothesis; Tulving & Thomson, 1973）に通ずるところがあり、学習時とテスト時の認知過程の類似の程度によって学習の効果が決定すると考える^{注 3-1}。そしてこの類似の程度のもととなる認知的処理の区分として、Roediger とその共同研究者たちによってデータ駆動型処理（data-driven processing）と概念駆動型処理（conceptually driven processing）の2つが提唱されている。データ駆動型処理とはボトムアップ（bottom-up）処理ともいわれ、処理すべき対象となる刺激の物理的・形態的特徴についての処理であり、単語完成課題などで求められることが多いものである。刺激の入力に対して知覚・感覚的な要素としての分析から始まり、その刺激が何であるかという解釈で終わる処理とも解説されている。一方、概念駆動型処理は概念的・意味的処理であり、再生や再認で求められることが多い。文脈や実験対象者の概念的知識によって導かれる自発的活動である。トップダウン（top-down）処理ともいわれ、既有の記憶に依存することが大きく、高次の水準にある概念や理論から駆動され、具体物やある意味の認知に到達する処理のことである（太田, 2008b; 菅井, 1999）。

注 3-1 符号化特定性仮説と転移適切処理とは結果的には類似したものであるが、違いとして、後者は符号化過程における処理の仕方と検索過程における処理の仕方に注目したものであり、貯蔵の段階や手がかりについて言及していない点が挙げられる（太田, 2008b）。

このように処理タイプによって、たとえば単語完成・知覚同定はデータ駆動型課題、再生・再認は概念駆動型課題というように課題も分類され得るが、これらの2つの処理は2つの独立した連続体を仮定するものであり、あらゆる記憶課題はデータ駆動型処理と概念駆動型処理の両方を含み、課題遂行時にどちらの処理が相対的に重要となるかによって課題が分類されると考えられている。

処理説に対する批判もいくつか出されており、そのひとつに、潜在記憶と顕在記憶の概念的な区分を決定づける意識の問題を説明していないことが挙げられる。処理説は、課題における認知的処理の特性とその課題成績の関係を説明することに主な目的が置かれているため、その認知的処理がどのような意識を生み出すのかなど、意識と認知的処理との関連性の問題を扱っていないという点が批判の対象となっている。

以上のような説明理論が出されているが、抑うつにおける潜在記憶の検討では、処理説の立場からの研究が多い（e.g., Jenkins & McDowall, 2001）。

第3節 臨床心理学における認知の無意識的側面と意識的側面

無意識的な心的過程と意識的な心的過程との概念的区分には長い歴史があり、心理学の歴史と同様、実験心理学の誕生以前から主に哲学の中で論じられてきた（Williams et al., 1997）。Williams et al. (1997) の解説によれば、その後 Freud が無意識を詳細に説明したが、実験心理学的には信頼性の欠けるものとみなされ、行動主義の到来によって無意識・意識の問題は棚上げされることになる。1950年代後半、心理学において情報処理パラダイムが用いられるようになると、前節で述べてきたように無意識と意識との区別に関するさまざまな知見が出されるようになり、このような心理学における変化が臨床心理学にも波及していった。臨床心理学では、たとえばさまざまな精神医学的障害を認知的な概念でどのように明らかにすることができるかという問題が扱われるようになり、そして無意識と意識の区分に関しても同様に関心をもたれるようになった（Williams et al., 1997）。

特に記憶に関して、意識的に想起できない記憶や記憶の無意識的な働きが神経症や感情障害に関わっているという考えは既に Freud が論じていたが、行動主義においてはこのことに関するエビデンスが得られないために、取り上げられることはなかった (Williams et al., 1997)。しかし近年、前節で述べてきたように Schacter (1987) などによって無意識的な記憶、すなわち潜在記憶が実証されるようになって、臨床心理学においてもこの無意識的な記憶がうつ病や強迫性障害、恐怖症などの症状に影響していることが説明されるようになってきている (Williams et al., 1997)。

現在の臨床心理学においては、心理療法の中で認知行動療法が基礎的な心理学との関連が最も深いと位置づけられており (丹野, 2008)、基礎的な心理学の中でも認知心理学の成果は臨床心理学の分野に大きなヒントを与えてきたと丹野他 (2008) は述べている。すなわち、認知の無意識的側面と意識的側面の問題に関しては、臨床心理学においては特に認知行動療法の基礎理論 (症状や障害の認知行動モデル) や介入技法、介入効果などに関する研究の中で、注目され、取り上げられてきているといえる。

伊藤・金築・根建 (2001) は、認知行動療法に自動的処理 (本研究でいう無意識的処理) と統制的処理 (本研究でいう意識的処理) が及ぼした影響について展望し、その中で、この概念が臨床心理学領域に多大な影響を与えたと述べている。彼らは日常的な活動とどのように無意識的処理と意識的処理が関わっているかのひとつの例として Tice, Bratslavsky, & Baumeister (2001) の研究を取り上げ、たとえばやけ食いのように、不快な感情経験に伴う苦痛を低減させるための無意識的行動が、意識的な行動 (たとえばテストのための予習をすることなど) に優先して生じることを示していると解説した。また Wegner (1994) の皮肉過程理論 (ironic process theory) について、認知的負荷の高い状態において、思考を抑制したり精神を集中したりしようとする、むしろそれと逆の効果を生じてしまうという現象の生起メカニズムが、無意識的処理と意識的処理との観点から説明されていると紹介している。そして伊藤他 (2001) は、認知行動療法とこれら 2 つの処理とは、主として、パニック障害や強迫性障害、うつ病などに関して提唱されているいくつかの認知モデルにおいて、この概念が応用され取り入れられる形で関連していることを紹介し、これが認知行動療法

において新たな認知的介入の広がりをもたらしていると論じている。さらに今後の可能性として、従来の認知行動療法のように、認知内容に焦点をあて、ひとつひとつを取り上げて解決したとしても、個人特有のその認知を生み出す過程に焦点を当てなければ症状はおさまらないと考えられる問題を挙げ、認知過程に焦点をあてて介入を行うことで、症状が効率的に軽減すると考えられると伊藤他（2001）は述べている。また、2つの異なる認知過程を考慮に入れ、それらを明確に区別することで、従来の認知理論と比べ症状をより詳しく説明することが可能になり、介入の際のターゲットを厳密に特定することも可能となると述べている。これらから、無意識と意識の世界を同時に研究対象とすることで、精神分析や認知行動療法を統合した、新たな心理療法の発展も導かれ得ると示唆している。

また Sugiura (2010) は、抑うつや不安において特徴的なネガティブな自動思考は、その自動性こそが問題となることを指摘し、Williams et al. (1997) は、認知療法の中心的目的は患者が自動思考にアクセスできるようにすることであり、無意識的处理に関する認知的な研究は、自動思考に対する意識的経験を可能にする方法を見つけるのに役立ち得ると論じている。このように、自動思考をどう捉え、どう扱っていくかということにおいても認知の無意識側面と意識的側面に関する研究は貢献するものといえる。

さらに 1990 年前後から、認知行動療法には第三世代といわれる立場が発展してきている。これは学習理論にもとづく行動療法を第一世代、認知モデルにもとづく認知療法が登場し、第一世代と合流することで認知と行動を統合的に扱おうとする認知行動療法を第二世代と位置づけるものであり、第三世代においては、マインドフルネス (mindfulness) とアクセプタンス (acceptance) という概念の導入がその特徴とされる (熊野, 2012)。マインドフルネスとは、Kabat-Zinn によるマインドフルネス・ストレス低減療法の中で概念化され、杉浦 (2011) では、今ここでの経験に、評価や判断をしない注意を向けることと紹介されている。またアクセプタンスとは、「今この瞬間の私的な体験の世界に対して、自動的に心を閉じてしまわないように意図的に努力すること」(熊野, 2012, p.28) と定義されている。第三世代の認知行動療法では、ネガティブな認知を変化させることなく、認知や感情とのかかわり方を変化させることを

強調する（杉浦, 2011）。特にマインドフルネスに関しては、ここまで論じてきた無意識的处理と意識的处理という概念に関連が深いと杉浦（2011）は指摘している。また、マインドフルネスとは、ネガティブな思考や感情が自動的に生じてくることにとらわれることをやめる方法を示唆するものであるとも述べている（Sugiura, 2010）。杉浦（2011）においても述べられているように、抑うつや不安においては自動的处理に支えられた認知によって苦痛を経験していると捉えられるが、心理療法においては、気づきや洞察、さらに認知行動療法の第三世代においては、注意を向けることや、意図的に努力すること、というように、意識的处理が重視されているといえる。言い換えれば、意識によって無意識の内容に気づいたり無意識をコントロールしたりしていくことが、心理療法において目指されているともいえよう。

以上のように、現代の臨床心理学において認知の無意識的側面と意識的側面とを研究する意義は非常に大きく、今まさに求められている研究課題であるとも考えられる。

第4節 抑うつにおける潜在記憶バイアス

記憶に関する基礎的研究において、認知の無意識的側面と意識的側面、すなわち潜在記憶と顕在記憶との区分や分離の現象が注目されてきた中、臨床心理学の分野においても、特に抑うつや不安などにおける認知研究や気分一致効果研究の中でこの違いへの関心が持たれるようになった。なお本研究では以下、抑うつにおけるネガティブな認知を検討する研究と抑うつにおける気分一致効果の研究を、広く認知バイアス研究とあらわすこととし、記憶に限定される場合には記憶バイアス研究とあらわす。また、抑うつにおいてネガティブな認知もしくは気分一致的な認知が促進された現象を認知（もしくは記憶）のネガティブ・バイアスとあらわすこととする。

抑うつにおける記憶バイアスに関する初期の研究では、Blaney（1986）、Williams et al.（1997）のレビューや Matt et al.（1992）のメタ分析からもわかるように、顕在記憶を対象としているものがほとんどである。しかし、日常生活

において顕在記憶が用いられているのはほんの一部に過ぎず、記憶の大半は無意識的なもの、すなわち潜在記憶が用いられているということも指摘されている (e.g., Watkins et al., 1996)。抑うつ欠損が潜在記憶で認められないといった分離現象がみられることを踏まえると、ネガティブ・バイアスも潜在記憶では認められないという分離が生じる可能性も考えられ得る。抑うつにおける認知のネガティブ・バイアスが抑うつの持続や発症、再発に重要な役割を果たしていると認知療法の確固たる基礎的理論として位置づけるためには、無意識も含めた記憶や認知において広く認められる現象であるかどうかを明らかにすることが必要であり、記憶に関していえば、潜在記憶においても同様に検討する必要があると考えられる。また Williams et al. (1997) の指摘のように、臨床に役立つ理論の修正・発展のためには、意識的側面だけではなく無意識的側面をも含めて理論化していくことが必要であるだろう。前節で論じてきたように、臨床的にも認知の無意識的側面に関して研究する意義があるといえる。

以上のような抑うつにおける潜在記憶バイアスを検討することの重要性の認識が主として臨床心理学の分野において高まり、1990年代に入って実証研究が行われるようになった。

1990年代の初期の抑うつにおける潜在記憶研究では、ネガティブ・バイアスは生起しないという結果が示されることが多かった。たとえば Denny & Hunt (1992) はうつ病患者と健常者を対象に刺激語の自己関連づけ課題（方向づけ課題）の後、自由再生テスト（顕在記憶）、単語完成テスト（潜在記憶）を実施した。結果、自由再生ではうつ病患者群でネガティブ語が多く、健常者群でポジティブ語が多かったのに対し、単語完成では感情価の影響も抑うつの影響も認められなかった。すなわち、顕在記憶ではネガティブ・バイアスが認められたのに対し、潜在記憶ではバイアスは生じなかった。また、Watkins, Mathews, Williamson, & Fuller (1992) は、臨床的な抑うつ者と健常者を対象に、刺激語の偶発学習（イメージ）の後、顕在記憶として手がかり再生課題、潜在記憶として語幹完成課題を実施した。結果、Denny & Hunt (1992) と同様、顕在記憶ではネガティブ・バイアスが認められたが、潜在記憶では認められなかった。

これらの初期の研究でネガティブな潜在記憶バイアスが認められなかった点に関して、Roediger & McDermott (1992) は記憶テストにおいて求められる処

理の違いによる影響を指摘している。すなわち、多くの潜在記憶課題は知覚的過程にもとづくものであるが (Roediger, 1990), 抑うつは意味的な精緻化過程に影響を及ぼすことが想定され, したがってこれまでの潜在記憶テストではネガティブ・バイアスが認められなかったのではないかと、いうものである。この指摘は、ひとつには前述の転移適切処理にもとづいているといえる。そして抑うつ of 新たな認知モデルを提唱した Williams ら (Williams, Watts, MacLeod, & Mathews, 1988; Williams et al., 1997) の主張にもとづくものであるといえる。Williams らは、そもそも意識的経験が無意識的過程が調整するという Freud の主張を支持する情報処理研究からのデータにもとづき、統合モデルを提唱した。このモデルは、不安はプライミング (潜在記憶テストに反映される) に影響を及ぼし、抑うつは精緻化 (顕在記憶テストに反映される) に影響を及ぼすという、感情状態の違いが効果の違いをもたらすことを説明するものである。

これらを踏まえ Roediger & McDermott (1992) の指摘を言い換えると、これまでの多くの潜在記憶課題で求められているのはデータ駆動型処理であるが、一方刺激の意味や概念に関するより深い処理は概念駆動型処理であり、概念駆動型潜在記憶テストを用いた場合には抑うつの影響、すなわち気分一致的なネガティブ・バイアスが認められる可能性が考えられるという指摘である。

この Roediger & McDermott (1992) 指摘にもとづき、概念駆動型テストを用いた抑うつにおける潜在記憶バイアス研究が 1990 年代半ば頃より行われるようになった。たとえば自由連想課題を用いた潜在記憶パラダイムで抑うつにおける気分一致バイアス、すなわちネガティブなバイアスが生じるかどうかを検討した Watkins et al. (1996) では、抑うつにおいて抑うつ語の潜在記憶パフォーマンスが高くなるというネガティブ・バイアスが認められている。Watkins, Martin, & Stern (2000) は 2 種のデータ駆動型テストと 2 種の概念駆動型テストの計 4 つの記憶テスト課題を実施し、抑うつにおける潜在記憶のバイアスを検討している。しかしながら、ネガティブ・バイアスが認められたのは、単語検索課題 (単語の定義を呈示し、単語を検索してもらう課題) という 1 つの概念駆動型テスト課題のみであった。

このように、概念駆動型テストを用いた抑うつにおける潜在記憶バイアス研究も行われるようになってきているものの、概念駆動型テストを用いてもネガ

ティブ・バイアスが生じることもあればバイアスが生じないこともあり、結果は一貫していない。その後の研究では、データ駆動型を用いてもネガティブ・バイアスが認められている研究もある。近年ではメタ分析やレビュー論文の中でこういった一貫しない結果を説明しようとする試みがなされており (Barry, Naus, & Rehm, 2004, 2006; Phillips, Hine, & Thorsteinsson, 2010; Watkins, 2002; Wisco, 2009), 中でも、検索方法の違い (意図的検索を行うか自動的検索を行うか) や処理の違い (データ駆動的処理か概念駆動的処理か) によって抑うつの影響は異なる可能性は大きいと考えられているが、現在もなお議論の分かれているところでもある。

第5節 抑うつにおける認知バイアスの説明

認知の無意識的側面と意識的側面の区分への関心が高まり、抑うつにおける無意識的な認知に関する研究が蓄積されてきた中で、得られた知見の包括的な説明の試みやモデルの構築がなされるようになってきた。本節では、潜在記憶バイアス研究の知見の説明を中心に、抑うつにおける認知バイアスに関する説明やモデルについて述べる。

(1) 抑うつにおける潜在記憶バイアスに関する説明

① Watkins らの説明 (Watkins, 2002; Watkins et al., 2000; Watkins et al., 1996)

抑うつの持続メカニズムとして気分一致バイアスを位置づけ、潜在記憶における気分一致バイアスについて、特に概念的処理に焦点を当てて研究を行ってきた Watkins ら (Watkins et al., 2000; Watkins et al., 1996) は、基本的には前述の Williams et al. (1988, 1997) の統合モデルを支持する立場である。Watkins (2002) のレビュー論文では、潜在記憶バイアスの先行研究の一貫しない結果についての別の説明として、転移適切処理アプローチについても取り上げ、比較検討している。そして、(a) 知覚駆動型テストを用いた場合は、抑うつにおいて潜在記憶バイアスは生じない、(b) どういった概念的過程が潜在記憶バイアスを生じさせるのかについては、疑問が残ったままである、(c) 転移適切処理アプロ

一チにおける知覚過程と概念過程の区分は粗すぎるという問題がある，(d) 過程分離手続き（process-dissociation procedure; Jacoby, 1991, 1998）を用いた検討の必要性，を結論として述べている。

② Barry らのモデル (Barry et al., 2004, 2006)

Barry らは，抑うつと潜在記憶を説明する上で，スキーマ理論を組み込んでネットワーク理論を拡張した Rehm & Naus (1990) のモデルにもとづき，転移適切処理アプローチと自伝的記憶に関するモデル (Conway, 1996, Conway & Pleydell-Pearce, 2000) を踏まえた新たなモデルの構築を行っている。Barry らのモデルのオリジナリティは，潜在記憶や無意識的处理も抑うつの理解に寄与するものと位置づけている点であり，転移適切処理アプローチが抑うつにおける潜在記憶研究の結果を説明するという点が主張されている。なお，基本的には自伝的記憶モデルを発展させたものであり，抑うつにおける自伝的記憶の概括性 (overgenerality) との関連から潜在記憶を説明しようとする立場であると考えられる。

③ Wisco の説明 (Wisco, 2009)

Wisco (2009) は，抑うつにおける自己関連づけと潜在・顕在記憶バイアスについて文献レビューを行っている。そして顕在記憶においてはネガティブ・バイアスがほぼ一貫して認められること，潜在記憶バイアスについての結果は一貫しておらず，認められない場合が多いものの，最近ではネガティブ・バイアスが認められる研究もいくつかみられていることをまとめている。

この一貫しない結果の説明に関して，転移適切処理アプローチから説明する Barry et al. (2004, 2006) の主張に対し批判を行い，用いられている課題の性質と，符号化時も検索時も知覚的な処理を行っている研究でネガティブ・バイアスを示している研究は 1 つのみであることから，知覚駆動型課題で潜在記憶バイアスが生じることは疑問であると主張している。

Wisco (2009) が主張するのは深い処理において抑うつのバイアス，すなわちネガティブ・バイアスが生じるのではないかということであり，Table 3.5.1 に示したように処理の深さと抑うつの認知を整理した上で，先行研究のエビデ

Table 3.5.1

処理の深さと抑うつの認知（Wisco, 2009, p.389 を和訳，一部改変）

処理タイプ／	処理の深さ	
	刺激	
	初期過程（浅い処理）	後期過程（深い処理）
記憶	知覚駆動型潜在記憶バイアスについてのエビデンスはほとんどない。	抑うつにおける顕在記憶バイアスについては強固なエビデンスがある。 抑うつにおける概念駆動型潜在記憶バイアスについてはいくらか実証されている。
自己関連づけ刺激が使われているか？	まれに	よく
注意	注意の初期の配分におけるバイアスについてのエビデンスはほとんどない。	抑うつにおいてネガティブ情報に戻ったりそこにとどまったりする傾向。 より長い呈示時間で可能性が高まる。
自己関連づけ刺激が使われているか？	まれに	まれに
解釈	抑うつにおいてネガティブな解釈の初期の活性化についてのエビデンスはない。	抑うつにおけるネガティブな解釈のより大きな選択。
自己関連づけ刺激が使われているか？	現時点でなし	よく

ンスが、顕在記憶ではバイアスが予測されるが潜在記憶では予測されないとする Williams et al. (1997) のモデルとも矛盾することを指摘した。そして、ネガティブ・バイアスは精緻化が行われないとされる潜在記憶課題でも生じるが、より深い処理水準に限られるのではないか、また自己関連づけ符号化は精緻化を促進するため自己関連的刺激がネガティブ・バイアスを増幅させるのではないかとし、Williams らのモデルの拡張を提案している。ただし、これまでの研究では、刺激の自己関連性と処理の深さが混ざっていることが多く、今後の課題として、認知内容（刺激の自己関連性）と認知過程（処理の深さ）とを分けて検討することも必要であると結論づけている。

④ Phillips らのメタ分析からの提言 (Phillips et al., 2010)

潜在記憶に限定している研究ではないが、Phillips et al. (2010) は広く注意や解釈などに関する研究も含め、ネガティブな自己関連づけ潜在的認知と抑うつとの関連を、メタ分析を用いて検討している。記憶に関わる論議においては、転移適切処理アプローチを支持する立場の Barry らの説明と、Williams らを支持する Watkins や Wisco による説明との論争に着目し、分析の結果、転移適切処理アプローチの流れをくむ Barry らの説明がこれまでの研究からは支持されるものと考察している。

ただし、抑うつにおける概念駆動型を用いた潜在記憶研究は数そのものが非常に少なく、Phillips et al. (2010) ら自身も述べているように、除外された研究も多い。転移適切処理アプローチの立場が支持されたとする結論を一般化するには時期尚早であると考えられる。

以上のように、現在まで抑うつと潜在記憶に関する現象は一貫しておらず、提唱されているモデルや理論から十分に説明できているとは言い難い。処理の違いの影響に関する論争にも結論は出ていない。顕在記憶や判断など意識的な認知におけるバイアス研究に比べると研究数はずっと少なく、論争の対象となる概念駆動的な潜在記憶課題を用いている研究はより一層少ない。未だ明らかとなっていない部分は多く、加えて主として認知の意識的側面に関して論じられてきた不一致効果、パーソナリティの交絡等に関する問題についても検討の余地が残されていると考えられる。

(2) 抑うつにおける無意識的处理と意識的处理の相互作用に着目した説明

無意識的处理と意識的处理の相互作用に着目し、抑うつにおける認知バイアスを説明しようとするモデルもある。Beevers (2005) は、感情調整に異なる認知的処理が働くという Forgas ら (Forgas, 2000; Forgas & Ciarrochi, 2002) の二過程説を、抑うつの認知的脆弱性の説明に援用しモデルを構築した。Beevers (2005) のモデルについて述べるに先立ち、Forgas らの感情調整の二過程説について触れたい。なお Forgas らのモデルは、抑うつに限定されるものではなく、広く感情が認知に及ぼす影響を説明するものである。

Forgas らのモデルでは、気分ははじめのうちは気分一致的な認知を自動的に

促進し気分を増強させるが、強度がある閾値に達すると今度は自発的に統制的・動機づけ処理が引き起こされ、気分不一致的な認知を促進し、その状態をコントロールしようすることが仮定されている。Forgas & Ciarrochi (2002) は実験的な気分誘導を行った研究でこのことを実証し、気分一致的な認知がなされるか気分不一致的な認知がなされるかについては、その気分が最初に誘導されてからの時間経過によることも示唆している。また気分不一致的な処理が行われやすい条件のひとつとして、極端な感情状態あるいは嫌悪的状态を経験している場合を挙げている。加えて、感情調整には個人差があることを Forgas らは指摘しており、たとえば自尊感情が高い場合は気分不一致的な認知が行われ感情調整が効果的になされやすいが、自尊感情が低い場合にはそれが生じにくいことも示されているように (e.g., Smith & Petty, 1995), 感情特性も影響を及ぼすことが考えられている。

Forgas らの説を抑うつ認知脆弱性の説明に発展させたのが Beevers (2005) によるモデルである。Beevers は、無意識的処理と意識的処理との相互作用が感情の調整に重要である点を強調し、ネガティブにバイアスされた自己関連づけ的な無意識的処理が抑うつへの認知脆弱性のもととなり、それが意識的処理によって修正され得ない場合に、抑うつの悪循環に陥ることをモデル化している。Figure 3.5.1 に示したモデルについて、以下、Beevers (2005) の解説を紹介する。まず不快気分は自動的に、課題とは無関係なネガティブな侵入思考を浮かび上がらせる。自動的な侵入思考に注意が向くということは、意識的処理を行うのに必要な認知的資源を使うことになり、その枯渇につながる。そしてネガティブな無意識的処理は、ネガティブな認知の検索をもたらし、ネガティブな感情も伴う。このとき無意識的処理が修正されないと、不快気分がより深刻になっていく下方スパイラルが始まる。一方、もしこの無意識的処理が意識的処理によって適切に修正された場合は(たとえば気分不一致情報の意識的検索)、不快気分は修復される。なお、意識的処理は認知的資源を要するので認知的に負荷のかかるような状況では生じにくいのであるが、たとえ意識的処理が生じたとしてもそれが適切でないと不快気分を強化することになる。Beevers (2005) の抑うつへの認知脆弱性の二重過程モデルでは、以上のように無意識的処理を意識的処理が調整することが重要であると考えられる。

このモデルは、各々の部分に関しては多くの先行研究からのエビデンスにもとづくものであるが、全体としてはさらなる実証研究を行う必要があることが Beevers 自身によっても課題として挙げられている。なお、潜在的・顕在的自尊心を測定してこのモデルを検討した Haeffel, Abramson, Brazy, Shah, Teachman, & Nosek (2007) によって、ある部分これを支持する結果が出されてもいる。

Beevers (2005) のモデルは無意識と意識の相互作用を考慮した興味深いモデルであると考えられるが、抑うつにおける認知のメカニズムを明らかにするには、さらに知見を重ね、実証研究や臨床的な研究から得られた知見を包括することができるようなモデルの修正・拡張、新たな構築を行うことが必要であると考えられる。

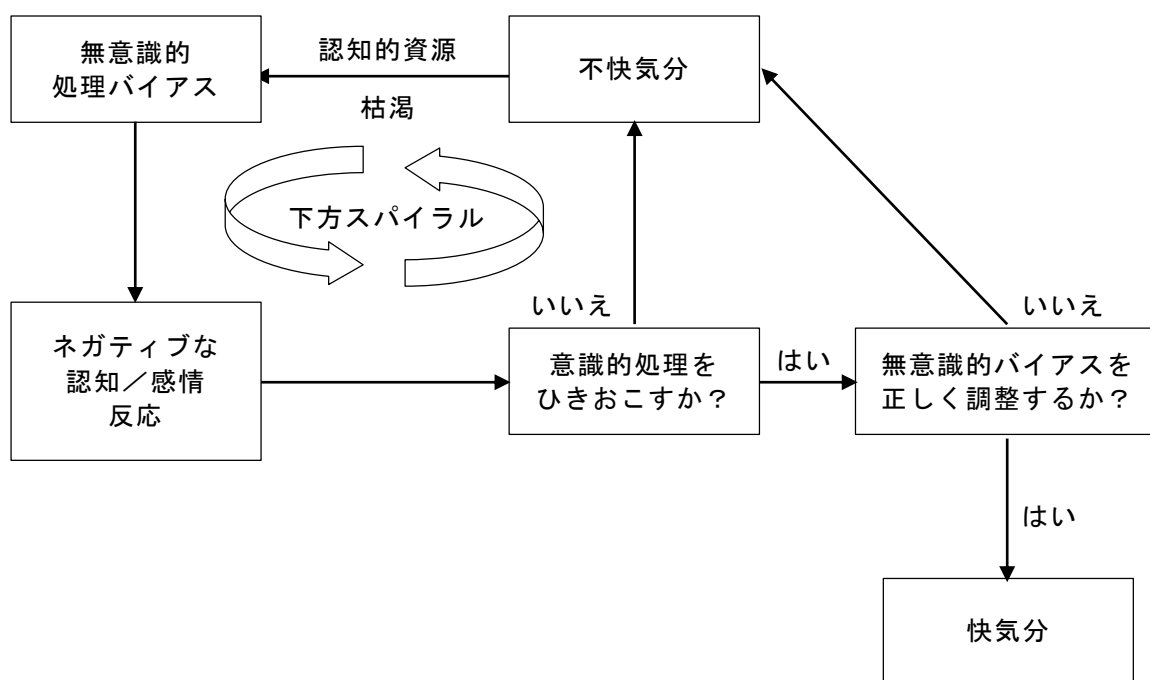


Figure 3.5.1. 抑うつへの認知的脆弱性の二重過程モデル (Beevers, 2005, p.981 を和訳, 一部改編)。

注)「不快気分」は、ネガティブな侵入思考を自動的に浮かび上がらせるというように、「無意識的処理バイアス」に影響を及ぼす。このとき、侵入思考に注意が向くことで、認知的資源の枯渇が生じるとされる。「無意識的処理バイアス」は「ネガティブな認知/感情反応」をもたらすが、このとき「意識的処理をひきおこすか？」どうかで、不快気分の修復につながるか、不快気分がより深刻になっていく下方スパイラルが始まるかが決まる。さらに引き起こされた意識的処理が「無意識的バイアスを正しく調整するか？」どうかで、快気分にいるか悪循環につながるか決まるとされる。

第4章 問題の所在と目的

第1節 本研究の目的

ここまで述べてきたように、抑うつにおける認知バイアスは抑うつと認知との悪循環を生み出すものであり、抑うつの発症・持続・再発に深く関わる現象であるといえる。そして現在、心理療法の中でも特に効果が広く認められている認知行動療法の基礎理論としてもこの現象は位置づけられている。しかしながら、気分一致効果をはじめ、認知バイアスに関する膨大な数の実証研究からは、抑うつにおけるネガティブな認知バイアスはそれほど安定した現象ではないことが示されてきている。現在までに提唱されている抑うつの認知理論においても、それらを十分説明できているとはいえないだろう。現代社会におけるメンタルヘルスの深刻な問題のひとつであるうつ病や抑うつ症状のよりよい理解や効果的な援助・治療を行っていくためには、その基礎のひとつといえる認知バイアスについていまいちど吟味し、どういった場合に生起するのか、あるいはどういった場合には生起しないのか、そのメカニズムを明らかにすることが必要であると考えられる。

第2章で論じた気分一致効果は、独立変数である気分や抑うつが従属変数である記憶などの認知に及ぼす影響のひとつであり、その時の気分や状態と一致する感情価を持つ情報の処理が促進されるという現象であるが、抑うつにおける認知バイアスに関する研究の中でも、この現象に着目した研究の知見は特に数多く蓄積されてきている。これまで論じてきたように、気分一致効果やその説明理論をめぐっては、さまざまな問題や限界が指摘されている。抑うつに関する研究では、独立変数である抑うつ症状や抑うつ気分の違い、従属変数である認知的処理の違いによって効果の現れは異なり、不一致効果でさえも認められている。さらには調整変数や媒介変数の影響の可能性も示唆されている。

本研究は、抑うつにおける認知バイアスに関してこれまでさまざまに指摘されている問題の中で、独立変数の問題として抑うつ気分と抑うつ症状の影響の違い、従属変数の問題として認知の無意識的側面と意識的側面との違いに着目する。また、調整変数として、あるいは媒介的關係の説明変数としての感情特

性の影響を考慮する。これらについて主として実験的な検討を通し、抑うつにおける認知バイアスの生起メカニズムを明らかにすることを目的とする。

なお、本研究の対象とする抑うつは、基本的にはうつ病などの臨床診断を受けるまでに至らない非臨床群及び抑うつに関しては準臨床的抑うつ群とし、相対的に軽度の抑うつにおける認知バイアスを検討したい。厳密に統制した実験室実験を中心とした検討においては、実験課題に取り組むエネルギーや認知機能がある程度保たれている必要があると考えられるのが主たる理由である。加えて、一般大学生を対象とした抑うつ研究は、いわばアナログ（analogue）研究として、うつ病などの臨床群への一般化の問題などの限界を指摘されることもあるが、積極的な意義もあることが論じられている（e.g., 坂本, 2002; 杉浦, 2009; Tull, Bornova, Patterson, Hopko, & Lejuez, 2008）。臨床診断を受ける以前の準臨床的抑うつを対象とすることにより、発症への脆弱性として作用する要因を捉えることができるのではないかと考えられる。

具体的には、以下の4点を検討する。

1. 基本的な前提として、Bowerが見出した気分一致効果が再現されるかどうか、方法上の修正を加えた上で追試的に実験的検討を行い、確認する。
2. 抑うつにおける認知バイアスの生起に関わり得る、気分一致効果における独立変数の問題として、抑うつ“気分”と抑うつ“症状”とが認知に及ぼす影響の違いを明らかにする。抑うつが影響を及ぼすのは自己関連づけ処理に関わる場合が多いという多くの先行研究からの指摘を踏まえ、自己関連的な認知に焦点を当て、抑うつにおける認知バイアスについて、気分一致効果研究の個人差アプローチと気分誘導アプローチの2つのアプローチから検討する。
3. 従属変数の問題として、記憶の無意識的側面と意識的側面への抑うつの影響の違いを明らかにする。そこで潜在記憶と顕在記憶という記憶の区分を用い、それぞれ抑うつの影響が異なるかどうか、ネガティブ・バイアスの生起について検討する。さらに、記憶における無意識的処理と意識的処理のはたらきにそれぞれ抑うつがどのように関わるかを検討する。

4. 抑うつにおける認知バイアスの生起に感情特性がどのように影響するか、調整的・媒介的關係について検討する。

本研究の第Ⅱ部において上記目的 1, 2 を実証的に検討する（研究 1～3）。第Ⅲ部では、目的 3, 4 を実証的に検討する（研究 4～7）。最後に第Ⅳ部において本研究の総合考察を行うこととする。

第2節 本研究の意義

本研究を行う意義として、以下の 3 点が考えられる。

第一に、基礎的研究への意義として、そもそも気分一致効果とは感情と認知との相互作用に関するひとつの現象として見出された現象であり、感情の病理として捉えることができると考えられる抑うつにおける現象を検討することで、一般的な人間の感情過程と認知過程との相互作用について、異なる視点からのより深い理解が可能となるであろうことが挙げられる。未だ感情と認知の働きは明らかになっていない点も多いと考えられ、その関係のひとつの形を捉えようとすることは、認知心理学や感情心理学などの基礎的領域にも大いに貢献するものであるといえよう。

第二に、臨床的研究への意義として、主として抑うつに対する認知的側面からの理解に貢献し得ることが挙げられる。認知の内容や働き・機能に着目する認知行動療法のさらなる発展には、抑うつにおけるより詳細な認知の特徴が明らかになること、そして抑うつにおける認知メカニズムの一端が明らかになることは意義あることと考えられる。また前述のように、準臨床的な抑うつを検討することで、臨床的な抑うつ発症への脆弱性として作用する要因を捉えることができる可能性があると考えられ、認知面に着目したうつ病の予防を考える上でも役立ち得るひとつの知見を提供することができるとも考えられる。

第三に、心理臨床実践への意義として、認知行動療法のより効果的な実践に貢献する可能性が挙げられる。現在、認知行動療法はさまざまに発展を遂げているが、その基礎のひとつとなる理論を見直し、修正・拡大、さらなるモデル

の構築を行っていくことは、認知行動療法の効果を高める上で、またさらなる発展に向けて意義あることであろう。加えて、感情特性の影響や記憶の特徴、無意識・意識過程の違いを明らかにしていくことは、認知行動療法に限らず、幅広い心理臨床的援助に役立ち得るだろう。

第Ⅱ部

自己関連的な認知における気分一致効果の検討

第5章 物語記憶に及ぼす気分の効果に関する実験的研究 —Bower, Gilligan, & Monteiro (1981) の再検討— (研究 1)

第1節 目 的

第 I 部でみてきたように、非常に多くの研究で気分一致効果が検討されている中、この効果は部分的・限定的であるということも指摘され、例外や問題点もさまざまに論じられている。そこでまず Bower らが見出した気分一致効果が再現されるかどうか、どのように再現され得るのかを確認することが必要であると考えられる。近年の気分一致効果研究の方法上の発展を踏まえ、気分一致効果を実験的に検証した Bower et al. (1981) の手続きを今一度見直し、気分一致効果を再検討することを目的とする。具体的には以下の 5 点について手続きを変更し、物語記憶に及ぼす気分の効果を再検討する。

(1) 気分誘導法

Bower et al. (1981) は催眠によって気分誘導を行っているが、催眠状態は非常に特殊な状態であり、非催眠状態における気分と同じであるかどうかの保証はないことが指摘されている (谷口, 1991a)。さらに催眠を用いる場合は催眠暗示にかかりやすい者を抽出した対象としているため、認められた効果は暗示にかかりやすい者特有の現象であるとも考えられている。そこで本研究では、近年多くの研究で用いられている音楽の聴取による気分誘導 (e.g., 川瀬, 1994; 野内・兵藤, 2006, 2007; 谷口, 1991b; 筒井, 1997; レビューとして Gerrards-Hesse et al., 1994) に変更する。音楽の聴取による気分誘導の有効性について、実験意図を明らかにせず要求特性を最小限にとどめることができること、言語課題に干渉しないこと、言語を介する方法に比べてより日常的で自然な気分が誘導されること、課題遂行中も連続して誘導できること等を谷口 (1991a) は挙げている。また Clark (1983) は、初期の中心的な気分誘導法であったヴェルテン気分誘導法と音楽による誘導法とを比較し、音楽による場合は成功率が高く実験参加者を選別する必要性が低いこと、その上ヴェルテン法とほぼ同様の日常感じるような気分が誘導されることを示している。以上の有効性から、音楽の聴

取を気分誘導法として用いることとする。

(2) 気分誘導の時期

Bower et al. (1981) の実験 1 と実験 3 では、気分状態依存効果をあわせて検討するために学習時と再生時の両方で気分誘導しているが、このような手続きでは、気分の効果が符号化に及ぼされたのか検索に及ぼされたのかが明確になりにくい。そこで本研究では、学習時にのみ気分誘導を行う実験（実験 1）と再生時のみに誘導を行う実験（実験 2）の 2 つの実験を実施し、物語の符号化及び検索に及ぼす気分の効果をそれぞれ検討する。

(3) 気分の測定

Bower et al. (1981) では行動観察や内省報告によって意図した気分が誘導されていることを確かめてはいるものの、厳密な気分の測定及び気分状態の比較は行っていない。彼らの実験 2, 4 で気分一致効果が認められなかったのは、意図した気分が誘導されていなかったという可能性もあり、これを明らかにするためには気分の測定及び比較が必要であると考えられる。また気分一致効果研究の多くで、自己報告式質問紙によって気分状態の測定が行われていることから、本研究では気分誘導後に自己報告式質問紙によって気分状態を測定する。

(4) 再生方法

物語の記憶では「設定」、「目標」、「結末」といった物語の上位カテゴリーほど再生されやすいといわれている（内田, 1989）。したがって物語の内容を単に再生させた場合には、主人公が経験したり思い出したりする具体的な個々のエピソードの多くが削除され、物語の枠組みのみが再生されてしまうことが推測される。Bower et al. (1981) の物語では気分状態と一致するような感情価を持つのはその個々のエピソードとなっているため、それらが再生されにくい方法では気分と一致した内容が記憶再生されやすいかどうかを検討できないと考えられる。そこで本研究では、彼らの研究で用いられている物語について、物語の内容を全体的に再生してもらうのではなく、物語に含まれる個々のエピソードを再生してもらうこととする。

(5) 分析方法

Bower et al. (1981) は実験参加者ごとの総再生数におけるネガティブな内容の割合を気分群間で比較している。しかし、気分一致効果が対称的か非対称的か、すなわちポジティブ気分とネガティブ気分の両方において気分と一致する感情価の記憶が促進されるのか、それともポジティブ気分もしくはネガティブ気分のいずれかの影響しかみられないのかについては、各気分群内においてポジティブな内容とネガティブな内容の再生を比較しなければ、厳密には検討できないと考えられる。そこで本研究では、Bower et al. (1981) の分析方法によって彼らの結果との比較をすると共に、気分要因と記憶材料の感情価要因との2つの要因がどのように再生成績に影響を及ぼしているかに着目した分散分析を用いて検討することとする。

以上の5点を変更し、実験1では記憶材料である物語の符号化に及ぼす気分の効果を、実験2では物語の検索に及ぼす気分の効果を検討する。記憶材料については、Bower et al. (1981) において用いられている物語文から1つ選択し、和訳したものを用いる。2つの実験から、Bower et al. (1981) で見出された現象と同様の現象が認められるかどうかを再検討することを本研究の目的とする。

第2節 実験1

(1) 目的

学習時に気分誘導を行い、物語の符号化に及ぼす気分の効果について、Bower et al. (1981) の実験1及び実験3で認められた気分一致効果が同様に認められるかどうかを検討する。

(2) 方法

① 実験参加者

大学生32名（男性16名、女性16名）が実験に参加した。ポジティブ気分群16名（男性8名、女性8名）、ネガティブ気分群16名（男性8名、女性8名）

に配置された。ポジティブ気分群の平均年齢は 20.25 ± 1.34 歳、ネガティブ気分群の平均年齢は 20.06 ± 1.34 歳であった。

② 気分誘導

音楽の聴取によって気分誘導を行った。呈示音楽については、ポジティブ気分群では、明るい音楽としてヘンデル作曲“シンフォニア変ロ長調「シバの女王の入城」”(3分00秒)を、ネガティブ気分群では、暗い音楽としてJ. S. バッハ作曲“ブランデンブルグ協奏曲第1番第2楽章”(4分44秒)をそれぞれ用いた^{注5-1}。選曲は谷口(1995b)による音楽作品の感情価測定尺度の結果にもとづき行われた。音楽作品の感情価測定尺度は、高揚、親和、強さ、軽さ、荘重の5つの下位尺度からなり、高揚尺度に関しては高揚を表す項目4項目と抑うつを表す項目4項目の計8項目(これは、高揚尺度が高揚-抑うつの両極性の因子となっているためである)、ほかの尺度(単極性因子)に関してはそれぞれ4項目ずつの、合計24項目の形容語で構成される5段階評定尺度である。この尺度を用いて谷口(1995b)では90曲の音楽作品の評定値のリストが作成されている。本研究1では、高揚的なポジティブ気分と抑うつ的なネガティブ気分を喚起するため、特に高揚尺度に着目し、高揚尺度得点上位5曲のうちから1曲、下位5曲のうちから1曲を選曲した^{注5-2}。

音楽の呈示方法に関しては、明るい音楽か暗い音楽かのいずれか1曲をそれぞれ繰り返しCDからカセットテープに録音し、カセットデッキによって再生された。実験参加者にはヘッドホンを通して聴取してもらった。音圧は一般的(概ね90~110dBの範囲内)なものとし、すべての実験参加者を通して一定であるよう設定した。また、課題に入る時点でねらいとした気分が喚起されているように、物語を読む前に5分間の聴取時間を設けた。このとき、音楽に集

注5-1 曲の長さは異なっているが、繰り返し聴取してもらうため、1曲が繰り返される回数に大きな違いはみられない範囲であるものと判断した。

注5-2 なお谷口(1995b)では、聴取者の感情状態についても、多面的感情状態尺度によって併せて測定している。“シンフォニア変ロ長調「シバの女王の入城」”では、抑鬱・不安 5.82 ± 1.25 、倦怠 6.31 ± 2.36 、敵意 6.22 ± 1.46 、活動的快 17.71 ± 2.94 、非活動的快 7.89 ± 2.87 、親和 12.27 ± 3.21 となっており、活動的快得点の上位10曲に含まれる。一方、“ブランデンブルグ協奏曲第1番第2楽章”に関しては順に、抑鬱・不安 11.82 ± 4.44 、倦怠 12.20 ± 4.04 、敵意 7.41 ± 2.88 、活動的快 6.59 ± 2.21 、非活動的快 12.05 ± 3.66 、親和 8.91 ± 3.30 となっており、抑鬱・不安得点の上位10曲に含まれる。

中してもらうためアイマスクを着用してもらい、視覚刺激を遮断した。5 分後にアイマスクは外してもらったが、物語を読んでいる間もその気分が持続するよう、音楽の呈示に関しては課題遂行終了まで継続した。

③ 気分の測定

寺崎・岸本・古賀（1992）による多面的感情状態尺度（以下 **MMS** とする）を用いて気分の測定を行った。**MMS** は、抑鬱・不安、敵意、倦怠、活動的快、非活動的快、親和、集中、驚愕の 8 つの下位尺度から構成されている。はじめの 3 つは否定的感情、次の 3 つは肯定的感情、最後の 2 つは中性的感情として分類される。各下位尺度は感情状態を表す形容語 10 項目から成り、現在の感情状態について、計 80 項目それぞれを 4 件法（1:まったく感じていない～4:はっきり感じている）で評価してもらうというものである。本研究では、**B4** 用紙 1 枚に **MMS80** 項目をランダムに配置し、気分誘導後にその時の感情状態について **MMS** と同様の 4 件法で評価してもらった。

④ 記憶材料

Bower et al.（1981）の実験 3, 4 で用いられている“Paul Smith”を翻訳した約 1900 字の物語文を使用した。これは、精神科医とともに催眠療法を経験している男性の患者（ポール・スミス）が、催眠による退行によって過去に経験したさまざまなエピソードを思い出すという内容の物語であった。主人公が思い出したのは 36 のエピソードであり、ポジティブなエピソードとネガティブなエピソードとが同数含まれていた。なお、あらかじめ大学生 5 名に、そのエピソードのポジティブ-ネガティブについて判定してもらったところ、100%の一致率であった。物語文は **B4** の用紙 1 枚に印刷されたものを呈示した。

⑤ 実験場所・実験時刻等

実験はすべて **A** 大学内の同じ一室^{注 5-3}で行われた。曜日・時間帯等は原則として平日の日中とした。時間帯については実験参加者の予定にあわせ、午前で

注 5-3 実験室として使用されることもあったプレイルームの一角で行われた。遊具等は片づけられてあった。

ある場合もあれば午後である場合もあった。ただし、各実験参加者における第1セッションと第2セッションの実験時刻は同一とした。

⑥ 手続き

Bower et al. (1981) の実験 1, 2 にもとづいた手続きを用いた^{注5-4}。実験は、学習段階である第1セッションと再生段階である第2セッションの、2つのセッションから構成された。実験は全て個別に実施した。実験の流れを Figure 5.2.1 に示した。

第1セッションでは、はじめに明るい音楽かまたは暗い音楽のいずれか1曲を繰り返し5分間呈示し、気分誘導を行った。その後、MMSによってその時の気分状態を測定し、次に物語文の呈示を行った。なおこの間も音楽の呈示を継続した。物語の呈示方法は、印刷された物語を6分間黙読してもらうというものであり、早く読み終わった場合には6分経過するまで繰り返し読むよう教示した。後で物語の再生を実施するという点については実験参加者には告げなかった。最後に物語を回収し、翌日も同じ時間に実験を行うことを確認して第1セッションを終了した。

第1セッションの24時間後に実施した第2セッションでは、気分誘導を行わない自然な状態で再生を実施した。再生課題は、物語の中で主人公ポール・スミスが思い出したエピソードを対象に、実験参加者の思い出した順にそのエピソードを箇条書きにしてもらうという方法で行った。制限時間は設けず、思い出せる限りのエピソードを記述してもらった。最後に、実験内容に関する内省報告（呈示音楽について、物語について、実験全体について）を求め、ディブリーフィングを行って実験を終了した。

(3) 倫理的配慮

研究への参加に関しては、原則として文書を用いて依頼を行い、参加者の自由意思によって行われた。参加者本人の署名がなされた文書の提出をもって、

^{注5-4} Bower et al. (1981) の実験 1, 2 と実験 3, 4 の大きな違いは、学習課題と再生課題の間の時間であり、前者では学習課題の1日後、後者では何時間かおいた後に再生課題を行っている。本研究では、誘導された気分が再生時に影響を及ぼすこと、また直後再生で天井効果が生じることを避けるために、彼らの実験 1, 2 にもとづくこととした。

研究参加の同意が得られたものとした。ただし、その後の参加辞退・中断も可能であった。

実験内容・手続きに関しては、先行研究で用いられ検討されてきているものを用い、過去において有害事象は報告されていないことから、精神的侵襲等の危険性は低いものと考えられる。より一層の安全性を確保し参加者が不利益を被らないようにするために、実験の依頼文書においては、実験の概要や所要時間等を記した。

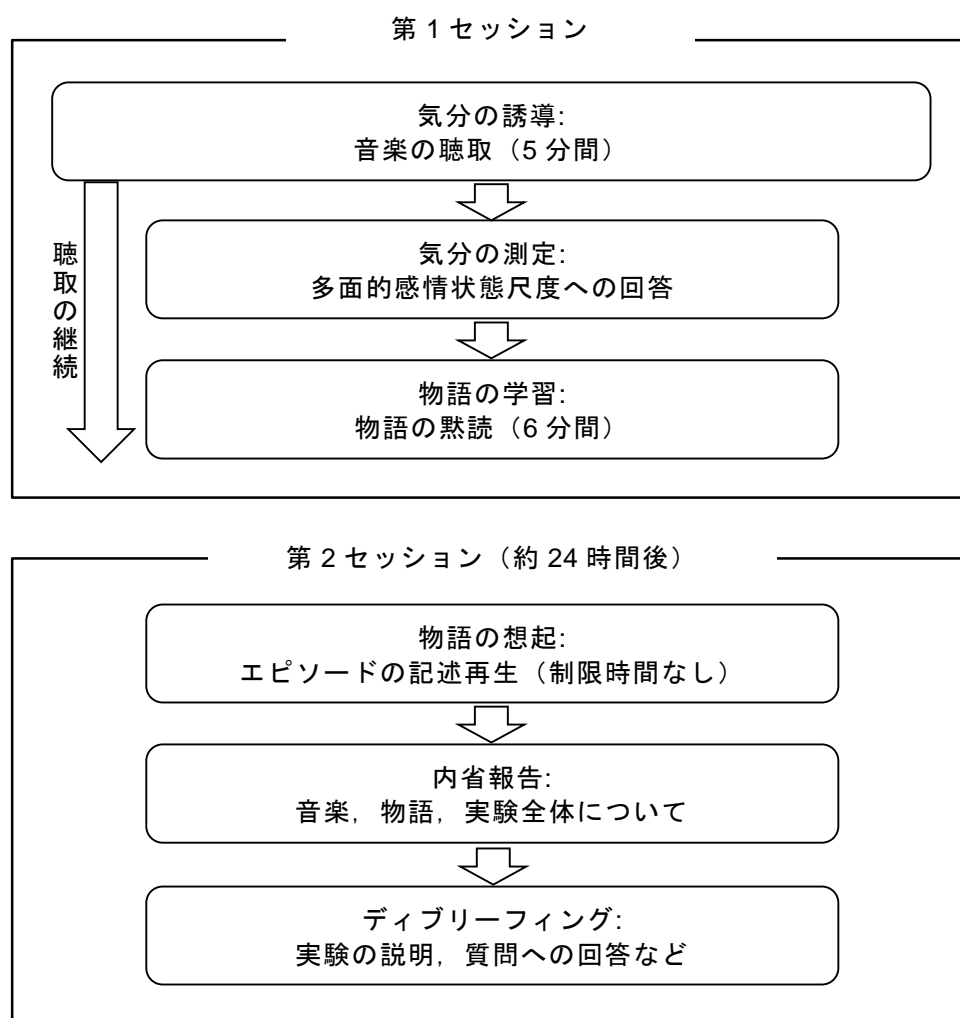


Figure 5.2.1. 実験の流れ (実験 1)。

Table 5.2.1
多面的感情状態尺度の 6 つの下位尺度における各群の平均得点（実験 1）

群	<i>n</i>	抑鬱・不安	敵意	倦怠	活動的快	非活動的快	親和
ポジティブ	16	12.94 (3.24)	11.63 (3.34)	14.25 (3.92)	30.81 (6.62)	26.38 (5.93)	33.44 (6.55)
ネガティブ	16	20.50 (6.23)	12.75 (3.22)	19.00 (5.77)	19.19 (5.14)	28.38 (7.00)	22.31 (5.35)

注）各下位尺度の得点範囲は 10 から 40。（）内は標準偏差。

実験の最後に、実験の目的と、研究で得られた情報については研究目的以外に使用しないこと、プライバシーは保たれることを口頭で伝えた。また参加者からの質問に応じた。

(4) 結果と考察

① 気分状態

Table 5.2.1 は各群の MMS の否定的感情と肯定的感情に関する 6 つの下位尺度における平均得点及び標準偏差を表している。意図した気分が音楽の聴取によって喚起されているかどうかを確認するため、6 つの下位尺度得点をそれぞれ群間で比較した。その結果、否定的感情に関しては抑鬱・不安尺度と倦怠尺度においてネガティブ気分群がポジティブ気分群よりも有意に高く ($t(22.33) = 4.29, p < .001$; $t(30) = 2.61, p < .05$)、肯定的感情に関しては活動的快尺度でポジティブ気分群がネガティブ気分群よりも有意に高い ($t(30) = 5.28, p < .001$) ということが示された。ただしネガティブな気分に関しては、Table 5.2.1 に示したように抑鬱・不安尺度においても倦怠尺度においても、ネガティブ気分群でも得点範囲の中央値 25 点を超えておらず、全体的に弱いものであったといえる。なお、内省報告において、呈示された音楽をこれまでに聴いたことがあるかを尋ねたところ、ポジティブ気分群の 2 名以外はすべて初めて耳にした曲であり、用いた楽曲の熟知性の影響は低いものと判断した。

以上より、ポジティブ気分群は高揚的なポジティブ気分状態、一方ネガティブ気分群は弱いものの相対的には抑うつ的なネガティブ気分状態であったと考えられ、気分誘導は成功したといえよう。

② 再 生

各群の感情価別のエピソードの平均再生数を Figure 5.2.2 に示した。

はじめに Bower et al. (1981) にならい、各実験参加者が再生したエピソードの総数におけるネガティブなエピソードの割合について角変換後の値を比較したところ、ネガティブ気分群がポジティブ気分群よりも有意に高いことが示された ($t(23.15) = 2.47, p < .05$)。したがって Bower et al. (1981) と同様に、気分一致効果が認められたといえる。

③ 再生についての再分析

感情価別のエピソードの再生数について、気分状態 (2; ポジティブ気分, ネガティブ気分) × エピソードの感情価 (2; ポジティブ, ネガティブ) の 2 要因分散分析を行ったところ、気分状態とエピソードの感情価の交互作用のみ有意

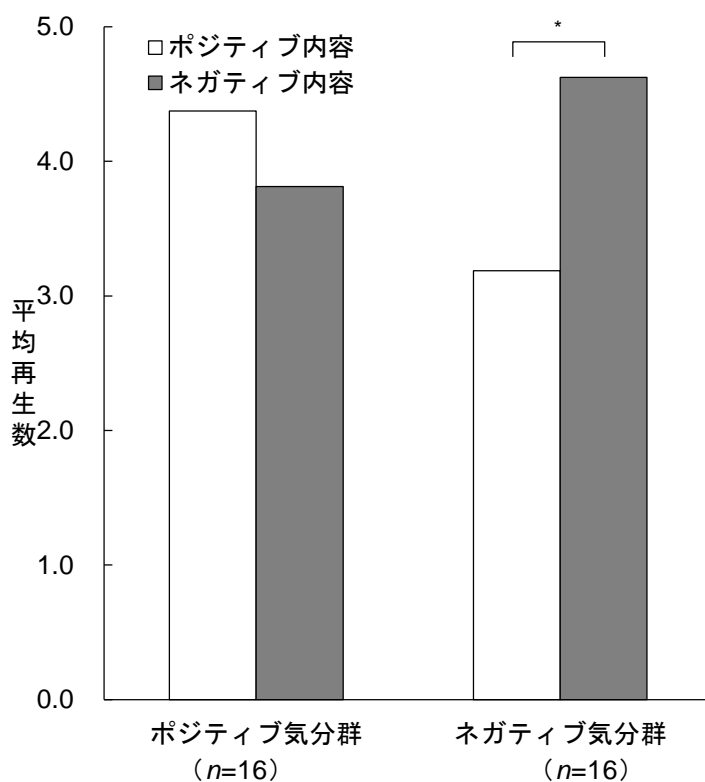


Figure 5.2.2. 各群のエピソードの感情価別平均再生数 (実験 1)。

注) * $p < .05$ 。ポジティブ内容: ポジティブな感情価のエピソード, ネガティブ内容: ネガティブな感情価のエピソード。

であった ($F(1,30) = 4.62, p < .05$)。交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、Figure 5.2.2 に示したように、ネガティブ気分群でネガティブなエピソードがポジティブなエピソードよりも有意に多く再生されていることが示されたが ($F(1,30) = 4.77, p < .05$)、ポジティブ気分群ではエピソードの再生に有意な差は認められなかった ($F(1,30) = 0.73, ns$)。以上の分散分析を用いた検討からは、ネガティブな気分状態でのみ気分一致効果が現れるという、従来とは逆の非対称的な効果が示されたと考えられる。

第3節 実験 2

(1) 目 的

再生時のみに気分を誘導した Bower et al. (1981) の実験 2, 4 では気分一致効果が認められていない。しかし感情ネットワーク理論にもとづけば、再生時に気分誘導を行った場合も学習時に誘導を行った場合と同様の効果が認められることが予想される。実験 2 では、物語の検索に及ぼす気分の効果について、気分一致効果が認められるかどうかを検討することを目的とする。

(2) 方 法

① 実験参加者

実験 1 とは別の大学生 32 名（男性 16 名，女性 16 名）が実験に参加した。ポジティブ気分群 16 名（男性 8 名，女性 8 名）とネガティブ気分群 16 名（男性 8 名，女性 8 名）に同数配置された。ポジティブ気分群の平均年齢は 21.31 ± 1.40 歳，ネガティブ気分群の平均年齢は 21.06 ± 1.73 歳であった。

② 気分誘導

実験 1 と同様に音楽の聴取によって気分誘導を行った。各群に呈示した曲及び呈示方法も同様であった。

③ 気分の測定

実験 1 と同様に、MMS を用いて気分誘導後の気分状態を測定した。

④ 記憶材料

実験 1 と同様の約 1900 字の物語文を使用した。

⑤ 実験場所・実験時刻等

実験はすべて A 大学内の同じ一室（実験 1 と同じ場所）で行われた。曜日・時間帯等は原則として平日の日中としたが、実験 1 と同様、時間帯については実験参加者の予定にあわせ、午前である場合もあれば午後である場合もあった。また、各実験参加者における第 1 セッションと第 2 セッションの実験時刻は同一とした。

⑥ 手続き

気分誘導を再生時に実施した他は実験 1 と同様の手続きであり、全て個別に実験を行った。実験の流れを Figure 5.3.1 に示した。第 1 セッションでは、気分誘導を行わない自然な状態下で物語を呈示し、6 分間黙読してもらった。後で物語の再生を行うことは告げず、翌日も同じ時間に実験を行うことを確認して第 1 セッションを終了した。第 1 セッションの 24 時間後に実施した第 2 セッションでは、はじめに 5 分間の音楽の聴取による気分誘導を行い、その後 MMS によってその時の気分状態を測定した。次に音楽の呈示を継続した状態で、前日読んだ物語に含まれる主人公が思い出したエピソードについての再生を行った。最後に、実験内容に関する内省報告を求め、実験目的を説明して実験を終了した。

(3) 倫理的配慮

研究 1 と同様、研究への参加に関しては、原則として文書を用いて依頼を行い、参加者の自由意思によって行われた。参加者本人の署名がなされた文書の提出をもって、研究参加の同意が得られたものとした。ただし、その後の参加辞退・中断も可能であった。

実験内容・手続きに関しては、先行研究で用いられ検討されてきているものを用い、過去において有害事象は報告されていないことから、精神的侵襲等の危険性は低いものと考えられる。より一層の安全性を確保し参加者が不利益を被らないようにするために、実験の依頼文書においては、実験の概要や所要時間等を記した。

実験の最後に、実験の目的と、研究で得られた情報については研究目的以外に使用しないこと、プライバシーは保たれることを口頭で伝えた。また参加者からの質問に応じた。

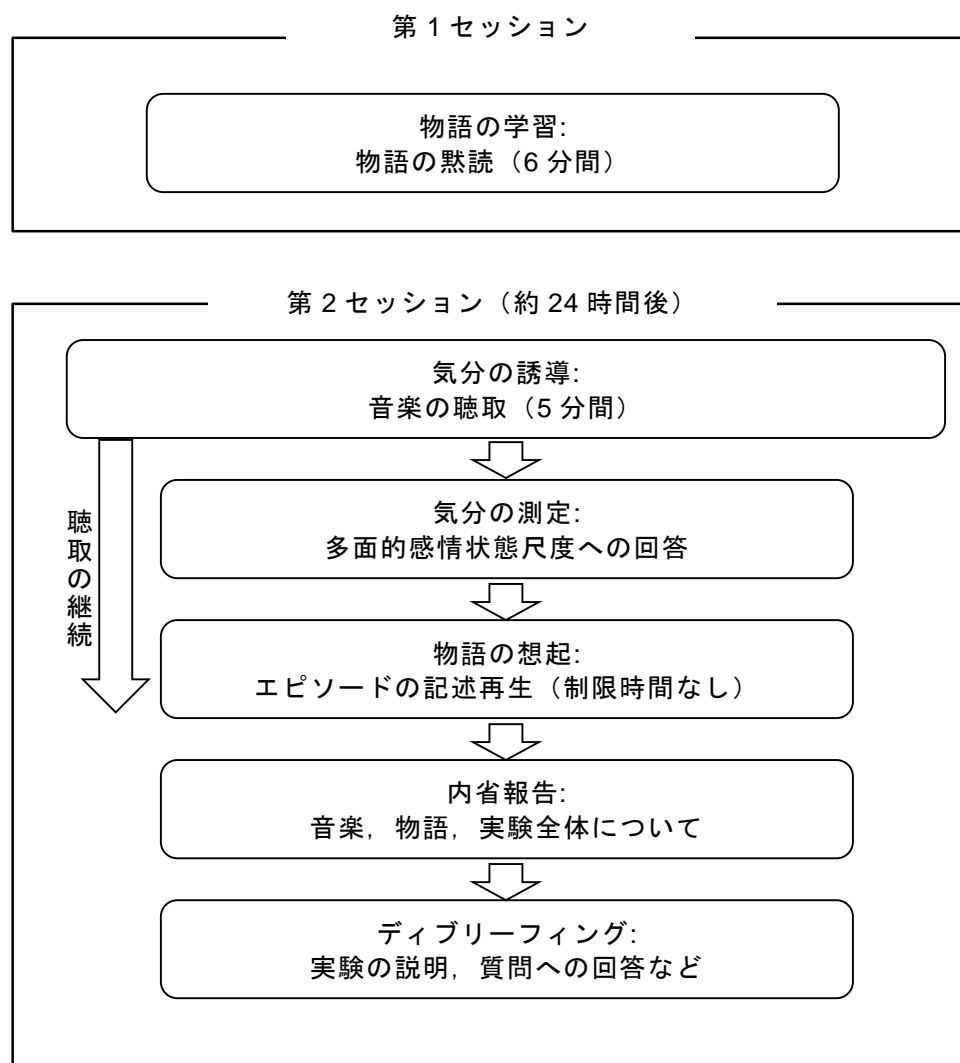


Figure 5.3.1. 実験の流れ（実験 2）。

Table 5.3.1
多面的感情状態尺度の 6 つの下位尺度における各群の平均得点（実験 2）

群	<i>n</i>	抑鬱・不安	敵意	倦怠	活動的快	非活動的快	親和
ポジティブ	16	13.63 (4.19)	11.00 (1.27)	16.31 (4.24)	27.19 (5.81)	28.94 (5.81)	22.06 (7.19)
ネガティブ	16	19.00 (5.85)	11.69 (2.36)	18.31 (5.56)	21.31 (4.51)	31.13 (5.35)	20.31 (5.96)

注）各下位尺度の得点範囲は 10 から 40。（）内は標準偏差。

(4) 結果と考察

① 気分状態

Table 5.3.1 は各群の MMS の否定的感情と肯定的感情に関する 6 つの下位尺度における平均得点及び標準偏差を表している。意図した気分が音楽の聴取によって喚起されているかどうかを確認するため、6 つの下位尺度得点をそれぞれ群間で比較した。その結果、否定的感情に関しては抑鬱・不安尺度においてネガティブ気分群がポジティブ気分群よりも有意に高く ($t(30) = 2.99, p < .01$)、肯定的感情に関しては活動的快尺度でポジティブ気分群がネガティブ気分群よりも有意に高い ($t(30) = 3.19, p < .01$) ということが示された。実験 1 でネガティブ気分群が有意に高かった倦怠尺度に関しては、有意差は認められなかった ($t(30) = 1.14, ns$)。ネガティブな気分に関しては、Table 5.3.1 に示したように抑鬱・不安尺度の得点範囲の中央値は超えておらず、弱いものであったといえる。なお、内省報告において、呈示された音楽をこれまでに聴いたことがあるかを尋ねたところ、ポジティブ気分群 3 名、ネガティブ気分群 1 名以外は、すべて初めて耳にした曲であった。聴いたことがある参加者数は実験 1 よりやや多いものの、用いた楽曲の熟知性の違いによる影響は低いものと判断した。

以上より、ポジティブ気分群は高揚的なポジティブ気分状態、ネガティブ気分群は弱いものの相対的にはほぼ抑うつ的なネガティブ気分状態であったと考えられ、気分誘導は成功したといえよう。

② 再生

各群の感情価別のエピソードの平均再生数を Figure 5.3.2 に表した。

実験 1 と同様に、各実験参加者が再生したエピソードの総数におけるネガテ

ィブなエピソードの割合について角変換後の値を比較したところ、ネガティブ気分群がポジティブ気分群よりも高い傾向にあることが示された ($t(30) = 1.56$, $p < .10$)。しかしこの差は統計的に有意ではなく、Bower et al. (1981) と同様に、気分一致効果は認められなかったといえるのではないかと考えられる。

③ 再生についての再分析

実験 1 と同様に、感情価別のエピソードの再生数について、気分状態 (2; ポジティブ気分, ネガティブ気分) × エピソードの感情価 (2; ポジティブ, ネガティブ) の 2 要因分散分析を行ったところ、気分状態とエピソードの感情価の交互作用のみ有意であった ($F(1,30) = 6.48$, $p < .05$)。単純主効果の検定を行ったところ、Figure 5.3.2 に示したようにネガティブ気分群でネガティブなエピソードがポジティブなエピソードよりも有意に多く再生されていることが示されたが ($F(1,30) = 8.00$, $p < .05$)、ポジティブ気分群ではエピソードの再生に有意な差

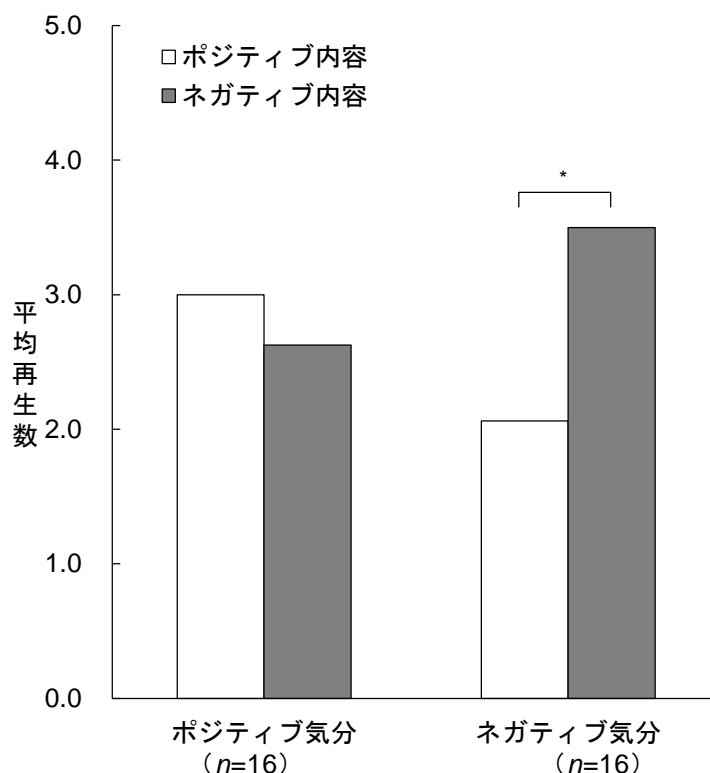


Figure 5.3.2. 各群のエピソードの感情価別平均再生数 (実験 2)。

注) * $p < .05$ 。ポジティブ内容: ポジティブな感情価のエピソード, ネガティブ内容: ネガティブな感情価のエピソード。

は認められなかった ($F(1,30) = 0.59, ns$)。以上の分析から、ネガティブな気分状態でのみ気分一致効果が現れるという、実験 1 と同様の、従来の見解とは逆の非対称的な効果が示されたといえる。

第4節 全体的考察

本研究は、Bower et al. (1981) で見出された気分一致効果に関する現象と同様の現象が認められるかどうか、追試を行い再検討することを目的とした。

Bower et al. (1981) と同様の分析を行ったところ、Bower らの結果と同様となり、物語の符号化に及ぼす気分の効果を検討した実験 1 では気分一致効果が認められるものの、検索に及ぼす気分の効果は認められないという結果となった。しかし分散分析を用いた再分析では、実験 1、実験 2 とともに気分と感情価の交互作用が認められ、気分一致効果が生じたと考えられる結果であった。ただし、ネガティブな気分状態においてのみ、エピソードの感情価間に有意差が認められるという、従来指摘されてきた現象とは逆の形での非対称的な気分一致効果が示された。

手続きの変更による違いに関して、本研究では Bower et al. (1981) の実験手続きの、(1)気分誘導法、(2)気分誘導時期、(3)気分測定、(4)再生方法の 4 つを変更し、彼らと同様の分析方法を用いた場合には同様の現象が見出された。したがって、これら 4 点に関して方法を変えても認められる安定した現象であると考えられる。

しかし分析方法を変えて再検討したところ、本研究の 2 つの実験で同様にネガティブな気分状態においてのみ気分一致効果が認められるという、Bower et al. (1981) とは異なる結果が見出された。このことから、各気分群内のポジティブな内容とネガティブな内容の再生の比較を合わせてより詳細に分析すると、彼らが見出した対称的であると考えられた気分一致効果が実は非対称的であり、さらに検索時に気分誘導した場合に認められなかった気分一致効果が実は部分的には現れていた可能性が高いことが示唆される。すなわち、Bower et al. (1981) で見出された現象に関しては、彼らの分析方法の特殊性によるところが大きい

のではないかということが考えられる。

物語記憶における符号化と検索に及ぼす気分の影響の違いに関しては、前述のように分析方法が異なると結果が異なることが本研究では示された。Bower et al. (1981) の分析方法を用いた場合に示されたのは、検索時の気分が記憶検索に及ぼす影響は弱いということであった。しかし、気分群内のポジティブな内容とネガティブな内容の再生の比較を含めた分析を行った場合には、符号化時に気分誘導を行った実験 1 と検索時に気分誘導を行った実験 2 の両方で、非対称的ではあるが気分一致効果が認められた。したがって、符号化時の気分と検索時の気分が記憶再生に及ぼす効果はほぼ等しいことが示唆され、この点に関してはネットワーク仮説を支持するものと考えられる。

次に、本研究ではネガティブな気分においてのみ気分一致効果が認められるという非対称的な効果が示された点に関して論じる。これは、多くの先行研究から見出されているネガティブな気分では気分一致効果が認められにくいという非対称的な効果とは反対の現象であった。ただし第 I 部で論じたように、従来の非対称性に関しては、自己に関する情報の処理に限ってネガティブ気分においても気分一致効果が認められるということがいわれている。したがって、本研究でネガティブな気分において気分一致効果が認められたことについては、自己に関する情報の処理が行われていたためであるという可能性が考えられる。すなわち、本研究で用いた記憶材料それ自体はある架空の人物（第三者）について描かれた物語であったが、実験参加者がそれぞれ自己に関連づけるような処理を用いて物語の記憶再生がなされていたのではないかと推察される。

本研究で用いた記憶材料は、主人公が幼児期から成人に至るまでの過去のさまざまなエピソードを思い出すということが描かれた物語であった。Bower et al. (1981) は、実験参加者の内省報告から、登場人物の過去の経験の回想について描写しているような物語は実験参加者の過去のエピソードを思い出させるということが示唆されたと述べている。また本研究においても、実験参加者の内省から自分も主人公と同じような経験があったということが報告されている。したがってその物語を読み、思い出す際に実験参加者は、主人公の過去経験を自己の過去経験と照らし合わせていた可能性が高いと考えられる。つまり、記憶材料それ自体は自己とは関係ないものであったが、自己に関連づけるような

処理を経て記憶再生されていたと推察される。こういった自己に関連づけるような処理が生じたために、ネガティブな気分において気分一致効果が認められたのではないだろうか。そしてこのように自己に関連のないものを関連づけるような処理が行われるのは、物語記憶の特徴にあるのではないかと考えられる。

物語記憶においては、それに先立ちまず文章の理解を必要とするといわれている。逆に文章がよく理解されれば再生されやすいともいわれており、物語理解の研究では古くから再生が指標とされてきた (Bartlett, 1932)。内田 (1983) は、文章の理解は情報を単に受容し保持する単語レベルでの過程とは異なり、既有知識によって情報を意味づけたり解釈したりして情報を統合し、一貫した内的表象を構成する積極的な過程であることを示唆している。このことから、物語記憶は単語記憶とは異なり、与えられた記憶材料を単に受容し保持するのではなく、たとえば自己の過去経験と照らし合わせるといったように、それを既有知識によって意味づけたり解釈したりして統合し再構成するプロセスを経ると考えられる。したがって、本研究でネガティブな気分において気分一致効果が認められたことは、こういった記憶材料の統合や再構成を伴う物語記憶の特徴によるところが大きく、そのため単語記憶を指標としている数多くの気分一致効果研究からの見解とは異なる現象が認められたのではないかと考えられる。すなわち、単語記憶と物語記憶とでは気分が及ぼす影響は大きく異なることが示唆される。

では、ポジティブな気分において気分一致効果が認められなかったのはなぜだろうか。

一般的にポジティブな気分状態下では自動的な処理をとりやすく、一方ネガティブな気分状態下ではコントロール的な処理をとりやすいといわれている。この処理の違いに関して川瀬 (1992) は、ポジティブな気分が自動的、直接的に認知過程に影響するのに対し、ネガティブな気分は自己関係的な情報の処理を媒介として認知過程に影響する可能性があることを示唆している。また抑うつ者の注意は自己に向きやすいといった知見 (e.g., Pyszczynski, Hamilton, Herring, & Greenberg, 1989; 坂本, 1994) から、ネガティブな気分は自己に注意を向けさせるといわれてきている。本研究で用いた物語の記憶に際しては、たとえば自己に関連づけるといった材料を統合し再構成するという、コントロー

ル的で深い処理が必要とされると考えられる。そしてこういった処理をするために自己に注意が向くことも必要とされる。しかし、ポジティブな気分では自動的直接的な処理がとられやすく、また自己に注意が向かないため自己に関連づけるといった処理が行われにくいと考えられる。したがって物語が深く統合され再構成されずに、そのまま自動的直接的に符号化・検索されたために、ポジティブな内容とネガティブな内容との再生に違いがみられず、気分一致効果が認められなかったのではないだろうか。つまり、物語記憶においてはネガティブな気分が引き起こすような深い処理を行った際に気分一致効果が認められやすいと考えられる。

以上から、本研究で従来とは逆の非対称的な気分一致効果が認められたことに関しては、気分によって情報処理過程への影響が異なるという点と物語記憶の特徴とによると考えられる。これに対して、単語記憶を指標とした先行研究で多く認められてきた従来 of 非対称的な気分一致効果に関しては、その意味を自動的に受容し保持する処理が重要となり、ポジティブな気分では気分一致効果が認められやすいのではないかと推察される。

本研究では Bower et al. (1981) の気分一致効果の再検討を行ったが、気分一致効果は再現され得る現象であるといえよう。ただし物語の性質もあり、自己関連づけ処理が関与している可能性が強くうかがわれた。これまで多くの気分一致効果研究で指摘されてきたように、自己関連づけ処理は気分一致効果の生起に必要な条件である可能性が高いのではないかと考えられる。

第6章 抑うつにおける自己関連的な認知の気分一致効果

—個人差アプローチと気分誘導アプローチからの検討— (研究 2)

第1節 目 的

気分一致効果研究には独立変数の扱い方によって、抑うつや特性不安などを質問紙や臨床診断から分類し、その個人差にもとづいて自然な状態での認知を比較する個人差アプローチと、ヴェルテン気分誘導法や音楽の聴取などの実験的な操作によって特定の気分を誘導し、その一時的な状態下での認知を調べる気分誘導アプローチの大きく2つのアプローチがある。この2つのアプローチから気分一致効果に関して数多くの研究がなされ、さまざまな気分状態と記憶や判断などの認知との関連を示す現象が観察されているが、第I部で論じてきたように多くの問題点も指摘されてきている。

中でも独立変数の問題のひとつとして Kwiatkowski & Parkinson (1994) は、実験的に誘導される抑うつ気分と個人差にもとづく自然発生的な抑うつ状態とが類似したものであるのかは疑わしく、気分誘導アプローチと個人差アプローチとを混同することの問題を指摘している。彼らはこの問題について、2つのアプローチを用い、抑うつにおける単語の手がかり再生の気分一致効果を検討した。その結果、個人差アプローチでは気分一致効果が認められたものの、ヴェルテン法を用いた気分誘導アプローチでは同様の効果は認められなかった。

また気分一致効果研究ではないが、Gotlib & McCann (1984) は同様に、自然発生的な抑うつと実験的に誘導した抑うつ気分において、ストループ課題での反応時間の偏りを検討した。抑うつ者と非抑うつ者を比較した実験1では、抑うつ者は抑うつ語への反応時間が長いことが示されたが、ヴェルテン法で一時的に誘導した抑うつ気分では反応時間の偏りは認められなかった。

これら2つの研究では、気分一致効果に着目した場合、質問紙によって測定された特性的な個人差としての、抑うつ者と非抑うつ者の自然な状態での認知を比較した個人差アプローチでは効果が生じているが、実験的に誘導した抑うつ気分と非抑うつ気分が認知に及ぼす影響を比較した気分誘導アプローチでは効果が生じていないといえる。このことから個人差アプローチは抑うつ者の認

知の特性を、気分誘導アプローチは抑うつ気分が認知に及ぼす影響を測定している可能性があると考えられ、これらを混同するのではなく、個別に捉える必要があると考えられる。したがって、抑うつにおける認知のネガティブ・バイアスを気分一致効果という観点から明らかにするには、生じた反応の偏りが状態的な気分の影響によるものか個人差によるものかを2つのアプローチから検討することが必要であると考えられる。先の2つの研究から予想されるのは、抑うつにおける認知のネガティブ・バイアスは気分の影響によるというよりむしろ、抑うつ者の認知自体のゆがみによるのではないかということである。

しかし最近の気分一致効果研究や抑うつにおける認知バイアス研究から、抑うつにおける気分一致効果は情報処理過程に自己が関連する場合にのみ生起するという指摘や、気分一致効果はネガティブな気分では生じにくく、自己に関連した情報の処理においてのみ、ネガティブな気分においても効果が生じるという指摘がなされている。前章の研究1からも自己関連づけ処理が気分一致効果の生起において必要である可能性が示唆された。

したがって、Kwiatkowski & Parkinson (1994) や Gotlib & McCann (1984) において、実験的に誘導した抑うつ気分状態で気分一致効果が認められなかったのは、用いた文章記憶やストループ課題などの認知課題で求められる処理が、自己には関連しないものであったためである可能性があると考えられる。逆にいえば、実験的に誘導した気分状態下でも、自己が関連する情報の処理では気分一致効果が生じる可能性があるだろう。このことから、抑うつにおける認知のネガティブ・バイアスが、気分の影響によるのか認知自体のゆがみの反映によるのかを明らかにするには、自己に関連する処理を求める認知課題を用いることが必要であると考えられる。自己関連的な認知における気分一致効果が個人差アプローチだけでなく気分誘導アプローチでも同様に生じるならば、抑うつにおける認知のネガティブ・バイアスには抑うつ気分が影響を及ぼしていることになると考えられ、抑うつ気分と自己に関するネガティブな認知との相互作用が抑うつ持続に重要な役割を果たしているという可能性につながるであろう。

そこで本研究では、情報処理過程に自己が関連する認知課題、具体的には自伝的記憶の想起と形容語の自己記述性（自分自身にどの程度あてはまるか）評

定を取り上げ、実験 1 では個人差アプローチから、実験 2 では気分誘導アプローチから気分一致効果を検討する。それぞれのアプローチで効果が認められるかどうか、また同様の現象が生じるのかどうかの検討を通して、抑うつ認知のネガティブ・バイアスにおける気分と認知との役割について明らかにすることを目的とする。

第2節 実験 1

(1) 目 的

気分一致効果研究の個人差アプローチから、自伝的記憶の想起課題と形容語の自己記述性評定の 2 つの自己関連的な認知課題を用い、抑うつにおいて気分一致効果が認められるかどうかを検証することを目的とする。

(2) 方 法

① 実験計画

第 1 要因を抑うつ（非抑うつ、抑うつ；被験者間）、第 2 要因を認知の感情価（ポジティブ、ネガティブ；被験者内）とする 2×2 要因計画とした。

② 実験参加者

大学生・大学院生 364 名（男性 169 名、女性 195 名）を対象とした。そのうち欠損値のあった者 84 名を除き、280 名（男性 114 名、女性 166 名）を以下の抑うつ群設定手続きの対象とした。

非抑うつ群と抑うつ群とへの分類は、Beck Depression Inventory（以下 BDI とする）の日本語版（林・塚本, 1987）の得点を基準に行った。BDI は 21 項目からなり、各項目に含まれる 4 つから 6 つの質問文の中で現在の状態に最も当てはまる文を 1 つずつ選択するものである。得点範囲は 0 から 63 で、得点が高くなるほど抑うつが重度であることを示す。有効回答 280 名全体の BDI 平均得点は 12.46 ± 6.93 であり、性差は認められなかった ($t(278) = 0.89, ns$)。平均得点-1SD 以下（5 点以下）を非抑うつ群、平均得点+1SD 以上（20 点以上）を抑

うつ群とした。非抑うつ群は 30 名（男性 15 名，女性 15 名），抑うつ群は 44 名（男性 21 名，女性 23 名）であり，BDI 平均得点はそれぞれ 3.2 ± 1.73 ， 23.75 ± 3.80 であった。

③ 認知課題

自伝的記憶の想起課題と性格表現用語の自己記述性評定課題の 2 つの認知課題を実施した。

自伝的記憶課題では，最近 1 か月間に生じた出来事を 10 個記述してもらい，その後想起した出来事それぞれが自分にとってどの程度望ましいか 7 段階（-3；非常に望ましくない～3；非常に望ましい）で評定してもらった。

自己記述性評定課題では，40 の刺激語がどの程度自分自身に当てはまるかを 6 段階（1；全く当てはまらない～6；非常に当てはまる）で評定してもらった。刺激語は性格表現用語の学生による社会的望ましさの評定中央値（青木，1971）をもとに，3.5 以下をポジティブ語，6.5 以上をネガティブ語とし，平仮名表記 4 から 6 字の形容詞・形容動詞・連体詞を各 15 語選択した。また系列位置効果が交絡しないようにするため，分析対象とはしない初頭バッファと新近バッファとして，学生評定中央値 4.7 から 5.3 の感情価が曖昧である 10 語を選択し，評定リストのはじめと終わりに 5 語ずつ加えた。

④ 気分の測定

実験時の気分状態を確認するために，寺崎・古賀・岸本（1991）の多面的感情状態尺度（MMS）短縮版によって，認知課題の後に気分の測定を行った。MMS 短縮版は，否定的感情に関する“抑鬱・不安”“倦怠”“敵意”，肯定的感情に関する“活動的快”“非活動的快”“親和”，中性的感情に関する“集中”“驚愕”の 8 つの下位尺度から構成されている。各下位尺度には 5 つの感情を表す形容語が含まれ現在の感情状態についてそれぞれ 4 段階で評定するものである。評定は -2（全く感じていない）から 2（はっきり感じている）で行われる。得点化においては，“全く感じていない”を 1，“はっきり感じている”を 4 とし，各下位尺度の得点範囲は 5 から 20 点であった。得点が高いほどその下位尺度の感情をはっきり感じていることを示す。

⑤ 手続き

主に講義時間の一部を用い、冊子回答形式により実験を行った。冊子内容は、自伝的記憶課題（または自己記述性評定課題）、自己記述性評定課題（または自伝的記憶課題）、MMS 短縮版、BDI の順で構成された。認知課題の順序を変えた 2 種類の冊子を実験参加者にランダムに配布した。

⑥ 倫理的配慮

研究への参加は自由意思にもとづくものであり、実験冊子への回答・冊子の提出をもって、同意が得られたものとした。

実験内容に関しては、個人的経験の想起や自己に関する質問項目が中心となるものであるが、主として先行研究で用いられてきた方法と既存の質問紙を用い、それらについては過去において有害事象は報告されていないことから、精神的侵襲等の危険性は低いものと考えられる。より一層の安全性を確保し参加者が不利益を被らないようにするために、冊子の表紙には調査の目的、概要、倫理的配慮等を明記した。

また、研究で得られた情報については本研究目的以外に使用しないことを冊子の表紙に明記し、個人が特定される形での研究成果の公表は行わないことを口頭で伝えた。

(3) 結 果

① 気分状態の検討

MMS 短縮版の否定的感情と肯定的感情に関する 6 つの下位尺度について群間比較を行った。平均得点および標準偏差を Table 6.2.1 に示す。結果、否定的感情に関する“抑鬱・不安”“倦怠”“敵意”尺度の得点は非抑うつ群<抑うつ群 ($t(72) = 9.68, p < .01$; $t(72) = 8.04, p < .01$; $t(72) = 3.54, p < .01$)、肯定的感情に関する“活動的快”“非活動的快”“親和”の得点は非抑うつ群>抑うつ群 ($t(72) = 6.18, p < .01$; $t(72) = 3.02, p < .01$; $t(72) = 3.16, p < .01$) であることが示された。非抑うつ群は肯定的な気分、抑うつ群は否定的な気分が高く、両群の気分状態は明らかに異なっているといえる。

Table 6.2.1

多面的感情状態尺度短縮版の 6 つの下位尺度における各群の平均得点（実験 1）

群	<i>n</i>	抑鬱・不安	敵意	倦怠	活動的快	非活動的快	親和
非抑うつ	30	10.00 (3.43)	10.20 (3.56)	7.23 (2.03)	15.70 (2.91)	14.40 (3.40)	14.90 (3.41)
抑うつ	44	17.00 (2.77)	16.23 (2.88)	11.52 (4.15)	10.59 (3.84)	12.00 (3.33)	12.64 (2.75)

注) 各下位尺度の得点範囲は 5 から 20。() 内は標準偏差。

② 自伝的記憶の想起

想起された 10 の出来事の望ましさを評価について、評価値 -3 から -1 をネガティブ、1 から 3 をポジティブとし、ポジティブな出来事とネガティブな出来事の想起数を求めた（Figure 6.2.1）。なお評価値 0 についてはニュートラルとし、分析の対象とはしなかった。想起数について、抑うつ（2; 非抑うつ, 抑うつ）

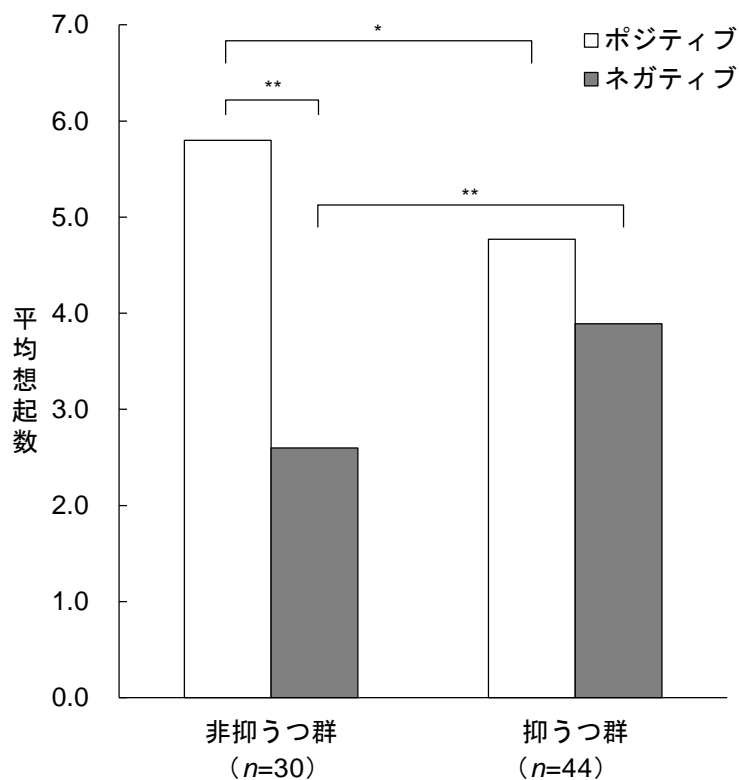


Figure 6.2.1. 各群の感情価別自伝的記憶平均想起数（実験 1）。

注) * $p < .05$, ** $p < .01$ 。ポジティブ: ポジティブな出来事, ネガティブ: ネガティブな出来事。

×想起された出来事の感情価（2; ポジティブ, ネガティブ）の2要因分散分析を行ったところ, 出来事の感情価の主効果および抑うつと出来事の感情価の交互作用が有意であった ($F(1,72) = 19.69, p < .01$; $F(1,72) = 6.31, p < .05$)。単純主効果の検定の結果, ポジティブな出来事数は非抑うつ群 > 抑うつ群, ネガティブな出来事数は非抑うつ群 < 抑うつ群であることが示された ($F(1,144) = 5.41, p < .05$; $F(1,144) = 7.20, p < .01$)。また, 抑うつ群においてポジティブな出来事とネガティブな出来事の想起に有意差は認められなかったが ($F(1,72) = 0.97, ns$), 非抑うつ群ではポジティブな出来事が有意に多く想起された ($F(1,72) = 80.08, p < .01$)。

③ 自己記述性評定

性格表現用語の自己記述性評定について, 刺激語の感情価別に平均評定値を算出し (Figure 6.2.2), 自伝的記憶の想起と同様に抑うつ×刺激語の感情価の2

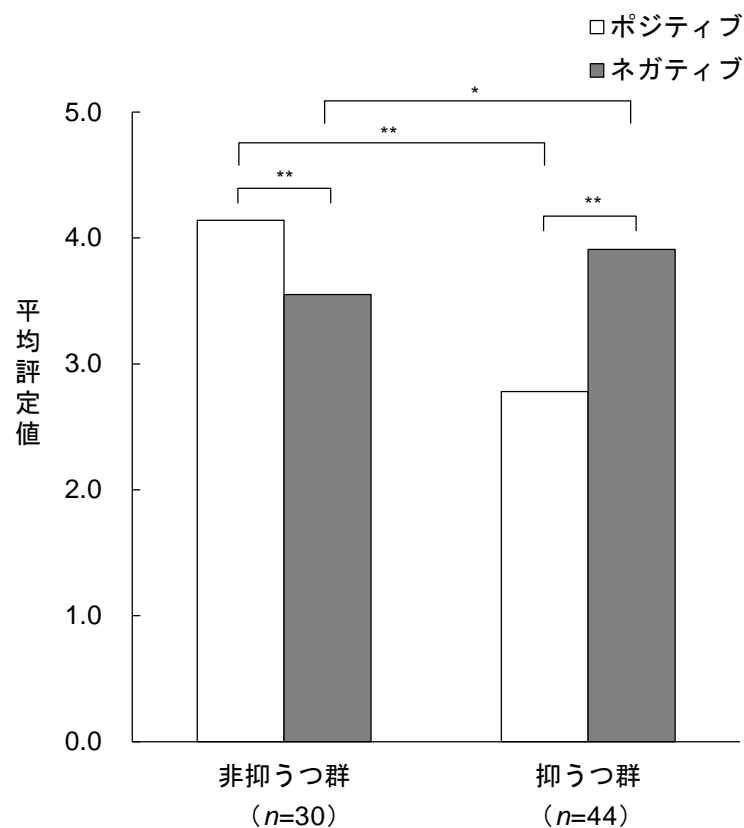


Figure 6.2.2. 各群の刺激語の感情価別自己記述性平均評定値 (実験 1)。

注) * $p < .05$, ** $p < .01$ 。ポジティブ: ポジティブな感情価の性格表現用語, ネガティブ: ネガティブな感情価の性格表現用語。

要因分散分析を行ったところ、抑うつの主効果、刺激語の感情価の主効果、抑うつと刺激語の感情価の交互作用のすべてが有意であった ($F(1,72) = 14.89, p < .01$; $F(1,72) = 16.39, p < .01$; $F(1,72) = 48.92, p < .01$)。単純主効果の検定の結果、ポジティブ語の評定値は非抑うつ群 > 抑うつ群 ($F(1,144) = 92.26, p < .01$)、ネガティブ語の評定値は非抑うつ群 < 抑うつ群 ($F(1,144) = 6.56, p < .05$) であり、また非抑うつ群における評定値はポジティブ語 > ネガティブ語 ($F(1,72) = 11.64, p < .01$)、抑うつ群においてはポジティブ語 < ネガティブ語 ($F(1,72) = 42.53, p < .01$) であることが示され、気分一致する感情価をもつ単語がより自己に当てはまると評定されていることが示された。

(4) 考 察

実験 1 では抑うつにおける自己関連的な認知のネガティブ・バイアスについて、個人差アプローチから検討した。その結果、自伝的記憶課題、自己記述性評定課題ともに、気分一致的方向での気分と感情価との交互作用が認められ、抑うつにおける気分一致仮説を支持し得る結果となった。これは、従来からいわれている抑うつ者の認知にネガティブなバイアスが認められるという見解と一致する結果であると考えられる。

しかし前述のように、抑うつ群にみられた結果のネガティブな方向への偏りが、そのときの抑うつ気分の影響によるのか、あるいは抑うつ者の認知自体のゆがみ、すなわち認知のネガティブ・バイアスがそのまま反映されたものであるのかは明らかではない。抑うつの持続に気分一致効果が大きな役割を果たしていると想定するのであれば、この点を明らかにすることが必要であり、一時的な気分がどのように自己にかかわる認知に影響を及ぼすのかを検討することが必要ではないかと考えられる。そこで実験 2 において、実験的に誘導した一時的な気分が認知に及ぼす影響について検討を行う。

なお自伝的記憶の想起においては、感情価別の抑うつ-非抑うつの群間比較では、両群ともに気分一致的な方向での有意差が認められており、このような点からすると、抑うつは気分一致的な方向で自己関連的な認知に影響を及ぼすとも捉えることができる。しかしながら、群内における比較では、抑うつ群においてネガティブな出来事の想起が有意に多いという結果は得られず、非抑うつ

群ではポジティブな記憶想起が促進されるが抑うつ群ではネガティブな記憶想起が促進されるわけではないという非対称性効果が生じたと捉えることもできよう。このように捉えた場合、自伝的記憶においては非対称性効果が、自己記述性評定においては対称的な気分一致効果が認められた理由として、次の2点が考えられる。第一に、そもそも自伝的記憶の想起はポジティブに偏っている（神谷, 1994, 1996）ということが挙げられる。したがって、抑うつは気分一致的想起が行われるような影響を及ぼしてはいるものの、ネガティブな想起が統計的に有意に多くなるほどではなかったのではないかと考えられる。第二には、処理において求められる自己関連性の程度の違いが影響している可能性が考えられる。自己記述性評定のように、直接的・意図的に自己に関連づける処理においては対称的な気分一致効果が認められるが、「最近 1 か月間に生じた出来事」という教示の下で過去を検索するというような処理では、自己に関連づける処理は意図的には生じにくく、このような認知課題では抑うつやネガティブな気分状態においても気分一致効果は生じにくいのではないかとということが考えられる。

以上、自伝的記憶の想起課題で生じたのは非対称性効果であるという捉え方もでき得るものの、抑うつ状態では非抑うつ状態に比べてネガティブにバイアスされた自己関連的な認知がなされることが、実験 1 の結果からは示唆される。

第3節 実験 2

(1) 目的

気分一致効果研究の気分誘導アプローチから、実験 1 と同様の自伝的記憶の想起課題と形容語の自己記述性評定の 2 つの自己関連的な認知課題を用い、一時的な抑うつ気分においてネガティブ・バイアスが認められるかどうか、気分一致効果を検証することを目的とする。

(2) 方 法

① 実験計画

第 1 要因を誘導気分条件（非抑うつ気分，抑うつ気分^{注 6-1}；被験者間），第 2 要因を認知の感情価（ポジティブ，ネガティブ；被験者内）とする 2×2 要因計画とした。

② 実験参加者

大学生・大学院生 63 名を対象とした。実験前に測定した BDI 得点が 12 点以上の者 31 名を除き，32 名（男性 20 名，女性 12 名）を非抑うつ気分条件 16 名（男性 12 名，女性 4 名）と抑うつ気分条件（男性 8 名，女性 8 名）にランダムに配置した。なお BDI12 点以上の者を除いたのは，個人差としての抑うつ要因の影響を最小限にするためであり，得点の基準については実験 1 の BDI 平均値 12.46 をもとに設定した。この除いた 31 名については気分誘導を行わずに実験を実施し，本研究の分析の対象とはしなかった。各気分条件の BDI 平均得点は非抑うつ気分条件 6.31 ± 2.21 ，抑うつ気分条件 6.69 ± 2.80 であり，条件間に有意な差は認められなかった ($t(30) = 0.42, ns$)。

③ 気分誘導

音楽の聴取によって気分誘導を行った。音楽の聴取を用いた理由は，音楽によって喚起される抑うつ気分は日常的に感じる抑うつ気分と類似していることが示されており（Clark, 1983），言語的な気分誘導法で指摘されている要求特性や認知プライミングの問題を最小限に抑えることができる，課題遂行中も気分誘導を継続することができる等，利点も多く挙げられているからである（谷口，1991a）。選曲は谷口（1995b）にもとづき，非抑うつ気分条件には，明るい音楽としてエルガー作曲“行進曲‘威風堂々’第 1 番ニ長調”（6 分 41 秒），グローフェ作曲“組曲‘グランドキャニオン’より‘日の出’”（6 分 43 秒）を，抑うつ気分条件には，暗い音楽として J.S.バッハ作曲“弦楽とオルガンのためのアダージョ ト短調”（7 分 19 秒），シベリウス作曲“トゥオネラの白鳥”（7 分 50 秒）をそれぞれ

^{注 6-1} 研究 2 では抑うつにおける気分一致効果が個人差によるものなのか一時的気分によるものなのかを明らかにすることを目的としているため，気分に関しては，“抑うつ気分”“非抑うつ気分”に焦点を当てることとし，誘導音楽の選定においても抑うつや高揚に着目した。

れ用いた^{注 6-2}。抑うつ気分条件に用いる 2 曲は谷口（1995b）の音楽作品の感情価測定尺度における高揚尺度の最も低い曲と次に低い曲であり、MMS の抑鬱・不安尺度においても得点が高い曲であった^{注 6-3}。非抑うつ気分条件の 2 曲は 90 曲のリストの中で、抑鬱・不安尺度の得点が低い曲の中から選んだ。

音楽の呈示方法に関しては、非抑うつ気分条件では明るい音楽 2 曲を、抑うつ気分条件では暗い音楽 2 曲を、それぞれ交互に繰り返して CD からカセットテープに録音し、カセットデッキによって再生された。実験参加者にはヘッドホンを通して聴取してもらった。音圧の設定については、実験参加者が最も適切であると感じる高さに各自調整してもらったが、一般的な範囲（概ね 90～110dB）にあったといえる。また、課題に入る時点でねらいとした気分が喚起されているように、はじめに 1 分間の音楽の聴取時間を設定した。音楽の聴取は課題終了まで続けられた。

④ 認知課題

実験 1 と同様の自伝的記憶の想起課題と性格表現用語の自己記述性評定課題の 2 つの認知課題を用いた。

⑤ 気分の測定

各条件に意図した気分が誘導されていたかを確認するために、実験 2 では実験開始前と実験の最後の 2 回、MMS 短縮版によって気分状態の測定を行った。

⑥ 実験場所・実験時刻等

実験はすべて A 大学内の同じ一室^{注 6-4}で行われた。曜日・時間帯等は原則として平日の日中^{注 6-5}とした。

^{注 6-2} 気分条件によって曲の長さはやや異なっているが、繰り返し聴取してもらうため、繰り返される回数に大きな違いはみられない範囲であるものと判断した。

^{注 6-3} 谷口（1995b）では、“行進曲‘威風堂々’第 1 番ニ長調”の抑鬱・不安尺度得点は 6.60 ± 2.53 ，“組曲‘グランドキャニオン’より‘日の出’”では 6.71 ± 2.49 ，“トゥオネラの白鳥”では 12.33 ± 4.32 ，“弦楽とオルガンのためのアダージョ ト短調”では 13.29 ± 3.75 となっている。

^{注 6-4} 実験室として使用されることもあったプレイルームの一角で行われた。遊具等は片づけられてあった。

^{注 6-5} 時間帯については実験参加者の予定にあわせ、午前である場合もあれば午後である場合もあった。

⑦ 手続き

実験は全て個別に行われた。最初に BDI と 1 回目の MMS 短縮版を実施した。BDI を最初に実施した理由は、BDI 高得点者を除くため（気分誘導を行わないようにするため）である。次に音楽を呈示し、1 分後に実験冊子への回答を求めた。冊子はほぼ実験 1 と同様であり、自伝的記憶課題（または自己記述性評定課題）、自己記述性評定課題（または自伝的記憶課題）、MMS 短縮版（2 回目）の順で構成された。なお、2 回目の MMS 短縮版では実験中の気分を尋ねた。課題の順序を変えた 2 種類の冊子は、カウンターバランスをして割り当てられた。最後にディブリーフィングとして実験の目的を告げ、質問があった場合には回答し、抑うつ気分条件の実験参加者には非抑うつ気分条件で用いた明るい音楽を呈示して^{注 6-6}、実験を終了した。

⑧ 倫理的配慮

研究への参加に関しては、文書を用いて依頼を行い、参加者の自由意思によって行われた。参加者本人の署名がなされた文書の提出をもって、研究参加の同意が得られたものとした。ただし、その後の参加辞退・中断も可能であった。

実験内容に関しては、個人的経験の想起や自己に関する質問項目が中心となるものであるが、内容・手続きとも先行研究で用いられ検討されてきているものを用い、過去において有害事象は報告されていないことから、精神的侵襲等の危険性は低いものと考えられる。より一層の安全性を確保し参加者が不利益を被らないようにするために、実験の依頼文書においては、実験の概要・所要時間等を記した。

実験の最後に、実験の目的と、研究で得られた情報については研究目的以外に使用しないこと、個人が特定される形での研究成果の公表は行わないことを口頭で伝えた。また参加者からの質問に応じた。

^{注 6-6} 明るい音楽を聴取することにより、誘導された抑うつ気分からの回復を図ったためである。

Table 6.3.1
多面的感情状態尺度短縮版の 6 つの下位尺度における
各条件の気分誘導前後平均得点（実験 2）

気分条件	n	抑鬱・不安		倦 怠		敵 意	
		誘導前	誘導後	誘導前	誘導後	誘導前	誘導後
非抑うつ	16	10.56 (2.90)	9.94 (3.04)	10.31 (3.16)	8.94 (3.36)	6.56 (1.97)	6.50 (2.10)
抑うつ	16	10.44 (2.76)	12.06 (2.86)	10.69 (3.05)	9.75 (2.93)	6.75 (1.73)	7.06 (3.17)
気分条件	n	活動的快		非活動的快		親 和	
		誘導前	誘導後	誘導前	誘導後	誘導前	誘導後
非抑うつ	16	14.19 (2.61)	12.06 (2.86)	13.63 (3.10)	12.25 (2.89)	12.38 (3.58)	10.19 (3.41)
抑うつ	16	13.06 (2.64)	9.94 (2.54)	13.38 (3.54)	11.81 (4.10)	10.94 (2.91)	8.00 (2.90)

注）各下位尺度の得点範囲は 5 から 20。（）内は標準偏差。

(3) 結 果

① 気分状態の検討

Table 6.3.1 は各条件の気分誘導前後の MMS 短縮版平均得点および標準偏差を表している。下位尺度別に誘導気分条件（2; 非抑うつ気分, 抑うつ気分）×測定時期（2; 気分誘導前, 気分誘導後）の 2 要因分散分析を行ったところ、抑鬱・不安尺度に関してのみ交互作用が有意であった（ $F(1,30) = 6.55, p < .05$ ）。単純主効果の検定の結果、抑うつ気分条件で気分誘導前 < 誘導後、気分誘導後の得点で非抑うつ気分条件 < 抑うつ気分条件であることが示された（ $F(1,30) = 6.84, p < .05$; $F(1,30) = 4.32, p < .05$ ）。意図された気分状態、すなわち抑うつの気分が音楽の聴取によって誘導されていたといえる。

② 自伝的記憶の想起

実験 1 と同様にポジティブとネガティブに分類し感情価別平均想起数を求めた（Figure 6.3.1）。想起数を従属変数とし、気分条件（2; 非抑うつ気分, 抑うつ気分）×想起された出来事の感情価（2; ポジティブ, ネガティブ）の 2 要因分散分析を行ったところ、想起された出来事の感情価の主効果のみが有意であり（ $F(1,30) = 44.75, p < .01$ ）、気分条件にかかわらず想起数はポジティブ > ネガティブであることが示された。

③ 自己記述性評価

自己記述性評価について (Figure 6.3.2), 同様に気分条件×刺激語の感情価の 2 要因分散分析を行ったところ, 刺激語の感情価の主効果のみが有意であった ($F(1,30) = 26.71, p < .01$)。自伝的記憶と同様, 気分条件にかかわらずポジティブ語の自己記述性評価値が有意に高いことが示された。

(4) 考 察

実験 2 では, 気分誘導アプローチから, 一時的な気分状態における気分一致効果を検討したが, 自伝的記憶課題の想起においても性格表現用語の自己記述性評価においても, ポジティブな認知が促進されるという結果が示され, 気分

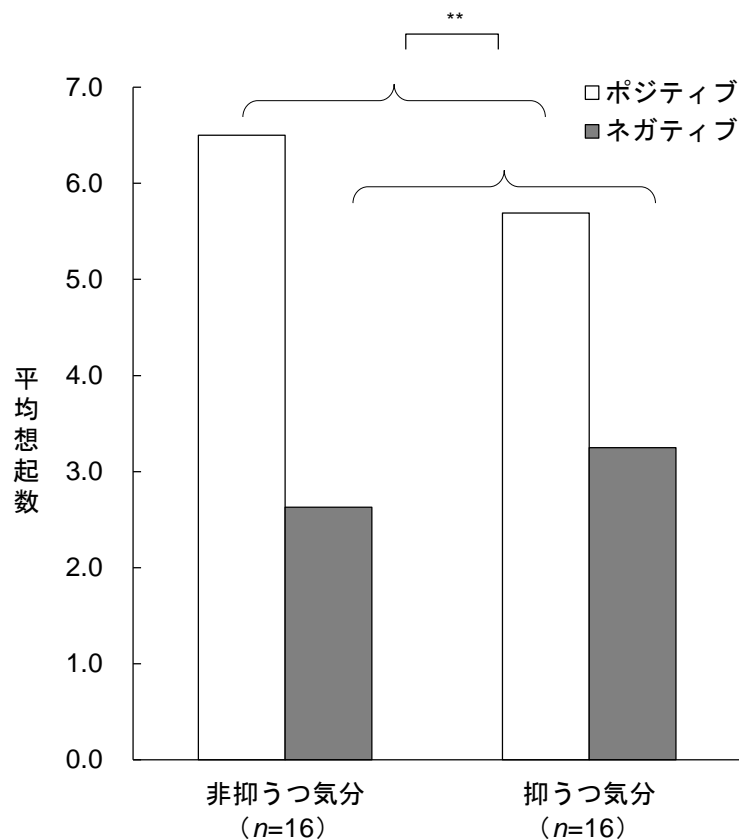


Figure 6.3.1. 各条件の感情価別自伝的記憶平均想起数 (実験 2)。

注) ** $p < .01$ 。ポジティブ: ポジティブな出来事, ネガティブ: ネガティブな出来事。波括弧は, 気分条件の区別なくあわせた, ポジティブな出来事全体とネガティブな出来事全体を示しており, 感情価間に有意差があること (感情価の主効果がみられたこと) を示している。

一致効果は認められなかったといえる。

自己関連的な認知においては、気分一致効果が生じにくいといわれているネガティブ気分でも効果が生じると先行研究からは指摘されており、本研究では実験 1 と同様に気分一致効果が生じると予想していたが、予想に反した結果となった。すなわち、一時的な気分では自己関連的な認知が行われたとしても必ずしも気分一致効果が生じるわけではないといえる。このことから、一時的な抑うつ気分が認知に及ぼす影響は弱いものであり、自己に関する要因の他に何らかの要因が加わって初めて気分一致効果は生起し得るものであることが示唆される。

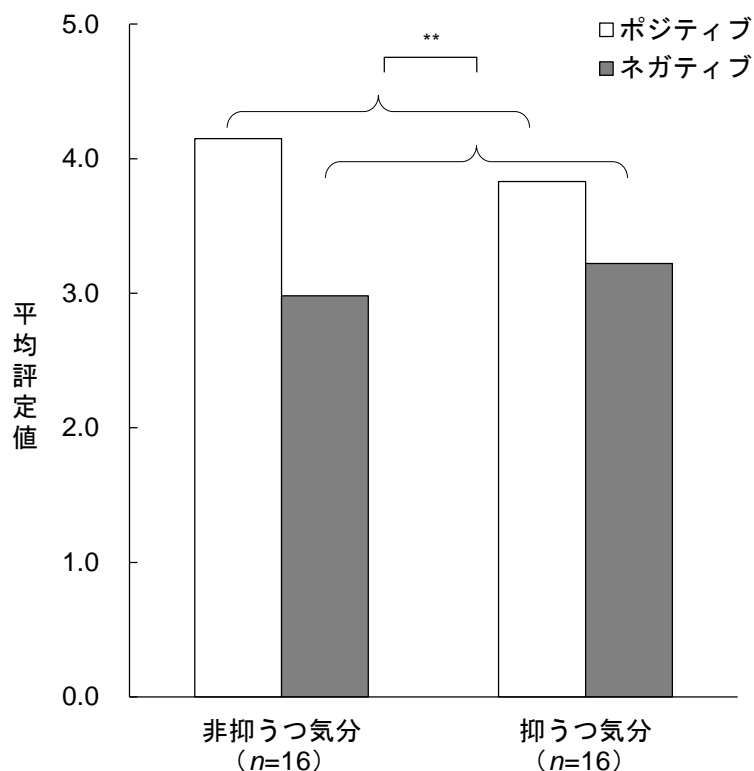


Figure 6.3.2. 各条件の刺激語の感情価別自己記述性平均評定値（実験 2）。

注）** $p < .01$ 。ポジティブ：ポジティブな感情価の性格表現用語，ネガティブ：ネガティブな感情価の性格表現用語。波括弧は、気分条件の区別なくあわせた、ポジティブな感情価の性格表現用語全体とネガティブな感情価の性格表現用語全体を示しており、感情価間に有意差があること（感情価の主効果がみられたこと）を示している。

第4節 全体的考察

本研究の目的は抑うつにおける自己関連的な認知のネガティブ・バイアスについて気分一致効果に着目して検討することであった。そこで自己に関連する処理が行われると考えられる自伝的記憶と自己記述性評定の2つを取り上げ、実験1では個人差アプローチから、実験2では気分誘導アプローチから、それぞれ気分一致効果の検証を試みた。結果、実験1では自伝的記憶、自己記述性評定ともに気分一致効果が生起したと考えられる結果が得られたが、実験2においては予想に反して、いずれの課題においても気分一致効果は認められなかった。

この結果から、本研究実験1の抑うつ群で自伝的記憶と自己記述性評定においてネガティブな方向でのバイアスが生じたことは、一時的な気分の影響によるのではないことが示唆される。すなわち、抑うつにおける認知のネガティブ・バイアスは、一時的な抑うつ気分がネガティブな感情価をもつ情報の処理を促進した結果生じるのではない、と考えられる。また、非抑うつ者に気分誘導を行った場合には気分一致効果が生じにくいということが示唆される。

この理由としては、**Gotlib & McCann (1984)**が述べているように、気分の影響よりもそもそもその個人が有している認知の特性による影響の方が大きいと考えられる。これは気分一致効果の説明理論のひとつである **Beck** らによるスキーマ理論を支持するものといえよう。すなわち、非抑うつ者においてはポジティブなスキーマが優勢であるため、一時的に抑うつ的な気分が喚起したとしても、認知の内容にネガティブなバイアスは生じず、非抑うつ的な気分状態の者と同様の認知パフォーマンスを示すが、一方抑うつにある者はネガティブなスキーマが優勢であるために、認知にネガティブなバイアスが生じると考えられるのである。

ただし、一時的な気分の誘導を行った実験2で気分一致効果が認められなかった点に関しては、気分誘導前後および条件間で有意な差はみられたものの、実験1の抑うつ群に比べ実験2の抑うつ気分条件において抑うつ気分の喚起が弱かった可能性や、サンプルの大きさの違いが結果に影響していた可能性は否定できない。また本研究では大学生を対象とし、自己報告式の質問紙を用いて

抑うつ の測定・分類を行ったが、本研究で見出された現象が抑うつ全般に適用し得るかという問題や、主観的な抑うつ の報告がたとえば臨床診断や客観的に観察された抑うつ とどの程度一致するものであるのかという質問紙法の限界もある。こういった本研究の問題点・限界を考慮した上でこの知見を活用しつつも、抑うつ における認知バイアスや抑うつ における気分と認知との相互作用についてより精緻な検討を行っていくことが必要であるだろう。

第5節 実験 1 の再分析

—抑うつ における性格表現用語の自己記述性評定について—

(1) 目 的

第 2 節の実験 1 では、抑うつ 平均得点 $12.46+1SD$ (6.93) より高い者を抑うつ 群、平均得点 $-1SD$ より低い者を非抑うつ 群とし、気分状態の群間差及び自己記述性評定値についての比較を行い、抑うつ における気分一致効果の検証を行っている。結果、抑うつ 群では否定的感情、非抑うつ 群では肯定的感情であることが示され、抑うつ 群ではネガティブ語の自己記述性評定が高く、非抑うつ 群ではポジティブ語の自己記述性評定が高いという気分一致効果が認められた。しかし、これが抑うつ によるものであるのか、気分の影響によるものであるのかは明らかではないことを論じた。また実験 2 で、実験的に誘導した気分状態で同様の検討を行ってはいるものの気分一致効果は生じておらず、一時的な気分状態は影響を及ぼしていない可能性が示唆された。しかしながら、実験的に誘導した抑うつ 気分は実験 1 の気分状態に比べやや弱いものであったこともあり、実験 2 で気分一致効果が認められなかったのは、一時的な気分状態は認知に影響を及ぼさないということであるのか、それとも気分誘導の実験的操作がうまくいっていない可能性によるものかは明らかではない。さらには実験的に誘導した気分が特殊な気分状態である可能性も否定できないだろう。したがって自然に生起した気分に着目し、抑うつ における認知のネガティブ・バイアスは抑うつ 者における認知構造が反映されたものかそれとも抑うつ 気分が認知的処理を促進した結果なのかについて検討をし直すことは意義あることではな

いかと考えられる。また第 I 部で論じたように、気分の種類（抑うつ気分）と刺激の感情価の種類（ネガティブな感情価）とが一致・対応していないために気分一致効果が生起しないという場合も考えられ得る。単にポジティブ-ネガティブの二分で捉えるだけではなく、認知のこういった側面にこういった気分や抑うつが影響するのか検討することも必要であろう。

以上のような問題意識から、実験 1 のデータについて再分析を行うこととする。第一に抑うつにおいて自己に関するネガティブな認知が認められるかどうかを確認するとともに、抑うつと一時的な気分状態のいずれがより大きな影響を持つのかを明らかにする。第二に、性格表現用語をポジティブ-ネガティブの一次元で捉えるだけではなく、カテゴリーに分類し、抑うつやさまざまな一時的気分状態がどのように影響を及ぼすのか探索的に検討することを目的とする。

(2) 結 果

① 性格表現用語の因子分析

性格表現用語の自己記述性について、単にポジティブ-ネガティブの二分で捉えるのではなく、性格の認知のこういった側面に抑うつ及び気分が影響を及ぼすのかを明らかにするために、はじめに研究 2 で用いた性格表現用語 40 語について、主因子法・プロマックス回転を用い、固有値 1.0 以上の基準を設け、複数の因子に 3.5 以上の負加量のある項目及びどの因子にも .35 未満の項目を削除し、繰り返し因子分析を行ったところ、最終的に 5 因子 17 項目が抽出された。累積寄与率は 46.98% であった。各項目の因子負荷量及び因子間相関の結果を Table 6.5.1 に示す。第 1 因子（「親身な」など 6 項目）を“調和性”，第 2 因子（「勤勉な」など 3 項目）を“実直性”，第 3 因子（「憂うつな」など 4 項目）を“情動性”，第 4 因子（「身勝手な」「口汚い」）を“利己性”，第 5 因子（「しつこい」「嫉妬深い」）を“執着性”と命名した。

② 自己記述性評定に抑うつ傾向と気分状態が及ぼす影響

a. 変数間の相関

はじめに、抑うつ（BDI 得点）と一時的な気分状態（MMS 短縮版各下位尺度得点）との相関を求めた（Table 6.5.2）。抑うつと一時的な気分状態との間には

Table 6.5.1
性格表現用語の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

	F1	F2	F3	F4	F5
F1 調和性					
親身な	.74	-.13	-.15	.04	.21
優しい	.70	-.03	.03	-.08	.14
素直な	.65	.04	.20	-.01	-.11
寛大な	.63	-.09	-.17	.06	-.02
円満な	.62	.06	.07	.05	-.25
誠実な	.53	.24	-.09	-.06	.06
F2 実直性					
勤勉な	-.04	.85	-.07	.12	.03
真面目な	.14	.62	.21	-.15	-.03
着実な	-.09	.59	-.12	-.01	.04
F3 情動性					
憂うつな	-.08	.04	.62	.07	.15
不安定な	-.04	-.11	.59	-.13	.25
上の空の	.09	-.14	.45	.23	-.17
気の小さい	.01	.04	.42	.02	.04
F4 利己性					
身勝手な	.03	.02	.10	.81	-.03
口汚い	-.03	.01	-.04	.64	.19
F5 執着性					
しつっこい	-.10	.09	.05	.19	.64
嫉妬深い	.07	-.02	.16	-.04	.58
因子間相関					
F1	—	.41	-.33	-.38	-.05
F2		—	-.22	-.35	.02
F3			—	.34	.24
F4				—	.21
F5					—

Table 6.5.2
抑うつと一時的気分との相関

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.
1. BDI	—	.60***	.54***	.40***	-.45***	-.25***	-.14*	-.10*	.31***
MMS 短縮版									
2. 抑鬱・不安		—	.50***	.40***	-.29***	-.17**	.06	.07	.46***
3. 倦怠			—	.41***	-.53***	-.11*	-.16**	-.09†	.21***
4. 敵意				—	-.18**	-.19*	.01	.08	.37***
5. 活動的快					—	.33***	.47***	.27***	.08†
6. 非活動的快						—	.32***	.12*	-.01
7. 親和							—	.35***	.25***
8. 集中								—	.24***
9. 驚愕									—

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

全て有意な相関が認められ、特に否定的感情状態を示す“抑鬱・不安”，“倦怠”，“敵意”との間に中程度の正の相関がみられた（ $r = .60, p < .001$; $r = .54, p < .001$; $r = .40, p < .001$ ）。また肯定的感情状態を示す“活動的快”で中程度の負の相関がみられた（ $r = -.45, p < .001$ ）。

次に、感情価別（ポジティブ，ネガティブ）及び因子別の自己記述性評定値と BDI，MMS 短縮版各下位尺度得点との相関を求めた（Table 6.5.3）。BDI 得点，MMS 短縮版“倦怠”得点，“敵意”得点が全ての自己記述性評定値との間で相関が統計的に有意または有意傾向であった。BDI 得点及と中程度の相関が認められたのはネガティブな感情価の性格表現用語における自己記述性評定値と“情動性”因子の自己記述性評定値であり（ $r = .47, p < .001$; $r = .49, p < .001$ ），この2つの評定値は MMS 短縮版“倦怠”得点との間でも中程度の相関がみられた（ $r = .43, p < .001$; $r = .46, p < .001$ ）。MMS 短縮版“敵意”と中程度の相関がみられたのはネガティブな感情価の自己記述性評定値であった（ $r = .45, p < .001$ ）。

またポジティブな性格表現用語の自己記述性評定値，“調和性”因子の自己記述性評定値は，BDI 得点及び MMS 短縮版の全ての下位尺度得点との間で統計的に有意な相関が認められた。中でも，MMS 短縮版“活動的快”尺度得点とポジティブな感情価の自己記述性評定値の間で中程度の相関がみられた（ $r = .45, p < .001$ ）。

Table 6.5.3
抑うつ及び一時的気分と自己記述性評定値との相関

	自己記述性評定						
	感情価別		因子別				
	ポ ジ	ネ ガ	調和性	実直性	情動性	利己性	執着性
BDI	-.31***	.47***	-.25***	-.12*	.49***	.23***	.23***
MMS 短縮版							
抑鬱・不安	-.17**	.38***	-.10†	-.05	.49***	.17**	.23***
倦 怠	-.34***	.43***	-.27***	-.17**	.46***	.22***	.12*
敵 意	-.34***	.45***	-.36***	-.09†	.35***	.36***	.29***
活動的快	.45***	-.32***	.39***	.17**	-.35***	-.09†	-.03
非活動的快	.16**	.02	.23***	.01	.01	-.02	-.05
親 和	.29***	-.08	.25***	.11*	-.07	-.03	.17**
集 中	.29***	-.18**	.17**	.37***	-.10*	-.19**	.01
驚 愕	-.14*	.15**	-.11*	-.07	.22***	.06	.09†

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

注) ポジ: ポジティブな感情価の性格表現用語, ネガ: ネガティブな感情価の性格表現用語。

b. 自己記述性評定に抑うつと一時的な気分が及ぼす影響

はじめに、ポジティブな感情価とネガティブな感情価の性格表現用語それぞれにおける自己記述性評定値を目的変数、BDI 得点と MMS 短縮版各下位尺度を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。結果を Table 6.5.4 に示す。ポジティブな感情価の性格表現用語については BDI 得点の影響は有意ではなく、MMS 短縮版の否定的感情である“敵意”，肯定的感情である“活動的快”が有意に影響していることが示された（ $\beta = -.24, p<.001$; $\beta = .35, p<.001$ ）。また中性的感情である“集中”と“驚愕”の影響も認められた（ $\beta = .24, p<.001$; $\beta = -.14, p<.05$ ）。ネガティブな感情価の性格表現用語については、有意な BDI 得点の影響が認められ（ $\beta = .30, p<.001$ ），ポジティブな感情価の性格表現用語とは対称的に MMS 短縮版の否定的感情である“敵意”の正の影響が認められた（ $\beta = .36, p<.001$ ）。またポジティブ語には影響のみられなかった MMS 短縮版の肯定的感情“非活動的快”が正の影響を及ぼしていることが示された（ $\beta = .24, p<.001$ ）。加えて非常に弱いが，“活動的快”“集中”得点の負の影響が示された（ $\beta = -.15, p<.05$; $\beta = -.17, p<.01$ ）。

Table 6.5.4

抑うつと一時的気分を説明変数，自己記述性評定値を目的変数とした
重回帰分析結果（ステップワイズ法）

	自己記述性評定						
	感情価別		因子別				
	ポ ジ	ネ ガ	調和性	実直性	情動性	利己性	執着性
BDI	—	.30***	—	—	.21**	—	.17**
MMS 短縮版							
抑鬱・不安	—	—	.15*	—	.24***	—	—
倦怠	—	—	—	—	.12†	—	—
敵意	-.24*** a	.36***	-.36***	—	.13*	.38***	.22***
活動的快	.35***	-.15*	.36***	—	-.16*	—	—
非活動的快	—	.24***	—	—	.19**	—	—
親和	—	—	—	—	—	—	.19**
集中	.24***	-.17**	—	.41***	—	-.21***	—
驚愕	-.14*	—	—	-.17**	—	—	—
R^2	.33***	.38***	.26***	.17***	.37***	.18***	.14***

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

^a 標準化係数

注) ポジ: ポジティブな感情価の性格表現用語，ネガ: ネガティブな感情価の性格表現用語。

次に性格表現用語の因子分析において抽出された 5 因子それぞれについて，自己記述性評定値を目的変数，抑うつ傾向と気分状態を説明変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。結果は Table 6.5.4 に示している。BDI 得点の有意な影響が認められたのは“情動性”因子と“執着性”因子の自己記述性評定値のみであった（ $\beta = .21, p<.01$; $\beta = .17, p<.01$ ）。性格表現用語の“調和性”因子については，否定的感情の“敵意”と肯定的感情の“活動的快”の影響が有意であり（ $\beta = -.36, p<.001$; $\beta = .36, p<.001$ ），“抑鬱・不安”の影響もわずかに認められた（ $\beta = .15, p<.05$ ）。“実直性”因子については，否定的・肯定的感情の影響は認められず，中性的感情の“集中”，“驚愕”の影響のみが有意であった（ $\beta = .41, p<.001$; $\beta = -.17, p<.01$ ）。“情動性”については，上述の BDI の影響が有意であったほか，MMS 短縮版の否定的・肯定的感情の多くの下位尺度得点（“抑鬱・不安”，“倦怠”，“敵意”，“非活動的快”，“活動的快”）も有意に影響しており（ $\beta = .24, p<.001$; $\beta = .12, p<.10$; $\beta = .13, p<.05$; $\beta = .19, p<.01$;

$\beta = -.16, p < .05$), 抑うつと否定的・肯定的感情の多くの変数で説明されることが示された。性格表現用語の“利己性”因子と“執着性”因子については説明する気分の変数は相対的に少なく、共に“敵意”の影響が認められた ($\beta = .38, p < .001$; $\beta = .22, p < .001$)。このほか、“利己性”に対しては中性的感情である“集中”の負の影響が、“執着性”に対しては肯定的感情である“親和”の正の影響が認められた ($\beta = -.21, p < .001$; $\beta = .19, p < .01$)。

(3) 考 察

① 抑うつにおけるネガティブな自己認知について

性格表現用語の感情価別の重回帰分析の結果、ネガティブ語に関する自己記述性評定では抑うつ of 正の影響が認められることが示されたことから、従来から指摘されてきている抑うつにおけるネガティブな自己認知は本研究においても確認されたと考えられる。しかし、ポジティブ語の自己記述性評定において抑うつ of 負の影響が認められたわけではなかった。このことから、抑うつ of 影響はポジティブ語の認知的処理とネガティブ語の認知的処理に対称的に及ぼされるのではないと考えられる。言い換えれば、抑うつにおいてはネガティブな自己認知がなされていると考えられるものの、それは自己のネガティブな側面に関してのみ生じているものであり、ポジティブな側面への影響によるものではないといえよう。逆に考えれば、自己のポジティブな側面に関する認知は抑うつ of ネガティブな影響から免れている、というようにも捉えられるのではないだろうか。

次に、抑うつと一時的な気分状態では自己認知にどちらがより大きな影響力を持つのかという点に関しては、先と同様、ポジティブ語とネガティブ語とは異なることが示唆される。ポジティブ語の自己記述性評定には、抑うつ of 影響は認められず、MMS 短縮版の“活動的快”の標準化係数が最も高い値であったことから、一時的な気分状態、中でも“活動的快”に代表される肯定的感情が正の影響を及ぼすのではないかと考えられる。一方ネガティブ語の自己記述性評定には、抑うつと否定的感情である“敵意”及び覚醒度の低い肯定的感情である“非活動的快”が特に正の影響を及ぼしていることが示され、抑うつと一時的気分状態のいずれの影響も高く認められると考えられる。ただし、一時

的な気分状態の影響の中に抑うつ気分が含まれていない点には留意すべきであろう。

このように、一時的な抑うつ気分を示していると考えられる“抑鬱・不安”がポジティブ語、ネガティブ語いずれの自己記述性評定にも影響を及ぼしていないという点は注目に値すると考えられる。本章の研究2における実験2では、実験的に誘導した気分状態下で気分一致効果が認められないことが示されたが、MMS 短縮版得点の変化をみると、この時喚起されていた気分は“抑鬱・不安”気分の特徴づけられるものであったといえる。このことが実験2で気分一致効果が生じなかった理由としてひとつに考えられる。すなわち、“抑鬱・不安”の気分のみが喚起されただけでは認知への影響はなく、敵意感情や非活動的快感情を伴うことでネガティブな認知が促進され、結果として気分一致効果が認められるのではないだろうか。

したがって、ネガティブ気分を広く捉えた場合、一時的な気分状態は認知に影響を及ぼさないと結論づけるのは時期尚早であると考えられる。実験的に誘導した気分が特殊である可能性及び実験的操作がうまくいっていない可能性については、この実験1の再分析の結果と実験2の結果を合わせて考えると、低いといえるのではないだろうか。以上から、ある種の単独の気分しか喚起されない場合、認知への影響が認められない可能性が示唆され、このことについては感情の同時生起の問題として考えることもできよう。そこには言語的な問題や感情に関する知識の問題、個人差の問題などが複雑に絡み合っているとされている(e.g., 川野・平野・下川, 1992; Russell, 1991)。今後はこういった観点からの検討も必要であると考えられる。

② 自己のどの側面に抑うつ及び一時的気分が影響を及ぼしているのか

性格表現用語の5つの因子ごとに重回帰分析を行った結果、因子によって抑うつ及び一時的気分の影響は大きく異なることが示された。中でも特に顕著な特徴が示されたと考えられるのは、“情動性”と“調和性”に関する面である。“情動性”の側面においては、有意な影響を示した変数の数が多く、抑うつや一時的な気分が広く影響していることが示唆される。これはある意味もったもな結果であるとも考えられるが、自己の情動性に関する認知は抑うつや気分の

影響を受けやすく、揺らぎ易い面であると考えられよう。

対人的側面と考えられる“調和性”（「親身な」「優しい」など）には、否定的感情である“敵意”の有意な負の影響と肯定的感情である“活動的快”の有意な正の影響が認められ、“抑鬱・不安”の正の影響もわずかに認められた。一時的な気分状態が正負ともに影響を及ぼす自己の側面であることが示唆される。

以上から、こういった内容の刺激を用いるかで、抑うつや一時的な気分の影響の有無が異なる、すなわち気分一致効果の生起を決定するのではないかと考えられる。単にポジティブ語-ネガティブ語、抑うつ語-非抑うつ語というように二分的カテゴリーの対応で一致性を検討するのは十分であるとはいえず、認知の内容的な側面や構造にも着目していく必要があると考えられる。榊(2006)は、自己知識の構造が気分一致・不一致効果の規定因であると述べているが、抑うつにおける気分一致効果についてもそういった観点からの検討が今後望まれるであろう。

第7章 抑うつにおける自伝的記憶の想起の特徴と気分状態との関連 (研究3)

第1節 目 的

自伝的記憶とは、自己に関連する情報についての記憶であり、個人の過去の中から思い出される特定のエピソードについての記憶と定義される。自伝的記憶研究の歴史的始まりのひとつとして、Robinson (1986) は神経症の説明と治療に際して記憶に関心を持った Freud, S. を挙げ、忘却や記憶の回避に関連する抑圧という防衛機制や、回想や連想などを用いてライフ・ヒストリーを再構成する精神分析における神経症の治療に、Freud の記憶への関心がうかがわれ、特に感情との関係から記憶の保持や忘却が論じられていることを紹介している。

このように自伝的記憶とは、従来、精神分析やカウンセリングなどの分野で診断や治療のために利用されてきたものである(森, 1992)。こういった点から、抑うつといった心理的問題や症状と自伝的記憶との関連性について明らかにすることは、面接場面におけるクライアントの理解や介入に役立つものと考えられる。さらには、抑うつ症状や感情的な問題についての、ひとつのアセスメント指標と成り得る可能性もあるといえよう。また佐治 (1966) は、心理的問題を抱えるクライアントは感情によって支配されていると述べており、面接場面においてクライアントの感情がどのように表出され、あるいは表出されないかということを考えることは、より良い心理的援助を考える上で重要なことと考えられる。以上の点から、その時の気分をはじめとした状態や症状等と想起される自伝的記憶との関連を明らかにすることや、そういった場合に自伝的記憶にどのような感情的な意味づけがなされ、どのように感情表出がなされるか、感情に焦点を当てて捉えることは重要であると考えられる。

第 I 部で論じたように、これまでさまざまな領域で、抑うつにおける認知の特徴については臨床的にも基礎的にも検討されてきた。中でも記憶に関しては、全体的な記憶パフォーマンスが低下すること (e.g., Burt, Zembar, & Niederehe, 1995; Ellis, 1990)、ネガティブな内容が記憶再生されやすいこと (e.g., Blaney, 1986; Matt et al., 1992; McDowall, 1984)、そして自伝的記憶に関しては、ネガテ

ィブなエピソードが想起されやすいこと (e.g., Ruiz Caballero & Moreno, 1993; Williams et al., 1997), 具体性に乏しく漠然とした自伝的記憶の想起となりやすいこと (e.g., Kuyken & Dalgleish, 1995; Williams, 1996; Williams, Barnhofer, Crane, Herman, Raes, Watkins, & Dalgleish, 2007) などが明らかとなってきた。

本研究では、自伝的記憶と抑うつ、気分状態、及び感情表出についての関連性について明らかにすることを目的とする。従来指摘されてきた、抑うつとネガティブな自伝的記憶の想起とが関連するのかどうかを確認すると同時に、抑うつ及び気分状態との関連性及び自伝的記憶における感情の表出に焦点を当て、自伝的記憶の想起の特徴を明らかにしたい。具体的には第 6 章 (研究 2) で実施した実験 1 の調査データの一部 (自伝的記憶の想起課題, MMS 短縮版, BDI) を用い、新たな観点から整理・分析する。

第2節 方 法

対象者数及び有効回答数、手続きの一部以外は、第 6 章第 2 節の研究 2・実験 1 の方法と同様である。

(1) 対 象

大学生及び大学院生 380 名が対象であり、有効回答数は 309 (男性 128 名, 女性 181 名) であった。

(2) 自伝的記憶課題

最近 1 か月間に生じたエピソードを 10 個記述してもらい、その後想起したエピソードそれぞれが自分にとってどの程度望ましいかを 7 段階 (-3; 非常に望ましくない～3; 非常に望ましい) で評価してもらった。

(3) 抑うつの測定

林・塚本 (1987) による BDI を用いた。21 項目から構成される尺度であり、得点範囲は 0 から 63 であった。

(4) 気分の測定

寺崎他（1991）による MMS 短縮版を用いた。8 下位尺度 40 項目から構成され、現在の感情状態についてそれぞれ 4 段階で評定する尺度である。

(5) 手続き

実験冊子を用い、集団で実施した。実験冊子の構成は、①フェイスシート（年齢・性別）、②自伝的記憶課題、③自己認知課題（今回は報告しない）、④MMS 短縮版、⑤BDI であり、②と③の順序を変えた 2 種の冊子を用意した。主に講義時間の一部を用い、集団で回答を求めたが、一部、個別に実験冊子への回答を求めたものもあった。

(6) 倫理的配慮

研究への参加は自由意思にもとづくものであり、実験冊子への回答・冊子の提出をもって、同意が得られたものとした。実験内容に関しては、主として先行研究で用いられてきた方法と既存の質問紙を用い、それらについては過去において有害事象は報告されていないことから、精神的侵襲等の危険性は低いものと考えられる。より一層の安全性を確保し参加者が不利益を被らないようにするために、冊子の表紙には調査の目的、概要、倫理的配慮等を明記した。また、研究で得られた情報については本研究目的以外に使用しないことを冊子の表紙に明記し、個人が特定される形での研究成果の公表は行わないことを口頭で伝えた。

第3節 結 果

(1) 自伝的記憶の主観的望ましさ、抑うつ、気分状態との関係に関する検討

① 自伝的記憶の主観的望ましさの傾向

7 段階評定で回答を求めた各エピソードの主観的望ましさについて、度数分布を Figure 7.3.1 に示した。各参加者につき 10 のエピソードを想起してもらっているため、総数は 3090 である。評定値-3~-1 を「望ましくない」、評定値 0

を「どちらでもない」、評定値 1～3 を「望ましい」の 3 つにまとめたところ、「望ましい」と評定されたエピソードは 56.80%、「望ましくない」は 31.04%、「どちらでもない」は 12.17%であった。また、「非常に望ましくない」を 1 点、「非常に望ましい」を 7 点として算出した対象全体の平均評定値は 4.58 ± 0.93 であった。

② 自伝的記憶の望ましさと抑うつ、気分状態との関係

BDI, MMS 短縮版の各下位尺度得点及び自伝的記憶の望ましき平均評定値との間の相関を求めた (Table 7.3.1)。BDI と MMS 短縮版各下位尺度との間については、“集中” 尺度以外の全てで有意な相関がみられ、BDI と否定的感情に関する 3 尺度 (“抑鬱・不安” “倦怠” “敵意”) 及び驚愕尺度との間では正の相関

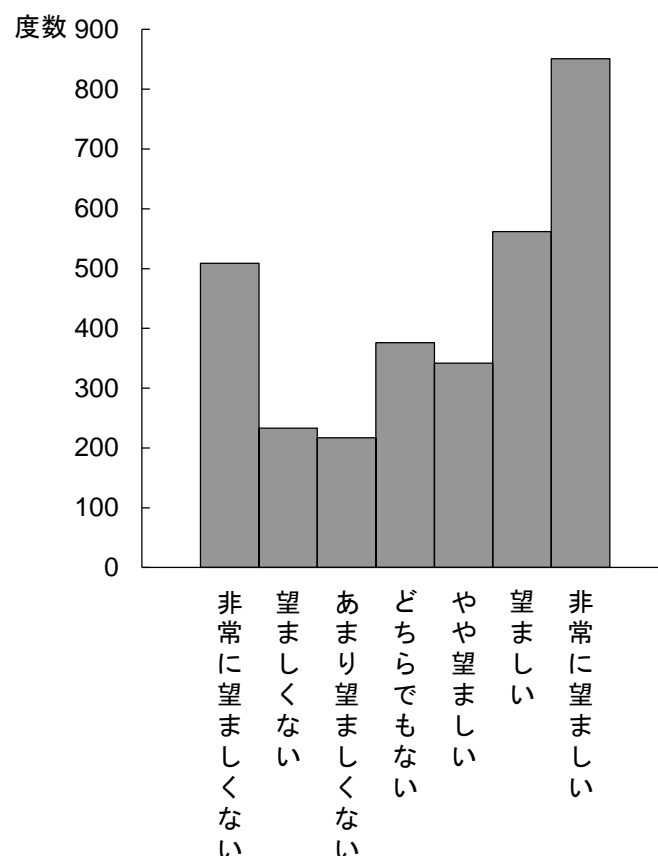


Figure 7.3.1. 自伝的記憶の主観的望ましきの度数分布。

注) 対象者 ($n=309$) 1 人につき 10 のエピソードを想起してもらった総数 3090 について、評定値別の度数の分布を表している。

Table 7.3.1
抑うつ，気分状態，自伝的記憶の主観的望ましさの相関係数

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.
1. BDI	—	.60***	.54***	.37***	-.45***	-.23***	-.15**	-.07	.26***	-.17**
MMS 短縮版										
2. 抑鬱・不安		—	.51***	.42***	-.26***	-.17**	.06	.04	.46***	-.08
3. 倦怠			—	.42***	-.49***	-.10	-.15**	-.10	.22***	-.16**
4. 敵意				—	-.17**	-.19**	.03	.04	.40***	-.00
5. 活動的快					—	.31***	.49***	.14*	.12*	.30***
6. 非活動的快						—	.27***	.09	.01	.08
7. 親和							—	.16**	.27***	.26***
8. 集中								—	.18**	.07
9. 驚愕									—	.01
10. 自伝的記憶 ^a										—

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

^a 自伝的記憶の主観的望ましさ

Table 7.3.2
気分状態を制御した抑うつ、及び抑うつを制御した気分状態と、
自伝的記憶の主観的望ましさの偏相関係数

	BDI	MMS 短縮版下位尺度							
		抑鬱・ 不安	倦怠	敵意	活動的 快	非活動 的快	親和	集中	驚愕
自伝的記憶 の主観的望 ましさ	-.04	.03	-.09	.06	.26***	.04	.24***	.06	.05

*** $p < .001$

が ($r = .60, p < .001$; $r = .54, p < .001$; $r = .37, p < .001$; $r = .26, p < .001$), BDI と肯定的感情に関する 3 尺度 (“活動的快” “非活動的快” “親和”) との間では負の相関が ($r = -.45, p < .001$; $r = -.23, p < .001$; $r = -.15, p < .01$), それぞれ統計的に有意であった。自伝的記憶の主観的望ましさと抑うつ及び気分状態との関連については、BDI との間には有意な負の相関が認められ ($r = -.17, p < .01$), MMS 短縮版 “倦怠” と有意な負の相関が ($r = -.16, p < .01$), MMS 短縮版 “活動的快” “親和” とは有意な正の相関が ($r = .30, p < .001$; $r = .26, p < .001$) 認められた。

③ 抑うつの影響を統制した気分状態、気分状態の影響を統制した抑うつと自伝的記憶の主観的望ましさとの関係

BDI と MMS 短縮版下位尺度との間に中程度の相関が認められるものもあるため、それぞれの自伝的記憶との関係については、正確な関係が示されたとは必ずしもいえないと考え、MMS 短縮版各下位尺度を制御変数とした BDI と自伝的記憶の主観的望ましさとの偏相関係数、及び BDI を制御変数とした MMS 短縮版各下位尺度と自伝的記憶の主観的望ましさとの偏相関係数を求めた (Table 7.3.2)。自伝的記憶の主観的望ましさと有意な偏相関が認められたのは MMS 短縮版 “活動的快” と “親和” であった ($r = .26, p < .001$; $r = .24, p < .001$)。

(2) 自伝的記憶にみられる感情語の表出及び抑うつ、気分状態との関連性

① 感情語の抽出と分類

想起されたエピソード計 3090 個について、2 名の研究者が独立に感情語 (感情を表わしていると考えられる単語) を抽出した (Table 7.3.3)。一致率は 94.37%

Table 7.3.3
大学生の自伝的記憶において表出された主な感情語

感情語	度 数	例
楽しい	30	「ビリヤードに行き、とても楽しかった」
嬉しい	21	「毛ガニを食べてうれしかった」
好き	19	「好きな人の夢をみたこと」
感動	16	「ある先生の講義をきいて感動したこと」
おもしろい	15	「昨日読んだマンガがおもしろかった」
良い・良かった	14	「映画『〇〇』がすごくよかった」
きれい	13	「夜景がきれいだったこと」
驚いた	9	「友だちに恋人ができて驚いたこと」
びっくりした	8	「独り言を喋っていた自分にびっくりした」
かわいい	8	「買い物先で、かわいい犬と出会った」
後悔	6	「嫌いな人を避けて後悔したこと」
いやな	5	「友だちと食事をして嫌な思いをした」
こわい	5	「変な人に話しかけられ、こわい思いをした」
ドキドキ	4	「ドライブで道に迷いドキドキしたこと」
怒った	4	「愛犬に怒ったこと」
気に入った	4	「初めて入った店の雰囲気が気に入った」
困った	4	「深刻な悩みを相談されて困った」
ショック	4	「自転車を盗まれてショックだった」
つまらない	4	「かなりつまらないコンパ」
ブルー	4	「電話がなくてブルーだった」
頭にきた	3	「ある先生の発言に頭にきた」
落ち込んだ	3	「遊びに来るのがダメになり落ち込んだ」
気まずい	3	「バイトで気まずくなった」
心配	3	「友だちが風邪で寝込んで心配だった」
たいへん	3	「妹が怪我をしてたいへんだった」
度数 2 の感情語		
安心, イライラ, 印象的, がっかり, 悲しい, 嫌い, 悔しい, すごい, 素敵, つらい, 懐かしい, 恥ずかしい, ひどい, 不安定, 変, 面倒		
度数 1 の感情語		
焦り, うざい, うつとおしい, 感心, きつい, 緊張, 苦しい, 元気, しんみり, すばらしい, 動揺, ハートに響く, 腹がたった, 不安, ほっとした, 無気力 他		

であり、一致した項目のみを対象とし分類・分析を行った。感情語が含まれたエピソード数は 258(8.35%), 1 つでも感情語を表出していた者 125 名(40.45%), 表出された感情語ののべ数 283 語, 感情語の種類は 82 であった。

次に表出された感情語（のべ数 283 語）について、2 名が独立にポジティブ、ネガティブ、ニュートラルの 3 つの感情価に分類を行った。一致率は 92.68% であった。表出された感情語 283 語におけるポジティブの割合は 55.12%，ネガティブ 30.04%，ニュートラル 11.66% であった（Figure 7.3.2）。また表出感情語の種類数の割合については、ポジティブ 31.70%，ネガティブ 45.12%，ニュートラル 15.86% であった（Figure 7.3.3）。

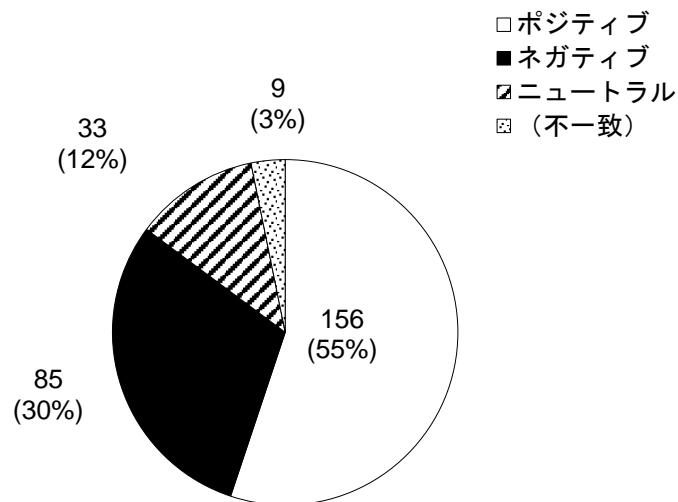


Figure 7.3.2. 表出感情語のべ数における感情価別の感情語数と割合。

注) 対象者 ($n=309$) の想起したエピソード総数 3090 の中で、表出された感情語ののべ数は 283 語であり、図中の実数は感情価別の語数、()内は 283 語全体に占める割合(%)を示している。

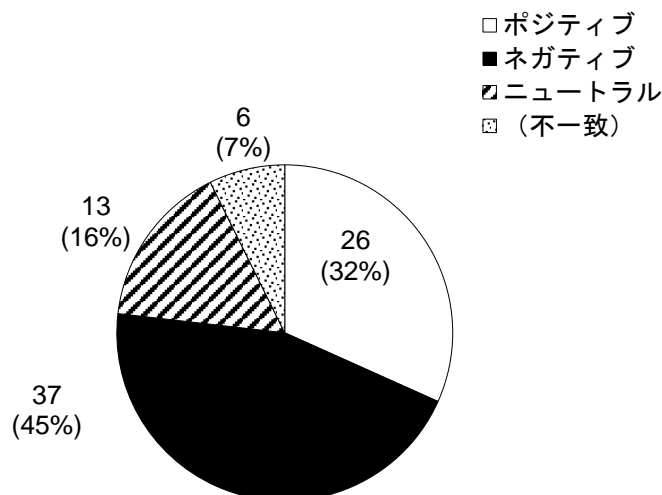


Figure 7.3.3. 感情価別の表出感情語種類数と割合。

注) 表出された感情語の種類 82 を感情価別に分類したものである。()内は 82 種類全体に占める感情価別割合(%)を示している。

② 感情語の表出と抑うつ、気分状態、自伝的記憶の主観的望ましさととの関係

気分状態や抑うつ状態と感情語の表出が関係しているかを検討するため、感情語を表出した者 ($n=125$) と表出しなかった者 ($n=184$) の BDI 得点、MMS 短縮版各下位尺度得点、自伝的記憶の主観的望ましさの比較を行った (Table 7.3.4)。BDI については感情表出の有無で有意差は認められなかった ($t(307) = 1.56, ns$)。MMS 短縮版下位尺度については“抑鬱・不安”尺度で感情語を表出した者の得点が有意に高いことが示され ($t(307) = 2.19, p < .05$)、“活動的快”尺度で感情語を表出しなかった者が高い傾向にあることが示された ($t(307) = 1.94, p < .10$)。なお、“倦怠”“敵意”“非活動的快”“親和”“集中”“驚愕”では有意差は認められなかった ($t(307) = 0.87, ns$; $t(307) = 1.60, ns$; $t(307) = 1.33, ns$; $t(284.43) = 0.17, ns$; $t(307) = 1.15, ns$; $t(307) = 0.83, ns$)。自伝的記憶の主観的望ましさ評定値にも有意差は認められなかった ($t(307) = 0.42, ns$)。

第4節 考 察

(1) 自伝的記憶の主観的望ましさ、抑うつ、気分状態との関係に関する検討

自伝的記憶の主観的望ましさの全体的な傾向としては、望ましいエピソードが約 6 割、望ましくないエピソードが約 3 割、どちらでもないエピソードが 1 割強であることが示された。先行研究においても、快エピソードの想起割合が高いのが一般的傾向であることが見出されているが (e.g., 神谷, 1994, 1996), 本研究でも同様の傾向が示されたと考えられる。

自伝的記憶の主観的望ましさと抑うつ及び気分状態との関係については、MMS 短縮版における“活動的快”“親和”が高いほど自伝的記憶の望ましさが高くなることが示され、一方、BDI で測定される抑うつ及び MMS 短縮版における“抑鬱・不安”との関連は示されなかった。抑うつ者はネガティブな内容の記憶を想起させやすいことが先行研究からは示されてきているが、抑うつとネガティブな自伝的記憶の想起とは表面上の関係であり、“活動的快”“親和”といったポジティブな気分など他の変数の影響を受けていることが示唆される。特に MMS 短縮版の“活動的快”尺度は、その項目（「陽気な」「はつらつとし

Table 7.3.4
感情語の表出の有無による抑うつ、気分状態、自伝的記憶の主観的望ましさの比較

感情語の 表出の有無	<i>n</i>	BDI ^a	MMS 短縮版下位尺度 ^b								記憶 ^c
			抑鬱・不安	倦怠	敵意	活動的快	非活動的快	親和	集中	驚愕	
無し	184	12.34 (7.05)	13.15 (3.72)	13.32 (3.41)	8.99 (3.09)	13.13 (3.71)	13.17 (3.23)	13.37 (3.57)	12.58 (2.97)	10.18 (3.23)	4.57 ^d (0.93)
有り	125	13.57 (6.42)	14.06 (3.44)	13.66 (3.42)	9.61 (3.68)	12.33 (3.36)	13.68 (3.33)	13.30 (3.20)	13.10 (5.06)	10.50 (3.25)	4.61 (0.95)
<i>t</i> 値 [<i>df</i> =307 ^d]		1.56	2.19*	0.87	1.60	1.94 [†]	1.33	0.17	1.15	0.83	0.42

* $p < .05$, $^{\dagger} p < .10$

注) ()内は標準偏差。

^a 得点範囲 0-63。 ^b 得点範囲 5-20。 ^c 自伝的記憶の主観的望ましさ。得点範囲 1-7。 ^d 「親和」のみ $df=284.43$ 。

た」など) から、肯定的感情の中でも覚醒度^{注 7-1}の高いと考えられる、アクティブな感情であると考えられる。また“親和”尺度はその項目(「好きな」「いとおしい」など)から対人的なポジティブ感情であると考えられる。すなわち、抑うつ者においてみられるネガティブな自伝的記憶の想起にみられる認知バイアスについては、アクティブで対人的なポジティブ気分の低下がポジティブな記憶の想起を抑制した結果として生じている可能性があるのではないかと考えられる。

抑うつにおいてネガティブな自伝的記憶が想起されやすいことについては、気分一致効果として説明されることも多い。しかし、本研究の結果からは、この現象はあくまで表面的に“見える”ものであり、“一致”は必要条件ではない可能性があることが示唆される。抑うつは、不安に比べて、ポジティブ感情の低下と関連することがこれまで指摘されているが(e.g., 福井, 1997; MacLeod, Tata, Kentish, & Jacobsen, 1997), 抑うつにおいては、まさにこのポジティブ感情の低下が自伝的記憶の想起に影響を及ぼしている可能性があるのではないだろうか。

また一時的な抑うつ気分は自伝的記憶と関連しないことが示されたが、これは第6章で述べた研究2の結果と一致するものであると考えられる。同じ調査データを用いているものの、研究2の実験1ではBDIの平均±1SDから外れた者を対象にしており、再分析では自己記述性評価のみを対象としているため、分析対象は異なっている。にもかかわらず、同じ傾向が示されていることから、一時的な抑うつ気分が認知に及ぼす影響は弱いことが強くうかがわれると考えられる。

この点に関する考察として、研究2ではスキーマ理論を支持するものと考えられたが、本研究の結果では、抑うつとの直接的な関連は見出されなかったといえる。したがって、別の説明が必要であると考えられる。

研究2の自己記述性評価の再分析における考察では、“抑鬱・不安”気分のみが喚起されただけでは認知への影響はなく、敵意感情や非活動的快感情を伴うことでネガティブな認知が促進されるのではないかと考えられた。これと類似

^{注 7-1} ここでいう覚醒度とは、心理学における感情の次元説(快-不快、高覚醒-低覚醒などの次元で感情をとらえる)における、覚醒水準の高さを示している。たとえば Vrana の感情空間理論では、快-不快という誘発性(valence)の次元と覚醒-睡眠という覚醒(arousal)の次元からポジティブ感情、ネガティブ感情と生理的反応の関係を記述し、喜びなどの感情を高覚醒の“高ポジティブ感情”と位置づけている(濱, 2001)。

して、自伝的記憶の想起に関しても、単なる一時的な抑うつ気分の喚起だけではなく、ポジティブな気分の低下を伴って初めて、ネガティブなバイアスが生じるのではないだろうか。このように考えると、再分析における考察同様、研究 2 の気分誘導アプローチ（実験 2）の自伝的記憶課題で気分一致効果が認められなかったのは“抑鬱・不安”気分だけしか喚起されていなかったためであり、ポジティブ気分に関しては喚起も抑制もされていなかったためではないかと考えられ得る。以上のことから、一時的な気分が自伝的記憶の想起に及ぼす影響についても、抑うつ気分そのものよりはそれに伴い得るポジティブ気分の低下がネガティブ・バイアスを生じさせる可能性があることが示唆されよう。

(2) 自伝的記憶にみられる感情語の表出及び抑うつ、気分状態との関連性

本研究の結果から、自伝的記憶の想起に伴って表出される感情語については、語数としてはポジティブな感情価を持つ語が全体としては多いが、感情語の種類に関してはネガティブなものが多いことが示された。このことから、ネガティブ感情はことばとして表出されにくい、その表現は多様であることが示唆される。ただし、本研究が実施されたのは 2015 年現在から 20 年近く前であり、用いられる感情語や種類については時代によって異なる傾向がみられる可能性も十分にあるだろう。

また、自伝的記憶の想起に際して感情語を表出した者としなかった者とは気分状態に違いがみられ、感情語を表出した者は抑鬱・不安気分が高いことが示された。抑うつや不安といった気分状態では、言語による感情表現がなされやすいと考えられる。加えて、ポジティブ感情語が表出された感情語の過半数を占めていることを併せて考えると、抑うつや不安といった気分ではポジティブな感情語を言語的に表出することが多くなることが考えられよう。この理由としては、ネガティブな状態にあるときには、それを低減するためにポジティブなものに注意が向けられるという気分調整の観点から説明することができそうであるが、本研究では直接的には感情語の感情価と気分状態との関連について、また感情語の表出が気分に及ぼす影響については検討しておらず、今後、こういった気分でこういった感情が表出されやすいか、またこういった変数からそれが説明され得るか、より詳細に検討する必要があるといえよう。

(3) 心理臨床への適用に向けて

研究3は、面接場面における語りを自伝的記憶という観点から捉え、抑うつや感情との関連を検討することでクライアントのよりよい理解や介入を目指そうとするものであった。

結果からは、第一にネガティブな自伝的記憶の想起にはアクティブで対人的なポジティブ感情の低下が関係していることが示唆された。すなわち、面接場面におけるクライアントのネガティブな内容の語りからは、クライアントの心理状態はアクティブなものではなく、対人的な快感情に乏しい状態にあることをうかがい知ることができる可能性が考えられる。また逆にいえば、そのようなポジティブ感情の低下がネガティブな語りを引き出し、苦しい状態を持続させてしまうといった悪循環が生じていると考えることもできる。いかにポジティブ感情を高めるかといった介入の可能性も示唆されよう。第二に、本研究からは抑うつや不安といった気分では感情が表出されやすいことが示された。つまり、面接場面で感情を多く表現するクライアントは、抑うつや不安が高い心理状態にあると推察することができると考えられる。このような自伝的記憶の基礎的な研究からの知見が心理臨床へもたらすものは大きいと考えられ、今後さらなる基礎と臨床との間の研究の蓄積が望まれよう。

第Ⅱ部の要約

第Ⅱ部では自己関連的な認知における気分一致効果について、3つの研究を通し検討を行った。

研究1では、物語の符号化・検索に及ぼす気分の効果について、2つの実験から Bower et al. (1981) の追試的検討を行った。結果、符号化時の気分の影響も検索時の気分の影響もほぼ等しく認められることが示された。気分一致効果に関しては、ネガティブな気分においてのみ認められ、ポジティブな気分では生起しないという非対称的な効果が生じた。このような現象が生じたことについては、主人公が過去を回想するという物語を材料として用いたことが関連しており、物語の理解や符号化・検索に自己に関連づける処理が行われた影響によることが示唆された。ネガティブ気分では自己に注意が向けられやすいため、自己関連づけ処理が求められる場合に気分一致効果は生起するが、ポジティブ気分では自動的直接的に刺激材料の符号化・検索がなされ、気分一致効果が生起しなかったのではないかと考えられた。ポジティブ気分の気分一致的效果を見出してきた多くの先行研究では単語記憶が指標とされることが多く、意味を自動的に受容し保持する処理が重要となる課題においてはポジティブ気分の気分一致的影響が認められるのではないかと考えられる。以上から、多くの先行研究で指摘しているように、抑うつにおける気分一致効果の生起には、自己関連づけ処理が必要な条件である可能性が高いと考えられる。

研究2では、抑うつにおける自己関連的な認知の気分一致効果について、独立変数の性質による認知への影響の違いを明らかにすることを目的とし、個人差アプローチ（実験1）と気分誘導アプローチ（実験2）から検討を行った。結果から、個人差アプローチでは気分一致効果が認められるが、気分誘導アプローチでは認められないこと、自伝的記憶課題と性格表現用語の自己記述性評定課題とでは認められる現象が異なり、前者では非対称的な、後者では対称的な気分一致効果が生じることが示唆された。実験1と2の結果の違いから、抑うつにおける気分一致効果はスキーマ理論からより説明可能ではないかということ、課題による結果の違いから、直接的・意図的に自己に関連づけることを求める処理で気分一致効果が対称的に認められやすいことが考えられた。

さらに、研究2の実験1の自己記述性評定について、抑うつと一時的気分の影響の違いを明らかにすることを主な目的として再分析を行った結果、自己のこういった側面を処理するかで抑うつの影響は異なること、抑うつは認知に直接的に影響を及ぼすのではなく、抑うつ的な気分に加え、敵意や覚醒度の低い感情が伴うことで、ネガティブな認知が促進されるのではないかとということが示唆された。

研究3では、抑うつにおける自伝的記憶の想起の特徴を捉えることを主な目的とし、気分状態との関連及び想起内容についての分析を中心に行った。結果から、抑うつにおけるネガティブ・バイアスは、気分一致的に生じるというよりも、アクティブで対人的なポジティブな気分の低下がポジティブな記憶の想起を抑制した結果として生じている可能性があることが示唆された。加えて、こういった内的状態で感情の言語的表現が過去経験の想起に伴うのかについての示唆を得た。

以上の、研究2及び研究2の再分析、研究3からは、スキーマ理論が支持されるというよりは、単なる抑うつ気分だけでは自己関連的な認知のネガティブ・バイアスは生じにくく、敵意などのネガティブ感情の同時生起や覚醒度の低い感情が伴うこと、またポジティブ感情の低下が生じていることが、抑うつにおける気分一致効果を生起させるということが示唆される。研究2の実験1における抑うつ群と非抑うつ群の気分状態の比較においても、MMS短縮版の6つの下位尺度で統計的に有意な差が認められているが、抑うつ的な状態・症状を有する場合には、このような抑うつ気分以外のネガティブ気分の高まりやポジティブ気分の低下がみられ、結果としてネガティブな認知バイアスが生じるのではないかと考えられる。

以上、第Ⅱ部では主に独立変数に焦点を当てて、自己関連的な認知における気分一致効果を検討した。第Ⅲ部では、従属変数に焦点を当て、認知の無意識的側面と意識的側面に抑うつの影響がどのように及ぼされるのかを検討する。

第Ⅲ部

抑うつにおける認知バイアスの検討
—無意識と意識の違いに着目して—

第8章 抑うつにおける潜在記憶バイアスの実験的研究

—データ駆動型テストと概念駆動型テストを用いて—（研究4）

第1節 目 的

第I部で論じたように、これまでの抑うつにおける記憶バイアスに関する多くの研究では、再生や再認などを測度とする顕在記憶が検討されてきた。顕在記憶とは、学習時のエピソードの意識的な想起を求める課題を測度とする記憶である。これに対して、先行学習のエピソードの意識的な想起を必要としない記憶を潜在記憶という。このような潜在記憶と顕在記憶との区分や分離の現象が注目される中、抑うつにおける認知バイアス研究においても、こういった無意識的な処理と意識的な処理との違いに関心が持たれるようになった。加えて臨床的な見地からも、認知の無意識的側面における研究の重要性の指摘がなされ（e.g., Williams et al., 1997）、抑うつにおける潜在記憶バイアスに関する研究が1990年代はじめより行われるようになった。

抑うつにおける潜在記憶バイアスに関する初期の研究では、データ駆動型潜在記憶課題が用いられることが多く、バイアスは認められないという結果が多かった。このことについて、記憶テストにおいて要求される処理の相違、すなわちデータ駆動型か概念駆動型かの影響を受けるのではないかと、概念駆動型テストを用いた場合にはバイアスが認められる可能性があるのではないかとという Roediger & McDermott (1992) のコメント以降、概念駆動型テストを用いた研究も行われるようになった。しかしながら、概念駆動型テストを用いても、ネガティブ・バイアスが生じることもあれば（e.g., Watkins et al., 1996）、生じないこともあり（e.g., Watkins et al., 2000）、結果は一貫していない。概念駆動型潜在記憶テストを用いた研究はまだそれほど多くなされていないこともあり、知見を重ねていく必要があると考えられる。また Watkins et al. (1996) が述べているように、データ駆動型的処理と概念駆動型処理の相違が抑うつにおける潜在記憶パフォーマンスに影響するのかどうか、これら2つの処理を、同様の刺激、類似した手続きで検討する必要性が考えられる。

以上から本研究では、概念駆動型潜在記憶テストとして連想課題を用いる実

験 1 と、データ駆動型潜在記憶テストとして単語完成課題を用いる実験 2 の 2 つの実験を、同様の刺激と類似した手続きで実施し、抑うつにおける潜在記憶バイアスを検討する。

第2節 実験 1

(1) 目 的

潜在記憶の測度として概念駆動型処理を反映する連想課題を用い、抑うつにおいてネガティブ・バイアスが生じるかどうか、すなわち抑うつが高い者においてはネガティブ語の潜在記憶成績が高くなり、一方非抑うつが低い者においてはポジティブ語の潜在記憶成績が高くなるのかどうかを検討することを目的とする。

(2) 方 法

① 実験計画

第 1 要因を抑うつ（低，高；被験者間要因），第 2 要因をターゲットの学習の有無（学習，未学習；被験者内），第 3 要因をターゲットの感情価（ポジティブ，ネガティブ；被験者内要因）とする 3 要因計画とした。

② 実験参加者

大学生及び大学院生 26 名（男性 9 名，女性 17 名）が実験に参加した。実験の中で測定した抑うつ尺度（BDI；林・塚本, 1987）の得点にもとづき，抑うつ高群と抑うつ低群に割り当てられた。

③ 刺激語

ターゲットは平仮名表記 5 字からなる形容語とし，情動語と性格表現用語を用いた。情動語については，松山・浜・川村・三根（1978）の「情動語の分析」（付表）から，抽出された因子のうち“楽観・悲観因子”の因子負荷量.70 以上の語と，寺崎他（1992）の多面的感情状態尺度の肯定的感情及び否定的感情に関

する下位尺度に含まれる項目から、ポジティブ語とネガティブ語として各 8 語ずつ選択した。性格表現用語については、青木（1971）の学生評定中央値が 3.5 以下をポジティブ語、6.5 以上をネガティブ語として選択した。これらを、同数のポジティブ語とネガティブ語、及び情動語と性格表現用語から構成されるターゲット A（16 語）とターゲット B（16 語）に二分した（Figure 8.2.1）。

学習語はターゲットと非ターゲットから構成され、ターゲット A を含む学習リスト A（72 語）とターゲット B を含む学習リスト B（72 語）の 2 種類用意された。非ターゲット 56 語はリスト A・B とともに同じものを用い、平仮名表記 5 字の名詞 24 語、動詞 24 語、形容語 8 語から構成されるニュートラル語とした。名詞は藤田（1997）から、動詞は主に運動や動作を表すことばを“分類語彙表”（国立国語研究所, 1990）から、それぞれ選択した。形容語は情動語 4 語と性格表現用語 4 語からなり、中性的な語として、松山他（1978）の“緊張-弛緩因子”“驚き因子”の因子負荷量が.70 以上のもの及び寺崎他（1992）の中性的感情に関する下位尺度に含まれるものから 4 語、また青木（1971）の学生評定中央値 4.5 から 5.5 に含まれるものから 4 語を選んだ。以上のように構成された学習リスト A または B のいずれか一方を、学習段階において実験参加者に呈示した。

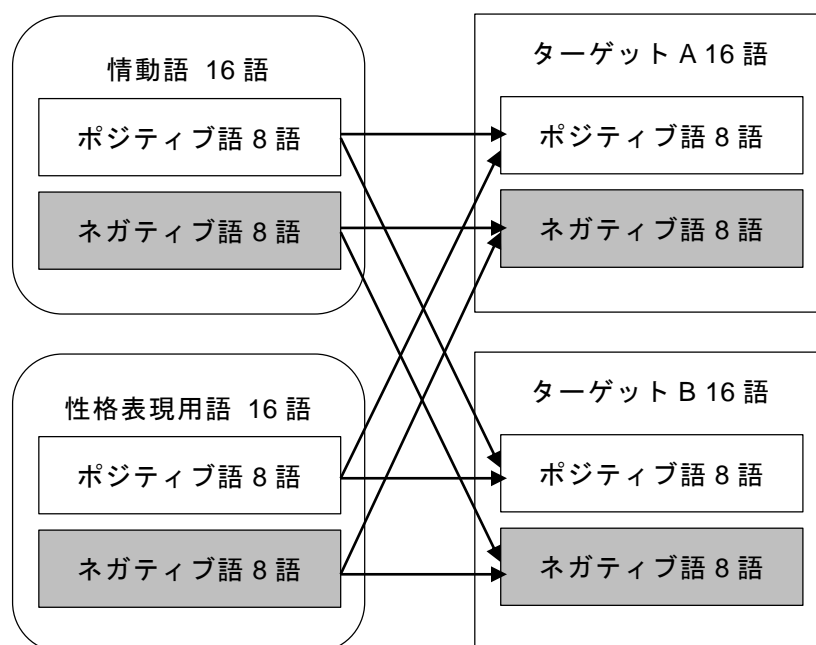


Figure 8.2.1. ターゲットのリスト構成。

注) 矢印は、ポジティブ語もしくはネガティブ語を 4 語ずつ二分し、リスト A と B にそれぞれ配置したことを示している。

連想語を産出してもらう手がかりとしてのテスト刺激は 20 語とし、全ての参加者に同一の刺激を用いた。連想課題ではテスト刺激 1 語につき 4 反応を求め、20 語のうち 4 語をターゲットに対応する刺激とし、ターゲットの分類名もしくは上位カテゴリーと考えられる“快感情”、“不快感情”、“望ましい性格”、“望ましくない性格”とした。それ以外の新項目 16 語については、分類語彙表（国立国語研究所, 1990）と国立国語研究所（1972）の形容語の分類名をもとにした 16 語を用いた（例えば“天候”、“服装”、“音”）。以上の刺激の構成について Figure 8.2.2 に示した。

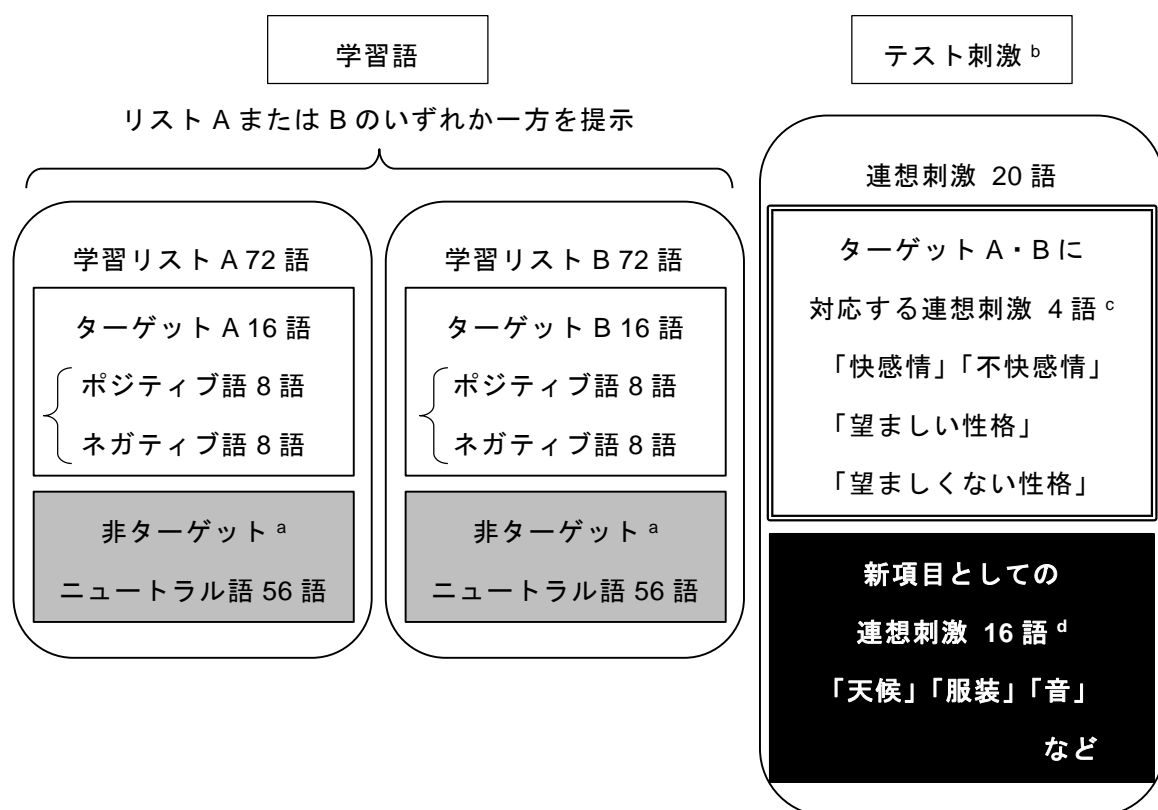


Figure 8.2.2. 学習語とテスト刺激の構成（実験 1）。

注）^a 灰色で示した非ターゲット 56 語は、学習リスト A, B とも同一のものを用いた。

^b テスト刺激はすべての実験参加者に同一のものを用いた。 ^c 二重線で示したターゲットに対応する連想刺激は、ターゲット A と B の両方に対応する刺激である。A と B に対応する連想刺激から、学習したターゲット（A または B）と学習していないターゲット（B または A）がそれぞれどの程度産出されるか比較することで、プライミング効果を測定することができる。なお、連想課題においては、連想刺激 1 語につき 4 反応を求めている。

^d 黒色で示した新項目としての連想刺激は、学習語（ターゲット及び非ターゲット）の産出を想定しない新たな刺激である。

④ 装 置

刺激の呈示はパーソナル・コンピュータ（NEC PC9801US）と 15 インチ CRT ディスプレイ（MITSUBISHI 製）を用いた。呈示と反応の入力のプログラミングは BASIC によって行われ、黒色の背景画面に白色文字で単語刺激が呈示された。画面の明るさ（輝度等）は標準的な設定とした。パーソナル・コンピュータ及びディスプレイは机の上に置かれ、ディスプレイの手前にキーボードが置かれた。実験参加者にはディスプレイの正面に向かい合う位置で、椅子に座ってもらった。参加者とディスプレイとの間の距離はおおよそ 50cm 程度を目安とし、目の高さがディスプレイと同じくらいかやや上になるようにした。

⑤ 実験場所・実験時刻等

実験はすべて A 大学内の同じ一室^{注 8-1}で行われた。曜日・時間帯等は原則として平日の日中^{注 8-2}とした。室内の明るさは標準的であった。

⑥ 手続き

実験は、学習段階、フィラー課題、テスト段階、抑うつ測定 of 4 セッションから構成され、全て個別に実施された。実験の流れを Figure 8.2.3 に示す。学習段階では、方向づけ課題として、学習リスト A または B の 72 語の使用頻度を尋ねた。学習段階の刺激呈示の流れを Figure 8.2.4 に示す。ディスプレイ上に注視点 (+) を 1 秒間呈示し、その 1 秒後に学習語 1 語が平仮名呈示され、その使用頻度について 3 段階でキーボード入力してもらった。学習語の呈示時間は、キーボード入力されるまでとした。入力後、参加者自身にスペース・キーを押してもらい、次の注視点及び刺激語呈示へと進んだ。はじめに練習課題として 3 試行実施し、次に本課題として 72 語をランダムに呈示した。

次にフィラー課題として日本版 WAIS-R の“符号”をもとに作成した課題を実施した。この課題では、90 秒の制限時間内にできる限り多くの決められた符号を書き込んでもらった。フィラー課題に要した時間は 2 分程度であった。

注 8-1 普段使用されていない、空いている教員研究室を使用した。実験中に人の出入りはなかった。

注 8-2 時間帯は実験参加者の予定にあわせ、午前である場合もあれば午後である場合もあった。

テスト段階では、テスト刺激から連想的に思い浮かぶ形容語を 4 語ずつ産出してもらう連想課題を行った。学習段階と同様、注視点を 1 秒間呈示した後、1 語ずつランダムにテスト刺激が呈示され、そこから連想される語を思い浮かんだ順に 4 語、口頭で答えてもらった。刺激の呈示時間は 4 反応が出されるまでとした。はじめに練習課題として 1 試行（1 刺激呈示 4 反応産出）を実施し、次に本課題を実施した。

抑うつ測定セッションでは、BDI への回答を紙面で求め、最後に実験の真の目的を伝え、終了した。

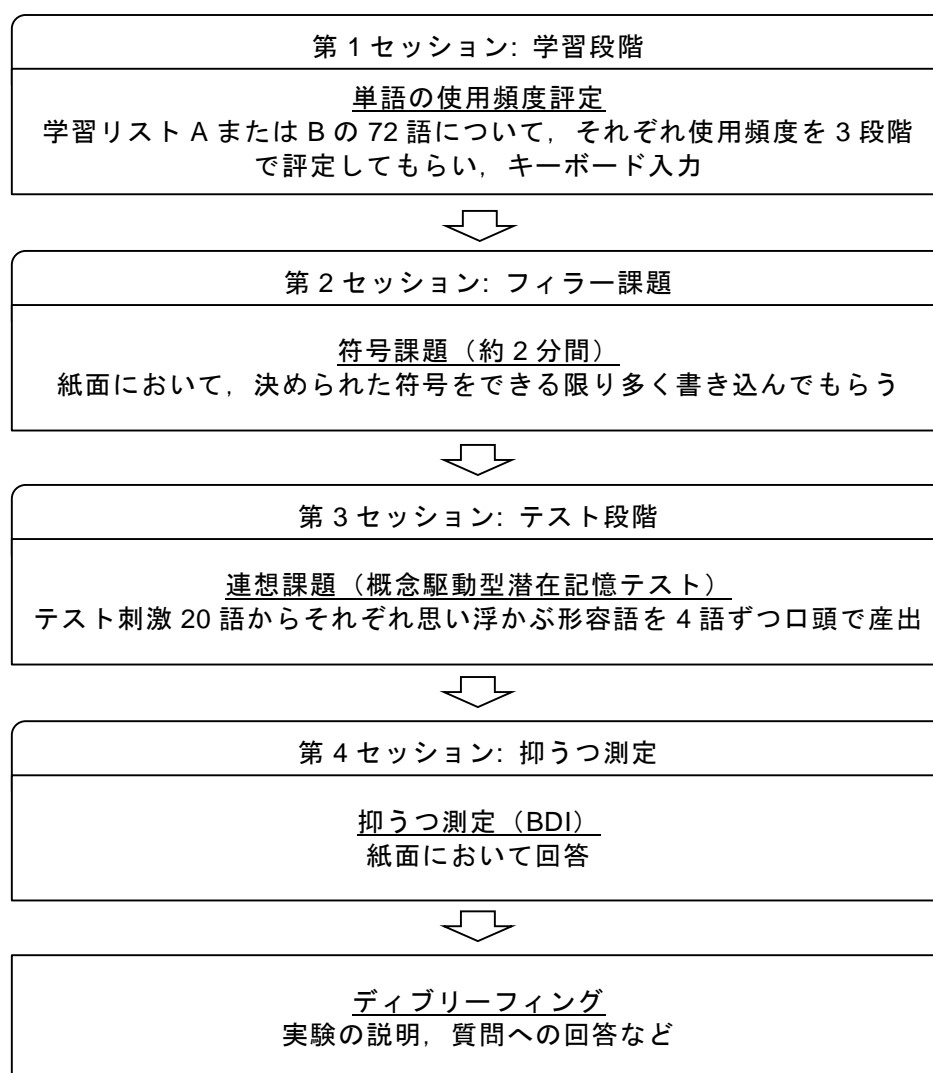


Figure 8.2.3. 実験の流れ（実験 1）。

⑦ 倫理的配慮

研究への参加に関しては、文書を用いて依頼を行い、参加者の自由意思によって行われた。参加者本人の署名がなされた文書の提出をもって、研究参加の同意が得られたものとした。ただし、その後の参加辞退・中断も可能であった。

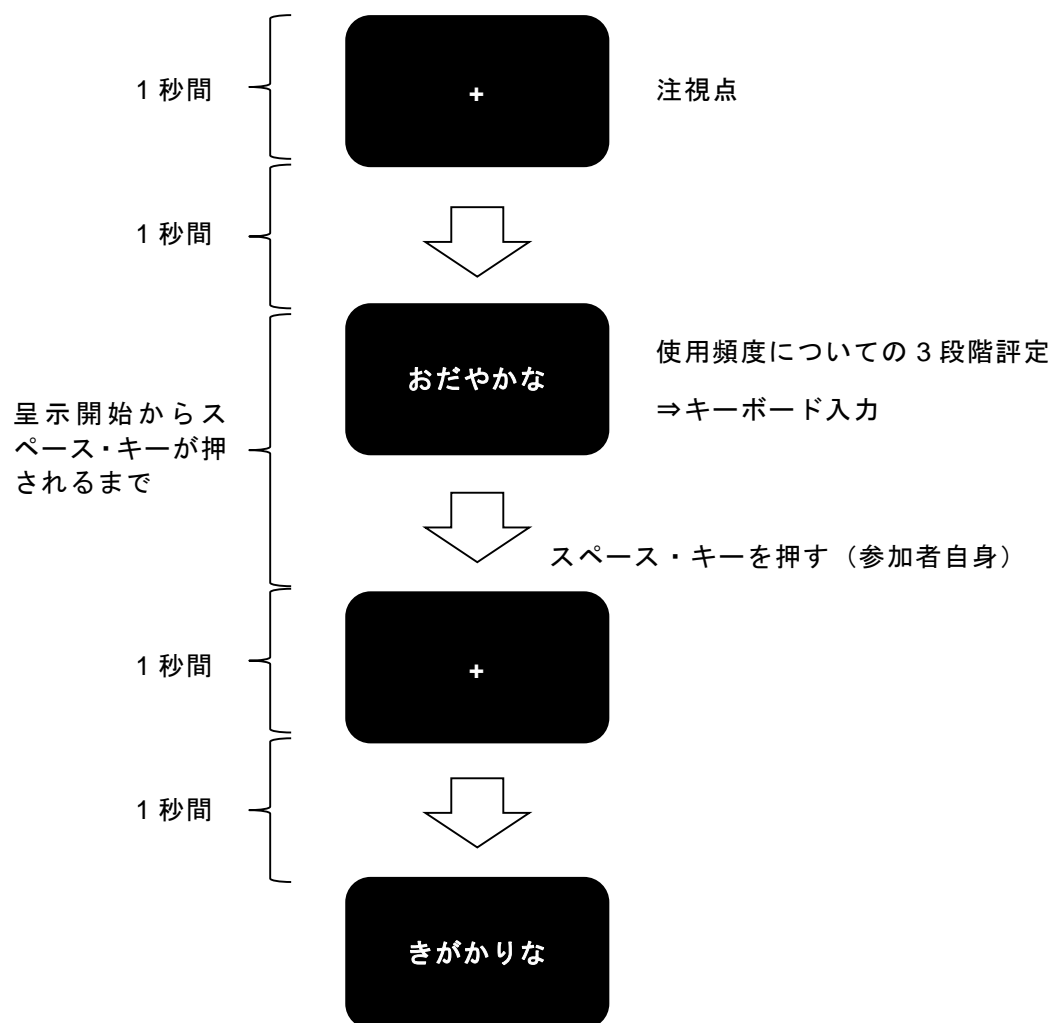


Figure 8.2.4. 学習段階における刺激呈示の流れ（実験 1）。

注）図のような注視点と刺激語の呈示，反応入力，スペース・キー押しの流れが 72 語連続して実施された。画面は黒色の背景，文字は白色で呈示された。刺激語の呈示順序は実験参加者ごとにランダムに行われた。

実験内容・手続きに関しては、先行研究で用いられ検討されてきているものを用い、過去において有害事象は報告されていないことから、精神的侵襲等の危険性は低いものと考えられる。より一層の安全性を確保し参加者が不利益を被らないようにするために、実験の依頼文書においては、実験テーマ・実験内容・所要時間・問い合わせ先等を明記した。

実験の最後に、実験の目的と、研究で得られた情報については研究目的以外に使用しないこと、個人が特定される形での研究成果の公表は行わないこと、結果に関心のある方には研究成果を報告することを口頭で伝えた。また参加者からの質問に応じた。

結果に関心があったとした参加者には、後日研究成果を文書にて報告した。

(3) 結果と考察

① 抑うつ高低群の設定

参加者全体の BDI 得点の平均値は 11.88 ± 7.59 、中央値は 12.00 点であり、性差は認められなかった ($t(24) = 0.21, ns$)。中央値未満の者 13 名（男性 5 名、女性 8 名）を抑うつ低群、中央値以上の者 13 名（男性 4 名、女性 9 名）を抑うつ高群とした。抑うつ低群の BDI 平均得点は 5.23 ± 3.35 、抑うつ高群の平均得点は 18.54 ± 3.60 であった。

② リストの影響とプライミング効果の検討

Table 8.2.1 は、リスト別の学習ターゲット（リスト A を学習した場合に産出されるターゲット A、もしくはリスト B を学習した場合に産出されるターゲット B）と未学習ターゲット（リスト A を学習した場合に産出されるターゲット B、もしくはリスト B を学習した場合に産出されるターゲット A）の平均産出数及び標準偏差を表している。プライミング効果が生じているか、すなわち学習ターゲットが未学習ターゲットよりも多く産出されているか、またそこにリストの種類による影響がないかどうかを確認するため、産出されたターゲット数について学習リストの種類（2; リスト A, リスト B）×ターゲットの学習の有無（2; 学習, 未学習）の 2 要因分散分析を行った。その結果、ターゲットの学習の有無の主効果のみ有意であり ($F(1,24) = 5.43, p < .05$)、学習ターゲットが

Table 8.2.1
リストの種類及び学習の有無別のターゲット平均産出数（実験 1）

リストの種類	<i>n</i>	学習ターゲット	未学習ターゲット
リスト A	13	1.38 (1.45)	0.38 (0.65)
リスト B	13	1.00 (0.82)	0.62 (0.77)

注) ()内は標準偏差

Table 8.2.2
各群の学習の有無及び感情価別のターゲット平均産出数（実験 1）

群	<i>n</i>	学習ターゲット		未学習ターゲット	
		ポジティブ	ネガティブ	ポジティブ	ネガティブ
抑うつ低	13	0.46 (0.52)	0.46 (0.66)	0.23 (0.44)	0.15 (0.38)
抑うつ高	13	1.15 (1.14)	0.31 (0.63)	0.38 (0.51)	0.23 (0.44)

注) ()内は標準偏差

未学習ターゲットよりも有意に多く産出されていることが示された。このことから、学習リストの種類に関わらずプライミング効果が示されたと考えられる。

③ 抑うつにおけるネガティブ・バイアスの検討

学習の有無及び感情価別のターゲットの各群の平均産出数を Table 8.2.2 に示した。産出されたターゲット数について、抑うつ（2; 低, 高）×学習の有無（2; 学習, 未学習）×ターゲットの感情価（ポジティブ, ネガティブ）の 3 要因分散分析を行ったところ、学習の有無の主効果、ターゲットの感情価の主効果が有意であり（ $F(1,24) = 5.25, p < .05$; $F(1,24) = 4.90, p < .05$ ）、抑うつとターゲットの感情価の交互作用、及び抑うつと学習の有無とターゲットの感情価との交互作用に有意傾向が認められた（ $F(1,24) = 3.60, p < .10$; $F(1,24) = 3.33, p < .10$ ）。

抑うつとターゲットの学習の有無とターゲットの感情価との交互作用について単純交互作用の検定を行ったところ、学習語における抑うつとターゲットの感情価の単純交互作用が有意であった（ $F(1,48) = 6.82, p < .05$ ）。学習語における各群の感情価別ターゲットの平均産出数を Figure 8.2.5 に示す。単純・単純主効果の検定の結果、学習語に関して、抑うつ高群で抑うつ低群よりもポジティブなターゲットの産出数が有意に多く（ $F(1,96) = 7.76, p < .01$ ）、また抑うつ高群においてポジティブなターゲットの産出数がネガティブなターゲットよりも有意

に多いことが示された ($F(1,48) = 13.63, p < .01$)。

なお、実験 1 のターゲット産出数が全体的に低かったことから、参考までにノンパラメトリック検定を行った。はじめに Wilcoxon の符号付き順位検定を用い、ターゲット産出における学習語と未学習語の比較を行ったところ、学習語が有意に多いことが示された ($p = .03$)。次に学習語に関して、抑うつ群別でポジティブなターゲットとネガティブなターゲットの産出数の比較を行ったところ、抑うつ低群では差が認められなかったが ($p = 1.00$)、抑うつ高群ではポジティブなターゲットが有意に多く産出されていた ($p = .04$)。

以上から、抑うつが低い者の概念的な潜在記憶にはバイアスは認められないが、抑うつが高い者の概念的潜在記憶にはポジティブなバイアスがみられたといえよう。すなわち、本研究では予想された抑うつにおける潜在記憶のネガティブ・バイアスは認められず、逆にポジティブ・バイアスが認められたと考えられる。

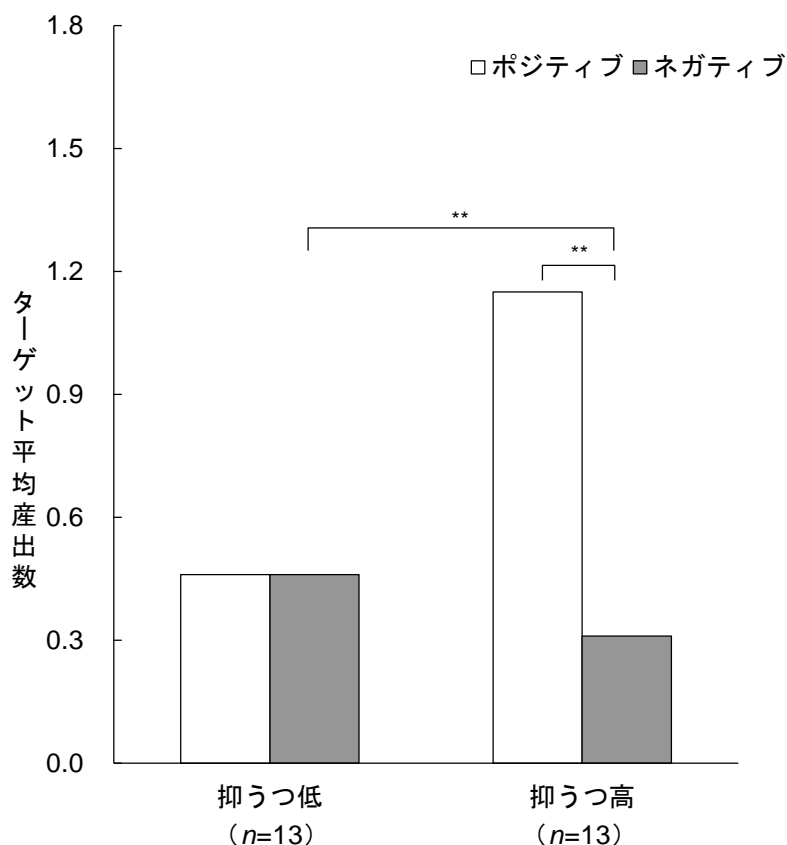


Figure 8.2.5. 各群の学習語における感情価別ターゲット平均産出数 (実験 1)。

注) ** $p < .01$ 。ポジティブ: ポジティブな感情価のターゲット, ネガティブ: ネガティブな感情価のターゲット。

Table 8.2.3
学習段階の方向づけ課題における
各群の学習リスト及び感情価別のターゲット平均評定値（実験 1）

群	<i>n</i>	ポジティブな感情価 のターゲット	ネガティブな感情価 のターゲット
抑うつ低	13	2.31 (0.38)	2.30 (0.38)
学習リスト A	6	2.38 (0.40)	2.42 (0.33)
学習リスト B	7	2.27 (0.38)	2.20 (0.41)
抑うつ高	13	2.34 (0.33)	2.44 (0.35)
学習リスト A	7	2.34 (0.32)	2.59 (0.25)
学習リスト B	6	2.33 (0.38)	2.27 (0.40)
学習リスト A	13	2.36 (0.35)	2.51 (0.29)
学習リスト B	13	2.30 (0.36)	2.23 (0.39)

注) 得点範囲は 1 から 3。得点が高いほど使用頻度が高いことを表している。
()内は標準偏差。

④ 方向づけ課題の分析

参考までに、方向づけ課題として学習段階で実施した単語の使用頻度評定について、ターゲット語に関する分析を行った。実験参加者ごとに感情価別のターゲットの平均評定値を算出し、まず学習リストの種類（2; リスト A, リスト B）×ターゲットの感情価（2; ポジティブ, ネガティブ）の 2 要因分散分析を行った。結果、リストの種類の主効果、ターゲットの感情価の主効果、リストと感情価の交互作用のいずれも有意ではなかった（ $F(1,24) = 2.03, ns$; $F(1,24) = 0.54, ns$; $F(1,24) = 2.52, ns$ ）。次に抑うつ（2; 低, 高）×ターゲットの感情価（2; ポジティブ, ネガティブ）の 2 要因分散分析を行ったところ、同様に抑うつの主効果、ターゲットの感情価の主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった（ $F(1,24) = 0.45, ns$; $F(1,24) = 0.36, ns$; $F(1,24) = 0.75, ns$ ）。各群のリスト別、感情価別のターゲットの使用頻度平均評定値を Table 8.2.3 に示した。以上の結果から、刺激として用いた単語の使用頻度に関して、リスト及び感情価による違いはなかったことが示唆され、抑うつ的高低による評定の違いも認められないと考えられる。

第3節 実験 2

(1) 目 的

潜在記憶の測度としてデータ駆動型処理を反映する単語完成課題を用い、実験 1 と同様の刺激を用いて抑うつにおいてネガティブ・バイアスが生じるかどうか、すなわち抑うつが高い者においてはネガティブ語の潜在記憶成績が高くなり、一方抑うつが低い者においてはポジティブ語の潜在記憶成績が高くなるのかどうかを検討することを目的とする。

(2) 方 法

① 実験計画

実験 1 と同様の、第 1 要因を抑うつ（低，高；被験者間要因），第 2 要因をターゲットの学習の有無（学習，未学習；被験者内），第 3 要因をターゲットの感情価（ポジティブ，ネガティブ；被験者内要因）とする 3 要因計画とした。

② 参加者

実験 1 とは別の、大学生及び大学院生 26 名（男性 9 名，女性 17 名）^{注 8-3} が実験に参加した。BDI 得点にもとづき、抑うつ高群と抑うつ低群に割り当てられた。

③ 刺激語

ターゲットは実験 1 と同じ平仮名表記 5 字からなる形容語 32 語とし、ターゲット A（16 語）とターゲット B（16 語）に二分された。学習語についても実験 1 と同様、ターゲット A を含む学習リスト A（72 語）とターゲット B を含む学習リスト B（72 語）の 2 種類が用意された。

単語完成課題のフラグメントとしてのテスト刺激は、ターゲットに対応する 32 個（学習ターゲット A または B の 16 個と未学習ターゲット B または A の 16 個）と新項目 48 個から構成される 80 個であった。フラグメントは単語のはじめの 2 字または 3 字のみを示し、残りは空欄にしたものであった（たとえば、

^{注 8-3} 実験 1 と男女比をそろえた。

“あた□□□”，“はなや□□”）。2 字のみ示す項目と 3 字のみ示す項目は同数とし，ターゲットに対応する 32 項目は全て 2 字のみ呈示した。新項目については，実験 1 の連想課題で提示した連想刺激（分類名，カテゴリー名）のターゲット及び非ターゲットに対応しない新項目 16 語の分類・カテゴリーに含まれる 5 字の形容語とし，主に分類語彙表をもとに各 3 語，計 48 語を選択し，フラグメントを作成した。実験 2 における学習語とテスト刺激の構成を Figure 8.3.1 に示す。

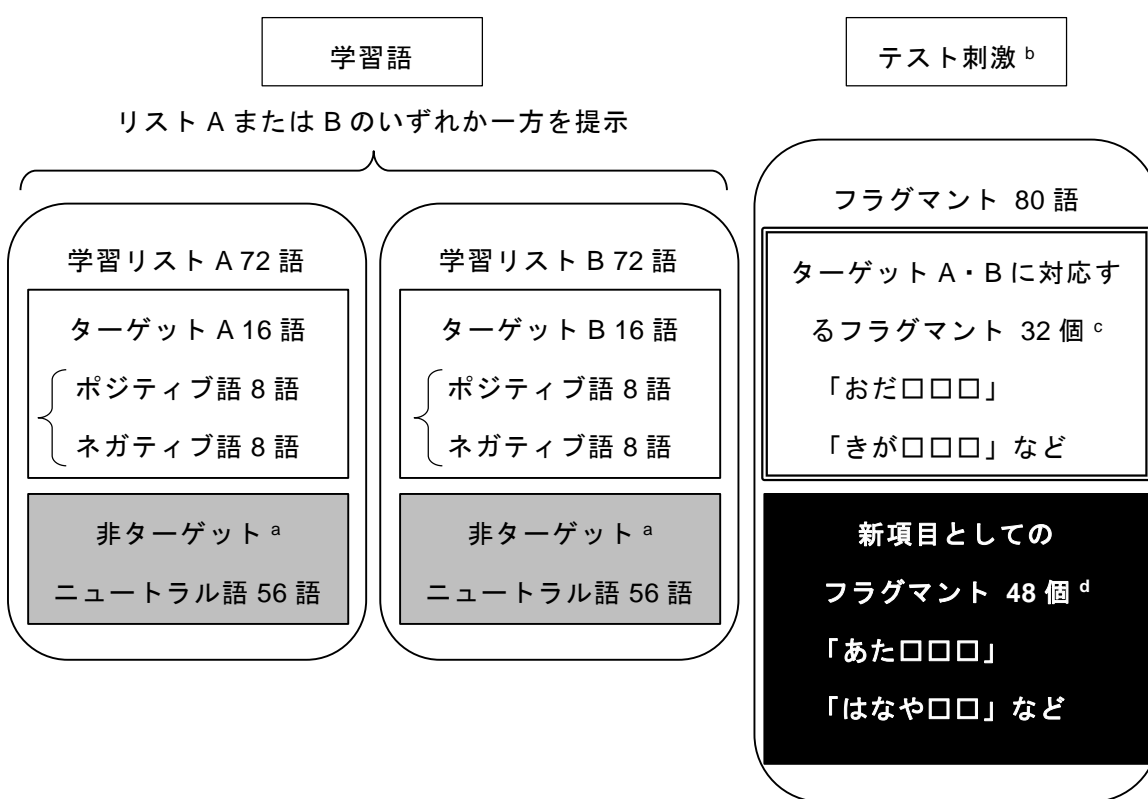


Figure 8.3.1. 学習語とテスト刺激の構成（実験 2）。

注)^a 実験 1 と同様，非ターゲット 56 語は，学習リスト A, B と同一のものを用いた。
^b テスト刺激はすべての実験参加者に同一のものを用いた。 ^c 二重線で示したターゲットに対応するフラグメントは，ターゲット A と B の両方に対応するものである。A と B に対応するフラグメントから，学習したターゲット（A または B）と学習していないターゲット（B または A）がそれぞれどの程度産出されるか比較することで，プライミング効果を測定することができる。なお，単語完成課題においては，フラグメント 1 個につき 1 反応を求めている。 ^d 黒色で示した新項目としてのフラグメントは，学習語（ターゲット及び非ターゲット）の産出を想定しない新たなものであり，実験 1 の新項目としての連想刺激に分類される形容語に関して作成されたフラグメントである。

④ 装 置

刺激の呈示は、実験 1 と同様のパーソナル・コンピュータとディスプレイを用い、刺激の呈示と反応の入力は BASIC によってプログラミングされた。画面の明るさ（輝度等）は標準的な設定とし、黒色の背景画面に白色文字で刺激が呈示された。パーソナル・コンピュータ及びディスプレイは机の上に置かれ、ディスプレイの手前にキーボードが置かれた。実験参加者にはディスプレイの正面に向かい合う位置で、椅子に座ってもらった。参加者とディスプレイとの間の距離はおおよそ 50cm 程度を目安とし、目の高さがディスプレイと同じくらいディスプレイよりやや上になるようにした。

⑤ 実験場所・実験時刻等

実験 1 と同様の A 大学内の同じ一室^{注 8-4}で行われた。曜日・時間帯等は原則として平日の日中^{注 8-5}とした。室内の明るさは標準的であった。

⑥ 手続き

実験は実験 1 と同様、個別実験であり、学習段階、フィラー課題、テスト段階、抑うつ測定 of 4 セッションから構成され、テスト段階の内容のみが実験 1 と異なっていた (Figure 8.3.2)。テスト段階では、データ駆動型潜在記憶テストとして単語完成課題を行った。注視点を 1 秒間呈示した後、1 語ずつランダムに呈示されたテスト刺激（フラグメント）から最初に思い浮かぶ形容語 1 語を口頭で答えてもらった。刺激の呈示時間は反応が出るまでとした。はじめに練習課題として 4 試行実施し、次に本課題を実施した。

⑦ 倫理的配慮

実験 1 と同様、文書を用いて研究参加の依頼を行い、参加者の自由意思によるものとした。参加者本人の署名がなされた文書の提出をもって、研究参加の同意が得られたものとした。ただし、その後の参加辞退・中断も可能であった。

^{注 8-4} 普段使用されていない、空いている教員研究室を使用した。実験中に人の出入りはなかった。

^{注 8-5} 時間帯は実験参加者の予定にあわせ、午前である場合もあれば午後である場合もあった。

実験内容・手続きに関しては、先行研究で用いられ検討されてきているものを用い、過去において有害事象は報告されていないことから、精神的侵襲等の危険性は低いものと考えられる。より一層の安全性を確保し参加者が不利益を被らないようにするために、実験の依頼文書においては、実験テーマ・実験内容・所要時間・問い合わせ先等を明記した。

実験の最後に、実験の目的と、研究で得られた情報については研究目的以外に使用しないこと、個人が特定される形での研究成果の公表は行わないこと、結果に関心のある方には研究成果を報告することを口頭で伝えた。また参加者からの質問に応じた。

結果に関心があるとした参加者には、後日研究成果を文書にて報告した。

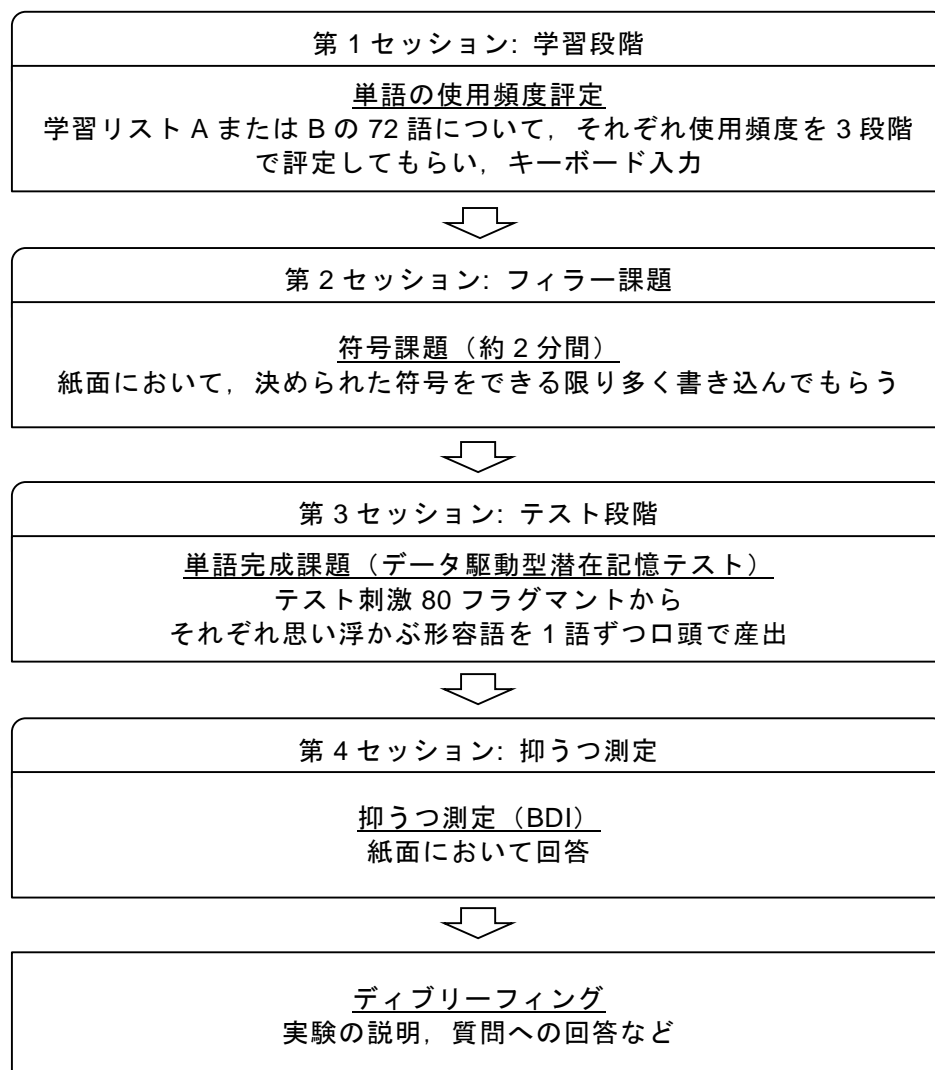


Figure 8.3.2. 実験の流れ (実験 2)。

Table 8.3.1

リストの種類及び学習の有無別のターゲット平均産出数（実験 2）

リストの種類	<i>n</i>	学習ターゲット	未学習ターゲット
リスト A	13	11.15 (1.82)	8.00 (1.29)
リスト B	13	10.15 (1.52)	7.62 (1.45)

注) ()内は標準偏差

Table 8.3.2

各群の学習の有無及び感情価別のターゲット平均産出数（実験 2）

群	<i>n</i>	学習ターゲット		未学習ターゲット	
		ポジティブ	ネガティブ	ポジティブ	ネガティブ
抑うつ低	13	5.23 (1.09)	5.54 (1.05)	4.00 (0.91)	4.00 (0.71)
抑うつ高	13	4.92 (0.95)	5.62 (1.04)	3.46 (1.05)	4.15 (1.07)

注) ()内は標準偏差

(3) 結果と考察

① 抑うつ高低群の設定

実験 2 の参加者全体の BDI 得点の平均値は 13.08 ± 9.08 、中央値は 10.50 点であり、性差は認められなかった ($t(24) = 0.78, ns$)。中央値未満の者 13 名（男性 4 名，女性 9 名）を抑うつ低群，中央値以上の者 13 名（男性 5 名，女性 8 名）を抑うつ高群とした。抑うつ低群の BDI 平均得点は 5.85 ± 2.34 ，抑うつ高群の平均得点は 20.31 ± 7.28 であった。

② リストの影響とプライミング効果の検討

実験 1 と同様に，リスト別の学習ターゲットと未学習ターゲットの平均産出数と標準偏差を求め（Table 8.3.1），学習リストの種類×学習の有無の 2 要因分散分析を行ったところ，ターゲットの学習の有無の主効果のみ有意であり ($F(1,24) = 129.87, p < .0001$)，学習ターゲットが未学習ターゲットよりも有意に多く産出されていることが示された。学習リストの種類に関わらずプライミング効果が示されたと考えられる。

③ 抑うつにおけるネガティブ・バイアスの検討

Table 8.3.2 に学習の有無及び感情価別のターゲットの各群の平均産出数を示

した。産出されたターゲット数について、抑うつ（2；低，高）×学習の有無（2；学習，未学習）×ターゲットの感情価（ポジティブ，ネガティブ）の3要因分散分析を行ったところ，学習の有無の主効果とターゲットの感情価のみが有意であった（ $F(1,24) = 122.60, p < .001$; $F(1,24) = 6.05, p < .05$ ）。学習語が未学習語より有意に多く，プライミング効果が認められた。またネガティブ語がポジティブ語より多く産出されていることが示された。実験1で認められた二次の交互作用は有意ではなかった（ $F(1,24) = 0.22, ns$ ）。実験1にあわせ，学習語における各群の感情価別ターゲットの平均産出数を Figure 8.3.3 に示す。

以上の結果から，抑うつはデータ駆動型テストを用いた場合に潜在記憶には影響を及ぼさないことが示唆される。すなわち，先行研究からの見解と一致して，データ駆動型処理においては抑うつにおける潜在記憶バイアスは認められないと考えられる。

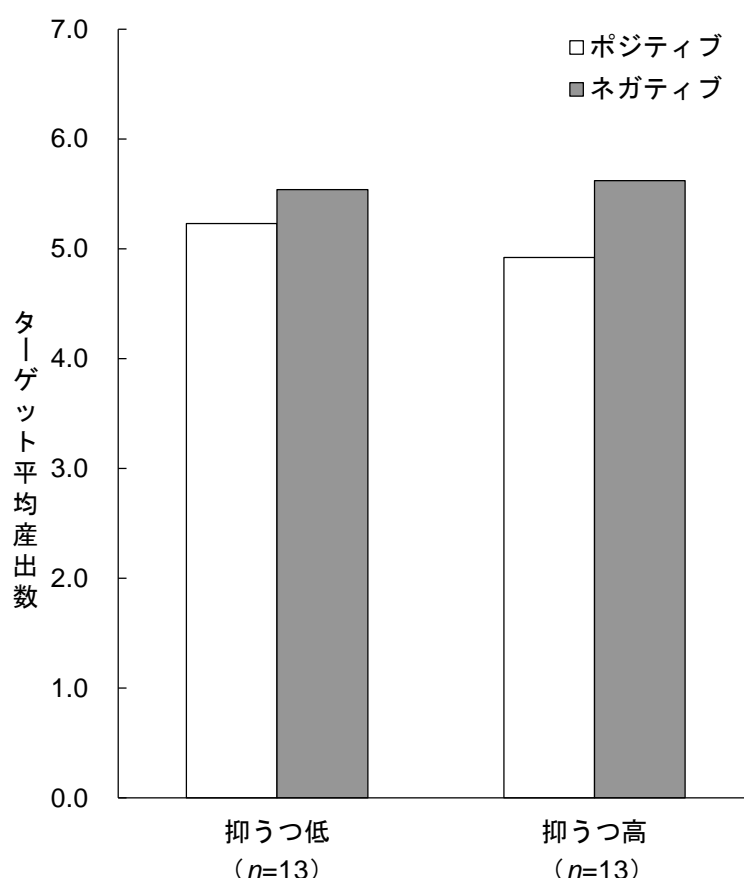


Figure 8.3.3. 各群の学習語における感情価別ターゲット平均産出数（実験2）。

注）ポジティブ：ポジティブな感情価のターゲット，ネガティブ：ネガティブな感情価のターゲット。

Table 8.3.3
学習段階の方向づけ課題における
各群の学習リスト及び感情価別のターゲット平均評定値（実験 2）

群	n	ポジティブな感情価	ネガティブな感情価
		のターゲット	のターゲット
抑うつ低	13	2.41 (0.33)	2.45 (0.31)
学習リスト A	5	2.60 (0.22)	2.75 (0.13)
学習リスト B	8	2.30 (0.34)	2.27 (0.23)
抑うつ高	13	2.41 (0.40)	2.66 (0.26)
学習リスト A	8	2.48 (0.24)	2.70 (0.24)
学習リスト B	5	2.30 (0.60)	2.60 (0.30)
学習リスト A	13	2.53 (0.23)	2.72 (0.20)
学習リスト B	13	2.30 (0.43)	2.39 (0.30)

注) 得点範囲は 1 から 3。得点が高いほど使用頻度が高いことを表している。
()内は標準偏差。

④ 方向づけ課題の分析

実験 1 と同様、参考までに、方向づけ課題として学習段階で実施した単語の使用頻度評定について、ターゲット語に関する分析を行った。実験参加者ごとに感情価別のターゲットの平均評定値を算出し、まず学習リストの種類（2; リスト A, リスト B）×ターゲットの感情価（2; ポジティブ, ネガティブ）の 2 要因分散分析を行った。結果、感情価の主効果が有意であり（ $F(1,24) = 8.70, p < .01$ ），ネガティブな感情価を持つターゲットの使用頻度がポジティブなターゲットより有意に高いことが示された。また、学習リストの種類の主効果も有意であり（ $F(1,24) = 6.60, p < .05$ ），学習リスト A の使用頻度がリスト B よりも有意に高いことが示された。次に、抑うつ（2; 低, 高）×ターゲットの感情価（2; ポジティブ, ネガティブ）の 2 要因分散分析を行ったところ、ターゲットの感情価の主効果及び抑うつとターゲットの感情価との交互作用が有意であった（ $F(1,24) = 10.29, p < .01$; $F(1,24) = 5.53, p < .05$ ）。交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、抑うつ高群において、ネガティブな感情価のターゲットの使用頻度を有意に高く評定していることが示された（ $F(1,24) = 15.45, p < .01$ ）。各群のリスト別、感情価別のターゲットの使用頻度平均評定値を Table 8.3.3 に示した。

以上の分析結果より、実験 1 とは異なり条件によって単語の使用頻度の違い

が認められたといえるが、抑うつとターゲットの感情価との交互作用が示されており、そもそもの熟知性の違いというよりは、抑うつが高い者においてネガティブな単語をより多く用いているという、気分一致的なバイアスが示されているとも考えられよう。もしくは、実験 2 の抑うつ高群は BDI の平均値及び標準偏差がやや高く、著しく高い抑うつ状態であるような者が一部含まれていた可能性があるかもしれない。本研究で用いた刺激については、事前に予備調査等で熟知性を検討し統制してはならず、こういった点を明らかにするためにも、今後はそのような統制も必要であるだろう。

第4節 全体的考察

本研究では、概念駆動型テストとデータ駆動型テストの 2 つを用い、抑うつにおける潜在記憶バイアスを検討した。概念駆動型潜在記憶テストとして連想課題を用いた実験 1 では、抑うつとターゲットの感情価の交互作用は認められたものの、予想に反して抑うつにおいてポジティブなバイアスが示された。一方、データ駆動型潜在記憶テストとして単語完成課題を用いた実験 2 からは、抑うつは潜在記憶には影響を及ぼさないことが示され、先行研究の見解を支持する結果となった。

以上の 2 つの実験から、潜在記憶テストで用いられる認知的処理が異なると抑うつにおけるパフォーマンスは異なり、概念駆動型処理ではバイアスが生じるものの、データ駆動型ではバイアスは生じないということが示唆される。すなわち、抑うつにおける潜在記憶バイアスが生じるのは形態的知覚的な処理ではなく、意味的な処理を必要とする場合に限られるのではないかと考えられる。このことから、抑うつが情報の意味的処理と深い関連を持つことが推察される。本研究の結果は Roediger & McDermott (1992) の見解を支持すると同時に、Williams et al. (1988, 1997) によって提唱された、抑うつは精緻化処理に影響を及ぼすというモデルを支持するものであると考えられる。

しかし本研究で認められた潜在記憶バイアスは、ネガティブ・バイアスではなく、逆のポジティブなバイアスであった。これはなぜなのだろうか。

抑うつにおける記憶バイアスについては、気分一致効果という現象として捉える研究も多い (e.g., Watkins et al., 2000)。第 I 部で論じたように、ネガティブな気分では気分一致効果は生じにくいという効果の非対称性や、気分一致効果の生起にはさまざまな条件が必要であることが見出されていることに加え、気分不一致効果を示している研究も存在している (e.g., Erber & Erber, 1994; Parrott & Sabini, 1990; Rink et al., 1992)。本研究の結果を気分一致効果研究の枠組みで考えると、抑うつ低群でネガティブな処理が促進されたわけではないことから対称的ではないものの、抑うつにおける気分不一致効果が生じたと捉えることができよう。

抑うつにおいて気分と一致した記憶再生が促進されない理由のひとつに、人は一般的にポジティブな気分は持続させようとするが、ネガティブな気分は軽減・緩和させようとする動機づけが働くということが考えられている (e.g., Clark & Isen, 1982)。気分不一致効果に関しても、この理論にもとづき、ネガティブな気分状態である者は気分を軽減・緩和させようとするために、反対のポジティブな情報を選択的に処理した結果気分不一致効果が生じると説明されることが多い。さらにこのような気分を調整する動機づけや能力には個人差があるとされている。

Smith & Petty (1995) は、ネガティブな気分を調整する動機づけや能力における個人差として自尊感情 (self-esteem) に着目し、その高低が気分と認知との関連に影響を及ぼすことを見出した。彼らは 3 つの実験から、気分一致効果は特に自尊感情の低い者に認められるが、一方自尊感情の高い者はネガティブな気分状態でもネガティブな情報を多く再生するわけではなく、ポジティブな情報をより多く再生する、すなわち気分不一致効果が生じることを示し、自尊感情の高低がネガティブな気分の調整に影響することを示唆している。この知見に照らし合わせると、本研究の実験 1 の抑うつ高群において示された現象は、自尊感情の高い者にみられる現象と捉えることができるのではないかと、言い換えればある種の特性が調整的に働いているのではないかと考えられる。

抑うつにおいてネガティブ・バイアスを見出している Watkins らの研究など先行研究の対象者と比較すると、本研究では一般学生を実験の対象としており、実験 1 抑うつ高群の BDI 平均得点は 18.54 ± 3.60 であった。一方、たとえば

Watkins et al. (1996) の抑うつ群の BDI 平均得点は 29.00 ± 9.27 となっており、本研究の抑うつ高群よりもかなり高い値となっている。標準的に用いられているカットオフポイントから捉えると、Watkins et al. (1996) の対象は重度 (severe) の抑うつ者、本研究の対象は軽度 (mild) もしくは中等度 (moderate) の抑うつ者ということになる。抑うつと自尊感情は基本的には負の関係にあると一般的にいられているが、本研究における対象のように、軽度もしくは中等度の抑うつでは、自尊感情がそれほど損なわれていないために、気分不一致的な、ポジティブ・バイアスが生じたのではないかと考えられ得る。一方、Watkins らの重度の抑うつでは自尊感情も低くなっている可能性が高いだろう。

抑うつはその最も大きな特徴に抑うつ的なネガティブな気分の優勢とポジティブな気分の低下が挙げられる。したがって、軽度から中等度の抑うつであっても、気分状態はネガティブなものであると考えられる。しかしながら、本研究で対象とした健常レベルでは、ネガティブな感情が優勢であっても自尊感情は比較的高く保たれた状態であった可能性がある。そのため、ネガティブな状態を軽減・緩和しようという動機づけが働き、記憶においてポジティブ・バイアスが生じたのではないだろうか。

また別の観点として、無意識的处理と意識的处理の相互作用によって気分調整がなされるという Forgas (2000) や Beevers (2005) によって提唱されたモデルからの説明が考えられ得る。彼らのモデルでは、健康な気分調整においては気分不一致情報を意識的に求めるとされ、無意識的には気分一致的处理が行われると提唱されている。本研究の実験 1 は無意識的に気分不一致的处理がなされていることが示唆され、この見解とは逆の結果が得られたといえるが、上述のような気分調整の観点からメカニズムを明らかにしていくためにも、無意識と意識の相互作用という点から認知バイアスを検討することが必要ではないかと考えられる。今後は潜在記憶のみでなく顕在記憶もあわせた測定・検討が必要であるだろう。

以上、抑うつにおける潜在記憶バイアスについては、データ駆動型処理では認められないが概念駆動型処理では認められること、またそのバイアスは必ずしもネガティブなものであるとは限らず、ポジティブ・バイアスが認められることもあるということが示唆された。前者に関しては、抑うつが情報の意味的

処理に関連するという Watkins らや Wisco (2009) などの見解を支持するものであった。後者のポジティブ・バイアスについては、抑うつの重篤性による違いや無意識的処理と意識的処理との交互作用による気分調整などから説明される可能性が考えられた。ただし、本研究ではこれらの点に関して直接的な検討は行っておらず、確かなものではない。抑うつと潜在記憶との関連について概念駆動型テストを用いて検討している研究は数少ないが、抑うつにおける潜在記憶バイアスについて明らかにするためには、抑うつ重篤性による違いや自尊心感情などの特性的な変数の影響の可能性、無意識的・意識的処理の相互作用などを考慮し、さらなる研究を重ねていくことが必要であると考えられる。

第9章 抑うつにおける潜在記憶と顕在記憶

—抑うつの重篤性の違いに着目して— (研究 5)

第1節 目 的

1990 年半ばより概念駆動型潜在記憶テストを用いた抑うつにおける潜在記憶バイアス研究がみられるようになった。たとえば Watkins et al. (1996) は、概念駆動型処理を反映すると考えられる自由連想課題を用いて抑うつにおける潜在記憶バイアスを検討し、概念駆動型潜在記憶テストでは抑うつにおいてネガティブ・バイアスが生じることを示した。また、Watkins et al. (2000) ではデータ駆動型テスト課題 2 つと概念駆動型テスト課題 2 つの 4 つの潜在記憶テスト課題を用いて抑うつにおける記憶バイアスの検討を行っているが、概念駆動型課題の 1 つにおいてのみネガティブ・バイアスがみられるという結果であった。概念駆動型潜在記憶課題を用いた研究はそもそも数が少なく、このように結果も一貫していない。

本研究の研究 4 (第 8 章) においても、大学生を対象に、データ駆動型テスト (単語完成課題) と概念駆動型テスト (連想課題) の両方を用いて抑うつにおける潜在記憶バイアスの検討を行った。結果、データ駆動型テストではバイアスはみられなかったが、概念駆動型テストではバイアスが認められた。ただし、Watkins らの結果とは逆に、高抑うつ者においてポジティブ語の産出が多いという、ポジティブなバイアスであった。

この違いは何によるのだろうか。前章で考察したように、ひとつの可能性として対象者の抑うつの違いが挙げられる。Watkins et al. (1996) の対象はうつ病 (大うつ病もしくは気分変調性障害) の診断基準を満たす大学生であり、ベック抑うつ尺度 (BDI) の平均得点は 29.00 ± 9.27 であった。これに対し、本研究の研究 4 実験 1 では同じ大学生を対象としているが、診断基準を満たすかどうかは検討しておらず、また抑うつ高群の平均 BDI 得点は 18.54 ± 3.60 であった。すなわち BDI のカットオフポイントに照らし合わせると、Watkins らの対象は重度 (severe) 抑うつ者、研究 4 の対象は軽度 (mild) もしくは中等度 (moderate) 抑うつ者ということになる。また、本研究 4 の対象は通常の大学生活を送るこ

とができ、実験に参加可能な準臨床群といえる。この対象の違いや抑うつの重篤性の違いが、バイアスに影響している可能性がひとつに考えられる。

本研究では抑うつの重篤性の違いに着目し、抑うつの重篤性によって潜在記憶バイアスに及ぼされる影響が異なるかどうかを明らかにすることを目的とする。また従来、抑うつにおいてネガティブ・バイアスがほぼ一貫して認められている顕在記憶についてもあわせて検討する。

第2節 方 法

(1) 実験計画

第1要因を抑うつの程度（非抑うつ，軽度，中重度；被験者間），第2要因を学習の有無（学習，未学習；被験者内），第3要因を刺激の感情価（ポジティブ，ニュートラル，ネガティブ；被験者内）とする3要因計画とした。

(2) 参加者

学生126名（男性41名，女性83名，不明2名）が冊子を用いた集団実験に参加した。

(3) 刺 激

秋田（1973）の形容詞の連想反応出現傾向をもとに，連想価が偏らないよう配慮し，ポジティブ，ニュートラル，ネガティブの形容詞連想対各12対，計36対を作成した（たとえば“楽しい—おもしろい”“低い—高い”“つらい—苦しい”）。連想対の刺激語（たとえば“楽しい”）を潜在記憶テストの手がかり語に，反応語（たとえば“おもしろい”）をターゲットに設定した。ターゲット36語は各18語からなるターゲットAとBに二分した（Figure 9.2.1）。また分析対象とはしない初頭バッファと新近バッファとして連体詞4語ずつ，計8語を用いた。学習リストは初頭・新近バッファ8語とターゲットAもしくはBの18語の計26語から構成され（それぞれ学習リストA，学習リストBとする），潜在記憶テストではテスト刺激として連想手がかり語36語を呈示した（Figure 9.2.2）。

(4) 課題内容

学習としての方向づけ課題では，学習リスト A または B の各単語について，社会的に望ましいかどうかを 5 件法（1; 望ましくない～5; 望ましい）で評定してもらった。

学習-テストの間にフィラー課題を設けた。フィラー課題では，横に並んだ数字の隣同士を足し，和の一桁目の数字を間に記入してもらった。所要時間は 1～2 分程度であった。

潜在記憶テストでは，形容詞の連想課題を行った。36 語の連想手がかり語各語から最初に思い浮かんだ形容詞 1 語を記述するよう求めた。

顕在記憶テストでは，自由再生課題を行った。学習課題で呈示された単語（連想対の反応語にあたる語）を思い出して記述するよう求めた。

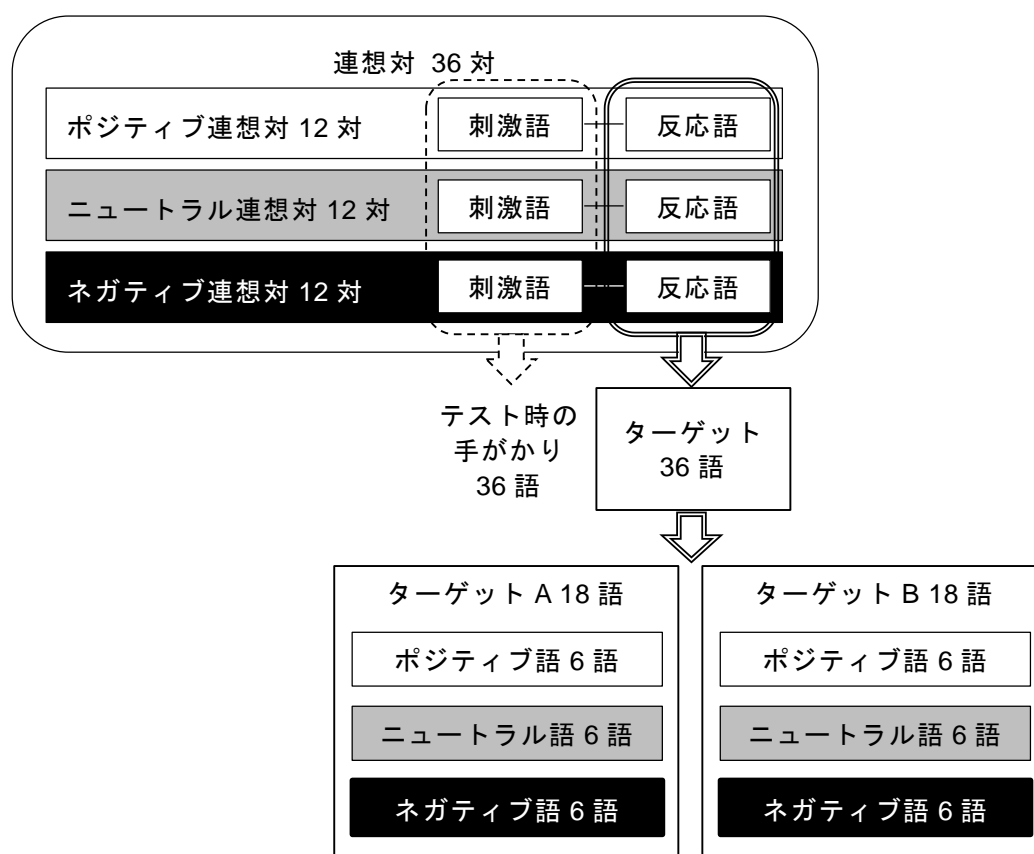


Figure 9.2.1. 刺激の構成。

注) 破線矢印は，連想対の刺激語がテスト時の手がかりとして呈示されたことを示している。二重線矢印は，連想対の反応語をターゲットとしたことを示し，それらがターゲット A とターゲット B に二分されていることを示している。

(5) 手続き

冊子を用いた集団一斉方式で実験を行った。課題の流れを Figure 9.2.3 に示した。冊子は B4 用紙 6 ページから成り、①フェイス・シート、②学習課題、③フイラー課題、④潜在記憶テスト課題、⑤顕在記憶テスト課題、⑥BDI（林・塚本，1987）の順に構成された。施行時には 1 ページ目から順に進めること、先のページは見ないこと、前のページには戻らないことを教示した。学習リストが A の冊子と B の冊子の 2 種類を準備し、ランダムに配布した。

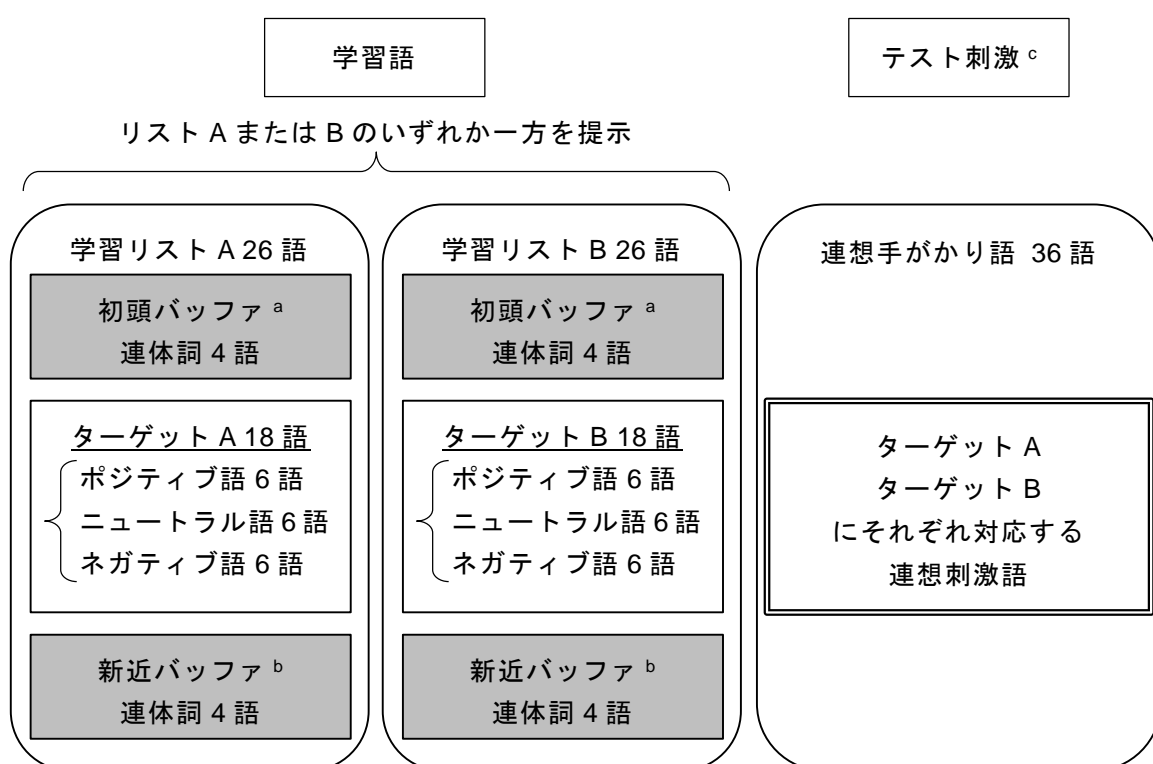


Figure 9.2.2. 学習語とテスト刺激の構成。

注) ^a 灰色で示した初頭バッファ 4 語は、学習リスト A, B とも同一のものを用いた。 ^b 灰色で示した新近バッファ 4 語は、学習リスト A, B とも同一のものを用いた。 ^c テスト刺激はすべての実験参加者に同一のものを用いた。 ^d 二重線で示したターゲットに対応する連想刺激は、ターゲット A と B に対応する刺激の両方が含まれる。A と B に対応する連想刺激から、学習したターゲット (A または B) と学習していないターゲット (B または A) がそれぞれの程度産出されるか比較することで、プライミング効果を測定することができる。なお、連想課題においては、連想刺激 1 語につき 1 反応を求めている。

(6) 倫理的配慮

研究への参加は自由意思にもとづくものであり，調査用紙への回答・提出をもって，同意が得られたものとした。

調査内容に関しては，主として先行研究で用いられてきた方法と既存の質問紙を用い，それらについては過去において有害事象は報告されていないことから，精神的侵襲等の危険性は低いものと考えられる。より一層の安全性を確保し参加者が不利益を被らないようにするために，調査用紙の表紙には調査の目的，概要，倫理的配慮等を明記した。

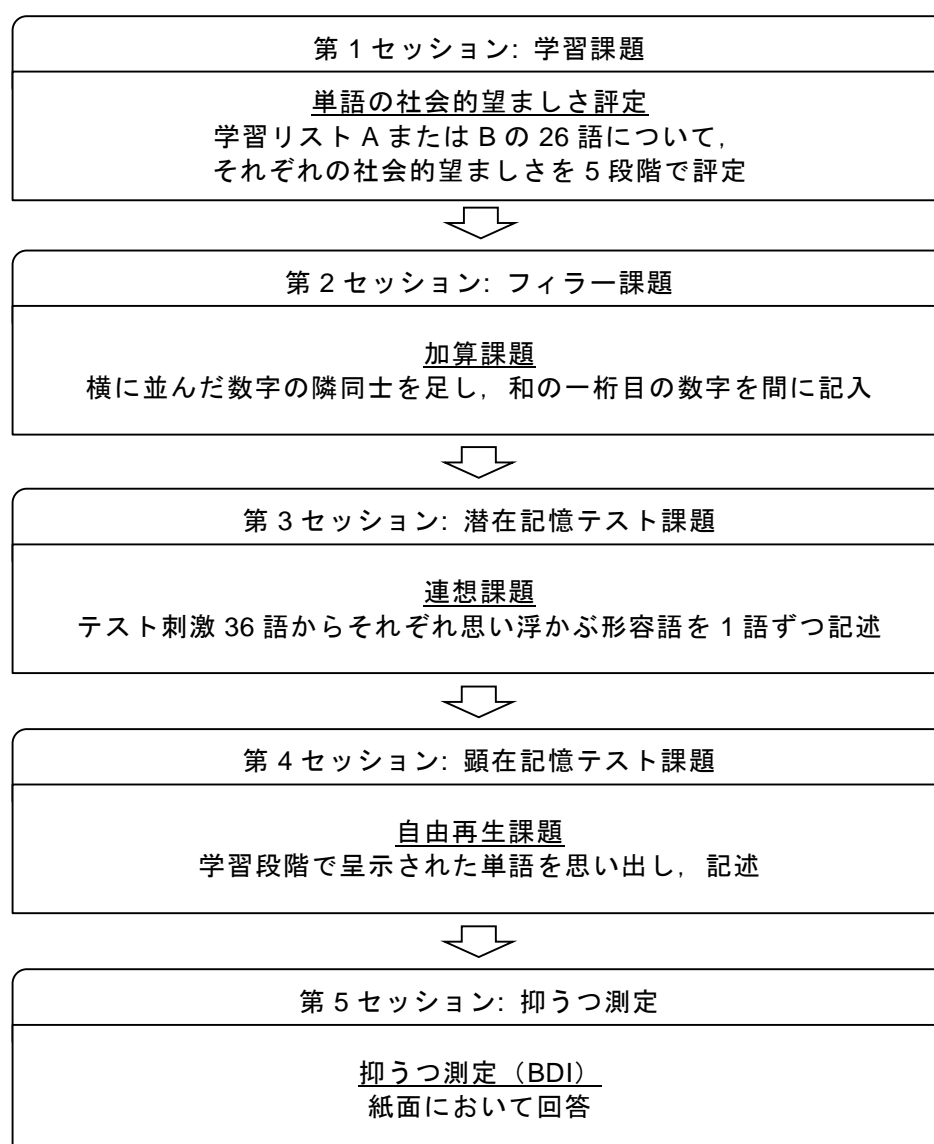


Figure 9.2.3. 実験の流れ（実験 1）。

注）実験冊子を用い，集団で実施した。学習リスト A または B を含む 2 種類の実験冊子を用意した。

また、個人が特定されることのないよう、回答を求める対象者の属性は年齢と性別のみとし、匿名性の確保に努めた。研究で得られた情報については本研究目的以外に使用しないこと、結果は統計的処理を用いて検討し、個人が特定される形での研究成果の公表は行わないことを明記した。

第3節 結 果

(1) 抑うつ群の設定

欠損値のある者 15 名を除いた 111 名（男性 36 名，女性 73 名，不明 2 名）を分析対象とした。平均年齢は 20.78 ± 0.80 歳であった。抑うつ群の設定は BDI 得点にもとづき行った。参加者全体の BDI 平均得点は 16.15 ± 7.61 であった。

カットオフポイントについてはベック抑うつ尺度について解説している Williams (1983 中村監訳 1993) にもとづき、0 から 13 点を非抑うつ、14 から 20 点を軽度 (mild) 抑うつ、21 から 26 点を中等度 (moderate) 抑うつ、27 点以上を重度 (severe) 抑うつとし、非抑うつ群 40 名，軽度抑うつ群 44 名，中等度 ($n=16$) と重度 ($n=11$) をまとめ、中重度抑うつ群 27 名とした。各群の BDI 平均得点は順に、 8.63 ± 3.10 ， 16.68 ± 2.11 ， 26.44 ± 5.09 であった。

(2) 潜在記憶

刺激の感情価及び学習の有無別に、正しく産出されたターゲット^{注 9-1}の数を算出した。平均値と標準偏差を Table 9.3.1 に示した。

ターゲットの正産出数について、抑うつ群 (3; 非抑うつ，軽度抑うつ，中重度抑うつ) × 学習の有無 (2; 学習，未学習) × 刺激の感情価 (3; ポジティブ，ニュートラル，ネガティブ) の 3 要因分散分析を行ったところ，学習の有無の主効果が有意であり ($F(1,108) = 10.35, p < .01$)，抑うつ × 学習の有無 × 感情価の 2 次の交互作用が有意傾向であった ($F(4,216) = 2.39, p < .10$)。学習の有無の主効果については，学習語が未学習語よりも有意に多く産出されていることが示

^{注 9-1} 設定した連想対として刺激語 (テスト刺激) と対応していなくとも，いずれかのテスト刺激に対して反応語として記述されている場合には正産出数としてカウントした。ただし，同じ単語を複数産出している場合は 1 とカウントした。

Table 9.3.1
各群の学習の有無及び感情価別のターゲット平均産出数（潜在記憶）

抑うつ 群	n	学習ターゲット			未学習ターゲット		
		ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ
非	40	1.48 (0.91)	1.60 (1.17)	1.48 (1.11)	1.20 (1.26)	1.00 (0.82)	1.15 (1.08)
軽度	44	1.11 (0.92)	1.64 (0.99)	1.84 (1.18)	1.36 (1.10)	1.16 (1.14)	1.07 (0.82)
中重度	27	1.48 (1.22)	1.26 (1.06)	1.59 (1.15)	1.19 (0.88)	1.15 (0.95)	1.56 (1.19)

注) ()内は標準偏差

され、プライミング効果が認められた。

2 次の交互作用について単純交互作用の検定を行ったところ、学習語における抑うつの程度とターゲットの感情価の交互作用が有意であった ($F(4,216) = 2.74, p < .05$)。学習語における各群の感情価別ターゲット平均産出数を Figure 9.3.1 に示す。さらにこの交互作用について単純・単純主効果の検定を行った結

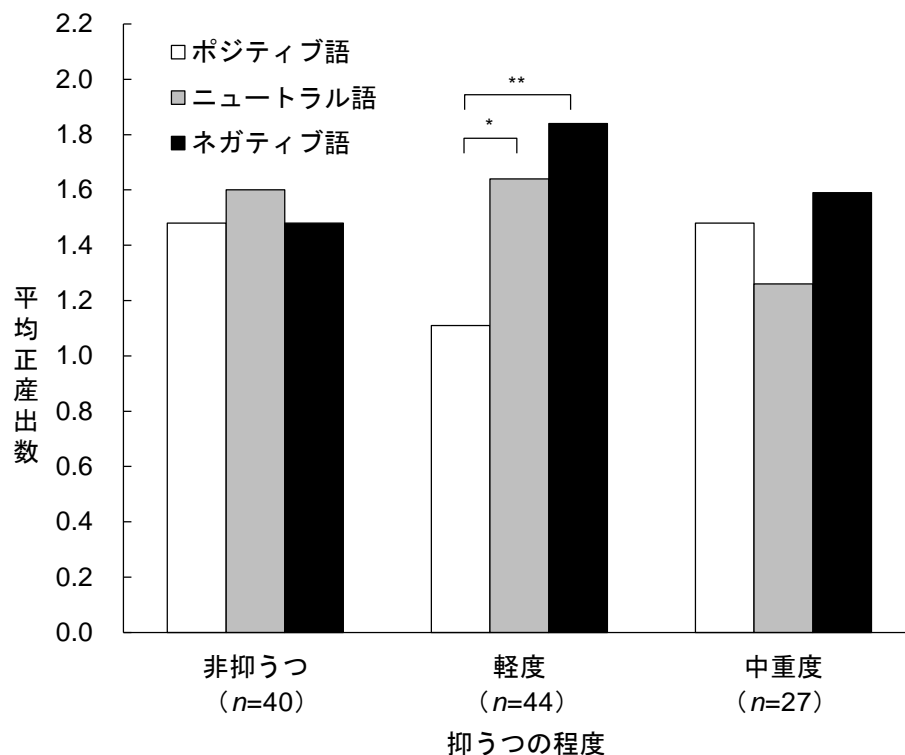


Figure 9.3.1. 各群の学習語における感情価別ターゲット平均正産出数（潜在記憶）。

注) * $p < .05$, ** $p < .01$ 。ポジティブ語: ポジティブな感情価のターゲット, ニュートラル語: ニュートラルな感情価のターゲット, ネガティブ語: ネガティブな感情価のターゲット。

果，軽度抑うつ群で感情価の単純・単純主効果が有意であり ($F(2,216) = 7.79$, $p < .01$)，ボンフェローニの方法を用いて多重比較を行ったところ，軽度抑うつ群においてポジティブ語の産出数がネガティブ語及びニュートラル語より有意に低いことが示された ($p < .01$; $p < .05$)。

(3) 顕在記憶

Figure 9.3.2 に各群の感情価別ターゲット平均再生数を示した。再生数について抑うつ群 (3; 非抑うつ，軽度抑うつ，中重度抑うつ) × 刺激の感情価 (3; ポジティブ，ニュートラル，ネガティブ) の 2 要因分散分析を行ったところ，抑うつの主効果，刺激の感情価の主効果，交互作用のいずれも有意とはならなかった ($F(2,108) = 0.86$, ns ; $F(2,216) = 0.73$, ns ; $F(4,216) = 1.07$, ns)。

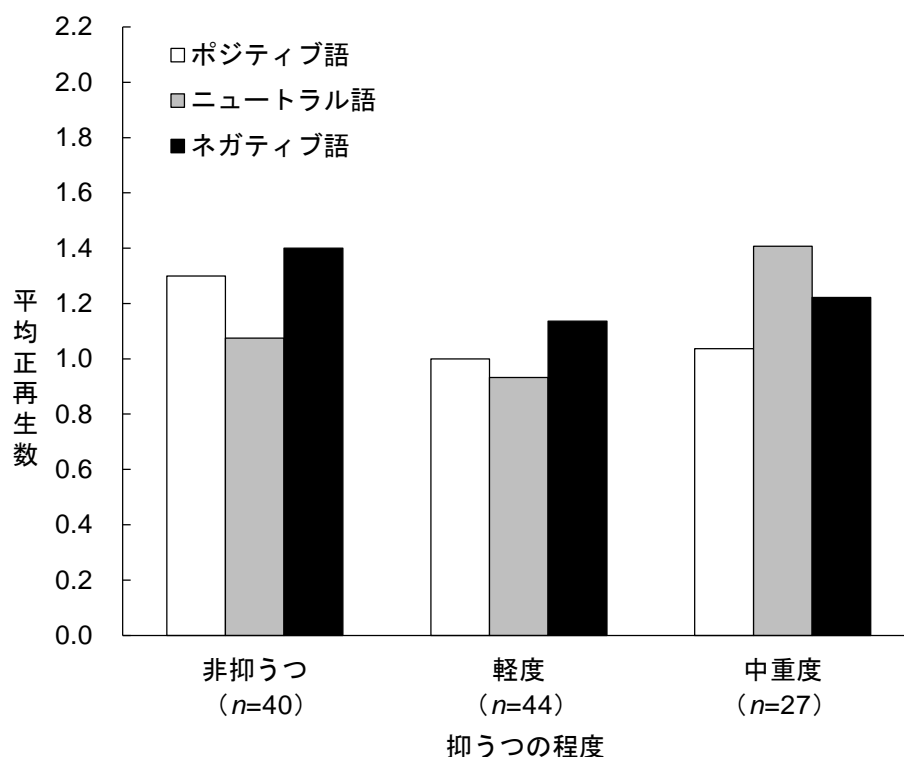


Figure 9.3.2. 各群の学習語における感情価別ターゲット平均正再生数 (顕在記憶)。

注) ポジティブ語: ポジティブな感情価のターゲット，ニュートラル語: ニュートラルな感情価のターゲット，ネガティブ語: ネガティブな感情価のターゲット。

Table 9.3.2

学習段階の方向づけ課題における
各群の学習リスト及び感情価別のターゲットの望ましさを平均評定値

群	n	ポジティブな感情価 のターゲット	ニュートラルな感情 価のターゲット	ネガティブな感情 価のターゲット
非抑うつ	40	4.37 (0.58)	3.22 (0.54)	2.19 (0.65)
学習リスト A	17	4.16 (0.63)	2.84 (0.43)	2.00 (0.55)
学習リスト B	23	4.53 (0.50)	3.49 (0.44)	2.33 (0.69)
軽度抑うつ	44	4.22 (0.54)	3.39 (0.59)	2.90 (0.92)
学習リスト A	23	4.03 (0.44)	3.20 (0.41)	2.67 (0.74)
学習リスト B	21	4.42 (0.57)	3.60 (0.69)	3.16 (1.04)
中重度抑うつ	27	4.17 (0.66)	3.09 (0.59)	2.50 (0.79)
学習リスト A	13	3.96 (0.60)	2.85 (0.55)	2.44 (0.89)
学習リスト B	14	4.37 (0.67)	3.31 (0.55)	2.56 (0.71)
学習リスト A	53	4.05 (0.54)	3.00 (0.48)	2.40 (0.77)
学習リスト B	58	4.45 (0.56)	3.49 (0.57)	2.69 (0.90)

注) 得点範囲は 1 から 5。得点が高いほど社会的望ましさが高いことを表している。()内は標準偏差。

(4) 方向づけ課題の分析

参考までに、方向づけ課題として学習段階で実施した単語の社会的望ましさを平均評定値について分析を行った。各群のリスト別、感情価別のターゲットの望ましさを平均評定値を Table 9.3.2 に示す。参加者ごとに感情価別のターゲットの平均評定値を算出し、まず学習リストの種類 (2; リスト A, リスト B) × ターゲットの感情価 (3; ポジティブ, ニュートラル, ネガティブ) の 2 要因分散分析を行った。結果、リストの種類の主効果及びターゲットの感情価の主効果が有意であり ($F(1,109) = 19.26, p < .001$; $F(1,109) = 313.60, p < .001$), リスト Bの方が全体的に望ましさが高く評定されていること, ポジティブ > ニュートラル > ネガティブとそれぞれ評定値に有意な差がみられること ($p < .05$) が示された。

次に抑うつ (3; 非抑うつ, 軽度抑うつ, 中重度抑うつ) × ターゲットの感情価 (3; ポジティブ, ニュートラル, ネガティブ) の 2 要因分散分析を行ったところ, 抑うつの主効果, ターゲットの感情価の主効果, 及び抑うつとターゲットの感情価の交互作用が有意であった ($F(2,108) = 3.27, p < .05$; $F(2,216) = 280.34, p < .001$; $F(4,216) = 7.25, p < .001$)。交互作用について単純主効果の検定を行ったところ, 非抑うつ, 軽度抑うつ, 中重度抑うつの抑うつ群全てにおいて感情価

の単純主効果が認められた ($F(2,216) = 167.41, p < .001$; $F(2,216) = 68.31, p < .001$; $F(2,216) = 68.45, p < .001$)。さらに感情価の単純主効果について多重比較を行ったところ、抑うつ群の全てにおいてポジティブ語 > ニュートラル語 > ネガティブ語という有意差がみられた ($p < .01$)。また、ニュートラルな感情価のターゲットにおいて抑うつ群の単純主効果が有意傾向にあり ($F(2,108) = 2.53, p < .10$)、ネガティブな感情価のターゲットにおいて抑うつ群の単純主効果が有意であった ($F(2,108) = 8.35, p < .001$)。多重比較を行ったところ、最も低い評定値だった非抑うつ群と最も高い評定値だった軽度抑うつ群の間でのみ有意な差がみられた ($p < .05$)。

第4節 考 察

本研究は抑うつの重篤性の違いに着目し、抑うつの重篤性の違いが潜在記憶バイアスに及ぼす影響を明らかにすることを目的に実験を行った。結果、潜在記憶テストでは軽度抑うつ群においてネガティブ語が有意に多く産出され、気分一致的なネガティブ・バイアスが生じたと考えられる。しかし中重度抑うつでは潜在記憶バイアスは認められなかった。また顕在記憶テストにおいて、抑うつの重篤性の違いによる影響は認められなかった。

潜在記憶に関して、軽度の抑うつにおいてはネガティブ・バイアスが生じたことから、Roediger & McDermott (1992) の指摘のように、概念駆動型テストを用いた場合には、抑うつにおいて潜在記憶バイアスが生じることが示唆される。Williams et al. (1988, 1997) が提唱しているように、また Wisco (2009) が論じているように、抑うつは概念的・意味的処理に影響を及ぼし、バイアスを生じさせるといえよう。しかしながら中重度の抑うつでは潜在記憶バイアスは認められなかった。これまで概念駆動型テストを用いて抑うつにおける潜在記憶バイアスを検討している研究は多くはないが、前述のように概念駆動型処理を反映すると考えられる潜在記憶テストを用いた場合であっても、ネガティブ・バイアスが認められないことも生じている (e.g., Watkins et al., 2000)。Watkins et al. (2000) において考察されているように、概念駆動型処理は抑うつにおいて

潜在記憶バイアスが生じる必要条件ではあるが十分条件ではないと考えられ、抑うつの重篤性の違いや、そこに抑うつ以外の何らかの要因が関与している可能性が示唆される。

なお研究 5 では軽度抑うつでネガティブなバイアスが生じたが、研究 4 では軽度抑うつで気分不一致的なポジティブなバイアスが生じるという結果となっている。軽度抑うつにおいてバイアスの方向性（ポジティブ・バイアスか、ネガティブ・バイアスか）が異なった点については、研究 4 と 5 における刺激の違いや課題の違い、実験手続きの違いによる可能性が推察される。この点については第 IV 部で論じたいが、ひとつの説明として Watkins (2002) は、記憶の課題によって顕在過程、すなわち意識的処理と潜在過程、すなわち無意識的処理の寄与が異なることがバイアスの生起に影響している可能性を論じている。一般的に潜在記憶テストは無意識的処理の寄与が、顕在記憶テストでは意識的処理の寄与が大きいとされているが、どちらの記憶テストにも、意識的処理及び無意識的処理が混入しているとされる（藤田, 1996; Jacoby, 1991）。研究 4 及び研究 5、そして先行研究で用いられてきた潜在記憶課題における無意識的処理と意識的処理との寄与がそれぞれ異なっているために、バイアスが生起したりしなかったり、ネガティブであったりポジティブであったりするということになり、結果が一貫しないのではないかとということがひとつに考えられる。このことから、同一課題での記憶パフォーマンスにおいて無意識的処理と意識的処理とを分離し検討する方法を用いることが、バイアスの生起を明らかにするためには有用ではないかと考えられる。

一方、顕在記憶に関しては、抑うつによる影響は認められなかった。Matt et al. (1992) の記憶再生に及ぼす抑うつの影響に関するメタ分析で示されているように、準臨床的な抑うつの記憶への影響は認められにくいことが、本研究においても示されたといえる。バイアスが認められなかった理由としては、第 I 部でも論じたように、これまでも気分一致効果研究において、ネガティブな状態時には効果が生起しにくいことが指摘されているが、抑うつにおいてもネガティブな状態を低減しようとする働き、すなわち抑うつ状態をそれ以上悪化させないようにするといった何らかの働きのために、記憶バイアスが生じなかった可能性がひとつには考えられよう。

抑うつ¹の認知的脆弱性に関する Beevers (2005) のモデルでは、無意識的処理におけるネガティブなバイアスは抑うつを生じさせるが、意識的に動機づけが働きポジティブな情報の処理が意識的になされれば、気分の調整がなされ、抑うつが軽減されると考えられている。したがって、たとえば準臨床群における軽度抑うつでは、ネガティブな無意識的処理がまず促進されるが、意識的には気分一致的な認知的処理が行われなくなり、ポジティブなバイアスが生起するまでには至らなくとも、結果として顕在記憶においてネガティブなバイアスが生起しないという可能性も考えられ得る。そしてそれが、臨床的な抑うつに悪化せず、軽度の抑うつ状態を維持もしくはそこからの回復につながっているということもあるかもしれない。Beevers (2005) のモデルに関してはまだ実証はほとんど行われていないものであると Beevers 自身述べているが、このような点からも無意識的処理と意識的処理との両側面から検討を重ねていくことが必要であると考えられる。

最後に、本研究では質問紙によってのみ抑うつを測定し、その得点のみにもとづいて重篤性を分類しているが、質問紙のみによって測定された抑うつは、ある種のパーソナリティ特性を反映したものであるのか、ある程度の期間持続している抑うつ²の症状であるのか、あるいは抑うつ気分を中心とした一時的状態を反映したものであるのか、明確に区別することが難しいと考えられる。何らかのパーソナリティ特性や感情特性など、抑うつ以外の要因の影響が交絡しており、その様相が重篤性によって異なることが、このような結果を生じさせた可能性もあるかもしれない。前述のように、ネガティブな状態を緩和・軽減しようとする感情特性の影響がひとつには考えられ得る。今後の研究では、こういった変数も加えた検討が必要であるだろう。

第10章 概念駆動型テストとしての意味定義課題の作成 (研究 6)

第1節 目 的

抑うつにおける認知バイアスの問題を明らかにするために、概念駆動型テストを用いた抑うつにおける潜在記憶研究の必要性が昨今論じられている。これまで数は多くはないものの、概念駆動型テストを用いた抑うつにおける潜在記憶研究が行われているが、結果は一貫しておらず、用いる刺激や課題の吟味を行うことが必要であると考えられる。

わが国ではこれまで、潜在記憶のテスト課題については、単語完成課題、類似語産出テストなどが作成されてきた (e.g., 藤田, 1997; 堀内, 2000)。しかしながら、概念駆動型テストに関しては、いまだ十分な検討がなされていないと考えられる。たとえば過程分離手続きを通して記憶の自動的利用と意図的利用を検討した田上 (2013) では、概念駆動型処理が反映されることが考えられる課題を作成し用いているが、全体的に産出数が低く、実験操作がうまくいかなかった参加者が半数程度みられ、刺激や課題の吟味の必要性が指摘されている。

そこで本研究では、前章で論じた Watkins et al. (2000) や Watkins (2002) の指摘を踏まえ、概念駆動型テストとして、意味定義を与えターゲットを検索するという意味定義課題の作成を目的とする。加えて、潜在記憶研究においては、未学習状態での意味定義からの産出率があまりに高すぎても低すぎても、プライミング効果は検討できないと考えられるため、未学習状態においてどの程度の産出率であるのかを調査する。

また、気分一致効果や抑うつにおける認知バイアス研究では刺激の感情価が重要な要因となり、刺激の符号化における自己関連的な深い精緻的な処理が認知への影響に関わっていることも指摘されている (e.g., Wisco, 2009)。したがって記憶材料としては性格特性語を用いることとし、さらに感情価についての検討が必要であると考えられることから、性格特性語の望ましき評定についても併せて調査する。

第2節 方 法

(1) 調査対象

大学生 34 名（男性 10 名，女性 24 名）を対象に調査を行った。対象者の平均年齢は 20.03 ± 0.72 であった。

(2) 材 料

特性語については、青木（1971）の性格表現用語の中から選択し、意味定義については筆者自身が作成した。以下の手順で材料の選定を行った。

第一段階として、性格表現用語の 455 語から、まず動詞、副詞、2 文節以上の語（たとえば「気苦労の多い」）、カタカナ表記の計 227 語を除いた。特性語をターゲットとした場合に、意味定義の呈示から動詞・副詞・2 文節以上の語は産出されにくいと考えられたこと、カタカナ表記の語については意味定義が和訳的な類義語となりやすく、産出率が過剰に高くなりやすいと考えられたためである。次に残った形容詞・形容動詞 228 語について、広辞苑第五版（新村，1998）をもとに意味定義の作成を行った。なおこのとき、形容動詞については語幹となる体言の意味にもとづき定義を作成した（たとえば「円満な」は「円満」の辞書的意味から定義を作成）。

第二段階として、作成した意味定義について検討を行った。はじめに、辞書的意味が単語そのものと重複する部分が大きいもの（たとえば「無責任」の意味として「責任のないこと」）、辞書的意味が類義語の呈示が中心であるもの（たとえば「用心深い」の意味として「注意深い。慎重である」）の 42 語を削除した。次に、類語辞典（山口，2003）を用いて類義語の検討を行い、類似している特性語や意味について、定義の表現の修正を行った。

第三段階として、望ましい特性語と望ましくない特性語の選定を目的としているため、青木（1971）において 9 件法で行われた学生評定中央値の 4.5 以上 5.5 以下の 31 語を削除した。

第四段階として、残った 155 語について、特性語間、意味定義間、特性語-意味定義間を照らし合わせ、さらに吟味を行った。意味定義の中に特性語の多くが含まれるものを削除し、他の特性語及び意味定義の中に重複がないもの 80 語

を確定項目とした。重複がみられた項目については、青木（1971）の使用頻度と学生評定中央値を参考にし、頻度が高いもの、中央値が中央から外れているものを優先して 26 語を選択した。最後に、全体的に青木（1971）の学生評定中央値にもとづいてみると、中央値より低い評定値の語（望ましい語）が 44 語、中央値より高い評定値の語（望ましくない語）が 62 語と、後者が多く残ったことから、学生評定中央値の 455 語全体の中央値が 5.7 であったことを考慮し、さらに 6.0 未満の 8 語を削除した。

以上の手続きから、望ましい特性語 44 語、望ましくない特性語 54 語の計 98 語とその意味定義 98 を選定・作成した。

(3) 質問紙構成

質問紙は 2 つの課題から構成された。課題の流れを Figure 10.2.1 に示す。

1 つ目の課題は単語検索課題であり、作成した意味定義を呈示し、定義から思い浮かぶ特性語を産出してもらうものであった。学習段階はなく、未学習状態での産出を求めた。制限時間は設けなかった。教示は以下の通りである。「下に、単語の意味が書かれています。これらはすべて性格を表現することばの意味です。これらから思い浮かぶ単語を 1 語ずつ、右欄 にご記入ください。なお、思い浮かばない場合は空欄で結構です」。項目数は作成した項目 98 の半分である 49 とした。

2 つ目の課題は特性語の社会的望ましさ評定であった。49 の特性語について、社会的にどの程度望ましいか 9 件法で評定してもらった。値が高いほど望まし

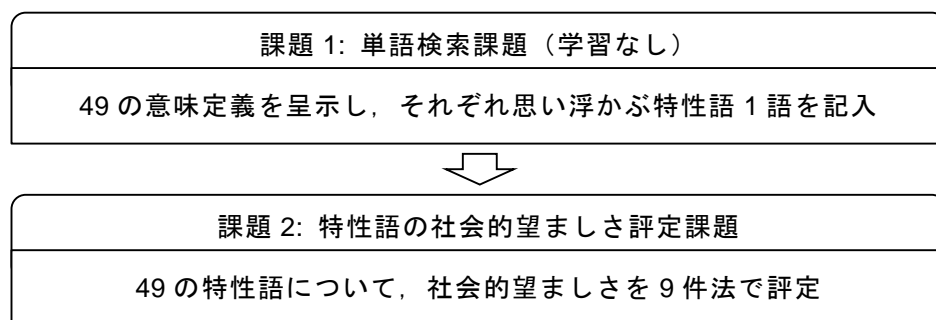


Figure 10.2.1. 課題の流れ。

注）課題 1 と 2 で用いた意味定義 49 と特性語 49 とは対応関係にないものであった。

くないことを示している。教示は青木（1971）にならい、次の通りとした。「(1)から(49)までひとつひとつのコトバによって表現されるひとが、あなたにとってどの程度好ましいかを評価して下さい。たとえば、あなたがほかの誰かに対して‘人なつっこい’というコトバを使う場合、やや好ましいというニュアンスをもって遣っているのなら、下の9段階の答えのうち、あてはまる4の番号を○で囲んで下さい。なお、9段階の好ましさの程度を表現するのに便宜的に‘まったく’とか‘かなり’といったコトバを使いましたが、1から9迄は同じ程度で変化しているものと考えて下さい」。

各課題のリスト構成については、まず特性語の望ましさを別にそれぞれリストを二分した。すなわち、望ましい特性語（以下ポジティブ語とする）44語を各22語のリストAとリストBに二分し、望ましくない特性語（以下ネガティブ語とする）54語を各27語のリスト(ア)とリスト(イ)に二分した（Figure 10.2.2 参照）。次に、リストA+リスト(ア)、リストB+リスト(イ)というように、ポジティブ語リストとネガティブ語リストを組合せたそれぞれ49項目から成るリストを作成し、一方のリストの意味定義を課題1に、もう一方のリストを課題2に配置した。このようなリストの組み合わせ及び課題への配置の組合せにより、4種類の質問紙を作成した（Table 10.2.1 参照）。

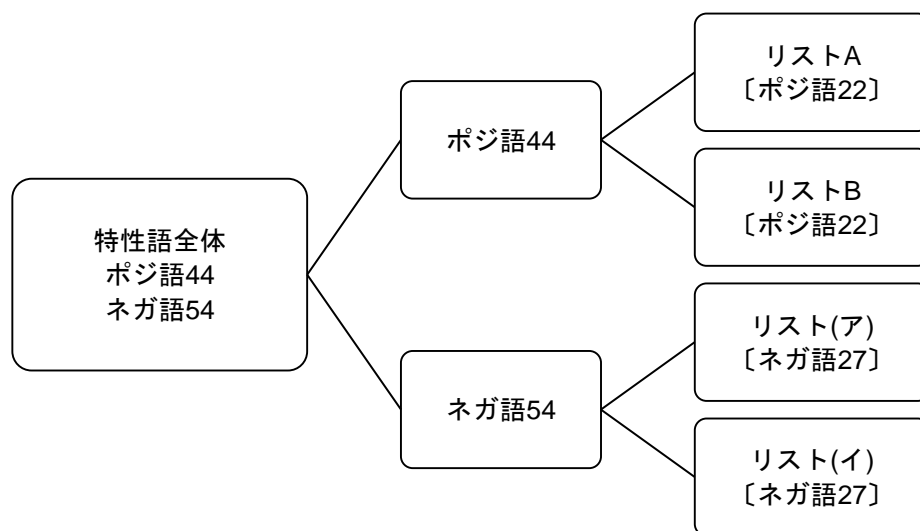


Figure 10.2.2. リスト構成。

注）図中の数字は単語数である。ポジ語：ポジティブ語，ネガ語：ネガティブ語。

Table 10.2.1
実験冊子の種類～リストの組み合わせ～

冊子の種類	課題 1	課題 2
冊子①	リスト A・リスト(ア)	リスト B・リスト(イ)
冊子②	リスト A・リスト(イ)	リスト B・リスト(ア)
冊子③	リスト B・リスト(ア)	リスト A・リスト(イ)
冊子④	リスト B・リスト(イ)	リスト A・リスト(ア)

注) リスト A, B はそれぞれポジティブ語 22 語, リスト(ア), (イ)はそれぞれネガティブ 27 語から構成された。

(4) 手続き

4 種類の質問紙を準備し、個別に配布・回収した。配布する際には、必ず課題 1, 課題 2 の順で取り組んでもらうよう伝えた。

(5) 倫理的配慮

研究への参加は自由意思にもとづき、調査用紙への回答・提出をもって、同意が得られたものとした。なお協力依頼に関しては、直接の利害関係のない者から行うこととし、協力に強制力が働かないよう留意した。

調査内容に関しては、単語の意味や評価を問うものであり、精神的侵襲等の危険性は低いものと考えられる。より一層の安全性を確保し参加者が不利益を被らないようにするため、調査用紙の表紙には調査の目的、倫理的配慮等を明記した。また、個人が特定されることのないよう、回答を求める対象者の属性は年齢と性別のみとし、匿名性の確保に努めた。研究で得られた情報については本研究目的以外に使用しないこと、結果は統計的处理を用いて分析し、個人が特定される形での研究成果の公表は行わないこと、協力の有無や回答内容は個人の評価や成績等には一切関係しないことを明記した。

第3節 結 果

(1) 特性語の望ましき評価値について

呈示した特性語の望ましき評価の平均値を算出し、Table 10.3.1 に示した。

Table 10.3.1
特性語の望ましさを平均評定値

特性語	n	評定 ^a		特性語	n	評定	
		平均値	SD			平均値	SD
優しい	16	1.88	0.89	雄弁	16	4.44	1.82
親切	18	2.28	1.13	しぶとい	18	4.56	1.15
寛大	16	2.31	1.14	ざっくばらん	15	4.73	1.67
誠実	16	2.38	1.15	平然	16	4.88	0.81
勇敢	16	2.38	0.96	のんき	16	4.94	1.12
素直	18	2.50	1.25	潔べき	18	5.06	1.80
正直	16	2.63	1.50	形式的	19	5.26	0.81
なごやか	18	2.67	1.28	淡々	16	5.31	1.66
献身的	16	2.81	1.28	ゆきあたりばったり	15	5.47	1.46
朗らか	18	2.89	2.00	あけっぴろげ	15	5.67	1.80
おだやか	18	2.94	1.39	気まぐれ	15	5.67	1.88
安定	18	3.00	1.08	無謀	19	5.68	1.42
快活	16	3.00	1.26	小胆	18	5.78	1.22
勤勉	18	3.00	1.14	気重	15	5.87	1.55
口堅い	18	3.00	1.53	大げさ	15	5.93	1.87
積極的	16	3.00	0.89	神経質	19	5.95	1.27
人なつこい	16	3.00	1.37	上の空	19	6.00	1.25
着実	18	3.11	1.41	あきっぱい	15	6.20	1.61
陽気	18	3.17	1.20	引込思案	19	6.21	1.03
純真	17	3.18	1.01	むら気	15	6.27	1.39
親身	18	3.39	2.00	移り気	19	6.32	0.95
まめ	16	3.44	1.26	臆病	15	6.33	1.76
綿密	16	3.56	1.31	せっかち	15	6.40	1.59
律儀	16	3.56	1.36	盲目的	15	6.40	1.59
慎重深い	18	3.61	1.75	気むずかしい	15	6.47	1.77
冷静	18	3.61	1.42	しつと深い	19	6.47	1.65
自発的	18	3.78	1.80	打算的	15	6.47	1.96
おっとり	16	3.94	1.29	めちゃくちゃ	15	6.47	1.77
じっくり	16	3.94	1.53	頭ごなし	19	6.58	1.46
慎重	18	3.94	1.39	八方美人	19	6.58	1.46
太っ腹	18	3.94	1.26	辛らつ	15	6.67	1.11
猛烈	18	4.06	1.63	意地っ張り	15	6.73	1.75
几帳面	16	4.13	1.26	憂うつ	19	6.74	0.87
気楽	16	4.25	1.57	うかつ	15	6.80	1.66
気軽	18	4.33	1.68	情け知らず	19	6.89	1.63
沈着	18	4.39	1.54	軟弱	15	6.93	1.53

(続く)

(Table 10.3.1 続き)

特性語	n	評定		特性語	n	評定	
		平均値	SD			平均値	SD
おせっかい	15	7.00	1.65	怒りっぽい	19	7.26	1.69
散漫	15	7.00	1.13	そらぞらしい	15	7.33	1.45
なげやり	15	7.00	1.46	でたらめ	19	7.47	1.84
悲観的	15	7.00	1.73	いい加減	19	7.53	1.31
冷酷	19	7.00	1.80	意地悪	19	7.53	1.71
むっつり	19	7.05	1.54	口軽い	15	7.53	1.64
意気地なし	15	7.07	1.28	口汚い	15	7.53	1.64
冷淡	19	7.11	1.37	わがまま	15	7.53	1.55
ふしだら	15	7.13	1.85	押しつけがましい	19	7.58	1.50
軽はずみ	19	7.16	1.21	やりっぱなし	19	7.58	1.30
軽薄	19	7.16	1.34	しつこい	19	7.63	1.34
中途半端	19	7.16	1.50	残忍	15	7.67	1.40
やかましい	19	7.21	1.47	乱暴	19	7.74	1.28

^a 得点範囲は 1-9。得点が高くなるほど望ましくないことを示す。

(2) 産出率について

意味定義から産出された特性語のうち、予め意図していた特性語で回答しているものを正答とみなし、産出率を求めた。意味定義、元の特性語、本研究における産出率を Table 10.3.2 に示した。産出率は手がかりによってかなり幅があることが示され、また 3 分の 1 以上で産出率 0 となった。ポジティブ語とネガティブ語の産出率の平均は、それぞれ 14%, 13% であった。

第4節 考 察

特性語の望ましき評定値については、全般的に、青木（1971）と大きな違いはないと考えられ、性格特性語の望ましきについては時代によってそれほど大きくは変化しないことがうかがわれる。

次に産出率について、3 分の 1 以上が 0 であったことについては、意味定義が適切ではなかった可能性があることと、今回の調査では使用頻度は尋ねていないが、日ごろあまり用いない単語である可能性が高いことが推察される。今

Table 10.3.2
意味定義と特性語及び未学習状態での産出率

特性語	意味定義	<i>n</i>	産出率
潔べき	不潔や不正を極度に気楽こと。また、そういう性質。	16	.75
積極的	物事をすすんでしようとするさま。	18	.72
几帳面	物事をすみずみまで気をつけ、きちんとするさま。	18	.61
しつこい	うるさくつきまとう。執念深い。	15	.60
大げさ	物事を実質以上に誇張していること。	19	.58
おせっかい	余計な世話をやくこと。他人の事に不必要に立ち入ること。	19	.58
中途半端	物事の完成まで達しないこと。また、どっちつかずで徹底しないさま。	15	.57
慎重	注意深くて、軽々しく行動しないさま。	16	.56
意地悪	人がいやがる仕打ちをわざとすること・人。	15	.47
しつと深い	自分の愛する者の愛情が他に向くのをうらみ憎む心が強い。	15	.47
冷静	感情に動かされることなく、落ち着いていて物事に動じないこと。	16	.47
臆病	ちょっとした物事にもおそれること。	19	.42
口軽い	簡単に秘密を漏らす。	19	.42
誠実	他人や仕事に対してまじめでまごころがこもっていること。	18	.39
勇敢	勇ましく、思い切ってすること。	18	.33
わがまま	相手や周囲の事情を顧みず、自分勝手にすること。	19	.32
献身的	自己を犠牲にしてでも他のために尽くすさま。	18	.28
人なつこい	すぐに人となれ親しみやすい。	18	.28
八方美人	誰に対しても如才なく振舞う人を軽んじていう語。	15	.27
あきっぱい	すぐにいやげがさしてしまう性質である。	19	.26
素直	飾り気なくありのままのこと。心の正しいこと。人にさからわないこと。	16	.25
正直	いつわりのないこと。かげひなたのないこと。	18	.22
雄弁	人に感銘を与える、巧みで力強い弁舌。	18	.22
寛大	心の広くゆるやかなこと。	18	.17
なげやり	結果はどうなっても構わないと、無責任な態度であること。	19	.16
軟弱	性質や意志がよわくて、物事に耐え得ないこと。	19	.16
ゆきあたりばったり	先のことを深く考えず、成り行きにまかせて物事を行うさま。	19	.16
上の空	他のことに心が奪われて、そのことに精神が集中しない状態。	15	.13
おだやか	心が落ち着いて安らかなさま。人柄が荒々しくなく、物腰が丁寧なさま。	16	.13
朗らか	心の晴ればれとしたさま。また、気持・性格が明るく楽しげなさま。	16	.13
憂うつ	気がはればれしないこと。気がふさぐこと。	15	.13

(続く)

(Table 10.3.2 続き)

特性語	意味定義	n	産出率
冷酷	思いやりがなく、むごいこと。	15	.13
ふしだら	しまりのないこと。特に男女関係にけじめがなく、品行のおさまらないこと。	19	.11
快活	はきはきとして元気のあること。明るくさっぱりして勢いのよいこと。	18	.08
頭ごなし	相手の言い分をよく聞かず、最初から一方的に物を言うこと。	15	.07
移り気	興味の対象が変わりやすいこと。	15	.07
怒りっぽい	ささいな事にもすぐ腹を立てる性格である。	15	.07
押しつけがましい	相手の気持にかまわず、無理にさせるような態度。	15	.07
神経質	こまごまと気に病むたち。また、そのさま。	15	.07
引込思案	進んで物事をしたり、人前に出たりする元気にとぼしい態度や性質。	15	.07
むっとり	口数が少なく無愛想な表情であるさま。	15	.07
やりっぱなし	物事をしたまま、または途中で後始末をせずに置くこと。	15	.07
乱暴	荒々しい振舞をすること。粗雑であるさま。	15	.07
冷淡	物事に熱心でないこと。あっさりしていること。同情心のないこと。	15	.07
安定	物事が落ち着いていて、激しい変化のないこと。	16	.06
おっとり	こせつかないで、ゆったりしているさま。	18	.06
勤勉	仕事や勉強に一心にはげむこと。	16	.06
親切	人情の厚いこと。思いやりがあり、配慮のゆきとどいていること。	16	.06
親身	肉親に対するようなまごころのこもった心づかいをするさま。	16	.06
沈着	落ち着いていること。物事に動じないこと。	16	.06
のんき	気分や性格がのんびりしていること。心配性でないこと。	18	.06
太っ腹	度量の大きいこと。肝の太いこと。	16	.06
意気地なし	物事をやり抜こうとする気力がない人。	19	.05
気まぐれ	その時々のおもいつきで行動するさま。	19	.05
せっかち	先を急いで心の落ち着きがないさま。	19	.05
打算的	物事をするのに、損得を考えて取りかかるさま。勘定高いさま。	19	.05
あけっぴろげ	心に包み隠しのないさま。	18	.00
いい加減	条理を尽さないこと。徹底しないこと。深く考えず無責任なこと。	15	.00
意地っ張り	無理にでも我を通そうとがんばること・人。	19	.00
うかつ	注意の足りないこと。うっかりしているさま。	19	.00
軽はずみ	深く考えずに、調子に乗って言ったりしたりすること。	15	.00
気重	気分が引き立たないこと。気分が沈んでいること。	19	.00
気軽	物事を深刻に考えず、もったいぶらないこと。こだわりのく事をするさま。	16	.00
気むずかしい	自分の考えや感情にこだわり、たやすく人に同調しない。	19	.00

(続く)

(Table 10.3.2 続き)

特性語	意味定義	n	産出率
気楽	苦労や心配がなく、のんびりしているさま。物事にこだわらないこと。	18	.00
形式的	表面的な形ばかりでないようが伴わないさま。	15	.00
軽薄	思慮のあさはかで篤実でないこと。	15	.00
口堅い	言うことが確かである。いたずらに他言しない。	16	.00
口汚い	言い方に品がない。	19	.00
ざっくばらん	心中をさらけ出して隠さないさま。遠慮がないさま。	18	.00
残忍	慈悲心の少しもないこと。無慈悲な行いを平気ですること。	19	.00
散漫	とりとめのないさま。しまりのないさま。	19	.00
じっくり	落ち着いて時間をかけて、念入りに行うさま。	18	.00
自発的	自分から進んでするさま。	16	.00
しぶとい	困難に負けず強い。	16	.00
純真	まじりけのないこと。けがれのないこと。邪念や私欲のないこと。	16	.00
小胆	気の小さいこと。度量の狭いこと。	15	.00
辛らつ	極めて手厳しいこと。	19	.00
そらぞらしい	知って知らないふりをする。見え透いている。	19	.00
淡々	あっさりしたさま。執着のないさま。	18	.00
着実	態度が落ち着いて軽率でないこと。また、物事が危なげなく行われること。	16	.00
慎重深い	差し出がましいところがなく、控え目である。	16	.00
でたらめ	筋の通らない言動。また、物事や言動が首尾一貫しないさま。	15	.00
なごやか	気分がやわらいでいるさま。	16	.00
情け知らず	人情を解しないこと。思いやりのないこと。	15	.00
平然	平気で落ち着いているさま。	18	.00
悲観的	物事がうまくいかず、悲しんで失望するさま。	19	.00
まめ	労苦をいとわずよく勤め働くこと。	18	.00
無謀	物事をするとき、そのやり方や結果について十分考えていないこと。	15	.00
むら気	気の変わりやすいこと。心の定まらないこと。	19	.00
めちゃくちゃ	秩序・道理などがひどく乱れていたり統一がとれていなかったりするさま。	19	.00
綿密	くわしくこまやかなこと。手抜かりのないこと。	18	.00
盲目的	感情に引きずられて、理性を失い、分別を欠くさま。	19	.00
猛烈	勢いや作用が激しいこと。	16	.00
やかましい	小言が多く、聞いてうるさく感じる。	15	.00
優しい	周囲や相手に気を遣って控え目である。	18	.00
陽気	心が晴れ晴れしいこと。うきうきすること。	16	.00
律儀	義理堅いこと。実直であること。	18	.00

後さらに使用頻度や熟知性を踏まえた検討が必要であるだろう。また産出率 0 の単語の望ましき評定をみると、ネガティブ語がポジティブ語よりやや多くなっている。このことから、抑制、抑圧といった機制が働きネガティブなものが検索されにくいという可能性も否定できないと考えられる。未学習状態で産出率 0 であっても、たとえば抑うつといった状態下では無意識的なプライミング効果はみられる可能性も考えられ、必ずしも床効果につながる不適切な項目とはいいきれないかもしれない。

一方、産出率が高かった単語については、たとえば単語フラグメント完成課題に関して、完成率が 60% を超えてしまうものはプライミング効果が生じた場合に天井効果を生じさせる恐れがあり不適切であるという指摘(藤田, 1997) もあることから、潜在記憶テストとしては用いない方がよいものと考えられる。産出率 60% 以上の「潔べき」「積極的」「几帳面」「しつこい」をもし用いるのであれば意味定義を再度検討する必要があるといえよう。

全体的にみると、産出率の平均はポジティブ語で 14%、ネガティブ語で 13% とあまり高くはない。Watkins et al. (2000) の研究では、単語の定義に加えて、元の単語の最初の一文字が呈示されているが、産出率を上げる方法としては、そういった修正を行うことも考えられ得る。なお、今回の産出課題では制限時間を設けなかったが、制限時間を設ける場合には、さらに産出率が低くなる可能性が高いことが予想される。藤田 (1997) では、未学習状態での完成率が平均で約 23% になるように刺激セットを作成した実験が紹介されており、また堀内 (2000) の研究においても、従来の潜在記憶テストでは正完成率が .20~.30 の場合がもっともプライミング効果が得やすいことが紹介されている。本研究で作成した刺激を潜在記憶テストに用いる場合にも、未学習状態で 20~30% となるように組み合わせた刺激セットとすることが必要ではないかと考えられる。

本研究では未学習状態での産出率を調査したが、今後は、意味定義をさらに検討することに加え、潜在記憶テストとして用いた場合のデータを蓄積し、さらに修正していくことが必要であると考えられる。また、たとえば生成効果や処理水準効果を検討することによって、潜在記憶課題間や概念駆動型課題間で求められる概念駆動型処理について比較し、課題の性質について明らかにすることも必要であるだろう。

刺激の感情価については、今回は望ましい-望ましくない、すなわち、ポジティブとネガティブの二分で検討したが、抑うつ-記憶研究においては、特性語の望ましさだけでなく、抑うつ関連語であるか否かも重要ではないかとも考えられる。今後そういった点からも調査することが必要であるだろう。

第11章 抑うつにおける処理バイアスと感情特性に関する 実験的研究—特性メタ感情の働きに着目して—（研究7）

第1節 目 的

抑うつにおける潜在記憶バイアスに関する研究は一貫した結果が得られておらず、近年においてもなお、その説明に関して論争が続いている（e.g., Phillips et al., 2010; Wisco, 2009）。抑うつにおいて潜在記憶バイアスが一貫して示されない理由として、ひとつには前述した課題の違い及び課題で求められる認知的処理の違いが考えられる。そしていまひとつには、第I部で論じたように気分一致・不一致効果の生起に関するひとつの説明である実験対象の違いや何らかの特性の影響・交絡の可能性が考えられるだろう。

前者の認知的処理の問題に関しては、研究5の考察においても論じているが、たとえば Watkins（2002）が指摘しているように、先行研究で用いられている課題への無意識的処理と意識的処理の寄与がそれぞれ異なっているために結果が一貫しない可能性が考えられる。したがって同一課題の記憶パフォーマンスにおいて無意識的処理と意識的処理とを分離し検討することが有用であると考えられる。この2種類の処理過程の寄与の程度を記憶パフォーマンスから別々に評価する手続きのひとつに過程分離手続き（process dissociation procedure; Jacoby, 1991, 1998）が挙げられる。抑うつにおける潜在記憶バイアス研究においても、過程分離の枠組みを用いることが役立つと Watkins（2002）も述べている。

過程分離手続きとは、記憶の自動的な（automatic）利用と意識的に統制された意図的な（controlled）利用の2つの過程^{注11-1}が協働してパフォーマンスを増加させる条件（包含条件）と、両者を対置させ、記憶の自動的な利用はパフォーマンスを増加させ、意図的利用は減少させる条件（除外条件）とを設け、その2つの条件のパフォーマンスから記憶の自動的利用と意図的利用を別々に評価するものであると藤田（2005）は解説している。以下では Jacoby（1991, 1998）、

^{注11-1} 過程分離手続きにおける記憶の自動的利用には自動的な処理過程が、意図的な利用には意識的で統制的な処理過程がそれぞれ反映されていると考える。この自動的処理過程と意識的処理過程は、本研究における無意識的処理と意識的処理にそれぞれ相当するものと位置づける。ただし、過程分離手続きの枠組みの中で記述する際には、Jacoby（1991）及び藤田（2005）の表現にもとづき、自動的利用と意図的利用と記述する。

藤田（2005）をもとに，語幹による手がかり再生課題を用いた場合の過程分離手続きの適用について，具体的に解説する。なお，過程分離手続きを用いた一般的な実験の流れを Figure 11.1.1 に示した。

まず，ターゲットとなる単語のリストを学習してもらい，その後，前述のように包含テスト条件と除外テスト条件という 2 つのテスト条件下で手がかり再生を行う。包含テストでは，語幹を手がかりに学習語を再生するように，またもし再生できない場合は最初に浮かんだ単語で語幹を完成させるように教示される。一方除外テストでは，語幹を手がかりに学習語を再生するよう教示されるが，それは答えず（除外し），別の単語で語幹を完成するよう求められる。あわせて学習語以外に単語が思い浮かばなかった場合はパスしてもよいことも告げられる。これらの 2 つのテスト条件における記憶パフォーマンスから，記憶の自動的利用の寄与（以下 A と表す）と意図的利用の寄与（以下 C と表す）は次のように算出される。

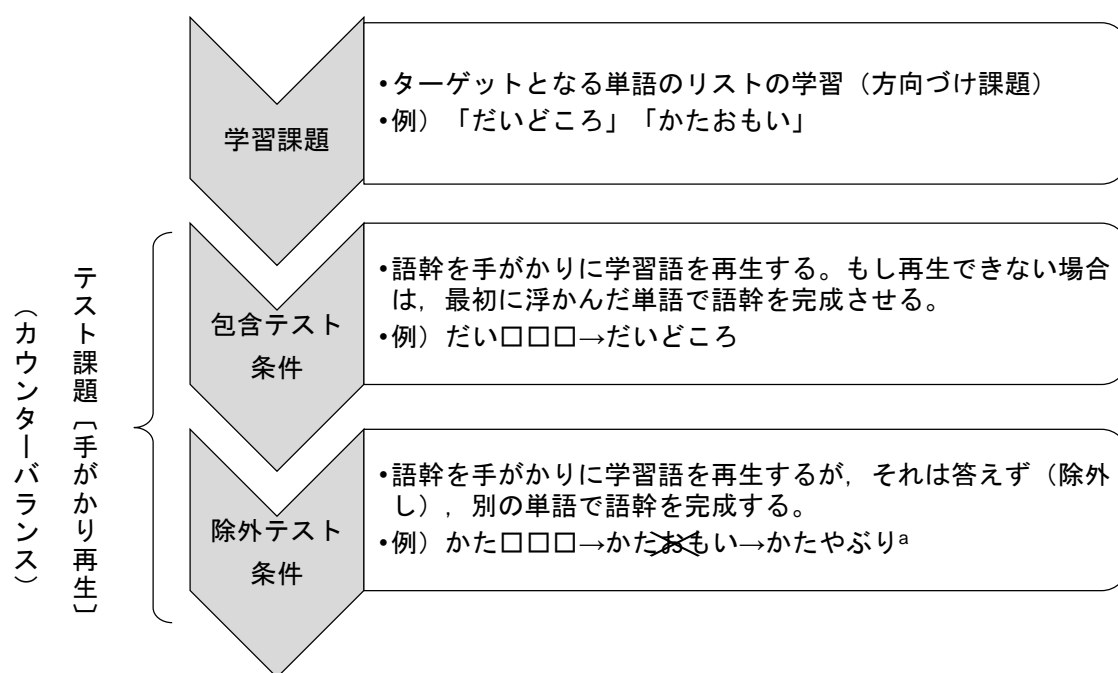


Figure 11.1.1. 過程分離手続きの一般的な実験の流れ（語幹手がかり再生を例とした場合）。

注）^a 除外テスト条件の例に関して，“かた□□□”が手がかりである場合，思い出されるべき学習語は“かたおもい”になるがそれは答えず（図の中では×で示している），別の単語，たとえば“かたやぶり”と回答する。

包含テストのパフォーマンス (inclusion performance; 以下 I と表す), すなわちフラグメントが学習語で完成される確率は, 語幹を手がかりにして学習語を意図的に想起できる確率 C と, 意図的に思い出せず, 自動的に頭に浮かんだ確率 $A(1-C)$ を合わせたものである。したがって, 以下のような式で表すことができる。

$$I = C + A(1 - C) \quad \text{〔Figure 11.1.2〕}$$

除外テストのパフォーマンス (exclusion performance; 以下 E と表す) に関しては, 学習語が想起できずに (意図的に思い出せずに) 自動的に浮かんだ場合にのみ, 学習語が産出されることになる。したがって,

$$E = A(1 - C) \quad \text{〔Figure 11.1.3〕}$$

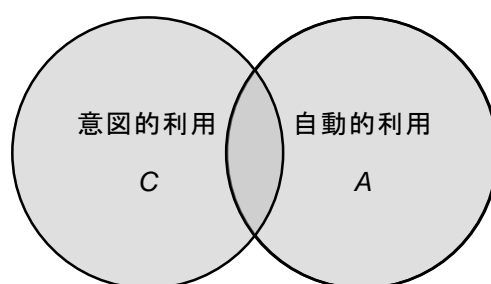


Figure 11.1.2. 包含テスト条件の記憶パフォーマンス。

注) 包含テスト条件においてフラグメントが学習した語で完成される確率 I は, 意図的に想起できる確率 C と, 意図的には想起できず自動的に頭に浮かんだ確率 $A(1-C)$ が足されたものであることを示している。

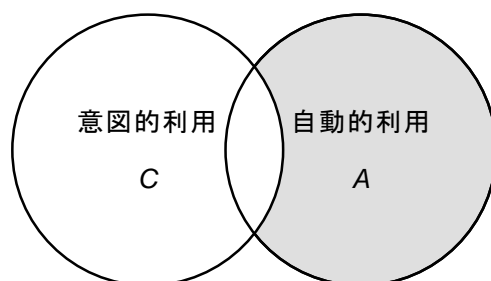


Figure 11.1.3. 除外テスト条件の記憶パフォーマンス。

注) 除外テスト条件においてフラグメントが学習した語で完成される確率 E は, 学習語を意図的に想起できずに自動的に頭に浮かんだ場合 $A(1-C)$ であることを示している。

この2つの式を連立させると、自動的利用と意図的利用の寄与を算出できる。
すなわち、

$$C = I - E$$

$$A = E / (1 - C)$$

以上の手続き及び数式を用い、同一課題の記憶パフォーマンスにおいて自動的利用と意図的利用を分離し検討することが可能であると考えられている。

本研究では、これまで一貫した結果の得られていない、抑うつにおける記憶のネガティブ・バイアスについて過程分離手続を用いて検討する。同一課題において記憶の自動的利用と意図的利用とを分離する過程分離手続を用い、それぞれの過程において抑うつの影響がどのようにみられるかを明らかにすることを第一の目的とする。

抑うつにおいて潜在記憶バイアスが一貫して示されない2つ目の理由として、冒頭に述べたように、実験対象の違いや何らかの特性の影響・交絡の可能性が考えられ得る。対象の違いの影響可能性に関しては、広く潜在的認知に関する研究を対象に抑うつとの関連についてメタ分析を行った Phillips et al. (2010) では影響がみられないと論じている一方で、抑うつにおける記憶再生バイアスに関してメタ分析を行った Matt et al. (1992) からは、臨床的抑うつで効果が最も大きく、準臨床的抑うつで効果が最も小さいことが示されている。Matt et al. (1992) は、気分状態が何らかのパーソナリティ特性と交絡している可能性もあり、何による違いであるかは明らかではないと論じている。

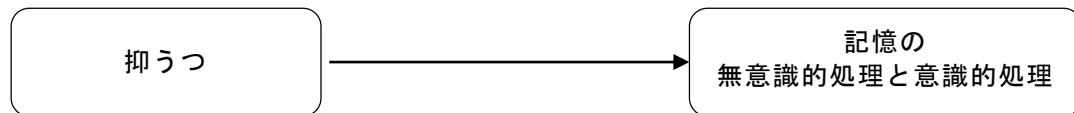
第I部で述べたように、Rusting (1998) による気分一致効果研究のレビューでは気分一致研究を3つに分類し、特性の影響を考慮した調整的アプローチや媒介的アプローチが、気分一致バイアスの生起をよりよく捉えることができるのではないかと提案されている。Rusting が挙げている特性は、準臨床的な抑うつや特性不安・特性怒り、感情調整に関する傾向、パーソナリティ特性などの感情特性であり、気分不一致的なポジティブなバイアスを説明しようとする多くの研究で気分調整動機を挙げていることから、感情特性の中でも特に気分調整に関わる個人差に着目することが有用ではないかと考えられる。

感情に関する基礎的研究の中では、感情をモニタリングしたり、評価したり、変化させたりする、感情に関連した思考過程をメタ感情体験（meta-mood experience; Mayer & Gaschke, 1988）と呼ぶ。メタ感情体験は刻々と変化する今現在感じている感情に対する思考であり、状態的メタ感情体験と捉えられている。これに対して、Salovey, Mayer, Goldman, Turvey, & Palfai（1995）は、個人差としての感情に対する比較的一貫した安定している態度が存在していることを指摘し、特性メタ感情という概念を提唱した。特性メタ感情とは、感情に対する比較的安定した全般的態度や、感情体験への対処方略を指す。Salovey et al.（1995）は特性メタ感情体験について、感情に関する“注目（Attention）”，“明瞭さ（Clarity）”，“転換（Repair）”の3つの因子から構成される48項目から成る尺度（Trait Meta-Mood Scale; 以下 TMMS とあらわす）を開発し、感情等に関する他の尺度との相関を分析した。“注目”因子は自身の感情体験に注意を向ける傾向，“明瞭さ”因子は感情体験がはっきりと明瞭である傾向，“転換”因子は不快な感情を回復させようとする傾向を示している。分析の結果，“注目”因子は私的自己意識、公的自己意識と正の相関があること，“明瞭さ”因子は CES-D によって測定される抑うつ及び感情表出における両価性と負の相関があること、そして“転換”因子は抑うつとは負の相関が、楽観性及びネガティブな気分調整とは正の相関があることが示されている。

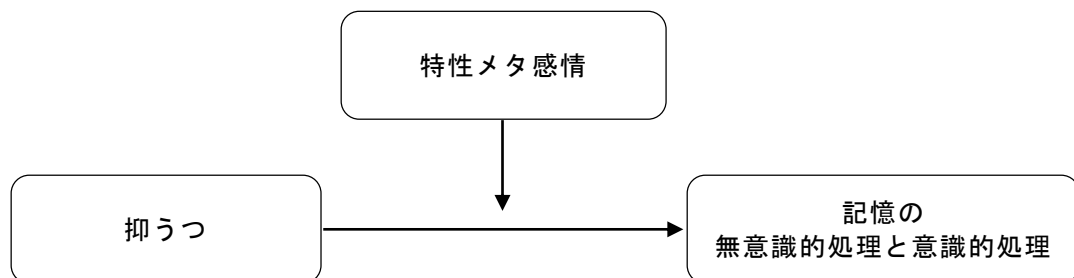
わが国においては、向山（1998）によって30項目から成る TMMS 短縮版が翻訳され、因子構造及びその内容について検討されている。向山（1998）では、因子分析の結果、“気分の明瞭さ”，“気分への注目”，“気分の転換”，“気分の重視”の23項目4因子構造が見出された。“気分の重視”因子は、Salovey et al.（1995）の“注目”因子に含まれる項目の一部がまとまったものであり、行動の指針として感情や気分を重視する態度を表わすものと向山（1998）はまとめている。

本研究は気分調整に関わる個人差としてこの特性メタ感情を取り上げ、Rusting（1998）の指摘する調整的・媒介的アプローチによる検討を行うこととする。Rusting（1998）のモデルにもとづき Figure 11.1.4 に示したような調整・媒介関係を想定し、過程分離手続きによって分離する無意識的・意識的認知的処理バイアスと抑うつとの関係に及ぼし得る特性メタ感情の影響について明ら

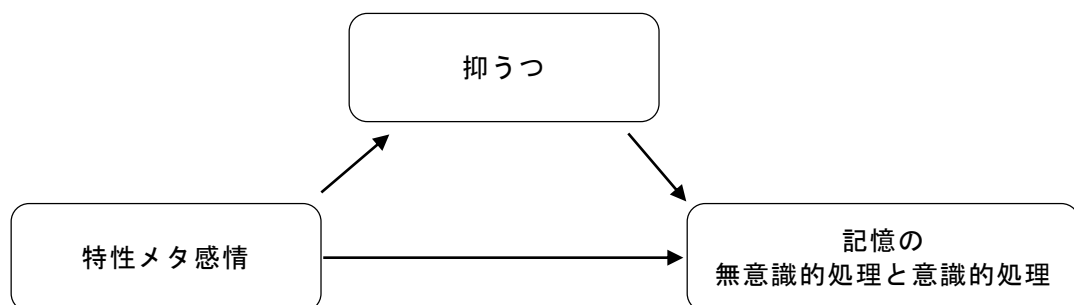
かにすることを第二の目的とする。あわせて、気分の影響についても補足的に検討する。以上の検討を通し、抑うつにおける認知的処理バイアスについて明らかにしたい。



(a) 従来のアプローチ



(b) 調整的アプローチ



(c) 媒介的アプローチ

Figure 11.1.4. 本研究における特性要因を加えた3つのアプローチ。

注) (a)の従来のアプローチでは、抑うつが独立して記憶に影響を及ぼすと仮定する。(b)の調整的アプローチでは、抑うつは特性メタ感情の影響を受け記憶に影響を及ぼす、すなわち、抑うつと特性感情が交互作用的に記憶に影響すると仮定する。(c)の媒介的アプローチでは、特性メタ感情が抑うつに影響を及ぼし、抑うつが記憶に影響すると仮定する。

第2節 方 法

(1) 実験参加者

学生（大学1年生～大学院修士1年生まで）32名（男性12名，女性20名）が実験に参加した。

(2) 刺激・材料

過程分離手続きにおいては，研究6（第10章）にもとづき，ポジティブ語36，ネガティブ語36から成る72の性格表現用語とそれに対応する意味手がかりを用いた。選択した刺激については，研究6にもとづく全体の平均産出率は9.27%，望ましき評定値については，ポジティブ語3.3（range=1.88-4.94），ネガティブ語7.07（range=6.40-7.74）であった。これをポジティブ語9，ネガティブ語9から成る18語のリストに4分割し，それぞれリストA，B，C，Dとした。これらをリストAB，リストCDの2つにまとめ，一方を学習提示リスト，一方を未学習語（新項目）リストとして，参加者間でカウンターバランスした（Figure 11.2.1）。

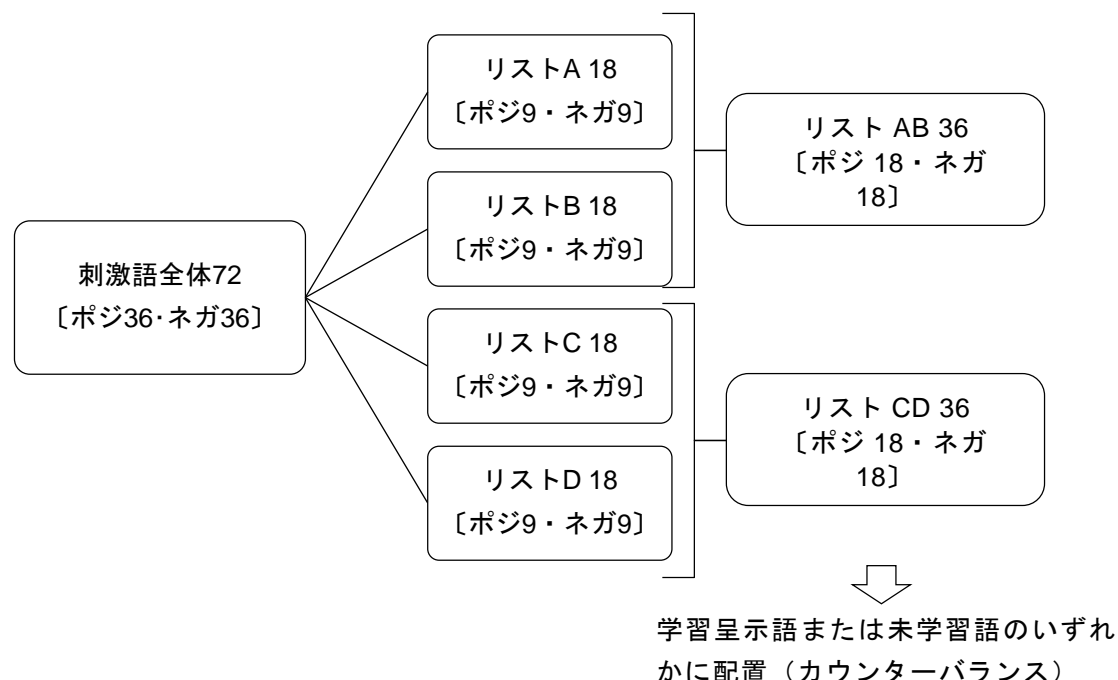


Figure 11.2.1. 刺激語リストの構成。

注）図中の数字は単語数である。リスト AB はリスト A とリスト B，リスト CD はリスト C とリスト D から成り，学習提示語もしくは未学習語にカウンターバランスして配置された。ポジ：ポジティブ語，ネガ：ネガティブ語。

Table 11.2.1
リストの組み合わせと割り当て

①学習呈示語		②包含テスト呈示 意味手がかり			③除外テスト呈示 意味手がかり	
		学習呈示	未学習		学習呈示	未学習
リスト AB	－	リスト A	リスト C	－	リスト B	リスト D
リスト AB	－	リスト A	リスト D	－	リスト B	リスト C
リスト AB	－	リスト B	リスト C	－	リスト A	リスト D
リスト AB	－	リスト B	リスト D	－	リスト A	リスト C
リスト CD	－	リスト C	リスト A	－	リスト D	リスト B
リスト CD	－	リスト C	リスト B	－	リスト D	リスト A
リスト CD	－	リスト D	リスト A	－	リスト C	リスト B
リスト CD	－	リスト D	リスト B	－	リスト C	リスト A

①学習呈示語		②除外テスト呈示 意味手がかり			③包含条件呈示 意味手がかり	
		学習呈示	未学習		学習呈示	未学習
リスト AB	－	リスト A	リスト C	－	リスト B	リスト D
リスト AB	－	リスト A	リスト D	－	リスト B	リスト C
リスト AB	－	リスト B	リスト C	－	リスト A	リスト D
リスト AB	－	リスト B	リスト D	－	リスト A	リスト C
リスト CD	－	リスト C	リスト A	－	リスト D	リスト B
リスト CD	－	リスト C	リスト B	－	リスト D	リスト A
リスト CD	－	リスト D	リスト A	－	リスト C	リスト B
リスト CD	－	リスト D	リスト B	－	リスト C	リスト A

注) 囲み□で示しているのが学習呈示リストである。包含テスト及び除外テスト呈示意味手がかりとは、それぞれのリストに対応する意味手がかりを示している。丸囲み数字は課題の順番である。

包含テスト条件、除外テスト条件では、学習呈示リストの一方（たとえば A）と未学習語リストの一方（たとえば C）の 36 語に対応する意味手がかりを呈示した。全ての実験参加者に同じ刺激 72 を用いたが、学習呈示・未学習、包含・除外テスト条件へのリストの割り当ては 16 通りとなり、それぞれに対象者を同数配置した（Table 11.2.1）。

気分状態を測定するために、寺崎他（1991）による MMS 短縮版を用いた。否定的感情について 3 つ、肯定的感情について 3 つ、中性的感情について 2 つの 8 下位尺度 40 項目から成る尺度であり、現在の気分を 4 件法で回答するものである。40 項目を 1 項目ずつディスプレイに呈示し、キーボード入力によっ

て回答を求めた。

特性メタ感情に関しては、向山（1998）による日本語版 TMMS を用いた。向山（1998）では 23 項目が採用され 4 因子構造が見出されているが、本研究では向山が翻訳したもとの 30 項目全てを用いた。項目を Table 11.2.2 に示す。MMS 短縮版と同様、1 項目ずつディスプレイに呈示し、キーボード入力によって 5 件法で回答を求めた。

抑うつについては、林（1988）によるベック抑うつ尺度（BDI）を用いた。21 項目 4 件法の尺度であり、得点範囲は 0～63、得点が高いほど抑うつのことを示す尺度である。BDI については、B4 サイズの用紙に印字し、紙面において回答を求めた。

(3) 装 置

学習課題、テスト課題の刺激の呈示及び MMS と TMMS の項目の呈示はパーソナル・コンピュータ（HP Compaq dx2000）と 17 インチ液晶ディスプレイ（SAMSUNG SyncMaster 172N）を通して行った。刺激呈示の制御については、SuperLab Pro 2.0.4（Cedrus 社）を用い、黒色の背景画面に白色文字で刺激が呈示された^{注 11-2}。画面の明るさは標準的な設定であった（輝度 270cd/m²，コントラスト比 450:1）。パーソナル・コンピュータ及びディスプレイは机の上に置かれ、ディスプレイの手前にキーボードが置かれた。実験参加者にはディスプレイの正面に向かい合う位置で、椅子に座ってもらった。参加者とディスプレイとの間の距離はおおよそ 50～60cm を目安とし、目の高さがディスプレイと同じくらいかディスプレイよりやや上になるようにした。

(4) 実験場所・実験時刻等

実験はすべて B 大学内の同じ一室（教員研究室）で行われた。実験中に人が出入りすることはなかった。曜日・時間帯は平日の日中であった^{注 11-3}。室内の明るさは標準的であった。

^{注 11-2} 文字のフォントは MS P ゴシックとした。刺激画像は Microsoft Power Point を用いて作成し、文字の大きさについては、教示は 20 ポイント、刺激は 36～48 ポイントとした。

^{注 11-3} 実験参加者の予定にあわせ、午前である場合もあれば午後である場合もあった。

Table 11.2.2
日本語版 TMMS の検討（向山, 1998）で用いられた 30 項目

1	不愉快なときには、良いできごとについて考えるようにしている（転）
2	感じることを少なくして考えることを多くすれば、人はもっと幸せになれるだろう（除）
3	自分の感情や気分になんか注意を払っても、意味がないと思う（除）
4	自分がどう感じているか、ふだんはあまり気にかけていない（注）
5	感じていることを、言葉にできないことがある（明）
6	自分がどのように感じているのか、わからなくなることはめったにない（明）
7	私の感情は、私に進むべき道を教えてくれる（重）
8	つらいことが起こった時でも、先々を良い方向に考えて心配しない（転）
9	失敗した時には、「人生には良いこともある」とは考えられない（転）
10	自分の気持ちに正直である（重）
11	どのように感じているか、うまく話せたことがない（明）
12	感情をコントロールする最も良い方法は、その感情を十分に経験し、味わうことだ（除）
13	不安になったり動揺した時には、楽しかったことをいろいろ思い出すようにしている（転）
14	私の意見や信念は、その時々気分によって変わる（除）
15	ほとんどの場合、自分がなぜそう感じるのか理由がわかる（明）
16	いつも自分がどう感じているのかわからない（明）
17	感情に従うべきではない（重）
18	感情におぼれてしまうことはない（除）
19	幸せな時でも、将来について悲観的に考える（除）
20	何か感情が生じたら、すぐそれに気づく（明）
21	自分がどう感じているのか、いつも注意している（注）
22	なぜそう感じたのか、わからない時がある（明）
23	自分の気持ちには、ほとんど注意を払わない（注）
24	自分の感情について、しばしば考える（注）
25	自分がどう感じているのか、いつもはっきりとわかる（明）
26	どんなに気分の悪い時でも、楽しいことを考えるようにしている（転）
27	感情があるということは、人間の弱点の一つである（除）
28	自分で自分の気持ちがよくわかる（明）
29	自分の感じていることについて、あれこれ考えるのは時間の無駄である（重）
30	ほとんどの場合、自分がどう感じているのか正確に理解している（明）

注）（ ）内は向山（1998）において分類された因子名。明：気分の明瞭さ、注：気分への注目、転：気分の転換、重：気分の重視、除：除外項目。

(5) 手続き

個別に実験を行った。実験の流れを Figure 11.2.2 に示す。

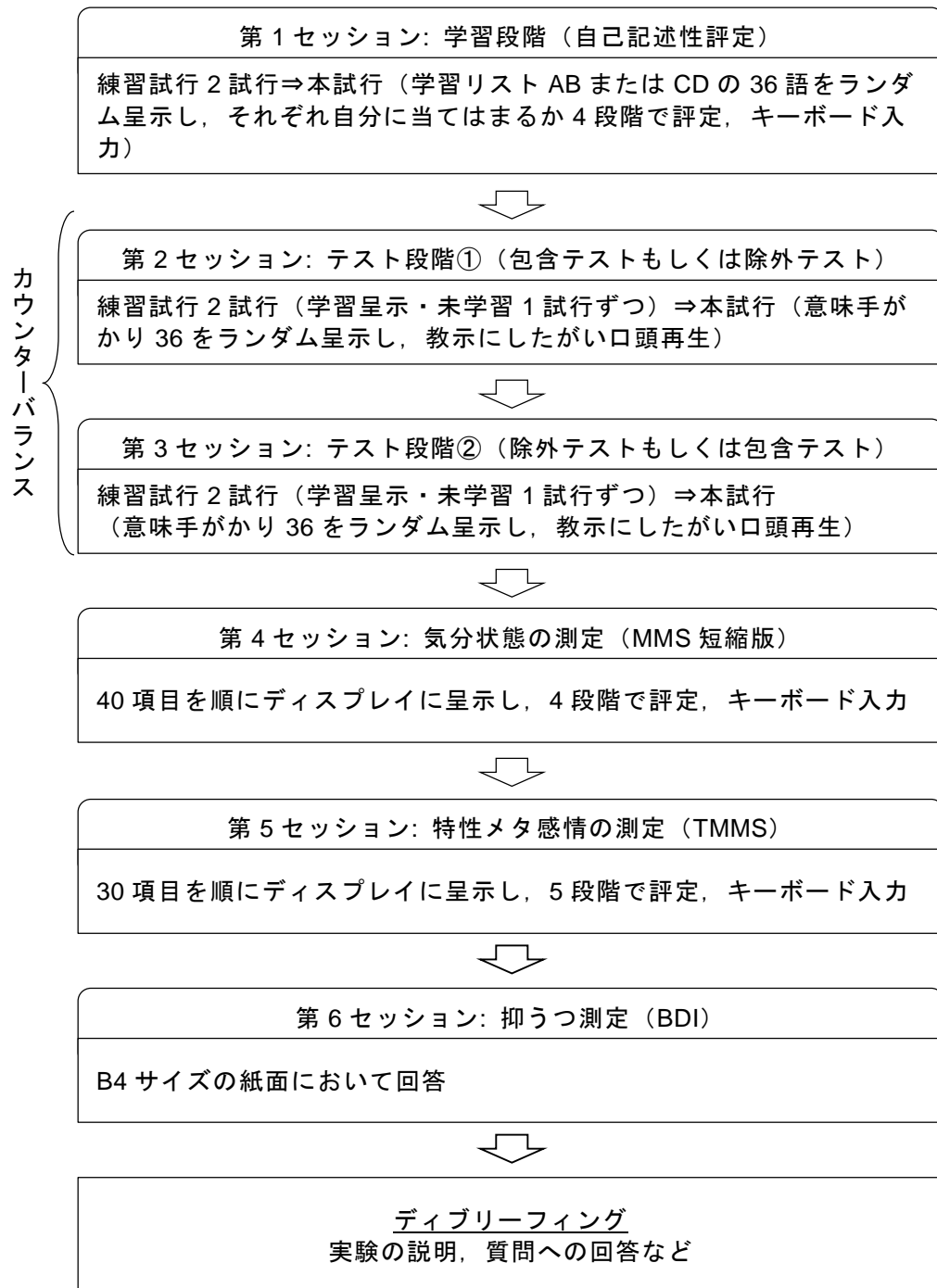


Figure 11.2.2. 実験の流れ。

注) 第2セッションと第3セッションのテスト段階①と②は実験参加者間でカウンターバランスを行った。

実験の概要を説明した後、最初に学習課題として自己記述性評定を行った。2語の練習試行の後、ディスプレイ上に学習提示語36語を1語ずつランダム呈示し、自分に当てはまるかどうかを4件法（当てはまる、やや当てはまる、やや当てはまらない、当てはまらない）でキーボード入力してもらった。刺激の表記形態は漢字-仮名まじりであり、刺激呈示時間は反応のキーボード入力までとした。教示文と選択肢の説明はA4サイズの下紙に印刷し、課題の説明時から学習課題の終了時までディスプレイの近くに呈示し続けた。

次にテスト課題として、包含テスト条件及び除外テスト条件の繰り返し2条件（順序はカウンターバランスした）で、手がかり再生を行った。包含テスト条件、除外テスト条件のそれぞれの本試行の前に練習試行を2試行行った（学習・新項目1試行ずつ）。本試行では学習提示語と未学習語に対応する意味手がかり36を1つずつランダム呈示した。再生は口頭によって求め、回答の後、参加者自身がキーボードを押して次の手がかりに進んだ。再生制限時間は各30秒とした。

包含テスト条件の教示は次の通りであった。

「今から、単語の意味がひとつずつ、計36個出てきます。この意味を手がかりにして、先ほど“自分にどのくらい当てはまるか”を回答した『性格をあらわす単語』を思い出して、口頭で答えてください。ただし、今から出てくる意味の全てが、先の単語の意味というわけではありません。出てきていない単語の意味も含まれています。先に出てきた単語を思い出すことができない場合には、その意味から、最初に思い浮かんだ単語を答えてください。何も思い浮かばない場合は『パス』して結構です。キーを押すと次の項目に進みます。また、30秒経過すると自動的に次の項目に切り替わります」。

除外テスト条件の教示は次の通りであった。

「今から、単語の意味がひとつずつ、計36個出てきます。この意味を手がかりにして、先ほど“自分にどのくらい当てはまるか”を回答した『性格をあらわす単語』を思い出してください。ただし、思い出した単語は答えないでください。あなたが思い出した、先に出てきた単語以外で、その意味から最初に思い浮かんだ単語を口頭で述べてください。単語の意味から、先に出てきた単語を思い出すことができない場合は、その意味から最初に思い浮かんだ単語を口

頭で述べてください。何も思い浮かばない場合は、「パス」して結構です。なお、今から出てくる意味の全てが、先に出てきた単語の意味というわけではありません。出てきていない単語の意味も含まれています。キーを押すと次の項目に進みます。また、30 秒経過すると自動的に次の項目に切り替わります」。

これらの教示文は、課題前の説明に加え、A4 サイズの用紙に印字し、課題中はディスプレイの近くに呈示し続けた。

続いて、MMS 短縮版、TMMS への回答をキーボード入力で求めた。これらについても学習課題と同様、教示文と選択肢について印刷し、回答中呈示し続けた。最後の課題として、BDI への紙面上での回答を求めた。

最後に実験の説明を行い、実験を終了した。所要時間は約 40 分間であった。

(6) 倫理的配慮

研究への参加に関しては、文書を用いて依頼を行い、参加者の自由意思によって行われた。参加者本人の署名がなされた同意文書の提出をもって、研究参加の同意が得られたものとした。ただし、その後の参加辞退・中断も可能であることを依頼文書に明記した。

実験内容・手続きに関しては、先行研究で用いられ検討されてきているものを用い、過去において有害事象は報告されていないことから、精神的侵襲等の危険性は低いものと考えられる。より一層の安全性を確保し参加者が不利益を被らないようにするために、実験の依頼文書においては、研究テーマ・実験内容・所要時間・問い合わせ先等を明記した。加えて、研究で得られた情報については研究目的以外に使用しないこと、結果については統計的処理を行い個人が特定される形での研究成果の公表は行わないこと、協力しないことで不利益を被ることはないこと、関心のある方には研究成果を報告することなどの倫理的配慮について明記した。

実験の最後には、実験の目的を口頭で伝えた。

結果に関心があるとした方には、文書によって成果の報告を行った。

第3節 結果①: 従来のアプローチによる検討

本節では、従来の気分一致バイアスのアプローチによる分析を行う。BDI で測定される抑うつの影響を独立に検討する。

(1) 抑うつ群の設定

BDI 得点をもとに、抑うつ群の設定を行った。実験参加者全体の平均は 10.97 ± 6.46 であり、性差は認められなかった ($t(30) = 1.11, ns$)。研究 5 と同様のカットオフポイントとした場合、0 から 13 点の非抑うつ群は 23 名 (男性 9 名, 女性 14 名), 14 から 20 点の軽度抑うつ群は 6 名 (男性 3 名, 女性 3 名), 21 から 26 点の中等度抑うつ群は 2 名 (女性 2 名), 27 以上の重度抑うつ群は 1 名 (女性 1 名) であった。中等度以上の抑うつ状態にある参加者が少なかったため、軽度抑うつ以上をまとめ抑うつ群 ($n=9$; 男性 3 名, 女性 6 名) とすることとした。各群の BDI 平均得点は、非抑うつ群は 7.78 ± 3.41 , 抑うつ群は 19.11 ± 5.11 であった。

(2) 各テスト条件における再生率と抑うつとの関連

包含テスト条件と除外リスト条件別に、各群における学習呈示語・未学習語の単語の感情価別平均産出率を Table 11.3.1 に示した。

包含テスト条件における学習呈示語の再生率について、抑うつ (2; 非抑うつ, 抑うつ) \times 単語の感情価 (ポジティブ, ネガティブ) の 2 要因分散分析を行ったところ、感情価の主効果のみが有意であり ($F(1,30) = 30.98, p < .001$), ポジティブな感情価の学習呈示語の再生率がネガティブな感情価のものより高かった。除外テスト条件における学習呈示語の再生率についても同様の 2 要因分析を行った。結果、2 つの主効果及び交互作用は統計的に有意ではなかった。

次にベースラインの検討として、未学習語の意味手がかりから意図された単語が再生された率について、抑うつ (2) \times 単語の感情価 (2) \times テスト条件 (2; 包含テスト, 除外テスト) の 3 要因分散分析を行った。結果、主効果, 交互作用とも全て統計的に有意ではなく、刺激に偏りがなかったことが確認された。

Table 11.3.1
各群のテスト条件及び単語の種類別平均再生率

群	n	BDI	包含テスト条件				除外テスト条件			
			学習呈示語		未学習語		学習呈示語		未学習語	
			ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ	ポジ	ネガ
非抑うつ	23	7.78 (3.41)	.62 (0.21)	.46 (0.15)	.11 (0.11)	.09 (0.08)	.08 (0.11)	.08 (0.09)	.11 (0.09)	.10 (0.09)
抑うつ	9	19.11 (5.11)	.70 (0.21)	.41 (0.18)	.06 (0.06)	.09 (0.07)	.12 (0.09)	.06 (0.06)	.09 (0.11)	.12 (0.10)

注) ()内は標準偏差。 ポジ: ポジティブ語, ネガ:ネガティブ語。

(3) 記憶の自動的利用と意図的利用に抑うつが及ぼす影響

Jacoby (1991, 1998) の方程式,

意図的利用寄与率 (C) =

包含テスト条件再生率 (I) - 除外テスト条件再生率 (E)

自動的利用寄与率 (A) = $E / (1 - C)$

にもとづき, 実験参加者ごとに, 自動的利用寄与率 (A) と意図的利用寄与率 (C) を算出した。なお包含テスト条件でポジティブな学習語を全て産出した ($C=1.00$) 参加者 2 名については, 自動的処理過程寄与率 (A) が算出されないため, 以下の分析からは除くこととした。この 2 名は非抑うつ群 1 名, 抑うつ群 (重度抑うつ) 1 名であり, 2 名を除いた各群の BDI 得点は, 非抑うつ群 7.55 ± 3.29 , 抑うつ群 17.88 ± 3.76 となった。各群及び単語の感情価別の, 自動的利用平均寄与率を Figure 11.3.1 に, 意図的利用平均寄与率を Figure 11.3.2 に示した。

まず自動的利用の寄与率について, 抑うつ (非抑うつ, 抑うつ) \times 単語の感情価 (ポジティブ, ネガティブ) の 2 要因分散分析を行ったところ, 抑うつの主効果, 感情価の主効果及び抑うつと感情価の交互作用の全てが有意であった ($F(1,28) = 4.32, p < .05$; $F(1,28) = 11.55, p < .01$; $F(1,28) = 5.70, p < .05$)。交互作用について単純主効果の検定を行ったところ, 抑うつ群においてポジティブ語の寄与率が有意に高く ($F(1,28) = 11.41, p < .01$), ポジティブ語の寄与率において抑うつ群が非抑うつ群よりも有意に高いことが示された ($F(1,28) = 6.73, p < .05$)。

次に意図的利用の寄与率について, 同様の 2 要因分散分析を行った。結果, 感情価の主効果のみが有意であり ($F(1,28) = 12.72, p < .01$), 抑うつの状態にか

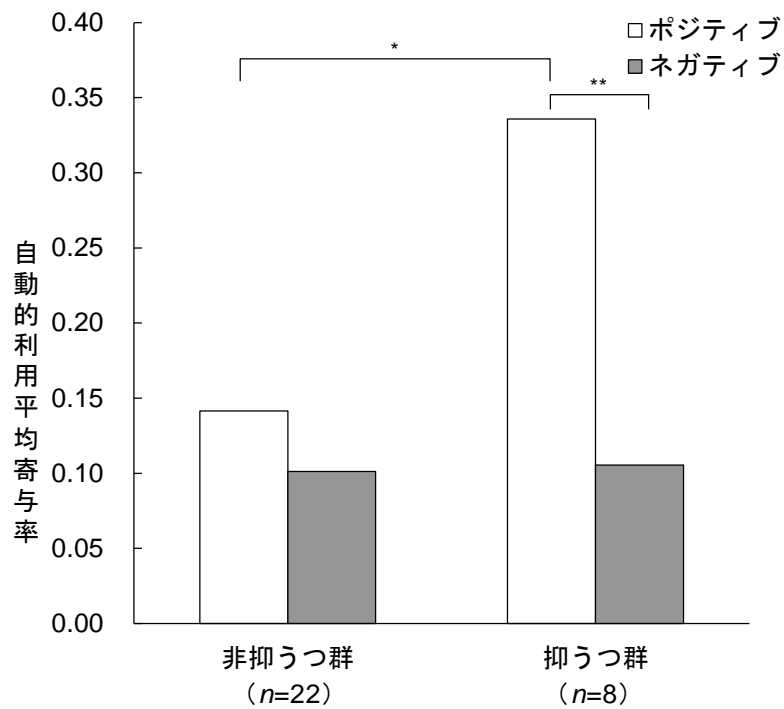


Figure 11.3.1. 各群の単語の感情価別自動的利用平均寄与率。

注) * $p<.05$, ** $p<.01$ 。ポジティブ: ポジティブな感情価の単語, ネガティブ: ネガティブな感情価の単語。

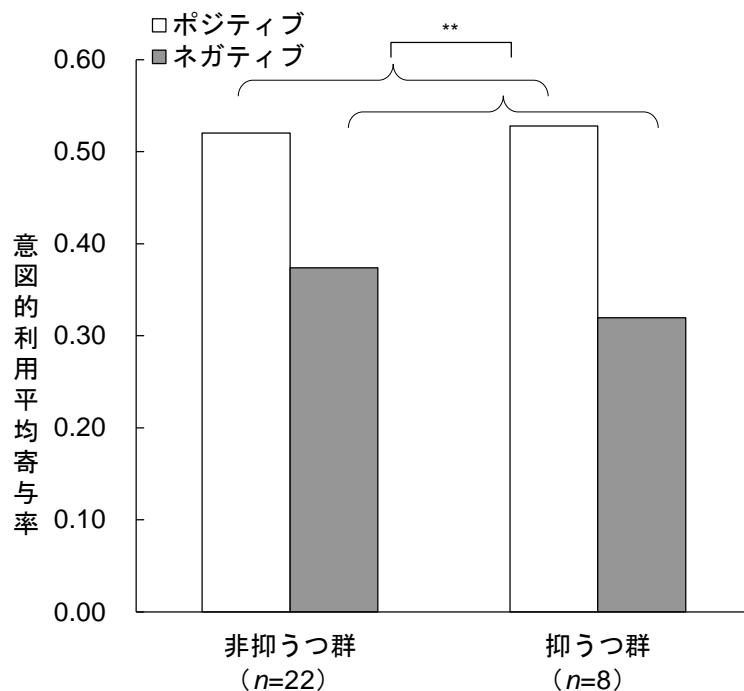


Figure 11.3.2. 各群の単語の感情価別意図的利用平均寄与率。

注) ** $p<.01$ 。ポジティブ: ポジティブな感情価の単語, ネガティブ: ネガティブな感情価の単語。波括弧は, 非抑うつ・抑うつとの区別なく合わせた, ポジティブな感情価全体とネガティブな感情価全体を示しており, 感情価間に有意な差があること(感情価の主効果がみられたこと)を示している。

Table 11.3.2
学習段階の自己記述性評定課題における各群の感情価別平均評定値

群	n	ポジティブな感情価の 学習呈示語	ネガティブな感情価の 学習呈示語
非抑うつ	22	2.80 (0.27)	2.64 (0.50)
抑うつ	8	2.65 (0.49)	2.68 (0.32)

注) 得点範囲は 1 から 4。得点が高いほど自分自身に当てはまると評定していることを表している。()内は標準偏差。

Table 11.3.3
MMS 短縮版下位尺度における各群の平均得点

群	n	抑鬱・ 不安	倦怠	敵意	活動的 快	非活動 的快	親和	集中	驚愕
非抑うつ	22	12.05 (3.79)	10.18 (2.97)	6.41 (1.89)	13.23 (3.21)	13.50 (4.00)	12.14 (4.29)	11.73 (3.13)	11.18 (4.00)
抑うつ	8	15.88 (3.23)	12.88 (2.53)	7.88 (5.00)	10.13 (4.22)	11.13 (4.02)	11.13 (3.31)	13.25 (3.11)	12.38 (4.44)
t 値 [df=28]		2.54*	2.53	1.19	2.15*	1.44	0.60	1.18	0.70

* $p<.05$

注) 得点範囲は 5 から 20。()内は標準偏差。

かわらず、ポジティブな単語の意図的利用寄与率がネガティブな単語よりも高いことが示された。

(4) 方向づけ課題の分析

学習段階で実施した自己記述性評定について、参加者ごとにポジティブな感情価の学習呈示語の平均評定値とネガティブな感情価の平均評定値を算出し (Table 11.3.2), 抑うつ (2) × 単語の感情価 (2) の 2 要因分散分析を行った。結果, 抑うつの主効果, 感情価の主効果, 交互作用の全てが有意ではなかった ($F(1,28) = 0.30, ns$; $F(1,28) = 0.28, ns$; $F(1,28) = 0.51, ns$)。

(5) 各群の気分状態及び特性メタ感情

非抑うつ群と抑うつ群の状態を捉えるため, 気分状態と特性メタ感情について群間比較を行った。MMS 短縮版の各群の平均得点を Table 11.3.3 に, TMMS

Table 11.3.4
TMMS（向山, 1998）の 4 つの下位尺度における各群の平均得点

群	<i>n</i>	気分の明瞭さ	気分への注目	気分の転換	気分の重視
非抑うつ	22	3.42 (0.63)	3.82 (0.79)	2.87 (0.81)	3.94 (0.61)
抑うつ	8	3.13 (0.77)	4.06 (0.88)	2.45 (0.84)	3.44 (0.48)
<i>t</i> 値 [<i>df</i> =28]		1.07	0.73	1.26	2.12*

* $p < .05$

注) ()内は標準偏差。得点範囲は 1 から 5。

の各群の平均得点を Table 11.3.4 に示した。

MMS 短縮版については，“抑鬱・不安”“倦怠”で抑うつ群の得点が有意に高く ($t(28) = 2.54, p < .05$; $t(28) = 2.28, p < .05$)，“活動的快”で非抑うつ群が有意に高いことが示された ($t(28) = 2.15, p < .05$)。

TMMS の下位尺度に関しては，向山（1998）にもとづく 4 下位尺度（“気分の明瞭さ”“気分への注目”“気分の転換”“気分の重視”）の得点を抑うつ群間で比較した結果，“気分の重視”においてのみ，非抑うつ群が抑うつ群よりも有意に高いことが示された ($t(28) = 2.12, p < .05$)。

第4節 結果②: 調整的アプローチによる検討

本節では，抑うつ，特性メタ感情，認知的処理の 3 つの変数の関係に着目し，調整的アプローチによる分析を行う。第 1 節で示したモデルにもとづき，特性メタ感情を調整変数とし，抑うつと特性メタ感情とが交互作用的に認知的処理に影響しているのかどうか，階層的重回帰分析を用いて検討する。なお特性メタ感情に関しては，下位尺度それぞれの影響を独立に検討する。基準変数となる認知的処理に関しては，ポジティブ語とネガティブ語それぞれの自動的利用寄与率と意図的利用寄与率を独立に検討することとする。

(1) 自動的利用寄与率への影響

① ポジティブ語における影響

ポジティブ語における記憶の自動的利用寄与率を基準変数とし、説明変数として、第1ステップに抑うつ（非抑うつ，抑うつ；カテゴリーカル）及び TMMS 各下位尺度（“気分の明瞭さ” “気分への注目” “気分の転換” “気分の重視” それぞれ1つずつ），第2ステップに抑うつと TMMS 各下位尺度との交互作用項を投入した4つの階層的重回帰分析を実施した。TMMS 各下位尺度得点は中心化した値を用いた。結果を Table 11.4.1 に示す。

“気分の明瞭さ” “気分への注目” “気分の転換” “気分の重視” をそれぞれ調整変数とした場合の全てにおいて，Step 1 で抑うつの有意な正の影響が認められた（ $b = 0.19, b SE = 0.08, p < .05$; $b = 0.20, b SE = 0.08, p < .05$; $b = 0.22, b SE = 0.08, p < .01$; $b = 0.18, b SE = 0.08, p < .05$ ）。さらに“気分の重視”を調整変数とした場合は，抑うつとの交互作用が有意傾向にあり（ $b = 0.07, b SE = 0.04, p < .10$ ），交互作用項を投入すると分散説明率が増分する傾向が示された（ $\Delta R^2 = 0.09, p < .10$ ）。単純傾斜の有意性の検定の結果，“気分の重視”が低い場合（ $-1SD$ ）に抑うつの影響は認められなかったが（ $b = 0.09, b SE = 0.09, p = .35$ ），高い場合（ $+1SD$ ）に抑うつの有意な正の影響が認められた（ $b = 0.43, b SE = 0.16, p < .05$ ）。この交互作用について，統計分析ソフト HAD（清水・村山・大坊，2006）を用いて作成した単純傾斜のグラフを Figure 11.4.1 に示す。

② ネガティブ語における影響

同様の4つの階層的重回帰分析を実施した。結果を Table 11.4.2 に示す。TMMS 下位尺度のいずれを調整変数とした場合においても，ネガティブ語における記憶の自動的利用寄与率に有意な影響は認められなかった。

(2) 意図的利用寄与率への影響

① ポジティブ語における影響

ポジティブ語における記憶の意図的利用寄与率を基準変数とし，同様の4つの階層的重回帰分析を実施した。“気分の明瞭さ”及び“気分への注目”をそれぞれ調整変数とした場合，Step 1 において抑うつの影響及びメタ感情の影響が

Table 11.4.1

ポジティブ語における自動的利用寄与率についての階層的重回帰分析結果

(1) TMMS“気分の明瞭さ”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	0.19*	0.08	0.17*	0.08
TMMS“気分の明瞭さ”	-0.00	0.01	0.01	0.01
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分の明瞭さ”			-0.02	0.01
ΔR^2	0.19†		0.07	

(2) TMMS“気分への注目”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	0.20*	0.08	0.21*	0.08
TMMS“気分への注目”	-0.01	0.01	-0.00	0.01
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分への注目”			-0.01	0.02
ΔR^2	0.20*		0.01	

(3) TMMS“気分の転換”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	0.22**	0.08	0.24**	0.08
TMMS“気分の転換”	0.01	0.01	0.01	0.01
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分の転換”			0.03	0.02
ΔR^2	0.25*		0.05	

(4) TMMS“気分の重視”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	0.18*	0.08	0.26**	0.09
TMMS“気分の明瞭さ”	-0.01	0.02	-0.02	0.02
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分の重視”			0.07†	0.04
ΔR^2	0.20*		0.09†	

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

認められたが ($b = -0.02, b SE = 0.01, p < .05; b = -0.03, b SE = 0.02, p < .10$), 交互作用の影響は TMMS 下位尺度のいずれを調整変数とした場合においても認められなかった。結果を Table 11.4.3 に示す。

② ネガティブ語における影響

先と同様の 4 つの階層的重回帰分析を実施した。結果を Table 11.4.4 に示す。“気分の重視”を調整変数とした場合、抑うつとの交互作用は有意傾向であり ($b = -0.07, b SE = 0.04, p < .10$), 交互作用項を投入すると分散説明率が増分する傾向が認められた ($\Delta R^2 = 0.11, p < .10$)。

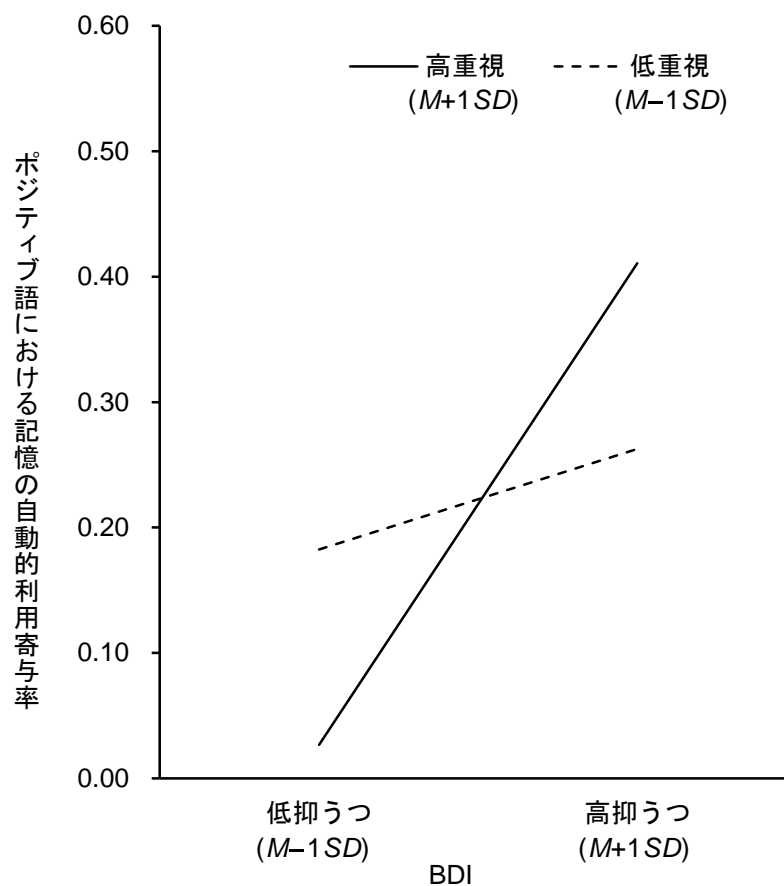


Figure 11.4.1. ポジティブ語の記憶の自動的利用寄与率における抑うつと TMMS 下位尺度“気分の重視”との交互作用についての単純傾斜。

注) 直線は、抑うつと TMMS の“気分の重視”得点に、各平均値 $M \pm 1SD$ の値を代入して求めた単回帰直線である。低抑うつ: BDI (カテゴリーカル・データ) が平均 $-1SD$, 高抑うつ: BDI が平均 $+1SD$, 高重視: TMMS “気分の重視”が平均 $+1SD$, 低重視: TMMS “気分の重視”が平均 $-1SD$ 。

Table 11.4.2

ネガティブ語における自動的利用寄与率についての階層的重回帰分析結果

(1) TMMS“気分の明瞭さ”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	0.01	0.05	-0.00	0.05
TMMS“気分の明瞭さ”	0.00	0.00	0.00	0.00
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分の明瞭さ”			-0.01	0.01
ΔR^2	0.00		0.05	

(2) TMMS“気分への注目”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	0.01	0.05	0.02	0.05
TMMS“気分への注目”	-0.01	0.01	-0.01	0.01
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分への注目”			-0.01	0.01
ΔR^2	0.08		0.03	

(3) TMMS“気分の転換”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	0.01	0.05	0.02	0.05
TMMS“気分の転換”	0.00	0.01	0.00	0.01
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分の転換”			0.01	0.01
ΔR^2	0.02		0.01	

(4) TMMS“気分の重視”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	0.00	0.05	0.02	0.06
TMMS“気分の明瞭さ”	-0.00	0.01	-0.00	0.01
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分の重視”			0.01	0.03
ΔR^2	0.00		0.01	

Table 11.4.3
ポジティブ語における意図的利用寄与率についての階層的重回帰分析結果

(1) TMMS“気分の明瞭さ”を調整変数として				
変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	-0.03	0.10	-0.00	0.10
TMMS“気分の明瞭さ”	-0.01	0.01	-0.02*	0.01
Step 2				
抑うつ×TMMS“気分の明瞭さ”			0.02	0.01
Δ <i>R</i> ²	0.09		0.06	
(2) TMMS“気分への注目”を調整変数として				
変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	0.03	0.10	0.01	0.10
TMMS“気分への注目”	-0.02	0.01	-0.03†	0.02
Step 2				
抑うつ×TMMS“気分への注目”			0.04	0.03
Δ <i>R</i> ²	0.08		0.05	
(3) TMMS“気分の転換”を調整変数として				
変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	0.00	0.10	0.03	0.11
TMMS“気分の転換”	-0.00	0.01	-0.01	0.01
Step 2				
抑うつ×TMMS“気分の転換”			0.03	0.03
Δ <i>R</i> ²	0.00		0.05	
(4) TMMS“気分の重視”を調整変数として				
変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	-0.01	0.11	0.05	0.13
TMMS“気分の重視”	-0.01	0.02	-0.02	0.02
Step 2				
抑うつ×TMMS“気分の重視”			0.05	0.05
Δ <i>R</i> ²	0.01		0.04	

† $p < .10$, * $p < .05$

Table 11.4.4

ネガティブ語における意図的利用寄与率についての階層的重回帰分析結果

(1) TMMS“気分の明瞭さ”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	-0.06	0.08	-0.04	0.08
TMMS“気分の明瞭さ”	-0.00	0.01	-0.01	0.01
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分の明瞭さ”			0.02	0.01
ΔR^2	0.03		0.08	

(2) TMMS“気分への注目”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	-0.05	0.08	-0.05	0.08
TMMS“気分への注目”	-0.00	0.01	-0.00	0.01
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分への注目”			0.00	0.03
ΔR^2	0.02		0.00	

(3) TMMS“気分の転換”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	-0.05	0.08	-0.08	0.08
TMMS“気分の転換”	0.00	0.01	0.01	0.01
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分の転換”			-0.03	0.02
ΔR^2	0.02		0.07	

(4) TMMS“気分の重視”を調整変数として

変数	Step 1		Step 2	
	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>b</i>	<i>b SE</i>
Step 1				
抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	-0.07	0.09	-0.15	0.09
TMMS“気分の明瞭さ”	-0.01	0.02	0.01	0.02
Step 2				
抑うつ × TMMS“気分の重視”			-0.07 [†]	0.04
ΔR^2	0.02		0.11 [†]	

[†] $p < .10$

交互作用に有意傾向が認められたため、単純傾斜の有意性の検定を行った。結果、気分の重視が低い場合 ($-1SD$) には、抑うつはネガティブ語の意識的処理に影響を及ぼさないが ($b = 0.03, b\ SE = 0.10, p = .76$)、高い場合 ($+1SD$) に、抑うつが負の影響を及ぼす傾向にあることが示された ($b = -0.33, b\ SE = 0.17, p < .10$)。この交互作用について、統計分析ソフト HAD (清水他, 2006) を用いて作成した単純傾斜のグラフを Figure 11.4.2 に示す。

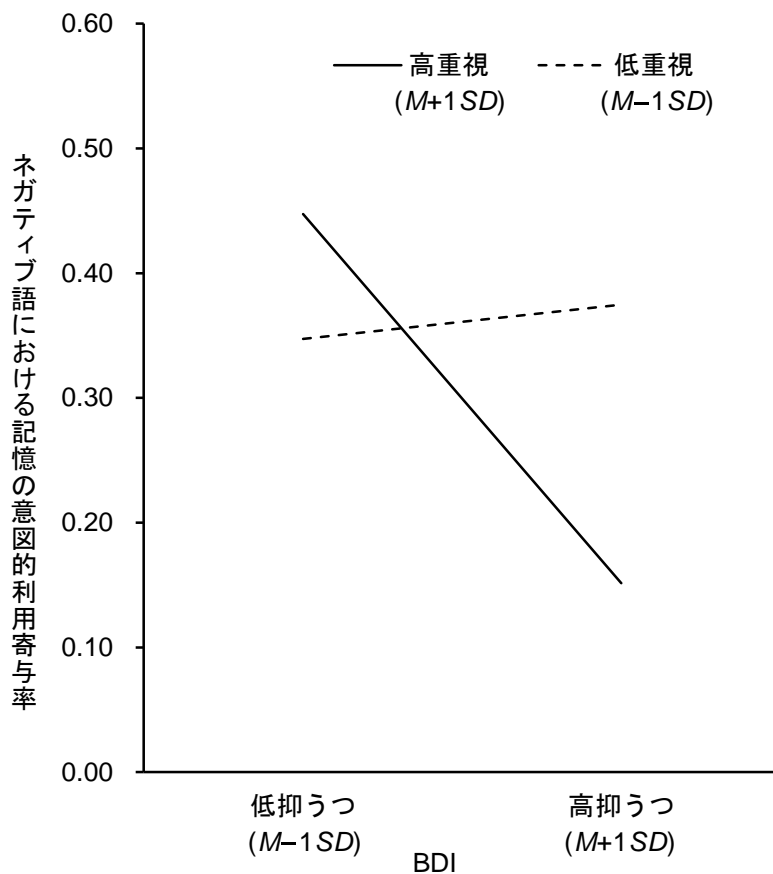


Figure 11.4.2. ネガティブ語の記憶の意図的利用寄与率における抑うつと TMMS 下位尺度“気分の重視”との交互作用についての単純傾斜。

注) 直線は、抑うつと TMMS の“気分の重視”得点に、各平均値 $M \pm 1SD$ の値を代入して求めた単回帰直線である。低抑うつ: BDI (カテゴリーカル・データ) が平均 $-1SD$, 高抑うつ: BDI が平均 $+1SD$, 高重視: TMMS “気分の重視”が平均 $+1SD$, 低重視: TMMS “気分の重視”が平均 $-1SD$ 。

Table 11.5.1
変数間の相関

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.
1. 抑うつ（非抑うつ，抑うつ）	—	-.20	.14	-.23	-.37*	.44*	.02	.01	-.13
TMMS									
2. 気分の明瞭さ		—	.45*	-.26	.16	-.09	.02	-.30	-.09
3. 気分への注目			—	.07	.28	-.03	-.28	-.28	-.08
4. 気分の転換				—	.26	.13	.12	-.05	.06
5. 気分の重視					—	-.24	-.03	-.10	-.01
認知的処理									
6. ポジ語における自動的利用						—	.19	-.17	-.31
7. ネガ語における自動的利用							—	-.24	-.43*
8. ポジ語における意図的利用								—	.39*
9. ネガ語における意図的利用									—

* $p < .05$

注）ポジ語：ポジティブ語，ネガ語：ネガティブ語。自動的利用：自動的利用寄与率，意図的利用：意図的利用寄与率

第5節 結果③：媒介的アプローチによる検討

本節では、媒介的アプローチによる分析を行う。前節と同様、抑うつ（BDI）、特性メタ感情（TMMS）、認知的処理（記憶の自動的利用寄与率，意図的利用寄与率）の3つの変数の関係に着目することとし、抑うつを媒介変数として、特性メタ感情が認知的処理に及ぼす影響について、Baron & Kenny（1986）による媒介分析を用いて検討する。特性メタ感情に関しては、各下位尺度の影響についてそれぞれ独立に検討する。認知的処理に関しても前節と同様に、ポジティブ語とネガティブ語それぞれの自動的利用寄与率と意図的利用寄与率について独立して検討することとする。まず用いる変数間の相関係数を算出した。Table 11.5.1 に示す。

媒介モデルの前提として、まず独立変数（特性メタ感情の4つの下位尺度）から結果変数（4つの認知的処理；ポジティブ語及びネガティブ語における自動的利用寄与率と意図的利用寄与率）への影響について単回帰分析を用いて検討した。分析結果をTable 11.5.2 に示す。結果、特性メタ感情の認知的処理への影響は全て有意ではなく、媒介モデルは成立しないことが示された。

Table 11.5.2
特性メタ感情が認知的処理に及ぼす影響

	<i>b</i>	<i>b SE</i>	<i>p</i>
“気分の明瞭さ”の影響			
ポジティブ語における自動的利用寄与率	-0.00	0.01	.65
ネガティブ語における自動的利用寄与率	0.00	0.00	.92
ポジティブ語における意図的利用寄与率	-0.01	0.01	.10
ネガティブ語における意図的利用寄与率	-0.00	0.01	.66
“気分への注目”の影響			
ポジティブ語における自動的利用寄与率	-0.00	0.01	.88
ネガティブ語における自動的利用寄与率	-0.01	0.01	.14
ポジティブ語における意図的利用寄与率	-0.02	0.01	.14
ネガティブ語における意図的利用寄与率	-0.01	0.01	.67
“気分の転換”の影響			
ポジティブ語における自動的利用寄与率	0.01	0.01	.51
ネガティブ語における自動的利用寄与率	0.00	0.01	.52
ポジティブ語における意図的利用寄与率	-0.00	0.01	.81
ネガティブ語における意図的利用寄与率	0.00	0.01	.75
“気分の重視”の影響			
ポジティブ語における自動的利用寄与率	-0.02	0.02	.20
ネガティブ語における自動的利用寄与率	-0.00	0.01	.89
ポジティブ語における意図的利用寄与率	-0.01	0.02	.61
ネガティブ語における意図的利用寄与率	-0.00	0.02	.94

第6節 考 察

(1) アプローチ別の検討

本研究では過程分離手続きを用い、単語検索課題における記憶の自動的利用と意図的利用の寄与率を分離し、それぞれに及ぼす抑うつ及び特性メタ感情の影響について検討をした。検討に際しては Rusting (1998) にもとづき、従来のアプローチ、調整的アプローチ、媒介的アプローチの3つのアプローチを用いた。ここではそれぞれのアプローチ別に考察を行う。

① 従来のアプローチによる検討

気分一致バイアス研究における従来のアプローチ，すなわち抑うつが独立に認知的処理に及ぼす影響については，気分一致バイアス研究において一般的に用いられている分散分析によって検討を行った。

抑うつの影響は，記憶の意図的利用においては認められなかったものの，自動的利用に関しては抑うつが高くなるとポジティブ語の利用の寄与率が高くなることが見出された。すなわち，気分不一致的な抑うつにおけるポジティブ・バイアスが示されたと考えられる。Figure 11.3.1 (p.186)を見ると，抑うつ群におけるポジティブ語の記憶の自動的利用寄与率のみが突出して高く，他はほぼ同じ高さであることがわかるが，このグラフの形は第 8 章（研究 4）の概念駆動型潜在記憶課題の結果（Figure 8.2.5; p.134）と非常に類似している。このことから，一般大学生を対象とし，概念的な処理を求めた場合には，抑うつにおいてポジティブな無意識的処理バイアスが生じるといえるのではないだろうか。なぜポジティブなバイアスが生じるのかということについては，ひとつに気分調整のはたらきによる可能性が考えられるが，このことに関しては後述する。

② 調整的アプローチによる検討

ポジティブ語とネガティブ語の記憶の自動的・意図的利用寄与率それぞれについて，階層的重回帰分析を用いて検討を行った結果，ポジティブ語における記憶の自動的利用及びネガティブ語における記憶の意図的利用に対して，抑うつと特性メタ感情“気分の重視”の交互作用の影響が認められた。ポジティブ語における記憶の自動的利用については，“気分の重視”が高い場合，抑うつが高いと寄与率が上がるという正の関係にあることが示された。一方，ネガティブ語における記憶の意図的利用については，“気分の重視”が高い場合に，抑うつが高いと寄与率が下がるという負の関係にあることが示された。

この結果から，“気分の重視”で測定されていると考えられる，感情を軽視せずに感情体験をそのまま受けとめようとする傾向が，抑うつ状態において気分不一致的な認知的処理を促進することが示唆される。すなわち，抑うつ状態においてこの感情特性が，無意識的には気分不一致的なポジティブ刺激の処理を促進し，意識的には気分一致的なネガティブ刺激の処理を抑制するという調整

的役割を果たしている可能性が推察される。そして、このような現象は、Beevers (2005) や Forgas (2000) などの感情調整における二重過程モデルから示唆される現象と類似しているとも考えられ得る。この点については第IV部の総合考察において論じたい。

③ 媒介的アプローチによる検討

Baron & Kenny (1986) による媒介分析を行った結果、モデルの前提である特性メタ感情の認知的処理への影響が認められず、媒介モデルは成立しないことが示された。抑うつは特性メタ感情と認知的処理との間を媒介するという関係にはないことが示唆される。

(2) 全体的考察

以上のアプローチ別検討から、抑うつの影響を独立して検討した場合、抑うつにおいてポジティブな無意識的処理が促進され得ることが示唆された。特性メタ感情を変数として加えて検討した場合、中でも感情を軽視せずに感情体験をそのまま受けとめようとする傾向であると考えられる“気分の重視”は、抑うつと認知的処理との関係を調整するはたらきがあることが示唆された。抑うつと認知との関係に及ぼす特性メタ感情の影響に関しては、調整的アプローチが支持されるのではないかと考えられる。認知課題や分析方法はかなり異なっているものの、伊藤 (2001) においても調整的アプローチがより妥当性のあるモデルであることが示されており、抑うつと認知との関係は感情特性によって調整される可能性が高いのではないかと考えられる。

本研究においては、感情を軽視せずにそのまま感情体験を受けとめようとする傾向が高いと、ポジティブな無意識的処理が促進され、ネガティブな意識的処理が抑制される可能性があることが示唆された。本研究では抑うつ状態の中でも比較的軽度の状態にある者が対象であったが、このような軽度の抑うつ状態では、無意識的にも意識的にも気分不一致的な方向での認知的処理が行われ、悪化せずに軽度のままの状態を保っている可能性があるのかもしれない。この点については次章で論じたい。

第Ⅲ部の要約

第Ⅲ部では、4つの研究を通し、無意識と意識の違いに着目して抑うつにおける認知バイアスを検討した。

研究4では、概念駆動型テストとデータ駆動型テストを用い、抑うつにおける潜在記憶バイアスを検討した。概念駆動型テストを用いた実験1では、予想に反して抑うつにおいてポジティブな潜在記憶バイアスが示された。一方データ駆動型テストを用いた実験2からは、抑うつは潜在記憶に影響を及ぼさないことが示された。このことから、データ駆動型テストでは認知バイアスは生じないが概念駆動型テストでは何らかの認知バイアスが生じ得ることが示唆され、ある部分 Watkins らなどの先行研究の見解を支持する結果であったと考えられる。ただし本研究では、概念駆動型処理を求めた場合抑うつにおいてポジティブ・バイアスが生じ、この点は多くの先行研究と異なる結果であった。この理由のひとつとして、軽度の抑うつにおいてはネガティブな状態を軽減・緩和しようという動機づけが働き、従来の顕在記憶研究でみられることのあった気分不一致的バイアスが生じる可能性が推察された。

研究5では、研究4の結果を受け、抑うつ の 重篤性が潜在・顕在記憶バイアスに及ぼす影響について検討した。抑うつ尺度 BDI の得点にもとづき、非抑うつ群、軽度抑うつ群、中重度抑うつ群に対象者を分類し比較した結果、潜在記憶テストにおいては、軽度抑うつで研究4とは逆のネガティブ・バイアスが示されたが、中重度抑うつではバイアスは認められなかった。軽度抑うつにおけるバイアスが研究4と研究5で異なった点に関しては、無意識的処理と意識的処理の寄与の違いが影響している可能性がひとつに考えられた。中重度抑うつでバイアスが認められなかったことに関しては抑うつ の 重篤性の違いやそこに抑うつ以外の何らかの要因が関与している可能性が考えられた。顕在記憶テストでは抑うつ の 重篤性にかかわらずバイアスは認められず、準臨床的な抑うつ の 記憶への影響は認められにくいという先行研究の見解を支持する結果となった。以上のような結果を明らかにするために、同一課題において無意識的処理と意識的処理とを分離し捉えることや感情特性などの変数を新たに加えて検討することなどの必要性が考えられた。

研究 6 では、認知課題において用いる刺激を検討することを主な目的とし、意味定義課題の作成を行った。最終的に望ましい特性語 44 語、望ましくない特性語 54 語の計 98 語とその意味定義 98 が選定・作成された。そしてこれらの単語の望ましき評定と、意味定義呈示による特性語の産出率が求められた。

研究 7 では、第Ⅲ部のこれまでの結果を踏まえ、過程分離手続きを用い記憶における無意識的处理と意識的处理それぞれへの抑うつの影響を明らかにすること、及び特性メタ感情を変数に加え、抑うつと認知との関係に及ぼす感情特性の影響について検討することを目的とし、Rusting (1998) が提唱した 3 つのアプローチから実験的検討を行った。従来のアプローチによる検討からは、抑うつにおいてポジティブな無意識的处理バイアスが認められ、研究 4 とほぼ同じ結果が得られた。このことから一般大学生における軽度の抑うつはポジティブな無意識的处理を促進する可能性が高いことが考えられた。次に調整的アプローチによる検討の結果、特性メタ感情の中でも、感情を軽視せずに感情体験をそのまま受け止めようとする傾向が高い場合に、抑うつが高いとポジティブな無意識的处理が促進されネガティブな意識的处理が抑制される、すなわちポジティブな認知バイアスが無意識的にも意識的にも生じ得ることが示唆された。この感情を軽視しない傾向が気分調整的に働き、抑うつにおけるポジティブ・バイアスを生じさせる可能性があると考えられる。最後に媒介的アプローチによる検討の結果、媒介モデルは成立しないことが示唆された。

以上、第Ⅲ部では従属変数である認知的処理に主に焦点を当て、さらに特性メタ感情という感情特性がどのように影響しているか検討を行い、抑うつは概念的な認知的処理に無意識的にも意識的にもバイアスを生じさせ得ること、そのバイアスの生起に感情特性が調整的役割をもっている可能性があることが示唆されたといえる。

第Ⅳ部

総合考察

第12章 本研究の総括と今後の課題

第1節 本研究で得られた知見の要約

(1) 第 I 部において明らかになった点

第 I 部では、抑うつと認知に関する基礎理論について、先行研究の概観、理論の整理を行い、問題を提起した。

第 1 章では、Beck や Teasdale の抑うつの認知理論についてまとめ、それが認知行動療法の基礎理論となっていることについて述べた。また、認知心理学などの実験心理学領域における認知-感情研究から見出された気分一致効果は、抑うつの悪循環に関わることが示されてきており、このような基礎的な心理学における知見や理論を取り入れる形で抑うつの認知理論も発展を続けていることが明らかとなった。

第 2 章では主として認知心理学分野において数多く研究されてきた気分一致効果の基礎的な研究について概観した。独立変数の操作方法によって分類し、それぞれの方法及び問題点・利点について整理した。また、気分一致効果を説明する初期の代表的な理論についてまとめ、これらから研究結果や、理論から予測される現象とは反対の現象が示されている問題の指摘を行った。さらに、気分一致効果の生起しにくい条件と気分不一致効果について、これまでの知見や見解を整理した。

気分一致効果が生起しにくい条件としては、①検索過程、②ポジティブ-ネガティブなど一次元で捉えた場合、③自動的処理、④ネガティブ気分、などが示された。気分不一致効果の生起に関しては、気分調整の働きの影響、個人の有する自己複雑性の影響、パーソナリティなどの特性が関係している可能性が示唆された。そしてこのように気分一致・不一致効果の生起に影響すると考えられる要因として、①自己関連づけ処理と情報の自己関連性、②独立変数（気分、抑うつなど）の扱い方の違い、③特性の交絡、の 3 つの可能性を指摘した。このような現象の説明を試みる理論も新たに提唱されてきているが、なお説明できない現象が多く認められていることから、理論のさらなる修正や拡張、もしくは新たな理論の構築の必要性があると考えられた。

第3章では抑うつにおけるネガティブな認知に関して先行研究を整理した。特に抑うつにおける気分一致効果研究においては、現在、認知の無意識的側面と意識的側面への抑うつの影響の違いが中心的な論点のひとつであることが明らかとなった。そこで認知心理学における無意識的側面と意識的側面に関して、潜在記憶と顕在記憶の区分に着目し、その測定方法や見出されている現象、理論的説明についてまとめた。次に臨床心理学における認知の無意識的側面と意識的側面に関して、認知行動療法での無意識と意識との関連を中心に論じた。そして、抑うつにおける認知の無意識的側面のバイアス、具体的には潜在記憶バイアスに関する先行研究を概観した。先行研究の結果は一貫しておらず、さらに記憶課題において求められる処理の違い（概念駆動型、データ駆動型）に着目することが必要であることが示された。このように一貫しない研究結果に関して、現時点でいくつかの説明やモデルが提唱されているが、どのように説明するかについては現在もなお議論の分かれているところでもあり、さらに知見を重ね、モデルの修正・拡張や新たな説明モデルの構築を行う必要があることが明らかとなった。

以上の検討から、第4章では本研究の目的と意義が示された。抑うつにおける認知バイアスの生起メカニズムを明らかにすることを目的とし、独立変数の問題として抑うつ気分と症状との違い、従属変数の問題として認知の無意識的過程と意識的過程への影響の違いをそれぞれ検討することとした。また調整・媒介的關係に関わる変数である可能性としての感情特性の影響の検討を行うこととした。この目的が明らかになることにより、基礎的研究への意義、臨床的研究への意義、そして心理臨床実践への意義があると考えられた。

(2) 第Ⅱ部において明らかになった点

第Ⅱ部では自己関連的な認知における気分一致効果について、3つの研究を通し検討を行った。各章の要約は第Ⅱ部の要約で述べた通りであるので、ここでは明らかになった点を中心に述べる。

気分一致効果の追試的検討（研究1）では、実験的な気分誘導を行い、気分が物語の符号化・検索に及ぼす影響を検討した。結果、ポジティブな気分では気分一致効果が生起せず、従来見出されてきた現象とは逆の非対称的な効果が

生じた。自己関連づけ処理が特に抑うつにおける気分一致効果の生起に必要な条件である可能性が高いことが示唆された。

この考察をふまえ、従属変数として自己関連的な認知を取り上げることとし、独立変数の影響の違いを研究 2、研究 2 の再分析、研究 3 で検討した。これらの検討の結果、単なる抑うつ気分だけでは自己関連的な認知のネガティブ・バイアスは生じにくく、敵意などのネガティブな感情の同時生起や覚醒度の低い感情が伴うこと、ポジティブな感情の低下が生じていることが、抑うつにおける気分一致効果を生起させるのではないかと考えられた。これらは抑うつ症状における気分の特徴であるとも考えられ、したがって気分誘導アプローチと個人差アプローチとでは結果が異なるのではないかということが示唆された。

(3) 第Ⅲ部において明らかになった点

第Ⅲ部では、4 つの研究を通し、無意識と意識の違いに着目して抑うつにおける認知バイアスを検討した。

主として無意識的処理が反映されると考えられる潜在記憶への抑うつの影響について、まず概念駆動型潜在記憶テストとデータ駆動型潜在記憶テストを用いて検討を行った結果（研究 4）、データ駆動型テストにおいては抑うつの影響が認められず、抑うつは概念的・意味的処理に影響を及ぼすとする Watkins らや Wisco の主張が支持されることが示唆された。しかし研究 4 の概念駆動型テストで抑うつにおいて生じたバイアスは気分不一致的なポジティブなバイアスであり、ここには抑うつの重篤性の違いが影響している可能性が推察された。

研究 5 で抑うつの重篤性の潜在・顕在記憶への影響を検討した結果、顕在記憶では抑うつの影響は認められず、準臨床的抑うつが顕在記憶に及ぼす影響は弱いものと考えられた。潜在記憶に関しては、バイアスの有無は重篤性によって異なることが示唆され、無意識的処理・意識的処理の寄与の程度の影響やネガティブな状態を低減しようとする感情特性などの抑うつ以外の要因が影響している可能性が考えられた。

研究 6 では認知課題における刺激の吟味と課題の検討を行い、この課題を用いて研究 7 では、抑うつにおける認知的処理バイアスを過程分離手続きによって実験的に検討した。また、調整・媒介可能性が考えられる変数として特性メ

タ感情を加え、Rusting (1998) の提唱した 3 つのアプローチから分析を行った。従来のアプローチによる分析では、軽度抑うつにおける記憶の自動的利用に研究 4 と類似したポジティブ・バイアスが生じ、軽度の抑うつはポジティブな無意識的处理を促進する可能性がさらに示唆された。調整的アプローチによる分析からは、感情を軽視せず感情体験をそのまま受けとめようとする傾向が調整変数として働いていることが示唆され、これが抑うつにおいてポジティブ・バイアスを生じさせている可能性が考えられた。媒介モデルは支持されなかった。

以上の、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部における検討から、一般大学生を対象とした場合、一貫した傾向は示されず、独立変数である抑うつの質や程度、及び従属変数である認知の無意識的・意識的側面の違いによって、認知バイアスが認められたり認められなかったり、あるいはポジティブなバイアスであるかネガティブなバイアスであるかが異なってくることを、またそこに感情特性が調整的に関与している可能性が考えられる。次節ではこれら点を整理し、考察する。

第2節 抑うつにおける認知バイアスに関する臨床心理学的考察

本研究では、抑うつにおける認知バイアスに関して、第Ⅱ部では独立変数に焦点を当て、第Ⅲ部では従属変数及び調整変数に焦点を当てて検討した。また結果として、ネガティブ・バイアスが生じる場合もあればポジティブ・バイアスが生じる場合もみられた。本節では独立変数の問題と従属変数の問題それぞれにおける考察、及び調整変数に関する考察を行う。

(1) 独立変数（気分及び抑うつ）の問題に着目して

第Ⅱ部では、実験的な気分誘導によって喚起された一時的気分、及び自然発生的な一時的気分、尺度によって測定・分類された抑うつ症状の影響について検討した。

① 一時的気分の影響

実験的に誘導された一時的気分の影響に関しては、研究1の物語記憶ではネガティブ気分においてネガティブな記憶が促進されるという気分一致効果が認められたが、ポジティブ気分の影響は認められなかった。また研究2の実験2においては、自伝的記憶の想起と自己記述性評定を認知課題としたが、いずれも音楽の聴取によって実験的に誘導された気分の影響は認められないという結果であった。すなわち、ポジティブ気分の影響はどちらの研究においても認められておらず、研究1の物語記憶においてネガティブ気分がネガティブ記憶を促進する気分一致効果のみが認められたといえる。

研究1と研究2(実験2)の違いは、第一に、実験的な気分誘導によって喚起された気分状態であると考えられる。研究1では実験1・2とも多面的感情状態尺度の“抑鬱・不安”“活動的快”で群間差が認められた。しかしながら研究2では“抑鬱・不安”で群間差が認められたのみであった。すなわち“活動的快”に代表されると考えられるポジティブ気分において差が無かったといえる。このことから研究1でのみネガティブ気分で気分一致効果が認められたのは、ネガティブ気分の喚起だけではなく、ポジティブ気分の低下が伴ったことによる可能性が高いのではないかと考えられる。

第二に、認知課題の違いによることが考えられる。研究1の物語記憶では、研究2の自伝的記憶の想起と特性形容語の自己記述性評定に比べ、その内容の性質から、自己に関連づけて処理しようとする認知的努力が高かったのではないかと考えられる。ポジティブな気分が自動的、直接的に認知過程に影響するのに対し、ネガティブな気分は自己関係的な情報の処理を媒介として認知過程に影響する可能性があることが示唆されている(川瀬, 1992)ことを踏まえると、より努力的に自己に関連づけようとする深い処理を要すると考えられる物語記憶において、ネガティブな気分の影響が認められたのではないだろうか。

次に自然発生的な気分の影響について、自己記述性評定を対象とした研究2の再分析からは、刺激がポジティブ語であるかネガティブ語であるかで気分の影響は異なっていたが、“敵意”及び“活動的快”の影響はともに認められていた。“抑鬱・不安”の影響はみられず、このことから抑うつ的な気分のみが一時的に喚起されたとしても、認知への影響は低いことが考えられる。また、研

究 2 (実験 2) の結果を合わせて考えると、実験的に誘導した気分は特殊な状態であるという可能性は低いと考えられ、特にポジティブ気分の喚起もしくは抑制が気分一致的なバイアスに影響を及ぼしやすいことが示唆される。このことは、研究 3 において自伝的記憶の主観的望ましさに“活動的快”“親和”のみが関係していたことからいえるのではないかと考えられる。

以上、一時的な気分の影響については、抑うつ気分のみが喚起しているような状態では認知への影響はみられにくく、ポジティブ気分の喚起もしくは抑制が大きな役割を果たしていることが示唆される。うつ病や抑うつ症状の特徴のひとつに、喜びの喪失や、ポジティブな気分の低下が指摘されているが (e.g., 福井, 1997), 抑うつ者におけるネガティブな認知という特徴についても、抑うつ的な気分や悲しみの直接的影響というよりは、このポジティブな気分の低下の方がより大きく影響している可能性があるだろう。加えて、抑うつは敵意と関係が高いことが示されてもおり (e.g., 三橋・田上, 2012), 敵意が伴う場合には、ネガティブな認知が促進されやすいと考えられる。さらに、自己関連づけ処理がどの程度求められるか、認知的努力の高さという点も、一時的な気分の影響の違いに関わっている可能性が示唆される。実験的な気分誘導を行っている多くの先行研究でポジティブな気分の気分一致効果が見出されてはいるが、このことについては、ポジティブな気分が喚起されており、さらに自己関連づけ処理の認知的努力がそれほど高くはない、という条件が満たされているのではないかと考えられる。

② 抑うつ症状の影響

抑うつ尺度 (BDI) によって測定・分類した抑うつ症状の影響を検討した研究 2 では、自伝的記憶の想起と形容語の自己記述性評価の課題によって影響は異なることが示された。自伝的記憶の想起では非抑うつ群ではポジティブな想起が促進されたが、抑うつ群では想起のポジティブ-ネガティブの内容に差が認められず、非対称的な気分一致バイアスが示されたといえる。一方、形容語の自己記述性評価においては、対称的な気分一致バイアスが認められた。

自伝的記憶の想起に関して非対称的なバイアスが生じたことについては、前述の自己関連づけ処理の高さもしくはその認知的努力の程度が影響しているこ

とが考えられる。今回の課題の教示は「過去 1 か月間に生じた出来事」の想起を求めるものであり、時間が主な手がかりとなり、自己を手がかりとする程度は低かったことが考えられ得る。したがって、抑うつが高い場合にネガティブな想起が促進されなかったのではないかと考えられる。一方、研究 2 の非抑うつ群-抑うつ群間では、多面的感情状態尺度の否定的感情・肯定的感情に関する 6 下位尺度全てで有意差が認められており、“活動的快”においても差がみられている。したがって、ポジティブな気分が喚起されていたと考えられる非抑うつ群で、気分一致的なポジティブ・バイアスが生じたのではないかと考えられる。加えて研究 3 からは、気分の影響を統制した場合には自伝的記憶の主観的望ましさに抑うつの影響はみられないことが示された。逆に抑うつを統制した場合、ポジティブな気分の影響は有意なままであり、ポジティブ気分が自伝的記憶の想起には中心的に影響を及ぼしている可能性が示唆される。

形容語の自己記述性評定で対称的な気分一致バイアスが認められたことについては、ポジティブ気分の喚起・低下がみられていたことによる影響が大きいのではないかと考えられる。加えて研究 2 の再分析から、抑うつはネガティブ語の評定に影響を及ぼすが、ポジティブ語の評定には影響を及ぼさないことが示された。この結果を踏まえると、抑うつは自己のネガティブな側面に注意を向けさせ、ネガティブな処理を促進させるが、自己のポジティブな側面に関しては影響を及ぼさず、ポジティブな情報の処理にはポジティブな気分が高い状態か低い状態かが影響するのではないかと考えられる。ただし、抑うつ症状を有する者はポジティブ気分の低下を伴っていることが多いことから、結果として対称的な気分一致的バイアスが認められるのではないかと考えられる。

③ 独立変数の影響に関する全体的考察

以上より、気分一致バイアスがみられるかどうかには、第一にポジティブ気分の喚起もしくは低下が関わっていることが示唆される。単に抑うつ的な気分が喚起しているだけでは認知のネガティブ・バイアスは生じにくく、ポジティブ気分の低下を伴うことで認知バイアスが生じるのではないかと考えられる。前述の通り、抑うつ症状においては、ポジティブ気分の低下が特徴のひとつともされており、抑うつ状態では敵意をも含むネガティブ気分の喚起やポジ

イブ気分の低下が同時に生じていると考えられるために、ネガティブな認知バイアスが認められやすいのではないだろうか。

第二に、認知課題において自己関連づけ処理の認知的努力がどの程度求められるかが抑うつにおける認知バイアスに影響している可能性が示唆される。少なくとも自己関連づけ処理の認知的努力が行われない場合や低い場合には、認知バイアスは生じにくいのではないかと考えられる。ただし、本研究ではこの点について直接比較検討しておらず、今後実証することが必要であるだろう。

(2) 従属変数の問題に着目して

第Ⅲ部では、認知の無意識的側面と意識的側面との違いに着目し、尺度によって測定・分類された抑うつが認知バイアスに及ぼす影響を検討した。ここでは無意識的側面、意識的側面にみられた現象についてそれぞれ考察する。

① 無意識的側面への抑うつの影響：潜在記憶及び記憶の自動的利用におけるバイアス

研究4で概念駆動型テストとデータ駆動型テストを用いて抑うつにおける潜在記憶バイアスを検討した結果、データ駆動型においてはバイアスが示されなかった。この結果は、Watkins (2002) や Wisco (2009) の考えをある部分支持するものであると考えられ、抑うつは概念的処理や精緻化処理に影響を及ぼすことが示唆される。Watkins et al. (2000) が述べているように、概念的処理は無意識的なバイアスを生じさせる必要条件である可能性が高いといえよう。

しかしながら、概念駆動型潜在記憶テストを用いた研究4(実験1)、研究5、過程分離手続きを用いて記憶の自動的利用への抑うつの影響について検討した研究7は一貫しない結果となった。研究4(実験1)、研究5、研究7の結果をTable 12.2.1に整理した。

軽度抑うつの影響に関しては、研究5のみがネガティブ・バイアスであり、他の2研究ではポジティブ・バイアスが示されるという結果となった。特に興味深いのは、前述したように研究4と研究7の結果の形が非常に類似しているという点である。研究4の結果のグラフ (Figure 8.2.5; p.134) と研究7のグラフ (Figure 11.3.1; p.186) を見ると、共に抑うつにおいてポジティブ語の産出・

Table 12.2.1
認知の無意識的側面への抑うつの影響についての本研究のまとめ

研究 ^a	BDI 平均 (SD)	抑うつ 水準	方向づけ 課題	刺激 ^b	テスト課題	認知 バイアス ^c
研究 4 (実験 1)	18.54 (3.60)	軽度	使用頻度 評定	感情語・ 特性語	連想 (1 対 4) ^d	ポジティブ
研究 5 軽度	16.68 (2.11)	軽度	望ましさ 評定	形容語	連想 (1 対 1)	ネガティブ
中重度	26.44 (5.09)	中～ 重度	望ましさ 評定	形容語	連想 (1 対 1)	なし
研究 7	17.88 (3.76)	軽度	自己記述 性評定	特性語	単語検索	ポジティブ

^a 研究 4, 5 は潜在記憶研究, 研究 7 は過程分離手続きを用いた研究であった。 ^b 感情語: 感情を表す語, 特性語: 性格表現用語, 形容語: 感情語や特性語の区別はないが, 特性語はほとんど含まれていなかった。 ^c ポジティブ: 抑うつにおける気分不一致的なポジティブな認知バイアスが生起したことを示す。ネガティブ: 抑うつにおける気分一致的なネガティブな認知バイアスが生起したことを示す。 ^d 1 対 4: 1 刺激に対して 4 反応を求めた。1 対 1: 1 刺激に対して 1 反応を求めた。

寄与率がほかに比べて際立って高くなっており, 非抑うつにおけるポジティブ語, ネガティブ語及び抑うつにおけるネガティブ語の産出・寄与率はほぼ同じ水準である。このことから, 軽度抑うつにおいてポジティブな処理が促進される可能性が高いといえるのではないかと考えられる。この理由としては, ここまで度々論じたように, 気分調整の働きがひとつに考えられ得る。気分一致効果に関する先行研究では主に意識的な処理において気分不一致効果が示されてきたが, 無意識的な処理においても, そのような働きがなされることが示唆されよう。

研究 5 では異なる結果が得られたが, 研究 4, 7 との大きな違いとして, 先に論じたように, 用いた刺激の違いが考えられる。軽度の抑うつ状態においては, 性格や感情に関する単語を用いた場合はポジティブなバイアスが, そうではない場合にはネガティブなバイアスが生じるのではないだろうか。すなわち, 性格や感情に関する刺激を用いた場合には, 無意識的に自己に関連づけるような処理が生じやすく, そのような場合に, 軽度抑うつにおいてポジティブなバイアスが生じるということが考えられる。対象が一般大学生であったことを踏まえると, 準臨床的な抑うつ者においてはこれ以上状態を悪化させないようにす

るための認知的な機制が働き、無意識的にポジティブな処理が促進されるという可能性がうかがわれる。一方、性格や感情など自己に関連しないような刺激を用いた場合には、意味的概念的処理はなされているためネガティブなバイアスが生じるが、自己には関連づけにくいことから、調整しようという機制が働かず、気分一致的な方向でのバイアスとなるのではないかと推察される。

中等度以上の抑うつに関しては研究 5 でしか対象としておらず、一般化することはできないが、軽度抑うつから少し重い抑うつに進むと、いったん認知バイアスは消失する可能性がうかがわれる。ひとつには、抑うつが重くなってくると状態を緩和・調整しようとするような無意識的働きが機能しなくなり、ポジティブなバイアスが生じなくなるのではないかと推察される。あるいは逆に、準臨床的な抑うつにおいてはある程度重い水準になると、それ以上の状態に進まないような機制として、無意識に行われる意味的概念的なネガティブな処理が促進されなくなり、ネガティブなバイアスが生じないのかもしれない。本研究では中等度以上の抑うつについて十分検討しておらず、このような重篤性による影響の違いに関しては、他の要因の交絡の可能性も考慮し、研究を蓄積していくことが必要であるだろう。

以上より、無意識的処理に及ぼす抑うつの影響について、第一に概念的な処理や意味的な処理が行われないとバイアスは生じにくいこと、第二に自己関連づけ処理の程度が関与している可能性があること、第三に抑うつの重篤性によって影響が異なり得ることが示唆される。

② 意識的側面への抑うつの影響: 顕在記憶及び記憶の意図的利用におけるバイアス

自由再生を行った研究 5 と過程分離手続きを用い意図的利用の寄与率への抑うつの影響を検討した研究 7 について Table 12.2.2 にまとめた。すべてにおいて認知バイアスは認められなかった。Matt et al. (1992) の記憶再生に及ぼす抑うつの影響に関するメタ分析において示されているように、準臨床的抑うつでは意識的処理において気分一致バイアスは認められにくいと考えられる。

この理由として、ひとつには先に論じたように、準臨床的な抑うつ状態ではポジティブな気分が低下していない可能性があり、そのことが気分一致的なネ

Table 12.2.2
認知の意識的側面への抑うつの影響についての各研究のまとめ

研究 ^a	BDI 平均 (SD)	抑うつ 水準	方向づけ 課題	刺激 ^b	テスト課題	認知 バイアス
研究 5 軽度	16.68 (2.11)	軽度	望ましさ 評定	形容語	学習語の 自由再生	なし
中重度	26.44 (5.09)	中～ 重度	望ましさ 評定	形容語	学習語の 自由再生	なし
研究 7	17.88 (3.76)	軽度	自己記述 性評定	特性語	単語検索	なし

^a 研究 5 は潜在記憶研究，研究 7 は過程分離手続きを用いた研究であった。^b 特性語：性格表現用語を示している。形容語：特性語はほとんど含まれていなかった。

ガティブ・バイアスを生じさせないのではないかと考えられる。また，第 I 部で気分一致効果の非対称性として，ネガティブな状態では認められにくい点に関する先行研究の見解をまとめたが，主として気分調整の動機づけからこれまで説明されている。この説明にもとづくと，準臨床的な抑うつ状態は気分を調整しようという働きが生じており，そのことによって認知の意識的側面においてネガティブなバイアスが生起しないという可能性が考えられよう。

さらに Matt et al. (1992) は準臨床的抑うつにおいてネガティブな記憶バイアスがみられないのは抑うつリアリズムとよばれる現象を支持するものであると考察している。抑うつリアリズムとは，抑うつ的な人の認知はネガティブにゆがんでいるのではなく正確であり，むしろ非抑うつ的な人のほうがポジティブな認知のゆがみがあるというものである (Twaddle & Scott, 1991 坂本訳 1996)。Matt et al. (1992) は，この抑うつリアリズムは準臨床的抑うつに限られる現象であり，臨床的な抑うつになると認知が抑うつ気分の持続に影響しネガティブなバイアスが生じると論じている。この見解にもとづけば，抑うつにおける意識的処理におけるネガティブな認知バイアスは慢性的な抑うつ状態が持続している臨床的な抑うつ特有の現象であると考えられる。

以上より，準臨床的抑うつにおいて意識的な認知的処理バイアスは生じにくく，抑うつにおけるネガティブなバイアスは臨床的な抑うつに限られる現象である可能性が示唆されるが，今後さらなる検討が必要であるだろう。

③ 従属変数の違いに関する全体的考察

従属変数の違いに着目した場合、抑うつにおける認知バイアスの生起に関して次の3点が明らかになったと考えられる。

第一に記憶における無意識的处理に及ぼす抑うつの影響に関しては、まず意味的概念的处理が行われることがバイアスの生起の必要条件であると考えられる。加えて自己に関連づけやすい刺激や手続きが用いられた場合、準臨床的な抑うつの中でも軽度の抑うつにおいて無意識的な気分調整が働きポジティブなバイアスが生じることが示唆される。中等度以上の抑うつに関しては、重篤性の違いの影響の可能性は示唆されたものの、本研究では十分な検討が行われたとはいえず、今後実証的に検討することが必要であるだろう。

第二に記憶における意識的处理に及ぼす抑うつの影響に関しては、これまでの先行研究の多くで示されてきたように準臨床的な抑うつでは認知バイアスは生じにくいと考えられる。気分一致的なネガティブな認知バイアスは、慢性的に抑うつ状態が続き、ポジティブ気分の低下を伴ったり、気分を調整しようとする動機づけが働かなかったりするような、臨床的抑うつにおいて生じる現象なのではないかと考えられる。

以上から、第三に無意識的处理と意識的处理への抑うつの影響の違いについて、準臨床的な抑うつは意識的处理には影響を及ぼさないが、軽度の抑うつ状態で自己に関連するような無意識的处理にポジティブなバイアスを生じさせることによって状態の回復が図られることが考えられたことから、まず無意識的な認知的处理に軽度の抑うつは影響を及ぼし、抑うつ状態が重くなってくると意識的处理に影響するようになっていくのではないかと考えられる。

(3) 調整変数の問題に着目して：感情特性の影響と役割

感情特性が抑うつにおける認知バイアスにおいて調整的役割を果たしているのではないかということについて、研究7で検討を行った。本研究では特性メタ感情を調整変数として取り上げたが、中でも向山（1998）で見出された因子である“感情の重視”，すなわち感情を軽視せずに感情体験をそのまま受けとめようとする傾向が、抑うつと認知との間を調整している可能性が示唆された。具体的には、特性メタ感情の“感情の重視”が高い場合に、抑うつにおいてネ

ガティブな意識的処理が抑制され、ポジティブな無意識的処理が促進されることが結果から示唆された。研究7は軽度抑うつの影響を検討しているが、同じく軽度抑うつを対象とした研究4でもポジティブな潜在記憶バイアスが認められていることを踏まえると、ここまで論じてきたように軽度の抑うつ状態ではポジティブな無意識的処理が促進される可能性が高いと考えられる。そして特に自身の感情体験をありのままに受けとめようとする感情体験に対する態度・傾向を有する場合にポジティブな無意識的処理が行われやすいということが示唆される。

このような自身の感情体験をありのままに受けとめようとする態度は、近年注目されている第三世代の認知行動療法で重視されている体験に近いものと考えられる。熊野（2012）によれば、第三世代の認知療法ではほぼ共通して、マインドフルネス（mindfulness）とアクセプタンス（acceptance）が重視されているという。マインドフルネスとは、「今の瞬間の現実につねに気づきを向け、その現実をあるがままに知覚して、それに対する思考や感情に囚われないでいる心のもち方や存在のありよう」（熊野, 2012, p.25）であり、アクセプタンスとは「嫌悪的な私的出来事に気づきながら、それと自分（観察している主体）との関係性を変えるための行動をしないでいること」「今この瞬間の私的な体験の世界に対して、自動的に心を閉じてしまわないように意図的に努力すること」（熊野, 2012, p.28）とされている。特性メタ感情の“気分の重視”はこれと全く同じ状態を指しているわけではないが、少なくとも感情を見ないようにするのではなく、また感情を変えようとするのではなく、そのまま体験を受けとめようとするような点においては近いものがあるのではないだろうか。このような、特に感情の体験に対して開かれている態度が、抑うつ状態を悪化させずに、軽度のままの状態を維持したり、あるいは自然と解消に向かったりすることにつながる可能性が考えられよう。

従来の感情特性の調整的役割に関する先行研究では、たとえば自尊感情やネガティブ気分調整期待が取り上げられ、主として認知の意識的側面に及ぼす気分や抑うつの影響を調整するものとして検討されている。第I部で論じたように、たとえば Smith & Petty（1995）では、ネガティブな気分一致効果は低自尊感情者に特徴的であり、高自尊感情者では気分不一致効果がみられることが報

告されている。また自尊感情の影響よりは弱いものの、ネガティブ気分調整方略が成功するかの期待の違いにおいても同様に、期待が低い場合には気分一致効果がみられるが、期待が高い場合には気分不一致効果がみられることも示されている。

本研究においては、低“気分の重視”者では気分一致的なバイアスは認められてはいないが、このような感情特性が気分不一致的なポジティブ・バイアスを生じさせるという点では Smith & Petty (1995) と同様の結果が示されたと考えられる。ただし、Smith & Petty (1995) が検討したのは意識的処理への影響であり、一方本研究では、状態を変えようとするよりは、そのまま無視せず受けとめようとする態度が、無意識的な処理に気分不一致的なバイアスを生じさせていたと考えられる。このように、認知の意識的側面に対しては状態を変えようとする傾向が、無意識的側面に対してはそのまま状態を受けとめようとする傾向が、それぞれポジティブな認知バイアスを生じさせるというように、認知の意識的側面と無意識的側面とで、調整する特性が異なる可能性も考えられるだろう。

第3節 抑うつにおける認知バイアスの図式化

本研究では一般大学生を対象とし、一時的な気分状態及び抑うつ状態が認知に及ぼす影響について検討した。条件や課題の違いによって異なる結果が得られたが、概して非臨床的・準臨床的抑うつでは認知のネガティブ・バイアスは生起しにくいことが示されたと考えられる。すなわち、通常的生活を送っていると考えられる一般大学生における準臨床的な抑うつ状態では、ネガティブな気分一致的な認知が促進され悪循環が生じるというよりは、状態の調整・軽減を図るための認知的処理がとられることが多いと考えられる。本研究の結果から、準臨床的な抑うつの影響に関しては、自己関連づけ処理が行われる場合、軽度の抑うつ状態でポジティブな無意識的処理が促進されることが示唆される。

本研究の結果と、Forgas ら (e.g., Forgas, 2000) や Beevers (2005) が提唱しているモデルをあわせると、無意識的処理と意識的処理の2つの認知的処理過程

のはたらきによって、気分調整が行われたり、その結果として抑うつ状態が改善したり、逆に抑うつと認知との悪循環が生じ抑うつ状態が悪化したりすることが示唆される。本研究の主な結果と、先行研究の知見及びモデルにもとづき、準臨床的な抑うつにおける自己関連づけ処理が行われた場合の無意識的・意識的な認知的処理バイアスについて Figure 12.3.1 のような図式化を行った。

まず非抑うつ状態において、何らかの外的要因の影響などにより一時的にネガティブ気分が高まりポジティブ気分が低下すると、認知の意識的側面において気分一致的なネガティブ・バイアスが生じ、これが軽度の抑うつ状態をもたらすと考えられる。

軽度の抑うつ状態では、ポジティブな無意識的処理がなされることで状態の回復が図られると考えられる。そしてここには、感情体験をありのまま受けとめる傾向が作用しており、この傾向が高い場合にはより無意識的なポジティブ・バイアスが促進されるが、低い場合にはこの処理は促進されない可能性が考えられる^{注 12-1}。

中から重度の抑うつ状態に関しては、Forgas らのモデルにもとづき、抑うつ状態がある閾値を超えると、ポジティブな意識的処理バイアスが生じ、状態の緩和・軽減が図られると考えられる。このとき気分調整動機が働いていることが想定され、この傾向が高い場合にポジティブな意識的処理が促進されるが、この動機が働かない場合には、ポジティブな認知バイアスは生じず、抑うつがそのままの状態にとどまるか、もしくは悪化の方向に向かうことが予想される。この時重要になるのが無意識的処理の働きであり、Beavers (2005) のモデルにもとづくと、ここで無意識的にネガティブな処理が促進されると悪循環が生じ、うつ病など臨床的な抑うつにつながるのではないかと考えられる。この見解に関しては、Phillips et al. (2010) のメタ分析からも示唆されている点である。

以上、本研究で行った図式化は、準臨床的な抑うつにおいて、認知の無意識的側面と意識的側面の相互のはたらきによって、抑うつ状態の回復、及び持続・悪化が説明されるのではないかというものである。実証が必要な部分も数多く残されており、今後さらなる研究の蓄積が必要であるだろう。

注 12-1 自己への関連づけがなされない単なる意味的な処理においては、ネガティブ・バイアスが生じ得ると考えられ、これが抑うつを持続・悪化に導くと考えられる。

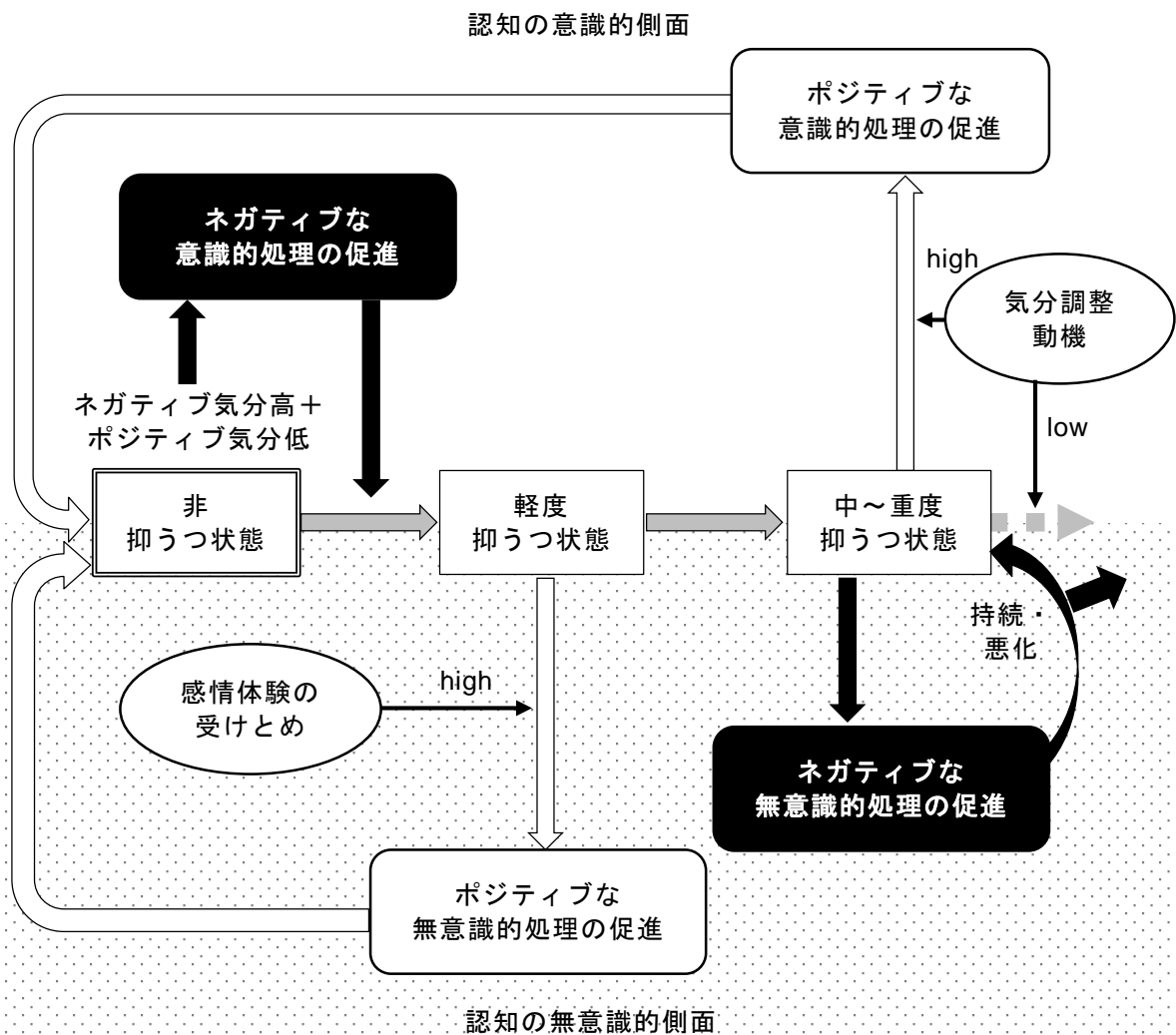


Figure 12.3.1. 準臨床的抑うつにおける記憶の無意識的・意識的処理の図式化。

注) 四角□は準臨床的な抑うつの状態（非抑うつ状態は二重線），楕円○は感情特性，角丸四角◻は認知的処理バイアスを表している。黒色で示しているのは，抑うつ状態の持続・悪化につながるネガティブな認知的処理，及び処理と抑うつとの影響関係（**➡**），白色で示しているのは抑うつ状態の軽減・緩和・回復につながるポジティブな認知的処理，及び処理と抑うつとの影響関係（**⇨**）である。また灰色太矢印➡は抑うつ状態の悪化・進行を表し，さらに臨床的抑うつへの移行を破線で示している。細矢印→は感情特性による調整を表し，細矢印に付している high, low は，その特性の傾向が高い場合と低い場合を指す。

“非抑うつ状態”の上にある“ネガティブ気分高＋ポジティブ気分低”は，非抑うつ状態時に一時的に感じた場合に，ネガティブな意識的処理が促進され，軽度の抑うつ状態に移行する可能性があることを示している。

図の上半分は認知の意識的側面を，下半分の網掛け部分は無意識的側面を示している。なおこの図は自己関連づけ処理が行われる場合を示したものである。

第4節 臨床への示唆及び今後の課題

(1) 臨床への示唆

本研究は、一般大学生を対象に抑うつと認知との関連について検討を行い、前節の図式化を行った。この図式から、心理臨床実践に対して次の3点が示唆される。

第一に、軽度抑うつ状態において、感情体験をそのまま受けとめる傾向が高いことがポジティブな無意識的認知を促進し得るという点に着目した援助である。本研究では特性メタ感情に着目し、その中の“感情の重視”が調整的に影響を及ぼしていることが示されたが、先に論じたように、この傾向は認知行動療法におけるマインドフルネスやアクセプタンスとつながる部分があると考えられる。すなわち、自分自身のあるがままの体験を受けとめ回避しないこと、無理に変えようとしないことが、軽度の抑うつ状態からの回復を図り、悪化を予防すると考えられるのではないだろうか。したがって、やや心身の不調が感じられるような段階でそれ以上の悪化を防ぐために、たとえば呼吸法や瞑想法などマインドフルネスのトレーニングを行うことが効果的であることが示唆される。

第二に、準臨床的な抑うつの中でもやや状態が重くなった場合には、気分を調整しようとする動機を高めることがポジティブな意識的処理を促進し、状態の回復が図られることが主として先行研究から示唆される。このことからひとつには気分調整のスキルを高めることが有用と考えられ、たとえば情動焦点型のコーピングなどを用いることができるようなストレスマネジメントのトレーニングを行うことや気晴らし（distraction）を行うことが、回復の助けとなることが考えられる。ただし、準臨床的抑うつであっても抑うつが持続した状態になってからのトレーニングは容易ではないと考えられ、ストレスマネジメントについては予防的に実践し、抑うつが持続している状態では休息をとることや他の活動に取り組むことを奨めるなど、気晴らしの活用の工夫が役立つのではないかと考えられる。気晴らしに関して寺澤・田上（2011）では、その有効性をいかに認知しているかが実行につながることを示唆している。したがって心理教育による介入も重要であるだろう。

以上、本研究で行った図式化にもとづき心理臨床実践の可能性について考察した。このように準臨床的な一般大学生における抑うつ状態への援助においては、ただ単に認知行動療法を用いれば効果的であるということではなく、抑うつ重篤性の違いによって介入の方法や焦点を変えることが有用であることが本研究の結果から示唆される。

最後に、本研究では一般大学生を対象としたが、感情体験をありのまま受けとめる傾向と気分を調整しようとする動機づけという感情特性を高めることが、認知的処理バイアスを調整することが示唆されたことから、上述のようなマインドフルネスとアクセプタンスのトレーニングや気晴らしなどの心理教育が、うつ病の予防においても効果的であるのではないかと考えられる。

(2) 今後の課題

本研究からは、準臨床的な抑うつにおける認知バイアスが図式化され、それにもとづき心理臨床実践への示唆を得た。しかしながら、まだ検討すべき課題は多く残されている。

第一に、最も大きな課題として考えられるのは、アナログ研究の限界として第Ⅰ部で述べた通り、うつ病の理解や援助にそのまま適用することは難しいという点である。抑うつ問題を広く捉えるためには、臨床群をも対象とした認知的処理に関する実証的研究が必要であるだろう。また抑うつ状態をどのように捉えるかという点に関しても、本研究では1つの自己報告式尺度の得点を基準にしたのみであり、抑うつ症状や状態が真に反映されているのかは確かではない部分も無いとはいえない。今後は、アナログ研究であるとしても、面接の実施や複数の尺度の使用など、多面的な抑うつ測定を行うことが望ましいと考えられる。

第二の課題は図式化した関係の実証とそれらを包括的に説明し得るモデルの構築であると考えられる。本研究では、実証的検討から得られた主要な結果と先行研究の知見・モデルから抑うつにおける認知バイアスに関する図式化を行ったが、実証されていない部分や、明確に描くことができていない部分も存在する。メカニズムをよりよく捉え、抑うつにおける認知の現象を説明し予測するためにも、条件を厳密に統制した上で、精緻な手続きによる実証が必要であ

るだろう。実証研究を蓄積し、それらから出された知見を包括的に説明することが可能なモデルを構築していくことが今後望まれる。

第三の課題は、本研究の知見や図式の日常・臨床場面への適用に関する点である。本研究の多くは要因を統制した実験室実験によるものであり、記憶課題を主として実施し、用いた刺激も単語が中心であった。日常生活における認知活動やふと頭にわいてくる自動思考への抑うつの影響にどの程度適用し得るか、さらなる検討が必要であるといえる。抑うつと自動思考や反すうなどより高次の認知との関連に関する研究は現在多く行われているが(e.g., 加曾利, 2009; 西川・松永・古谷, 2013; 義田・中村, 2007), 今後はより日常的・臨床的な認知を対象とした抑うつ研究の知見も統合し、抑うつの認知メカニズムに関する図式を再検討して、新たなモデル構築を目指していくことが必要であるだろう。

第四に、心理臨床実践に関する実証、すなわち介入研究の必要性が課題として挙げられる。本研究から示唆された心理臨床実践については、有用性や効果が考えられはするものの、検証されているものではない。今後は図式から導かれる介入についてプログラムを立て、実践的な研究を行い実証していくことが必要であるだろう。

以上、今後の課題として4点を挙げたが、これらを実証的に明らかにしていくことで、より一層の抑うつの理解、そしてより効果的な援助・治療が期待できるのではないかと考えられる。

引用文献

- Abramson, L. Y., Alloy, L. B., & Metalsky, G. I. (1988). The cognitive diathesis-stress theories of depression: Toward an adequate evaluation of the theories' validities. In L. B. Alloy (Ed.), *Cognitive processes in depression* (pp.3-30). New York: Guilford Press.
- 秋田 清 (1973). 形容詞 126 語の連想反応出現傾向 人文学 (同志社大学), 125, 63-102.
- 秋山 学・竹村 和久 (1994). 不快感情と関与が意思決定過程に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 34, 58-68.
- Albersnagel, F. A. (1988). Velten and musical mood induction procedures: A comparison with accessibility of thought associations. *Behaviour Research and Therapy*, 26, 79-96.
- 青木 孝悦 (1971). 性格表現用語の心理-辞典的研究—455 語の選択, 分類および望ましさの評定— 心理学研究, 42, 1-13.
- Bargh, J. A., & Tota, M. E. (1988). Context-dependent automatic processing in depression: Accessibility of negative constructs with regard to self but not others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 925-939.
- Baron, R. M., & Kenny, D. A. (1986). The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1173-1182.
- Barry, E. S., Naus, M. J., & Rehm, L. P. (2004). Depression and implicit memory: Understanding mood congruent memory bias. *Cognitive Therapy and Research*, 28, 387-414.
- Barry, E. S., Naus, M. J., & Rehm, L. P. (2006). Depression, implicit memory, and self: A revised memory model of emotion. *Clinical Psychology Review*, 26, 719-745.
- Bartlett, F. C. (1932). *Remembering: A study in experimental and social psychology*. London, UK: Cambridge University Press.
- Bazin, N., Perruchet, P., de Bonis, M., & Féline, A. (1994). The dissociation of explicit and implicit memory in depressed patients. *Psychological medicine*, 24, 239-245.

- Beck, A. T. (1976). *Cognitive therapy and the emotional disorders*. New York: International University Press.
- Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. (1979). *Cognitive therapy of depression*. New York: Guilford Press.
- Beevers, C. G. (2005). Cognitive vulnerability to depression: A dual process model. *Clinical Psychology Review*, 25, 975-1002.
- Blaney, P. H. (1986). Affect and memory: A review. *Psychological Bulletin*, 99, 229-246.
- Blaxton, T. A. (1989). Investigating dissociations among memory measures: Support for a transfer-appropriate processing framework. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 15, 657-668.
- Bower, G. H. (1981). Mood and memory. *American Psychologist*, 36, 129-148.
- Bower, G. H. (1991). Mood congruity of social judgments. In J. P. Forgas (Ed.), *Emotion and social judgments* (pp.31-53). Oxford: Pergamon Press.
- Bower, G. H., & Cohen, P. R. (1982). Emotional influences in memory and thinking: Data and theory. In M. S. Clark & S. T. Fiske (Eds.), *Affect and cognition* (pp.291-332). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bower, G. H., & Forgas, J. P. (2000). Affect, memory, and social cognition. In E. Eich, J. F. Kihlstrom, G. H. Bower, J. P. Forgas, & P. M. Niedenthal (Eds.), *Cognition and Emotion* (pp.87-168). Oxford: Oxford University Press.
- Bower, G. H., Gilligan, S. G., & Monteiro, K. P. (1981). Selectivity of learning caused by affective states. *Journal of Experimental Psychology: General*, 110, 451-473.
- Burt, D. B., Zembar, M. J., & Niederehe, G. (1995). Depression and memory impairment: A meta-analysis of the association, its pattern, and specificity. *Psychological Bulletin*, 117, 285-305.
- Clark, D. M. (1983). On the induction of depressed mood in the laboratory: Evaluation and comparison of the Velten and musical procedures. *Advances in Behaviour Research and Therapy*, 5, 27-49.
- Clark, D. M., & Teasdale, J. D. (1982). Diurnal variation in clinical depression and accessibility of memories of positive and negative experiences. *Journal of*

- Abnormal Psychology*, 91, 87-95.
- Clark, M. S., & Isen, A. M. (1982). Toward understanding the relationship between feeling states and social behavior. In A. H. Hastorf & A. M. Isen (Eds.), *Cognitive Social Psychology* (pp.73-108). Amsterdam, NL: Elsevier.
- Collins, A. M., & Loftus, E. F. (1975). A spreading-activation theory of semantic processing. *Psychological Review*, 82, 407-428.
- Conway, M. A. (1996). Autobiographical knowledge and autobiographical memories. In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory* (pp.67-93). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Conway, M. A., & Pleydell-Pearce, C.W. (2000). The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, 107, 261-288.
- Cunningham, M. R. (1979). Weather, mood, and helping behavior: Quasi experiments with the sunshine Samaritan. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1947-1956.
- Danion, J., Willard-Schroeder, D., Zimmermann, M., Grangé, D., Schlienger, J. & Singer, L. (1991). Explicit memory and repetition priming in depression. *Archives of General Psychiatry*, 48, 707-711.
- Denny, E. B., & Hunt, R. R. (1992). Affective valence and memory in depression: Dissociation of recall and fragment completion. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 575-580.
- Derry, P.A., & Kuiper, N. A. (1981). Schematic processing and self-reference in clinical depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 90, 286-297.
- Duclos, S. E., Laird, J. D., Schneider, E., Sexter, M., Stern, L., & van Lighten, O. (1989). Emotion-specific effects of facial expressions and postures on emotional experience. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 100-108.
- Ehrlichman, H., & Halpern, J. N. (1988). Affect and memory: Effects of pleasant and unpleasant odors on retrieval of happy and unhappy memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 769-779.
- Eich, J. E. (1980). The cue-dependent nature of state-dependent retrieval. *Memory and Cognition*, 8, 157-173.

- Eich, E., & Metcalfe, J. (1989). Mood dependent memory for internal versus external events. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 15, 443-455.
- Ellis, H. C. (1985). On the importance of mood intensity and encoding demands in memory: Commentary on Hasher, Rose, Zacks, Sanft, and Doren. *Journal of Experimental Psychology: General*, 114, 392-395.
- Ellis, H. C. (1990). Depressive deficits in memory: Processing initiative and resource allocation. *Journal of Experimental Psychology: General*, 119, 60-62.
- Ellis, H. C., Thomas, R. L., McFarland, A. D., & Lane, J. W. (1985). Emotional mood states and retrieval in episodic memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 11, 363-370.
- Erber, R., & Erber, M. W. (1994). Beyond mood and social judgment: Mood incongruent recall and mood regulation. *European Journal of Social Psychology*, 24, 79-88.
- Forgas, J. P. (1995). Mood and judgment: The affect infusion model (AIM). *Psychological Bulletin*, 117, 39-66.
- Forgas, J. P. (2000). Managing moods: Toward a dual-process theory of spontaneous mood regulation. *Psychological Inquiry*, 11, 172-177.
- Forgas, J. P., & Bower, G. H. (1987). Mood effects on person-perception judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 53-60.
- Forgas, J. P., & Ciarrochi, J. V. (2002). On managing moods: Evidence for the role of homeostatic cognitive strategies in affect regulation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 336-345.
- Forgas, J. P., & Moylan, S. (1987). After the movies: Transient mood and social judgments. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 13, 467-477.
- Frost, R. O., Graf, M., & Becker, J. (1979). Self-devaluation and depressed mood. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 958-962.
- 藤田 哲也 (1992). 単語完成はデータ駆動型テストといえるか 心理学研究, 63, 326-332.
- 藤田 哲也 (1994). 潜在記憶研究における単語完成課題をめぐる問題 心理学

- 評論, 37, 72-91.
- 藤田 哲也 (1996). 記憶における自動的処理と意図的処理—過程分離手続をめぐる問題について 京都大学教育学部紀要, 42, 73-89.
- 藤田 哲也 (1997). 潜在記憶研究における単語フラグメント完成課題の作成について 光華女子大学研究紀要, 35, 111-126.
- 藤田 哲也 (1999). 潜在記憶の測定法 心理学評論, 42, 107-125.
- 藤田 哲也 (2005). 記憶の自動的利用における処理水準効果—過程分離手続による検討— 法政大学文学部紀要, 50, 125-144.
- 福井 至 (1997). Depression and Anxiety Mood Scale (DAMS) 開発の試み 行動療法研究, 23, 83-93.
- Gerrards-Hesse, A., Spies, K., & Hesse, F. W. (1994). Experimental inductions of emotional states and their effectiveness: A review. *British Journal of Psychology*, 85, 55-78.
- Gilboa, E., Roberts, J. E., & Gotlib, I. H. (1997). The effects of induced and naturally occurring dysphoric mood on biases in self-evaluation and memory. *Cognition and Emotion*, 11, 65-82.
- Gotlib, I. H., & McCann, C. D. (1984). Construct accessibility and depression: An examination of cognitive and affective factors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 427-439.
- Graf, P., & Ryan, L. (1990). Transfer-appropriate processing for implicit and explicit memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 16, 978-992.
- Haefffel, G. J., Abramson, L. Y., Brazy, P. C., Shah, J. Y., Teachman, B. A., & Nosek, B. A. (2007). Explicit and implicit cognition: A preliminary test of a dual-process theory of cognitive vulnerability to depression. *Behaviour Research and Therapy*, 45, 1155-1167.
- Hale, W. D., & Strickland, B. R. (1976). Induction of mood states and their effect on cognitive and social behaviors. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 44, 155.
- 濱 治世 (2001). 感情・情緒（情動）とは何か 濱 治世・鈴木 直人・濱 保久

- (編) 感情心理学への招待—感情・情緒へのアプローチ—(pp.1-62) サイエンス社
- Hamann, S. B. (1990). Level-of-processing effects in conceptually driven implicit tasks. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 16, 970-977.
- Hasher, L., Rose, K. C., Zacks, R. T., Sanft, H., & Doren, B. (1985a). Mood, recall, and selectivity effects in normal college students. *Journal of Experimental psychology: General*, 114, 104-118.
- Hasher, L., Zacks, R. T. (1979). Automatic and effortful processes in memory. *Journal of Experimental Psychology: General*, 108, 356-388.
- Hasher, L., Zacks, R. T., Rose, K. C., & Doren, B. (1985b). On mood variation and memory: Reply to Isen (1985), Ellis (1985), and Mayer and Bower (1985). *Journal of Experimental Psychology: General*, 114, 404-409.
- 林 潔 (1988). 学生の抑うつ傾向の検討 カウンセリング研究, 20, 162-169.
- 林 潔・塚本 嘉寿 (1987). Beck Depression Inventory (新改定版)についての検討 埼玉大学教養部紀要(総合篇), 6, 45-57.
- 堀内 孝 (2000). 社会的認知研究のための潜在記憶テストの作成 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学) , 47, 407-412.
- 池上 知子 (1992). 社会的認知の情報処理 多鹿 秀継・川口 潤・池上 知子・山 祐嗣 (編) 情報処理の心理学—認知心理学入門 (pp.106-156) サイエンス社
- 今井 久登・高野 陽太郎 (1995). 記憶をさぐる 高野 陽太郎 (編) 記憶 認知心理学 2 (pp.27-48) 東京大学出版会
- Isen, A. M. (1985). Asymmetry of happiness and sadness in effects on memory in normal college students: Comment on Hasher, Rose, Zacks, Sanft, and Doren. *Journal of Experimental Psychology: General*, 114, 388-391.
- Isen, A. M., & Daubman, K. A. (1984). The influence of affect on categorization. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1206-1217.
- Isen, A. M., Daubman, K. A., & Nowicki, G. P. (1987). Positive affect facilitates creative problem solving. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1122-

- Isen, A. M., Shalke, T. E., Clark, M., & Karp, L. (1978). Affect, accessibility of material in memory, and behavior: A cognitive loop? *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 1-12.
- 伊藤 美加 (2000a). 気分一致効果を巡る諸問題—気分状態と感情特性— 心理学評論, 43, 368-386.
- 伊藤 美加 (2000b). 気分一致効果研究における方法論上の問題 京都大学大学院教育学研究科紀要, 46, 196-208.
- 伊藤 美加 (2000c). 自己関連的情報処理における気分一致効果—自伝想起課題による検討— 心理学研究, 71, 281-288.
- 伊藤 美加 (2001). 気分状態と感情特性とが認知に及ぼす影響—共分散構造分析による検討— 日本心理学会第 65 回大会発表論文集, 566.
- 伊藤 美加 (2005). 感情状態が認知過程に及ぼす影響 風間書房
- 伊藤 義徳・金築 優・根建 金男 (2001). 認知行動療法における自動的处理と統制的处理—認知臨床心理学からの提案①— 行動療法研究, 27, 97-108.
- Jacoby, L. L. (1991). A process dissociation framework: Separating automatic from intentional uses of memory. *Journal of Memory and Language*, 30, 513-541.
- Jacoby, L. L. (1998). Invariance in automatic influences of memory: Toward a user's guide for the process-dissociation procedure. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 24, 3-26.
- Jenkins, W., & McDowall, J. (2001). Implicit memory and depression: An analysis of perceptual and conceptual processes. *Cognition and Emotion*, 15, 803-812.
- 神谷 俊次 (1994). 自伝的記憶の安定性 アカデミア人文・社会科学編 (南山大学), 59, 119-135.
- 神谷 俊次 (1996). 記憶と感情—快・不快刺激の忘却— アカデミア人文・社会科学編 (南山大学), 63, 217-247.
- 加曾利 岳美 (2009). 抑うつ傾向大学生に見られる自動思考の特徴 心理臨床学研究, 27, 17-28.
- 川野 健治・平野 直己・下川 昭夫 (1992). 感情研究レビュー①: 感情の操作と自己報告について 東京都立大学心理学研究, 2, 13-20.

- 川瀬 隆千 (1990). 感情が記憶に及ぼす影響: 研究のレビューと今後の展望
立教大学心理学科研究年報, 32, 28-42.
- 川瀬 隆千 (1992). 日常的記憶の検索に及ぼす感情の効果—検索手がかりの自己関係性について— 心理学研究, 63, 85-91.
- 川瀬 隆千 (1994). ムードが記憶再生に及ぼす影響—感情的経験の質的分析—
感情心理学研究, 1, 89-100.
- 慶應義塾大学認知行動療法研究会 (2009). うつ病の認知療法・認知行動療法治療者用マニュアル 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「精神療法の実施方法と有効性に関する研究」 厚生労働省ホームページ
〈<http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/kokoro/dl/01.pdf>〉 (2015 年 12 月 2 日閲覧)
- 国立国語研究所 (1972). 国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究 秀英出版
- 国立国語研究所 (1990). 国立国語研究所資料集 6 分類語彙表 28 版 秀英出版
- 越川 房子 (2010). マインドフルネス認知療法: 注目を集めている理由とその効果機序 ブリーフサイコセラピー研究, 19, 28-37.
- 厚生労働省 (2015). 平成 26 年 (2014) 患者調査の概況 厚生労働省ホームページ
ジ 〈<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/14/dl/kanja.pdf>〉 (2015 年 12 月 18 日閲覧)
- 厚生労働省労働基準局安全衛生部労働衛生課産業保健支援室 (2015). 労働安全衛生法に基づくストレスチェック制度実施マニュアル 厚生労働省ホームページ
〈<http://www.mhlw.go.jp/bunya/roudoukijun/anzeneisei12/pdf/150507-1.pdf>〉 (2015 年 12 月 2 日閲覧)
- Kuiper, N. A., & Derry, P. A. (1982). Depressed and nondepressed content self-reference in mild depressives. *Journal of Personality*, 50, 67-80.
- 熊野 宏昭 (2012). 新世代の認知行動療法 日本評論社
- Kuyken, W., & Dalgleish, T. (1995). Autobiographical memory and depression. *British Journal of Clinical Psychology*, 34, 89-92.
- Kwiatkowski, S. J., & Parkinson, S. R. (1994). Depression, elaboration, and mood congruence: Differences between natural and induced mood. *Memory and*

- Cognition*, 22, 225-233.
- Larsen, R. J., & Ketelaar, T. (1989). Extraversion, neuroticism and susceptibility to positive and negative mood induction procedures. *Personality and Individual Differences*, 10, 1221-1228.
- MacLeod, A. K., Tata, P., Kentish, J., & Jacobsen, H. (1997). Retrospective and prospective cognitions in anxiety and depression. *Cognition & Emotion*, 11, 467-479.
- Marks, T., & Hammen, C. L. (1982). Interpersonal mood induction: Situational and individual determinants. *Motivation and Emotion*, 6, 387-399.
- 松本 麻友子 (2014). 反すうによる抑うつ持続プロセスおよび緩衝要因の検討—反すうの構造・機能に着目して— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士学位論文（未公刊）
- 松山 義則・浜 治世・川村 安子・三根 浩 (1978). 情動語の分析 心理学研究, 49, 229-232.
- Matt, G. E., Vázquez, C., & Campbell, W. K. (1992). Mood-congruent recall of affectively toned stimuli: A meta-analytic review. *Clinical Psychology Review*, 12, 227-255.
- Mayer, J. D., & Bower, G. H. (1985). Naturally occurring mood and learning: Comment on Hasher, Rose, Zacks, Sanft, and Doren. *Journal of Experimental Psychology: General*, 114, 396-403.
- Mayer, J. D., & Gaschke, Y. N. (1988). The experience and meta-experience of mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 102-111.
- McDowall, J. (1984). Recall of pleasant and unpleasant words in depressed subjects. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 401-407.
- 三橋 識子・田上 恭子 (2012). 抑うつと怒りとの関連 *Asian Journal of Human Services*, 3, 77-86.
- 森 敏昭 (1992). 日常記憶研究の生態学的妥当性 広島大学教育学部紀要（第一部心理学）, 41, 123-129.
- 森 敏昭 (1999). 符号化 中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁榊 算男・立花 政夫・箱田 裕司（編）心理学辞典（p.747）有斐閣

- 森岡 正芳 (2008). 想起・反復・現実構成—野村論文へのコメント— 心理学評論, 51, 114-119.
- 向山 泰代 (1998). 気分への注目・気分の明瞭さ・気分の転換—日本語版 特性メタ・ムード尺度の検討— 日本心理学会第 62 回大会発表論文集, 1003.
- Niedenthal, P. M., & Setterlund, M. B. (1994). Emotion congruence in perception. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 401-411.
- 西川 大志・松永 美希・古谷 嘉一郎 (2013). 反すうが自動思考と抑うつに与える影響 心理学研究, 84, 451-457.
- 野内 類・兵藤 宗吉 (2006). 自伝想起課題と他者エピソード想起課題が気分一致記憶の生起に及ぼす影響 認知心理学研究, 4, 15-23.
- 野内 類・兵藤 宗吉 (2007). 想起エピソードの感情価と気分状態の一致が気分一致効果に及ぼす影響 心理学研究, 78, 25-32.
- 大平 英樹 (1996). 抑うつにおける感情と認知—情報处理的モデルと生理的指標の導入 土田 昭司・竹村 和久 (編) 感情と行動・認知・生理—感情の社会心理学 対人行動学研究シリーズ 4 (pp.179-202) 誠信書房
- 太田 信夫 (2008a). 潜在記憶と顕在記憶 太田 信夫 (編) 記憶の心理学 (pp.87-108) 財団法人放送大学教育振興会
- 太田 信夫 (2008b). 記憶のプロセス 太田 信夫 (編) 記憶の心理学 (pp.24-40) 財団法人放送大学教育振興会
- 岡 直樹 (1999). 検索 中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁樹 算男・立花 政夫・箱田 裕司 (編) 心理学辞典 (p.235) 有斐閣
- 岡田 圭二 (1999a). 気分が潜在記憶に与える影響—鬱, 不安, 恐怖に焦点をあてて— 心理学評論, 42, 466-486.
- 岡田 圭二 (1999b). 潜在記憶理論の展望 心理学評論, 42, 132-151.
- Parrott, W. G., & Sabini, J. (1990). Mood and memory under natural conditions: Evidence for mood incongruent recall. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 321-336.
- Phillips, W. J., Hine, D. W., & Thorsteinsson, E. B. (2010). Implicit cognition and depression: A meta-analysis. *Clinical Psychology Review*, 30, 691-709.
- Pössel, P., & Knopf, K. (2011). Bridging the gaps: An attempt to integrate three major

- cognitive depression models. *Cognitive Therapy and Research*, 35, 342-358.
- Psyzzczynski, T., Hamilton, J. C., Herring, F. H., & Greenberg, J. (1989). Depression, self-focused attention, and negative memory bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 351-357.
- Rehm, L. P., & Naus, M. J. (1990). A memory model of emotion. In R. E. Ingram (Ed.), *Contemporary psychological approaches to depression: Theory, research, and treatment* (pp.23-35). New York: Plenum Press.
- Rinck, M., Glowalla, U., & Schneider, K. (1992). Mood-congruent and mood-incongruent learning. *Memory & Cognition*, 20, 29-39.
- Robinson, J. A. (1986). Autobiographical memory: A historical prologue. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory* (pp.19-24). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Roediger, H. L. (1990). Implicit memory: Retention without remembering. *American Psychologist*, 45, 1043-1056.
- Roediger, H. L., & McDermott, K. B. (1992). Depression and implicit memory: A commentary. *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 587-591.
- Rosenhan, D. L., Salovey, P., & Hargis, K. (1981). The joys of helping: Focus of attention mediates the impact of positive affect on altruism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 899-905.
- Ruiz Caballero, J. A., & Moreno, J. B. (1993). The role of affective focus: Replication and extension of mood congruent and memory. *Personality and Individual Differences*, 14, 191-197.
- Russell, J. A. (1991). In defense of a prototype approach to emotion concepts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 37-47.
- Rusting, C. L. (1998). Personality, mood, and cognitive processing of emotional information: Three conceptual frameworks. *Psychological Bulletin*, 124, 165-196.
- Rusting, C. L., & DeHart, T. (2000). Retrieving positive memories to regulate negative mood: Consequences for mood-congruent memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 737-752.
- 佐治 守夫 (1966). カウンセリング入門 国土社

- Sakaki, M. (2004). Effects of self-complexity on mood-incongruent recall. *Japanese Psychological Research*, 46, 127-134.
- 榎 美知子 (2006). 自己知識の構造が気分不一致効果に及ぼす影響 心理学研究, 77, 217-226.
- 坂本 真士 (1994). 抑鬱者の性格特性の自己評価におけるネガティビティ・バイアス 心理学研究, 65, 156-161.
- 坂本 真士 (1996). ティーズデイルの抑うつ的処理活性仮説 (訳者解説) W.ドライデン・R.レントゥル (編) 丹野 義彦 (監訳) 認知臨床心理学入門: 認知行動アプローチの実践的理解のために (pp.140-143) 東京大学出版会 (Dryden, W., & Rentoul, R. (1991). *Adult clinical problems: A cognitive-behavioural approach*. London, UK: Routledge.)
- 坂本 真士 (2002). 抑うつ 下山 晴彦・丹野 義彦 (編) 講座臨床心理学 4 異常心理学 II (pp.147-163) 東京大学出版会
- 坂本 真士・大野 裕 (2005). 抑うつとは 坂本 真士・丹野 義彦・大野 裕 (編) 抑うつの臨床心理学 (pp.7-28) 東京大学出版会
- 坂本 真士・丹野 義彦・大野 裕 (2005). はじめに 坂本 真士・丹野 義彦・大野 裕 (編) 抑うつの臨床心理学 (pp.1-5) 東京大学出版会
- Salovey, P., & Birnbaum, D. (1989). Influence of mood on health-relevant cognitions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 539-551.
- Salovey, P., Mayer, J. D., Goldman, S. L., Turvey, C., & Palfai, T. P. (1995). Emotional attention, clarity, and repair: Exploring emotional intelligence using the Trait Meta-Mood Scale. In J. W. Pennebaker (Ed.), *Emotion, disclosure, and health* (pp.125-154). Washington, D. C.: American Psychological Association.
- Schacter, D. L. (1987). Implicit memory: History and current status. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 13, 501-518.
- Schneider, W., & Shiffrin, R. M. (1977). Controlled and automatic human information processing: I. Detection, search, and attention. *Psychological Review*, 84, 1-66.
- Schwarz, N., & Bless, H. (1991). Happy and mindless, but sad and smart? The impact of affective states on analytic reasoning. In J. P. Forgas (Ed.), *Emotion and social judgments* (pp.55-71). Oxford: Pergamon Press.

- Schwarz, N., & Clore, G. L. (1983). Mood, misattribution, and judgments of well-being: Informative and directive functions of affective states. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 513-523.
- Schwarz, N., Strack, F., Kommer, D., & Wagner, D. (1987). Soccer, rooms, and the quality of your life: Mood effects on judgments of satisfaction with life in general and with specific domains. *European Journal of Social Psychology*, 17, 69-79.
- Scott, K. M., Mogg, K., & Bradley, B. P. (2001). Masked semantic priming of emotional information in subclinical depression. *Cognitive Therapy and Research*, 25, 505-524.
- Sedikides, C. (1994). Incongruent effects of sad mood on self-conception valence: It's a matter of time. *European Journal of Social Psychology*, 24, 161-172.
- Shiffrin, R. M., & Schneider, W. (1977). Controlled and automatic human information processing: II. Perceptual learning, automatic attending, and a general theory. *Psychological Review*, 84, 127-190.
- 清水 裕士・村山 綾・大坊 郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1)—コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用— 電子情報通信学会技術研究報告, 106, 1-6.
- 清水 馨・鈴木 伸一 (2011). うつ病の認知行動療法の実践 心身医学, 51, 1079-1087.
- Singer, J. A., & Salovey, P. (1988). Mood and memory: Evaluating the network theory of affect. *Clinical Psychology Review*, 8, 211-251.
- 新村 出 (編) (1998). 広辞苑 第五版 岩波書店
- Smith, S. M., & Petty, R. E. (1995). Personality moderators of mood congruency effects on cognition: The role of self-esteem and negative mood regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 1092-1107.
- 菅井 勝雄 (1999). トップダウン処理／ボトムアップ処理 中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁樹 算男・立花 政夫・箱田 裕司 (編) 心理学辞典 (pp.640-641) 有斐閣
- 杉浦 義典 (2009). アナログ研究の方法 臨床心理学研究法第4巻 新曜社
- Sugiura, Y. (2010). Consciousness and unconsciousness in clinical and educational

- psychology through the lens of mindfulness. 教育心理学年報, 49, 238-248.
- 杉浦 義典 (2011). 臨床心理学キーワード第 61 回 マインドフルネス／第三世代／自動的处理と制御的处理 臨床心理学, 11, 442-444.
- Surprenant, A. M., & Neath, I. (2009). *Principles of memory*. London, UK: Routledge.
(スープレナント, A. M.・ニース, I. 今井 久登 (訳) (2012). 記憶の原理 勁草書房)
- 田上 恭子 (2000). 単語の認知処理に及ぼすムードの効果: 処理の違いとムード一致効果について 東北大学教育学部研究年報, 48, 149-160.
- 田上 恭子 (2013). 過程分離手続きを用いた抑うつにおける記憶バイアスの検討: うつ病対策に向けての基礎的研究 *Asian Journal of Human Services*, 4, 62-76.
- 谷口 高士 (1991a). 認知における気分一致効果と気分状態依存効果 心理学評論, 34, 319-344.
- 谷口 高士 (1991b). 言語課題遂行時の聴取音楽による気分一致効果について 心理学研究, 62, 88-95.
- 谷口 高士 (1995a). 被験者の自然な気分の状態と性格形容語の再生成績との関連について 大阪学院大学人文自然論叢, 30, 1-11.
- 谷口 高士 (1995b). 音楽の感情価と聴取者の感情的反応に関する認知心理学的研究 京都大学教育学研究科博士学位論文 未公刊
- 丹野 義彦 (2008). 認知行動療法と心理学 小谷津 孝明・小川 俊樹・丹野 義彦 (編) 臨床認知心理学 (pp.9-16) 東京大学出版会
- 丹野 義彦・小川 俊樹・小谷津 孝明 (2008). 臨床心理学と認知心理学のインターフェース 小谷津 孝明・小川 俊樹・丹野 義彦 (編) 臨床認知心理学 (pp.1-6) 東京大学出版会
- Teasdale, J. D. (1983). Negative thinking in depression: Cause, effect, or reciprocal relationship? *Advances in Behaviour Research and Therapy*, 5, 3-25.
- Teasdale, J. D. (1985). Psychological treatment for depression: How do they work? *Behaviour Research and Therapy*, 23, 157-165.
- Teasdale, J. D., & Barnard, P. J. (1993). *Affect, cognition, and change: Re-modelling depressive thought*. Hove: Erlbaum.

- Teasdale, J. D., & Fogarty, S. J. (1979). Differential effects of induced mood on retrieval of pleasant and unpleasant events from episodic memory. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 248-257.
- 寺崎 正治・岸本 陽一・古賀 愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356.
- 寺崎 正治・古賀 愛人・岸本 陽一 (1991). 多面的感情状態尺度・短縮版の作成 日本心理学会第 55 回大会発表論文集, 435.
- 寺澤 三和・田上 恭子 (2011). ストレス場面における気晴らしについての認知 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, 8, 31-38.
- Thompson, W. C., Cowan, C. L., & Rosenhan, D. L. (1980). Focus of attention mediates the impact of negative affect on altruism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 291-300.
- Tice, D. M., Bratslavsky, E., & Baumeister, R. F. (2001). Emotional distress regulation takes precedence over impulse control: If you feel bad, do it! *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 53-67.
- 富山 尚子 (1995). 児童が文を記憶する際のムードの影響 心理学研究, 66, 336-344.
- 富山 尚子 (1999). 文作成時の気分の影響—気分一致効果と気分不一致効果— 心理学研究, 69, 441-448.
- 豊田 弘司 (2008). エピソード記憶と意味記憶 太田 信夫 (編) 記憶の心理学 (pp.70-86) 財団法人放送大学教育振興会
- 筒井 美加 (1997). 自己関連語における気分一致効果 心理学研究, 68, 25-32.
- Tull, M. T., Bornovalova, M. A., Patterson, R., Hopko, D. R., & Lejuez, C. W. (2008). Analogue research. In D. McKay (Ed.), *Handbook of research methods in abnormal and clinical psychology* (pp.61-77). Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Tulving, E., & Schacter, D. L. (1990). Priming and human memory systems. *Science*, 247, 301-306.
- Tulving, E., & Thomson, D. M. (1973). Encoding specificity and retrieval processes in episodic memory. *Psychological Review*, 80, 352-373.

- Twaddle, V., & Scott, J. (1991). Depression. In W. Dryden, & R. Rentoul (Eds.), *Adult clinical problems: A cognitive-behavioural approach* (pp.56-85). London: Routledge.
- (トワドル, V.・スコット, J. 坂本 真士 (訳) (1996). 抑うつ ドライデン, W.・レントウル, R. (編) 丹野 義彦(監訳) 認知臨床心理学入門: 認知行動アプローチの実践的理解のために (pp.113-179) 東京大学出版会)
- 内田 伸子 (1983). 絵画ストーリーの意味的統合化における目標構造の役割 教育心理学研究, 31, 303-313.
- 内田 伸子 (1989). 非具象的絵画ストーリーの構成的理解における“欠如-補充”枠組みの発達 教育心理学研究, 37, 327-336.
- Velten, E. (1968). A laboratory task for induction of mood states. *Behaviour Research and Therapy*, 6, 473-482.
- Watkins, P. C. (2002). Implicit memory bias in depression. *Cognition and Emotion*, 16, 381-402.
- Watkins, P. C., Martin, C. K., & Stern, L. D. (2000). Unconscious memory bias in depression: Perceptual and conceptual processes. *Journal of Abnormal Psychology*, 109, 282-289.
- Watkins, P. C., Mathews, A., Williamson, D. A., & Fuller, R. D. (1992). Mood-congruent memory in depression: Emotional priming or elaboration? *Journal of Abnormal Psychology*, 101, 581-586.
- Watkins, P. C., Vache, K., Verney, S. P., Muller, S., & Mathews, A. (1996). Unconscious mood-congruent memory bias in depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 105, 34-41.
- Wegner, D. M. (1994). Ironic processes of mental control. *Psychological Review*, 101, 34-52.
- Williams, J. M. G. (1983). *The psychological treatment of depression*. London, UK: Croom Helm.
- (ウィリアムス, J. M. G. 中村 昭之 (監訳) (1993). 抑うつ認知行動療法 誠信書房)
- Williams, J. M. G. (1996). Depression and the specificity of autobiographical memory.

- In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past: Studies in autobiographical memory* (pp.244-267). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Williams, J. M. G., Barnhofer, T., Crane, C., Herman, D., Raes, F., Watkins, E., & Dalgleish, T. (2007). Autobiographical memory specificity and emotional disorder. *Psychological Bulletin*, 133, 122-148.
- Williams, J. M. G., Watts, F. N., MacLeod, C., & Mathews, A. (1988). *Cognitive psychology and emotional disorders*. Chichester, U. K.: John Wiley & Sons.
- Williams, J. M. G., Watts, F. N., MacLeod, C., & Mathews, A. (1997). *Cognitive psychology and emotional disorders* (2nd edition). Chichester, U. K.: John Wiley & Sons.
- Wisco, B. E. (2009). Depressive cognition: Self-reference and depth of processing. *Clinical Psychology Review*, 29, 382-392.
- Wright, J., & Mischel, W. (1982). Influence of affect on cognitive social learning person variables. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 910-914.
- 山口 翼 (編) (2003). 日本語大シソーラス—類語検索大辞典 大修館書店
- 山中 亮 (1999). 読語過程におけるエラー発生に及ぼす感情の影響 感情心理学研究, 6, 27-36.
- 山下 直治 (2006). 認知活動における構えの形成と転換—自動的処理・統制的処理過程— 宮城教育大学紀要, 41, 163-173.
- 義田 俊之・中村 知靖 (2007). 抑うつ促進および低減プロセスにおける自動思考の媒介効果 教育心理学研究, 55, 313-324.

初出一覧

本論文は以下の研究をまとめたものである。

- 田上恭子 (1999). 文章記憶におけるムード一致効果の再検討 東北大学教育学部研究年報, 47, 73-87. (第 5 章)
- 田上恭子 (1999). 抑うつにおける潜在記憶バイアス 日本心理学会第 63 回大会発表論文集, 567. (第 8 章)
- 田上恭子 (2002). 抑うつと記憶 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 50, 95-109. (第 1～3 章)
- 田上恭子 (2002). 抑うつにおける自己関連的な認知のネガティブ・バイアス: 気分一致効果に着目して 心理学研究, 73, 412-418. (第 6 章)
- 田上恭子 (2003). 抑うつの程度が潜在記憶に及ぼす影響 弘前大学教育学部紀要, 90, 193-199. (第 9 章)
- 田上恭子 (2006). 抑うつと記憶, 気分及びメタ気分との関連性 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 997. (第 12 章)
- 田上恭子 (2007). 自伝的記憶と抑うつ, 気分状態, 感情表出の関連性 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, 4, 59-64. (第 7 章)
- 田上恭子 (2007). 抑うつ-記憶研究における概念駆動型潜在記憶テストとしての意味定義課題の作成について 弘前大学教育学部紀要, 98, 117-125. (第 10 章)
- 田上恭子 (2011). 抑うつ傾向と気分状態が自己認知に及ぼす影響: 気分一致効果の再検討 弘前大学教育学部紀要, 105, 117-123. (第 6 章)

謝 辞

本研究は、東北大学大学院教育学研究科在籍時に実施した実験・調査を中心に、1999年から2011年にかけて発表した研究をまとめたものです。研究を進めるにあたり、多くの方々からのご指導・ご助言・ご協力をいただきました。以下に記して、お礼を申し上げます。

本論文をまとめるにあたり、主査の長谷川啓三先生（東北大学教授）、副査の上埜高志先生（東北大学教授）、安保英勇先生（東北大学准教授）には、懇切なご指導をいただきました。

長谷川先生には、博士前期課程から現在に至るまでの長きにわたり、指導教員としてご指導いただきました。本研究の抑うつと認知に関するテーマは、長谷川先生からエリスの論理療法やベックの認知療法を学ぶよう勧められたところから始まりました。また臨床心理学における基礎研究の重要性についても大学院生時代に先生から学び、現在も私の研究のスタンスとなっています。

上埜先生には大学院の精神医学に関する講義においてうつ病をはじめ精神医学的問題について学ばせていただき、その後も学会等において多々ご指導いただきました。本研究をまとめるに際しては、抑うつ・うつ病に関することのみならず、研究や論文執筆における基本的要件、実験研究のあり方など、細部にわたりご助言いただきました。

安保先生には、本研究をまとめるに際しまして、特にデータの分析方法やデータの意味するところについて、また考察のポイントについてなど、分かりにくい長文であるにもかかわらず、丁寧で的確なコメントをくださり、細やかに温かくご指導いただきました。

研究のスタートとなる卒業論文においては、故・小松教之先生（東北大学名誉教授）に、指導教員として多くのご指導をいただきました。認知心理学的アプローチによる気分一致効果研究という、臨床心理学からは少し離れたテーマでしたが、認知心理学の枠組みの中での概念や用語の定義・整理の重要性や統計的处理について等々、非常に細やかにご指導くださいました。大学院進学後は、医療機関で心理アセスメントの業務に携わらせていただき、患者さんとの

接し方や知能検査の実施・解釈法などご指導いただきました。残念ながら短い期間ではありましたが、臨床心理学研究において重要であると考えられる、臨床的な視点の基礎を学ばせていただいたと感じております。

東北大学大学院教育学研究科在籍中は、臨床心理学の学びだけではなく、他分野の先生方からも多くのご指導をいただきました。中でも菊池武剋先生（東北大学名誉教授）と本郷一夫先生（東北大学教授）には、心理学の研究とはどういうものかを教えていただいたと感じています。

菊池先生には、学部3年時の不安と内発的動機づけに関するテーマで行った追試研究でご指導いただいてから長きにわたって、基礎的な研究の見方や考え方を中心にあたたかくご指導いただきました。心理臨床に関しても事例検討を通してご指導いただき、臨床的な視点についても学びました。そして何より、研究者としてのあり方について深く学ばせていただいたように感じます。

本郷先生には、修士論文の口頭試問の頃からご指導いただきましたが、いつも核心をついたコメントを与えてくださり、全く考えてもみなかった、しかしながらとても重要で基本的な点をいつも考えさせてくださいました。先生のご指導から、より一層実験研究の面白さを感じるようになったと感じています。

学部生時代には、故・細谷純先生（東北大学名誉教授）、故・寺田晃先生（東北大学名誉教授）、宇野忍先生（東北大学名誉教授）、工藤与志文先生（東北大学教授）、片岡彰先生（聖和学園短期大学教授）から、研究の基本について丁寧に細やかなご指導をいただきました。研究のあり方についてよく分からないまま始めた学部3年時の追試研究、そして卒業論文を通してご指導いただきました数々の点は、今でも研究に取り組む際の礎となっています。

本研究の実施・まとめに際しましては、特に内容に関してご専門でいらっしゃる他大学の先生方からも非常に多くのご指導をいただきました。

谷口高士先生（大阪学院大学教授）には、研究のスタート時から、気分一致効果に関して、記憶材料や気分誘導のこと、音楽に関する事等々、多くのことを教えていただきました。

藤田哲也先生（法政大学教授）には、潜在記憶や過程分離手続きに関して、理論や方法論のみならず、私にとっては複雑で理解が難しかった実験デザイン

や刺激構成についてなど細かな点まで教えていただき、本研究の幾つかの研究へのコメントもいただきました。また先生には記憶・認知研究会をご紹介いただき、本研究の第Ⅲ部の内容に関して発表する機会を頂戴しました。研究会では認知心理学や記憶心理学のご専門の先生方や院生・学生の方々から多くの助言をいただき、本研究をまとめる上での貴重なご示唆をいただきました。研究会に参加された皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。

林潔先生（白梅学園短期大学名誉教授）からは、抑うつに関してご指導をいただきました。林先生が翻訳・ご検討されたベック抑うつ尺度を使用させていただき、抑うつをめぐる問題についても多く学ばせていただきました。その後も現在までずっと、精力的に研究を続けていらっしゃる先生からさまざまなテーマについて学ばせていただいています。

このほか、学会等で貴重なご指導ご助言をくださいました、気分一致効果、感情と記憶、認知心理学、臨床心理学等をご専門とされる諸先生方、大学院生の方々に、心から感謝申し上げます。また研究2の調査に際しまして、堀毛裕子先生（東北学院大学教授）、宇田川一夫先生（東北福祉大学教授）にご協力とご指導をいただきました。御礼申し上げます。

大学院生時代は、とても密度の濃い時間を過ごし、研究に関しても多くの刺激を得ました。大学院での出会いやそこで学び経験したことは、私の研究活動において、非常に大きな糧となっています。諸先輩方には、研究のこと、教育のこと、臨床のこと、人生のこと、その他たくさんのことを教えていただき、励ましてもいただきました。中でも、若松養亮先生（滋賀大学教授）、佐藤淳先生（北海学園大学教授）、沼山博先生（山形県立米沢栄養大学教授）、加藤道代先生（東北大学教授）、吉中淳先生（弘前大学准教授）、稲垣宏樹先生（東京都健康長寿医療センター研究所研究員）、吉國秀人先生（兵庫教育大学准教授）、若島孔文先生（東北大学准教授）には、現在も学会や研究会等においてご一緒させていただく機会が多く、本研究をまとめる上でも多くの助言とサポートをいただきました。博士後期課程同期の神谷哲司先生（東北大学准教授）、中村修先生（東北福祉大学准教授）、高綱睦美先生（愛知教育大学講師）とは、苦しい

時間も楽しい時間も共に過ごさせていただき、多くの刺激を与えていただきました。また、同窓の渡部敦子先生（関西福祉科学大学准教授）、佐藤宏平先生（山形大学准教授）、浅野晴哉先生（宮城県警察本部犯罪被害者支援室心理カウンセラー）にも、大学院時代から現在まで多くの刺激と励ましをいただきました。長谷川先生の研究室の修了生の皆様からは、特に共同研究におけるチームワークの重要性を学ばせていただきました。そして、他専攻ではありましたが心身障害学専攻の諸先輩方・同期の方々には卒業論文時から大変お世話になり、公私にわたり格別の刺激を与えていただきました。特に博士後期課程時には、院生室のスペースが足りず、心身障害学専攻の院生室に間借りさせていただいたこともあり、学会参加・発表等を共にさせていただくことも数多くありました。中でも、奥住秀之先生（東京学芸大学准教授）、田中敦士先生（琉球大学准教授）、平野幹雄先生（東北文化学園大学准教授）には、研究についてだけでなく、社会のこと、人生のこと、数々のことを今現在も学ばせていただいております。

心理臨床と教育研究職に携わってからも、研究活動を多くの方々にサポートしていただきました。池田忠義先生（東北大学教授）、野口和人先生（東北大学教授）には、就職後に学会等でご一緒させていただく機会が多く、本研究をまとめる上でも多くの励ましをいただきました。富澤登志子先生（弘前大学准教授）には、これまで多くの共同研究や学会等でご一緒させていただき、公私にわたってたいへんお世話になりました。本研究をまとめるに際しても、たくさんのサポートをいただきました。また国立仙台病院（現・仙台医療センター）の諸先生方・スタッフの皆様、HIV カウンセリングの実践と研究に関してご指導くださいました各地の諸先生方、弘前大学の諸先生方、愛知県立大学の諸先生方にも大変お世話になり、厚く感謝申し上げます。

3年前に名古屋に移り、参加させていただいている研究会 S-LED では、工学・医学系の諸先生方とご一緒させていただき、自身の研究や専門分野について外の視点から考える機会をいただいています。先生方にはいつも博士論文の進捗状況についてご配慮いただき、励ましていただきました。研究者としてのありようについても数多くの学びを得ています。北川邦行先生（名古屋大学名誉教授）、岡本和士先生（愛知県立大学教授）、久野覚先生（名古屋大学教授）、吉田友紀子先生（大阪大学講師）、中谷こずえ先生（中部学院大学講師）、宮地清和

社長と高田誠一郎さん(ミヤチ株式会社), 松浪有高さん(名古屋大学技術職員)に, 心から感謝申し上げます。

そして, 実験・調査にご協力くださった皆様, 東北大学教育心理学研究室の卒業生・修了生・関係者の皆様, これまで臨床の場でお会いしたクライアントの皆様に改めて感謝いたします。

なお本研究の一部の実施・まとめに際しまして, 科研費(課題番号 16730343, 18730431)による助成を受けました。ここに記して感謝の意を表します。

最後に, 長い間支えてくれた家族・親戚, そしていつもあたたかく見守ってくれた夫・亮に, 心から感謝します。